
イヴの接吻

ケロンパ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イヴの接吻

【Nコード】

N5131E

【作者名】

ケロンパ

【あらすじ】

生まれ変わっては巡り会つ、運命の愛をご堪能ください。

あんなにも愛し合ったのは遙か時空の彼方。燃え上がるような三つの輪廻を繰り返し、二人は再び時を重ねる。

狂おしいほどに求め、懇願してきた。震えるほどに恋焦がれて。

永遠に私のものだ。心も身体も、その魂さえも…もう二度と離しはしない。

出会った瞬間、自分のものではない誰かの囁きが、耳元に零れ落ち掻き消えていく。

宝くじ（レオン）

イヴは蛇にそそのかされ、アダムはイヴに誘惑され、人は最初の罪を犯す。口にした禁断の果実は

the tree of the knowledge of
good and evil（善悪の知識の樹）

己が裸である事に気付いてしまったアダムとイヴ。知らないことは幸せだ。無知は自分が置かれた境遇を、不幸かどうかなんて判断できない。

暮盤の目に整備された街。いや、施設といった方が無難だろう。フランス語で卵：l^{ウツ}oefという街の名は誰がつけたのだろうか。皮肉つているとは思えない。内側に入ってしまったえば出口がない閉ざされた空間。けれども、未知の可能性を秘めた響きを持つ街の名は、儚い希望を匂わせる。

二百年の歳月を経て管理体制は整った。人間は全てルールに従い行動し、何をするにも許可を得なければ生きていけない世界。自由という言葉の、本当の意味を知る者など皆無だというのに、何故こんな茶番が大々的にプロモーションされるのか疑問だ。

十年に一度、たった一人の人間が味わう事の出来る自由へのチケット『宝くじ』。昔々は金銭が配当されるシステムだったらしい。貨幣の流通などつくの昔に廃止された。紙切れの為に人を殺める事さえ日常茶飯事だった時代を考えれば、ここは安全に生きていくパラダイスだとも言えるかもしれない。

十年に一度、たった一人の当選者だけが味わえる『自由』。それを手に入れた女のデータを頭にインプットする。

リコ。コードNO・38569268-RICO。分類区分：ア
ートヒューマン

アートヒューマン……これは希少種がお出ましになったもんだ。
だからか……この前代未聞の「自由」へのリクエストは。

リコが「自由」に関してその行動範囲をリクエストしてきた。与えられた「自由」を過ごす場所は希望を出せば審議される。大抵の者は、何をしたらいいのか分からず途方に暮れてしまう。公園が設置された無難な遊戯場を、こちらから提案したりする事がほとんどらしい。

リコがリクエストした場所のデータを再び眺める。それにしても……よくこれが審議を通過したな。

ギア（歯車）と呼ばれる管理される側の人間は、この言葉さえ知らないはずだ。だが、芸術を生産する特殊な任務を背負ったアートヒューマンなら、育成プログラムの一環としてその存在を知らされるのだろう。

『sea（海）』

最初は、何故、自分がリコの監視役なんていう職務を任命されたのか見当がつかなかった。治安維持システムを管理している身としてはあまりにも気が抜ける仕事に思えた。

徹底した管理体制の中に芽吹く危険思想の発生に目を光らせ、ギア（歯車）達の異常行動を見逃さないよう監視する。人間の頭の中に浮かび上がる危険思考を察知し、状況に応じて処理していく。テロなどの発生を事前に防ぐ為、時にはギア達の中にスパイとして潜り込む事さえある特殊任務。

身を守る為の護身術、素手で相手を仕留める技術、厳しい環境下における作戦遂行の為のあらゆる訓練を積み重ねてきた。

生れ落ちた瞬間、マザーコンピュータ・エリサベスが、遺伝子を瞬時に読み取りどちらの人生を歩むのか選別していく。物心ついた頃から、ギア（歯車）ではなくキーパー（番人）として生きていくのだと教え込まれてきた。その俺がたった一人の女の休息に付き合うなど……。

リコが特に危険分子要素があるという情報は見受けられなかった。

何故、こんな仕事が自分に課せられたのか未だわからない。だが、深く考える必要もないだろう。十年に一度あるかないかの突発任務1/2321523213の確率で『宝くじ』はリコを弾き出した。その奇跡の女の願いに付き合うのも悪くない。

『sea（海）』

海といえるものは、地球上には限られた場所にしか存在しない。95%が汚染され、修復の為立ち入り禁止となっている。立ち入れる場所といたら……俺は頭の中でその限られた海を限定した。

ああ、そうか……世界中どの場所にいても、網の目に設置されたカメラや衛星システムで、個人の指先ひとつ動かす仕草まで監視できる時代。だが、確かにこの場所は監視非該当区域だったはずだ。地球中枢管理レベルの高官が休暇を過ごす為の、ヘブンと呼ばれるプライベート領域。……特別な監視役が必要って訳だ。

『sea（海）』

知識としては知っている。バーチャル映像も見たことがある。いつも波音がしているだなんて、何て落ち着かない場所だろう。大きな水溜り……やっぱりアートヒューマンと違って陳腐な表現しか思い浮かばない。水の循環の供給源として、地上生物に欠かせない淡水をつくる水蒸気の発生源……。再び頭をよぎるのは堅苦しい倫理ばかり。

ボタンを押すと、リアルレビューがぼつかりと空間に浮かび上がる。リコの立体映像が俺の前に立っている。肩で切りそろえられたキャラメルブラウンの髪。同じ色の瞳。肌はモンゴロイド（黄色人種）の名残を感じさせる。

リコ……リコ……。他人に興味を持つ事など滅多にないというのに。だが、知りたいと思った。

アートヒューマンの彼女だったら『sea（海）』をなんと表現するのだろう。

記憶の片鱗（リコ）

『当選しました』

その知らせは、あまりにも不意打ちに届いた。封筒に入れられた一枚のカードが、カプセルベッドの上にポツリと置かれていた。

ペーパーは貴重な資源。そこに印字された手紙など、自分宛に届いたのは初めての事だ。一瞬頭が真っ白になった。これはなあに？ピカッピカッ……部屋の中央に置かれた楕円形のテーブルが青く点滅する。テーブルの表面を人差し指でちょこんと触れると、メールのマークがふわりと浮き上がる。

あ、エリーからだ。たった一人のメールフレンド。ワクワクした気分で人差し指を再び軽くテーブルに乗せる。

触れた指先の下から渦巻模様が描かれ、女の子の顔が浮かび上がる。やがて顔だけのリアルレビューがテーブルの上に立体的に映し出される。

あ、可愛いね今日のエリーの髪。お花の輪がお姫様みたい。

「ハロー」

はにかんだ顔でエリーは笑いかけてくる。

「ハロー」

メールだというのに、ついつい挨拶を返してしまう。

「ねえねえ、知ってるのよあたし……」

エリーがもったいぶった様子で話を始める。彼女はいつまでもいつまでも小さな子供のままだ。最初にメールを貰った頃と何も変わらない。この姿はただの架空のイメージなのか、どうして子供の姿なのか、実際会った事がないので分からない。ずっとエリーは5, 6才の少女のままだ。あたしはいつの間にか彼女を追い越して、すっかり大人になってしまったというのに。

「宝くじ、当たったでしょう？　すごいねリコ」

え、なあに？ あの封筒ってもしかしてエリーの悪戯？

「ほら、十年に一度の自由はリコのものなんだって」

……ジユウって何だっけ？

「買ったでしょ、宝くじ。あれ、好きな所で好きなように過ごしていいんだって。」

ねえ、リコは何処に行くの？」

プチッと小さな音と共にエリーの顔が消え、テーブルの中央から小さな映像がぐぐつとクローズアップされてくる。あ、これって……。

「リコ、前に行ってみたって言っていたの覚えている？」

誘うようなエリーの声。テーブルから溢れるように映し出された『sea（海）』は、不思議な音をたずさえて、すぐそこで揺れている。思わずそつと波を撫でてみた。どんな感触が伝わってくるのか、少しドキドキした。けれども、指先に触れた感触は、いつもの冷やりとしたテーブルの表面。そう、これはただの映像なのだから……。

宝くじ。あれって皆がエントリーするんだよ？ 誰でも夢を手に入れるチャンスがあるんだって値段もあつてないような金額だった。いつも無表情なギアの人々が、高揚した顔で列にならび宝くじにエントリーしていた。そう、あれは確か1ヶ月前だ。

……本当に？ あたし、当選したのっ？

えっ、ええっ。すごい。すごい。ずつとしてなんて居られず、意味もなく小さな部屋をぐるぐると歩き回る。どうしよう。どうしよう。

壁には埋め込まれたカプセルベッドに寝転び、届いた封筒を繰り返し眺める。

“好きな所で好きなよう過ごしていいんだって”

さっきのエリーの言葉が耳の奥で繰り返される。

“ねえ、リコは何処に行くの？”

ドクンっ。本当に？行けるの？好きな所に……

アートヒューマン。過去の芸術を未来に引き継ぐための修復作業や、新たな現代美術を感性で産み落としていく仕事を請け負う。ギアの中でも一握りしかない希少種。過去の著名な芸術家達の遺伝子を持って生まれてきたと言われているが、事実なのか知るよしもない。その育成プログラで、あたしは数世紀前の生活や地球の自然を、当時の絵画より垣間見る事が出来た。

燃えるような黄色で、太陽が生む光を描いたゴッホ。睡蓮を映す水面の、光と影を追い続けたモネ。

人々の溢れる生命力を、見事に表現したルノワール。黄金のベールを纏い、甘美で妖艶な女性の美しさと残酷さを匂わせたクリムト。

題材になった情景は、ギアの目には決して触れる事のないものばかり。

整備された巨大なドーム型の街、ウフ。白い壁。白い廊下。この中で規則正しく生活すれば、一生、不自由のない生活が約束される。皆、ウフの外に何があるのか知らない。知る必要もない。だけど、アートヒューマンという立場上、あたしは皆が知らない地球の断片を知っている。

キャンバスに描かれた情景は、今でも地球のどこかに存在するのだろうか。男と女は、クリムトの描く絵画のように愛し合うのだろうか。外の世界はどんな色彩が溢れているの？

とりわけ、あたしを魅了したのは青だった。

パステルブルー。マリンブルー。スカイブルー。ラベンダーブルー……画家達の好奇心を駆り立てるブルー。その色彩が織り込まれた『sea（海）』の存在に、心を奪われずにはいらなかった。

“ねえ、リコは何処に行くの？”

……あたしの行きたい所。

目を覚ますと、見覚えのない天井が見えた。いつもなら、手の届く距離につるりとしたカプセルベッドの上部がある。だけど今日は……はるか遠い天井には見た事のない大きなプロペラがあった。カタカタと音を立てて回り、そよぐような風を送ってくる。心地よくてあたしは再び瞼を閉じた。

いつもと全く違う朝。身体にまとわりつく眠気が思考回路を奪っていた。

ギシツ。耳元で聞いた事のない音が響く。視線を流すと、こちらを覗き込む人影が見えた。ぼんやりとした視界が、少しづつ晴れていく。男……の人。黙ってこちらを見詰める彼の存在感に圧倒された。

冷たい炎を宿した、チャコールグレーの瞳。ギアにはない、支配者の眼差し。

知らない人。なのにどうしてだろう。不思議。ね、不思議。懐かしいだなんて。

輪郭を覆う濡れたような漆黒の髪。形の良い薄い唇がゆっくりと動くのが見えた。

「リコ……コードNO・38569268-RICO」

胸の奥を震わせる低いアルトの不思議な響き。呼びかけられる前から、彼がこんな声色だって知っていたような気がする。

再会（レオン）

AM7:00、リコが目を覚ました。昨夜彼女のカプセルベッドへ送り込んだ睡眠剤は、目覚めの時間をきっかりと指定する事ができる。

不意打ちの出発。『sea（海）』の場所はトップレベルの機密情報だ。途中経路の景色一つ、リコの目に触れさせる訳にはいかない。この俺でさえ、視力遮断ゴーグルの装着を余儀なくされた。十分前、ゴーグルの着脱を許され、三日後の同じ時間に迎えに来るかとパイロットは去っていった。

波の音が響いている。思ったよりもそれは空気に溶け込み、耳障りには感じられなかった。小さなコテージの中ではカタカタと、天井にはめ込まれた扇風機が回っている。椅子から立ち上がり、ベッドのふちに手を掛けると、ギシリと軋んだ音が鳴った。リコの視線がこちらに流れる。まだ、眠剤が残っているのかぼんやりとした眼差し。

「リコ……コードNO・38569268-RICO」

そう呼びかけると、ぱちりと彼女の瞳が大きく見開かれる。条件反射ってヤツだろう。毎朝毎朝、目覚まし代わりにこのコードネームで呼び起こされ、割り振られた仕事をこなす日常。ギアは皆、感情のない無表情な者が多い。

「……だあれ？」

上半身を起こしたリコがこちらを覗き込んでくる。不意打ちに呼びかけた俺に警戒心を見せることもなく、少しだけ気恥ずかしそうに再び声を掛けてくる。

「……コードコ？」

アートヒューマンに与えられる仕事は、単純作業ではなく創造性が必要とされる。その分少しは人間性が残っている者もいるのかもしれない。

「今から七十二時間、宝くじで獲得した自由がお前に与えられる」
リコの瞼がパチパチと瞬く。きょとした仕草。話が飲み込めていないのだろう。俺は淡々と話を続ける。

「行動範囲は島の中及び周囲の浅瀬に限定される。島は一周徒歩10分程だ。他に滞在するものは居ない」

リコの視線はまっすぐに俺を捕らえ、神妙な様子で耳を傾けている。

「俺は監視員として滞在中同行する。逃亡は厳重に処罰される事を忘れるな」

そう言い放すと、しんとした沈黙が部屋を包んだ。

ギシッ。リコがそろそろとベッドから床に足を伸ばすと、古めかしいベッドのスプリングが音をたてた。

ギシッ。ギシッ……カプセルに眠る彼女にとって、さぞかしシーツを広げたベッドなど不思議な代物に見えるだろう。リコはしばらく感触を味うようにマットレスを撫でたり指で押したりしていたが、その内チラチラと窓に視線を泳がせ始めた。陽射しが強まったのだろうか、窓から覗く海の色が、いつそう鮮やかに浮かび上がる。

「俺の存在は気にしないでいい。お前が想定外の行動を起こさないよう見張るだけの監視役だ。」

誰の命令も受けない自由……それを手に入れただろうか？」

困ったような顔でリコはこちらの様子を伺っている。生まれてからずっと、自分の意志で行動する事など叶わなかった境遇。突然、好きにしろと言われ、困惑するのは当たり前かもしれない。

ぐいつ。不意打ちに伸びてきた手に袖口を掴まれる。

「ね、いつしょ……」

……何だ？

「海……いつしょ」

ギアは他人との会話が制限されている。そのせいなのだろう、リコの会話がたどたどしいのは。

いつもの自分だったら、何の躊躇もなしにその手を振り払うだろう

うに。どうしたっていうんだ？ 目の端にチラチラと入り込んでくる、海の蒼さに心が騒ぐ。

ぐいつ。再びリコが俺の手を引いた。今度はしっかりと手首を掴まれる。白くて細い指先の、何処にこんな力が潜んでいるんだ？ 引きずられるようにドアに向かう…と思ったら。

どかつ！ リコがドアに激突し、尻餅をついた。

「……った。いたい」

俺の手を掴んでなかったら、ひっくり返って頭を打つところだった。もう片方の手で、赤くなった額を必死にさすっている。

ウフに自動で開かないドアはない。自分で扉を開いた経験が、彼女にはないのだろう。無知は己の命を危険にさらす。

涙目でリコが俺を見上げてくる。

「そんなに痛いなら、これが夢じゃないってわかっただろう」

皮肉を添えてドアノブを回し、開け方を教えてやる。

ほら、やってみる。立ち上がったリコに視線で促す。

カチャガチャ。リコがぎこちない手つきでドアノブを回している。片手じゃあ開かないとでも思ったのか両手で必死に握り締めている。難しい事なんて何もないはずなのに、扉一つ開けられないってどういう神経だ？ 舌打ちしたい気分では腕を伸ばした。リコの指の上に手を添えてドアノブを回す。

ふわり。顎の下でリコの髪が触れる感触。……なんだ？ この感じ。どこかで同じ場面が……。

ざわざわと、胸が騒ぐ。締め付けられるように…込み上げてくるこの感情は何なんだ？

パタンと、あっけなく扉は開け放たれた。急に開けた視界の眩しさに、目を細める。さっき、俺を捕らえていたもどかしさが、吹き抜ける南風に飛ばされていく感覚。

「わぁ、ね、あそこ……行こ」

いつの間にか、またリコに手首を掴まれていた。さくさくと砂を踏みしめながら、波音に向かって歩き始める。傷跡一つない卵のよ

うな白い砂浜に、二人の足跡が刻まれていく。

……俺は何をやっているんだ。仕事中に、女と手を繋いで歩いているだなんて。いや、今回の指令は何を持って任務遂行とするのか？ 消えないようにリコを監視し、三日間後にウフまで送り届ける。この状況は、あまりにも至近距離とは思われるが、監視状態といえない訳ではない。違和感を感じながらも、その現実に頷くしかないだろう。ぐつと、リコの指に力が込められる感触が伝わってくる。「すごい。動いてる……うみ」

ザンツツ。その波音を間近で耳にした瞬間、立ち尽くしていた。一歩も動けずに。

これは何だ？ ゆっくりと脈打つように揺れる海が、視界に覆い被さってくる。白い砂浜を溶かしながら、絶妙に色を変化させていくブルー！

「お日様たくさん吸い込んで、ひかってる」

目の前に釘付になっていた視線を、はっと彼女に流す。手をかざしながら、目を細める横顔が見えた。瞳は未知の世界への期待で押さえきれない輝きを放っている。

「キラキラ、きれいな」

屈託のない笑顔。たしか二十歳だったな、もう成人女性だっていうのに。……ちょっと発育に問題ないか？ コイツ。身体的には問題なさそうだが、あまりにも幼い仕草。

「ぐるって島、まわろう、ね」

ずっと手首をリコの指が擦り抜けていった。波打ち際に走っていく後姿。

あ……ただ。湧き上がる慣れない感情。身体的なものではない。リコの指先がふと離れた瞬間、えもいわれぬ不安が俺の神経を締め上げた。

どうした？ 緊張、焦燥、動揺、憂鬱、恐怖。あらゆる感情を押し殺す術を知っている。なのに、どうした？ 俺は何に翻弄されている？

「きゃっつー!!」

波打ち際を歩いていたらリコが、尻餅をついている。緩やかな波が彼女の身体を濡らしていく。押し寄せる波の感触に驚いたのか、リコは身体を強張らせてしゃがみこんだまま。

「あつくない……つめたいのね」

やっと慣れたのか、ぱちゃん手の平で水を叩く。

「みず、くすぐったい」

くすぐすと混ざる笑い声が、この状況を楽しんでいる事を物語っている。いつまでそうしているつもりだ。別に俺が口を出すこともない。彼女は『自由』を満喫しているだけではないか。

「ほら、行くぞ」

手を差し出したのは何故？ 放っておけばいいものを。

リコは素直に腕を伸ばし、俺の手の平に指をのせてきた。

もう、誤魔化しようもない。再び繋がれた温もりに胸を撫で下ろすなんて。知っている。そう確信した。リコを？ いやこの感覚を。アートヒューマンとは一度も会った事などない。生まれてからこのかた一度も、だ。すべての接触は管理され記録される。……なのに。知っている……この女を。重ねた指先からひたひたと忍び寄る満たされた幸福感も。そしてもうひとつ俺の胸を締めあげる遠い記憶。暗い、暗い。

それは奈落の底までも続く、果てしない絶望。

花模様のワンピース（リコ）

あんなに陽射しが強いのに、足首に触れた海の水は意外なまでの冷たさで、驚いた拍子にバランスを崩してしまった。

「きゃっつー！」

ばっちゃん。お尻に水が染み込んでくる。

「あつくない……つめたいのね」

体重を支えようと付いた手の平の下で、砂がさらさらと流されていく。不思議な感触。

「みず、くすぐりたい……」

手の平で水面を叩くと、パチャンと心地良い音が響く。柔らかい。体の形に、砂がくぼんで、地面に吸い込まれそうだ。

「行くぞ」

声の方向を見上げると、コバルトブルーの空を背景に彼が手を差し伸ばしている。夢？ 夢で見た気がする。こんな風にあたしを覗き込む瞳。

素直に彼の手を取り、再び歩き出す。濡れたワンピースの裾からポタポタと落ちる水滴が何だかくすぐつたい。

ああ、でもなんて素敵。この島を覆い尽くす色彩は、息づくように艶やかだ。コテージのはるか上まで背伸びしたのつぼの木。こんもりと生い茂った緑に飾り付けられた南国の花々。まっさらな砂浜のキャンバスが、あたし達の足跡を点々と刻んでいく。そして何より心を揺さぶるのは……ブルー。降り注ぐ太陽の光を吸い込み、金色にオブラートされたソーダブルー。

陽射しに火照った肌を、海風がそつと撫でていく。隣を歩く横顔をちらりと盗み見ると、彼は真っ直ぐに前を見据え、不機嫌そうに黙り込んでいる。でも、不思議。怖くない。

繋いだ手の平が、二人の温度を混ぜ合わせる。男の人の手って、こんなに大きいんだ。

……やっと思つた。この気持ちはなあに？　ずっと、ずっと探していたもの……。

木々の隙間に点在するコテージを通り過ぎる。途中、砂が入ったと立ち止まると、彼は靴を脱ぎ捨てた。裸足になったならばと、その手を引き、わざと波打ち際を歩いて進む。舞い降りた海鳥が物珍しそうにあたし達を見送っている。時間が止まったかのようだ。

二時間ごとの進捗報告、独りきりの作業ルーム、決まった食事、永遠と繰り返してきた決められた生活のリズム。

“誰の命令も受けない自由……それを手に入れただろう”

あたしが手に入れたもの……。再び彼の横顔に視線を流す。

どくんっ。チャコールグレーの瞳と目が合ってしまった。ぷいっ
と彼は顎を上げた。なのに、手は繋がれたまま。

海辺を離れて島の中央に足を踏み入れる。建物の中に入っていくと、彼は硝子張りの扉の中にあたしを招き入れた。帽子や服、色とりどりの布地が綺麗にディスプレイされている。どれも真新しいものである事が伺えた。

「好きな物を選ぶといい」

「え？」

「いくら南国でもずっと濡れた服のままいる訳にもいかないだろう。滞在中の着がえはここから好きなものを選んでいいと許可をもらっている」

選ぶって……。どれも鮮やかな服ばかり。

ギアは皆、支給される白い服しか身に付けない。こんな服は、絵画の中でしか見た事がない。並べられた服を眺めながら歩き回る。ぱさっ。頭の上に降ってきた布地に視界が遮られた。

「外で待つてるから着がえて来い」

扉の閉まる音。手にとって見てみると、白地に大輪の黄色い花が大胆に描かれたワンピースだった。あたしに選んでくれた……。んだよね？

素敵。素敵。でも、似合うだろうか。躊躇いながらもおずおずと

袖を通してみる。いつも身に付けている、発汗や蓄熱など機能性を重視したテクノロジー素材とは明らかに違う、軽く柔らかい生地 of 感触。

鏡に映った自分の姿を覗き見る。……あたしじゃないみたいだ。照れ臭くて仕方がない。

ドアに手を伸ばす。さっきよりも、今度はすんなりとノブを回し、扉をあける事が出来た。彼の姿を探す。白い砂浜に日除けの屋根があるカフェのテーブルで、ぽつんと椅子に座る後姿が見えた。歩いていく間、高鳴る胸の鼓動を不思議な気持ちで聞いていた。

どくんっどくんっ。気配を感じたのか、彼がゆつくりとこちらを振り向く。あたしの姿を認めると、一瞬、目を見開いてみせた。まじまじと眺めてくる。頭から爪先まで……。その視線に体が熱くなる。

どうしちゃったんだろう、あたし。強い陽射しに、のぼせたのかもしれない。

ガタンと小さな音を立てて席を立った彼が、すっと脇を素通りして行った。何も言わずに。

スカートの裾をぎゅっと掴む。落胆している自分に気づき、恥かしくなった。よくわからないよ。一体、何を期待しているのだろう？ 白い砂にくっつきりと落ちる自分の影をしばらく眺めていた。風にゆつくりとなびくスカート……。

ばさっ。

「きやつ」

不意打ちに頭に被さってきたものに手を伸ばす。帽子……。ぐるとツバの広い帽子。さっきの部屋に飾られていた物だ。

「陽射しにやられたりしたら面倒だからな」

いつの間にか背後に忍び寄った彼はボソリと呟くと、再びあたしの脇をすり抜け席に着いた。

「……ありがとう」

彼は聞こえないふりをしている。ぶっきらぼうな仕草。だけど、

深い優しさを感じる。この安堵感……。

カプセルで目覚める朝、いつも見ていた夢に想いをはせては、思い出せないもどかしさを感じていた。だけど、糸がほどけた気がする。泣きたくなるような懐かしさが押し寄せてくる。幸福で、暖かく、満ち溢れていた遠い夢の記憶。

ほら、探していたものはここにある。それは積み上げていく確かな時間。目覚めと共にかき消される事のない、新しく紡がれていく現実。

再び二人で歩き出した。少しだけ距離をおいて彼はあたしの後をついてくる。背中に感じる視線が気恥ずかしくて、振り向く事が出来ない。だけど、そんな戸惑いは、目の前に現れた風景に吹き飛ばされた。

「すごい。水の上に家があるよ！」

穏やかな海にコテージがポツンと浮かんでいる。木で作られた道が、砂浜から海の家に伸びている。恐る恐る、足を踏み出してみる。思ったよりも足場はしっかりしていて、板と板の隙間から、透き通った海面が垣間見える。

ずっと、何かが通り過ぎていった。あ、魚？ 魚だ。デッサンの題材に、水槽に入られている魚を見たことはある。だけど……何て鮮やかな鱗。

周りを見渡してみると、沢山の魚が泳いでいる影が浮かんでいる。しゃがみ込み、海面を覗くあたしの背後から、覆い被さるような影が伸びてくる。

「ピカソ・トリガーフィッシュ」

背中越しに彼が指差す魚を目で追う。

「ピカソ？」

絵の具を滲ませたようなマーブル模様。ピカソが魚に色をのせたら、本当にこんな絵を描くかもしれない。

ピカソ・トリガーフィッシュ。魚に名前があるなんて、今まで考えた事もなかった。ヒラヒラと、天女の衣を纏ったライオン・フィ

ツシユ。黄色い羽で舞うロングノーズ・バタフライフィッシュ。彼が囁く魚のネーミングは、不思議な響きを添えてあたしの耳をくすぐる。

ねえ、あの青い魚はなあに？ 身を乗り出したら、体が一瞬宙に浮いた。あ……この感覚……。

落ちる。落ちる。スローモーションのように時間がゆっくりと感じた。魚を指差していた手が大きく広がり、あたしの身体を抱き止めた。

どさつ。彼の腕の中に抱かれたまま、木の道の上に転がる。

「何をやっている。お前、泳げるのかっ」

あきれ果てた低い声色。

「泳ぐって……魚みたいに？」

あたしが泳ぐ？ 鼻先が触れ合うほどの距離で見詰め合う。怪訝な眼差しで彼はこちらを一瞥すると、急におかしそうに口元を歪めた。

「監視するまでもなさそうだな。そうか、泳げる訳がない」

あたしの顔が、チャコールグレーの瞳に写っている。そんな距離。どくんっ。あ、まただ。心臓が高鳴り始める。苦しいような、甘く締め付けられるような。

がたつ。逃れるように彼の腕の中から立ち上がる。おずおずと上から見下ろした彼の口元はもう笑っていなかった。ただ、あたしの視線を、途惑いを滲ませた表情で受け止めていた。

夢への逃避（レオン）

長い一日だった。アートヒューマンの女の世話の、なんと疲れる事か。

棧橋の先に連なる水上コテージの一棟を彼女にあてがった。隣の棟が俺の寢床。ひとつ屋根の下での監視は必要ないと判断した。泳ぎを知らない女では、海の上から逃亡のしようがない。棧橋を忍び足で横切るような事があれば、俺は部屋の中からでも察知できる。それになんと言っても疲れるのだ。さつき、裸のままドアをノックされたのには、さすがの俺も驚かされた。

「バス、いつぱい……」

鼻の頭にシャボンの泡を乗せたまま、困った顔で訴えてくる。白い肌が薄暗い外の風景に溶けてしまいそうな程に儚げで……俺は自分の部屋のバスローブを、女の肩に羽織らせた。

リコのコテージに行くと、開きっぱなしの蛇口がバスのお湯を溢れさせていた。泡風呂の泡がどんどんタイルに流れている。

「フワフワなくなっちゃう」

しょんぼりとした顔でリコはその様子を眺めている。

一刻前、蛇口を捻り湯を出したのは俺だ。その時、脇に置いてあったバブルバスのキューブも、あまり深く考えずに放り込んだ。温度の調整は無理だと思い手助けしたのだが、まさかここまで何も出来ないとは。今朝までドアノブすら回せなかった女だと、忘れていた自分が迂闊だった。

この島では二十一世紀初期の生活様式が模擬されている。この無駄に水を浪費するバスがいい例だ。人間が資源を使い果たす前の、贅沢を好んだ時代。バカンスという名目で、人々は大金をはたき、わざわざこんな南国へといそしんで出掛けた。皮肉にも、自然を味わうひと時の為に……。

ギアは裸でカプセルベッドに眠る。深い眠りについた頃、自動的

に身体は消毒され、肌の老廃物もジェットエアで吹き飛ばされる。貴重な資源である水を、体の洗浄の為に使うなど、今時ありえない。この場所だから許される贅沢。

平等などという言葉は綺麗事だ。地球を修復する為、コンピューターによる徹底した管理体制をしいた今でも、だ。マザーコンピューター・エリザベスの元では、管理する者もされる者も、身分の差はないとされている。役柄は、あくまで皆が円滑に生きていく為の区分けに過ぎないのだと。だが、己で物事を考える機会を失ったギアと、あらゆる知識を蓄えたチップを脳内に埋め込んだキーパーとの格差は歴然。

地球が歩んできた軌跡、あらゆる言語、文化、時代を経た生活様式……浅瀬に戯れる魚の名まで俺の脳内チップは一瞬にして弾き出す。そしてキーパーの中でも上層部一握りの者は、特権階級の恩恵を味わえる。地球の環境が急変し、人類の存亡が危ぶまれる時、シエルターにも代わるこの樂園^{ヘブン}で生き永らえる権利は、所詮、特等席をキープできる選ばれし者のみといった力ラクリ。

俺は？　こんな女の面倒を見させられるくらいだ。特権階級には程遠いつて事だ。

苦笑いを噛み殺して、蛇口の捻り方と、栓の抜き方をリコに教える。びしょ濡れの髪から滴を落しながら、彼女は神妙な顔でうなずいている。

昼間何度も心に覆い被さってきた慣れない感情が、再びひたひたと忍び寄る気配を感じる。一体、何だっというんだ？　心の中で舌打ちする。

「明日、俺がこの部屋に来るまで、外出は一切禁止する。これ以上世話をかけるな」

振り払うようにそう吐き捨てると、俺はリコの脇をすり抜けドアへと向かう。

「ごめ……なさい」

背中に小さく呟く声が投げ掛けられるのを、聞こえない振りをし

て外に出ていった。苛立っている自分がもどかしい。

俺はどうかしている。

脇を通り過ぎる時に一瞬、リコのはだけた前襟の隙間から、不思議な形のあざが見えた。羽を広げた小さな蝶のようだ。その瞬間、彼女を抱き締めてしまいたい衝動にかられた。唇を噛み締め邪念を振り払う。

どうかしている。

ちりちりと胸の奥底で、記憶の片鱗がくすぶっている。何故だ？

自分の水上コテージに戻ると、棚に並んだアルコールの瓶に手を伸ばす。グラスに注ぎ、唇を寄せると、誘うような香りが鼻孔をくすぐった。

何世紀にも渡って、人は趣向品として飽きることなく、この液体を愛でてきた。時には溺れ、惑わされ、身体を蝕む事さえもあるというのに……。今、人々の口にアルコールが触れる事はほとんど無い。だが、ここはさすが監視外地域『ヘブン』、小道具まで徹底した二十一世紀ごっこって訳だ。

窓を開け放ち、その先に続くテラスに足を運ぶ。ぽっかりと浮かぶ水上コテージは海に抱かれているようだ。海面に月の光が揺らめいている。

カラリ……。握り締めたグラスの中で、氷が音をたてた。

知っている。何を？ この穏やかなラグーンに映し出される光模様を。

グラリと頭の中が歪み、一瞬平衡感覚を失った。思わず閉じた瞼の裏側にちらちらと黄色い花模様が浮かんで消える。リコのワンピースの……。？ いや違う。似ているが違う。

酔ったのか？ アルコール耐性がレベル5のこの俺が、か？

職務に就くまでの訓練には、本能を脅かすあらゆる快楽に耐えうる術も叩き込まれる。アルコール、麻薬、性欲に至るまで。生身の女をあてがわれ、何週間も甘美な肉体的快楽に漬け込まれる。生ま

れ落ちた瞬間から、人肌の温もりすら知らない男達は軒並み脱落者の印を押されていった。

今、俺を惑わす慣れない感情が、酔いで説明がつくのならば、その状況に身を委ねてしまいたい。再び注いだウィスキーを煽り、ベッドに仰向けに寝転がる。固く瞼を閉じる。このまま眠ればいい。そう己に暗示をかける。

暗い穴に引きずり込まれる感覚に包まれる。けれどもいつだって眠りの淵を漂うだけで、俺はその穴に落ち込む事はない。不審な物音ひとつ逃さないよう、常に耳をそばだて眠る習慣が染み付いているからだ。

瞼の奥から灯火のように浮かび上がる光景が見える。夢？ もう何年も何年も、夢など見たことなど無いというのに。

……聞こえる。陽気な笑い声だ。男も、女も。歌も響いてくる。大袈裟に芝居がかった様子で、男が口説き文句を囁いている。

「今宵、貴女がいなければ僕はひとりシーツの海で凍えてしまう」

どつとわくような冷やかし笑いが、辺りにこだまする。誰だ？

目を凝らすと、細長く小さな船の上に彼等のは居た。一人だけ立ち姿の男が長い棒状の物を水に差し入れている。

棒……いや、これは船を漕ぐオールというものだ。何重にもドレープを描いたアーチを持つ、ルネッサンス調の重厚な建築物が建ち並んでいた。道ではなく建物の合間には水が満たされ、似たような細長い船が何槽も行き交っている。船上の女達は大胆に胸元のあいたドレスにきらびやかな宝飾品を飾りたて、編み込んだ髪に羽飾りをさしている。隣の男達は膨らんだ袖の上着に、ぴっちりとしたタイツと、かなり奇抜な装い。

夢の淵でも脳に埋もれたチップは的確に作動し、情報を提供してくる。ヴェネチア……ふとそんな単語が弾き出される。

英名：ベニス、アドリア海の女王と賛美された水の都。彼等の服

飾からして、中世十六・七世紀といったところだろうか。

奇妙な夢を見るものだ。ふわふわと漂う意識のなか、俺はこの世界を傍観している。

船上の男達は、ふと一点を見上げると、大袈裟に目を丸くし、うやうやしくお辞儀をしてみせた。その視線を辿ると、バルコニーより船を見下ろす、女の姿があつた。クスクスと笑いを噛み殺し、両手で手すりに頬杖をついている。

額を飾り立てる栗色の小さな巻き毛、螺旋状にまとめた網み髪。

深紅の唇、強い光を宿した瞳。

凜と咲く大輪の薔薇のようだ。

船の上で膝まづく男達に妖艶な含み笑いをひとつ投げると、女は素っ気なく視線を他に移した。じつと女の視線が一点に捕らわれている。そこには帽子を被った男が一人立っていた。

女が頬杖をつくバルコニーの真下には、柱廊造りのトンネルがあり、水際からの船を建物に招き入れる様式になっている。今、まさにそのトンネルをくぐろうとする船から、その帽子の男は彼女を見上げていた。

カタカタと頭の中で、奴のいでだちが分析される。

黒いビロードの山高帽。サテンのジューッポーネ（胴衣）には絹で包まれたボタンが並び、

首まわりは純白のひだ襟で包まれている。端麗に着飾った男は、深緑の瞳を見開いてバルコニーの女を見上げていた。

いつまでも絡み合った視線はほどかれる様子もない。だがそれは、男と女の色恋沙汰を奏でる前奏曲のように熱を帯びたものでもなかった。お互いの存在に気付いた事を確かめ合っている、そんな雰囲気だ。

ゆっくり建物に吸い込まれていく船が、二人の視界を遮ろうとしている。不意に女はドレスの裾を摘まみ、微笑みを携えてお辞儀をした。黄色……いや、黄金色の糸で織り込まれた花模様のドレス。ぐらり。視界が歪んで見えた。

次の瞬間、船から上陸する帽子の男の姿が目前に迫った。まるで全身を映す鏡のように、俺の目の前に男は立っていた。

ずいっと革製の磨きあげられた靴で、男はひとつ歩をすすめる。意識しか存在しない俺と奴の肉体がひとつに重なる不思議な感覚。

墜ちる……ストンと深い穴ぐらに墜ちていく。

遠のく意識の中、男の心が読み取れた。

“だから……こんな役回りは嫌だと言ったのだ。どうして俺があんな女の迎えなどしなくてはならない。

美しい。そうだ、異議など申し立てる余地などない程に。だが、それがどうしたというのだ。淑女と見間違う程に飾りたててみたところで、身体に染み付いた汚れを拭い去る事はできないであろう。所詮、あの女はコルティジャーナなのだから”

コルティジャーナ……

カタリ。

脳内チップが溜息のように最後の分析を弾き出す。と同時に、俺の意識も途絶えた。

コルティジャーナ。中世、宮廷に君臨した高級売春婦達。

リユートの調べ（モニカ）

よく男は嘘つきだなんて言うけれど、女のペテン振りに比べたら、可愛いものだと思う。視線を泳がせながらもじもじと、子供はあどけない嘘をつく、自分を守る為に。男も同じだ。

“愛してる”

“貴女だけだ”

背徳の時間を熱い溜息で埋めながら、潤んだ瞳でそう囁いてくる。そしてお返しにと、甘いお菓子をねだるのだ。一步距離をおいて耳をそばだてれば、なんて心地よく浅はかな嘘だろう。微笑みさえ添えて、私は彼等の願いを叶える事が出来る。そして逆に罌を仕掛けるのだ。金色に妖しく光を放つ、蜘蛛の糸にも似た罌。気が付いたら甘美な息苦しさにも身動きが取れなくなるように……と、女の嘘は計算高い。

言葉だけでなく、時には体温さえも、男を悦ばす為に熱を帯びる事すら出来る。

娼婦かどうかの境目は、自分の価値を男に認識させられるかどうかだ。金貨を払ってまで再び、また会いたいと思わせる女だけが、娼婦の称号を背負う事が出来る。

けれども、私はただそれだけの女になり下がる気は無い。寝たい男は自分で決める。そして、流し目ひとつで金貨の雨を降らせられる、ヴェネチアの花、コルティジャーナ（高級売春婦）への道を歩んだ。

なんて愛想の無い男。そう思った。先程バルコニーから見下ろした男が、ぶぜんとした表情で居間に入ってきた。だが、おもてなしに関して、こちらは玄人。最高の笑顔で客人を迎える。

「はじめまして男爵様。今日はサロンへお招き頂き光栄ですわ」

初見の客人だった。宮廷には出入りしているとはいえ、全ての貴族と顔見知りな訳ではない。まだ、私自身、顔が売れ始めたばかりなのだ。

男は新しいものに目がない。噂のコルティジャーナを味見しようと、爵位を持つ貴族さえもが誘いをかけてくる。そんな男達とは対照的な冷めた口調で、目の前の男はそっけなく言い放った。

「……男爵は私ではない。だから愛想笑いも不要だ」

見下した物言いにカチンときたが、こんな台詞に目くじらをたてる程、私は大人げない女ではない。あら、と大袈裟に目を丸くしてみせる。この男、使用人というには随分と立派な身なりに見える。「残念ですわ。やっと運命の方に巡り逢えたと予感がいたしましたのに」

真っ直ぐに男を見つめながら、甘い嘘を吹き付ける。だが、男は躊躇する事なく無粋な視線を絡めてくる。整った顔立ちが、余計にその冷淡な態度を際立たせていた。

「叔父貴好みの台詞だな」

「……叔父？」

「バルゾ男爵は私の叔父だ。人使いの荒い方だね。今日は小間使いの真似事を仰せつかった」

「エスコートを任せるなんて、男爵様は余程、貴方を信用なさっているのね。殿方は結構、嫉妬深い生き物ですもの」

「叔父は移り気な男だね。他のコルティジャーナの相手が忙しく、貴女を迎えに行くのが億劫になっただけらしい」

「……嫌味な男だ。女たるもの修道女のように慎ましく謙虚に生きるべきだなどと、声高に諭すタイプなのだろう。」

今の時代、女の生きる道は三つしかない。修道院に入り神につかえる人生。または妻となり、家に籠りながら子供を産み育て、それが自分に与えられた使命だと微塵も疑わず夫につかえる人生。そして最後の道は、己の欲望に忠実になる代償に娼婦となる人生。

その中でも、芸術にたけ、博学で、美貌を備えた一部のコルティ

ジャーナは宮廷婦人と呼ばれ、特別な扱いを手に入れる。肉体的快樂よりも、蜃気楼のように儚く甘い、ひと時の恋煩いを男達に振る舞うのだ。女が自分らしく、知的に花開く唯一の道。

コルティジャーナの何処が悪い。迷いなど今の私には微塵も残ってはいない。所詮、娼婦だと見下す者がいようと、私は誇りを持つて相手を見返すことができる。生まれた瞬間から、恵まれた人生をお気楽に歩む貴族の男など、自分がのし上がっていく為の踏み台でしかない。

「でも救われましたわ。代理に貴方のような方がエスコートして下さるだなんて。私、運だけはいいんですの。では、転ばないように腕を貸して下さる？」

私はスカートの裾を少しだけたくし上げ、赤いビロードで装飾されたチヨビン（厚底靴）をそつと覗かせた。

「今日の踵は特に高くて……けれどもこれなら濡れた川辺りを歩いても、足元を濡らさずに済みますわ」

「こんな靴が何故流行るのか理解に苦しむね。女のお洒落は命懸けだな」

すつと、男は腕を差し出してきた。

「叔父に会わせる前に、怪我でもされたら面倒だ」

全く嫌味な男だ。ちらりと歩き始めた横顔に視線を向ける。幾つくらいだろう。私よりひとつたつ上といったところか。二十……二三。

背の高い男だ。差し出された腕にぶら下がるように歩を進める。

“女のお洒落は命懸けだな”

そう、命懸けだ。おぼつかない足元に男が思わず手を引きたくなるようにと、こんな不安定なチヨビン（厚底靴）を履く。優雅に広がるドレスを際立たせる為に、ギリギリとウエストを細く締め上げるコルセット。手加減を間違えれば、骨を砕く事さえ珍しくはない。金糸で織り込んだ花模様のドレスを纏ったコルティジャーナを、男達の瞼に焼き付けるため、誰よりも優雅に咲き誇らなければ。

再び男の横顔を盗み見る。悪くない。柔らかく撫で付けた癖のある黒髪。形のよい顎。余分な肉とは縁遠い滑らかな頬は、出来すぎたブロンズ像のようではないか。冷淡で薄闇の海を映したような深緑の瞳を持つ男爵の甥。

わざと遅れてサロンの扉を開けたなら、尚更に皆の注目を集める事だろう。そして意外なカップルの登場に驚きながらも、称賛の眼差しを注がれるに違いない。自惚れてなどいない。私は美貌を売り物にしているコルティジャーナなのだから。そして愛想がないものの、隣の男は競う程に光を放ち独特の魅力をかもし出していた。

随分と時間をかけ、一階の船着き場まで降りた所で、男の上着の裾を引く。何だ？ と彼は怪訝な眼差しを落としてきた。年季の入った演技力で、私は申し訳なさそうに罪を告白する。

「大事な物を忘れてしまいました。男爵様に絶対に持つてくるようにと仰せつかっていましたのに……」

「私が急いで取ってこよう。忘れ物は居間のテーブルの上にも？」
「いいえ、大事な物ですから秘密の場所に隠してありますの。私も一緒に戻りますわ。また腕を引いてくださる？」

男の表情が曇るのが見てとれた。決して口にはせずに、胸の内ですつと笑いを噛み殺す。

“綺麗な顔が台無しですわ”

隠れ家のような男爵の別宅は、トルコ人商館の上階にあった。室内は、宮殿の一室かと見間違う程にきらびやかで、質素な外観から想像も出来ない。

大理石、金細工、壁を彩る艶やかな絵画。今までの貴族とは格が違う。けれども、この場に相応しい男の腕に導かれ、臆する事なく私は広間の中央へ進んでいく。

新参者のコルティジャーナに好奇な視線が絡み付いてくる。期待を裏切らない微笑みを携え、優雅な足取りでその視線を横切ってい

く。凝った細工を施した椅子に、一目で主賓だとわかる男が座っていた。

「叔父上、モニカ嬢をお連れしました」

うやうやしく男は、帽子を胸に男爵に挨拶をした。彼の口から、さらりと自分の名が溢れた事に驚かされる。

いつだって男から、ねだるように名前を尋ねられるのが当たり前
の日常。だが、そんな価値など無いとも言いたげな様子で、ここ
までの道のり、男は決して私に名を問いはしなかった。自尊心を踏
みにじられたが、こちらからもあえて彼の名を尋ねない事でブライ
ドを保っていたというのに……知っていたなんて。わかつていな
がら、呼び掛けてもくれなかっただなんてたいそうな嫌われぶりだ。

だが、こんな時にこそ私は顎をあげ、自分の存在を引き立たせる
術を知っている。蔑まれようとも、相手が無視できない程に価値の
ある女だと誇示する為に。

「男爵様、今宵はサロンにお招き頂き光栄でございます。ご挨拶が
わりに一曲、リュートの音色をお披露目してもよろしいでしょうか」
私は甘い媚を含ませた眼差しでそう挨拶をした。男爵は値踏みす
るように私をしばらく眺めると、満足そうに頷いた。

男爵の背後に控え立つ女が、じろりとこちらを見据えている事に
気付く。挑発するように胸ぐりの大きく空いた青いドレス。黒髪を
高く結い上げ、金の髪飾りを散りばめている。若いという年を過ぎ
ようとしている年齢だと伺える。熟れた果実のような色香をかもし
だしていた。コルティジャーナだという事は付け足すまでもない。
距離からして男爵の愛妾だろう。けれど、嫉妬深い女はいただけな
い。

挑み返すほど私は愚かではない。男は余裕のある女に寄り掛かり
たがるものだ。ご機嫌いかが？とでも言いたげな視線を女に流す。
ついつと彼女は視線をそらしてしまった。

私は後ろに控えた小間使いに目配せをすると、部屋から持参した
楽器を受け取った。

リュート。この楽器の震えるような上品な音色は人々の心を弾く。「楽器の女王」と称される理由は、小振りで女性にも似合うという意味が含まれているのだろうか。注意を引くような大きな音を奏でるわけではない。けれども思わず耳をそばだてずにいられない。魂を爪弾く魅惑の旋律。

私は小さく息を吐くと、調べに乗せて歌いはじめた。

“ 気紛れでもいい。愛してくださるなら。

今宵、貴方の心に散る薔薇の花になりたい。

気紛れでもいい。愛してくださるなら。

今宵、貴方の瞼に私の微笑を刻みつけたい。

真珠の涙で惑わせようか。

甘い口づけで酔わせようか。

気付いてください。貴方から捧げられる花冠を待つ女を”

しんとした静寂の後、溜息と共に拍手が沸き上がる。自分の才能をより知らしめる秘訣は、即興での弾き語り。伴奏を奏でながら、頭の中で次なる相応しい言葉を吟味する。すると、背後から調べを追い掛けるように、異なるリュートの音色が響いた。力強く弦を弾くリズムに、弾き手は男だと伺える。気にして振り返るのは無様だ。思えた。やがて、男の歌声が響いてきた。

“ 眠り込んだ貴女は気付かないまま。

愛は闇夜をいつもさ迷う。

夜毎、違う男に微笑む君に心奪われた私は愚か者だろうか。

気紛れの振りが唯一の砦。

それさえも奪われたなら、我が身に剣を突き立てるであらう。

追いかけて欲しい。

だから背を向けよう。

夢見て欲しい。

だから満たしはしない。

花冠は既に貴女の髪を彩っている。

だけど気付かないで

気付かないで……”

弾き手はどんな男なのだろう。即興での返歌にしては粹な出来だ。仕上げの旋律は示しあわせたかのように、音をいつそう深く絡ませていく。高く低く。命を吹き込まれたリュートの音色は伸びやかに息づき、やがて小さな溜息へと消えていった。

わっと湧くような拍手が辺りを包む。男爵までもが、席を立ち愉快そうに手を叩いている。私はひと時のパートナーを確かめる為にゆっくりと振り向いた。

だって……まさか。どうしてこの男だったなんて想像できよう。

深緑の瞳。男爵の甥だった。注目される中、男は芝居がかった様子で私の手を取ると冷たい唇を指先に重ねてきた。

「カルロ・モディリアーニです」

皆が見ている。取り繕った笑顔を返してみたが、この男、カルロには全てを見透かされている気がした。

カルロは私が手にしていたリュートをそっと取り上げると、自分の楽器と一緒に小間使いに手渡した。

「全く疲れるな。場を盛り上げるのは……」

ひっそりと声を落としたカルロが話しかけてくる。

「お互い、思ってもいない嘘を歌にするのが得意なようだな」

私は何も答えず、リュートを運んでいく小間使いを目で追っている振りをした。

この男は危険だと、本能が囁く。カルロの存在が、あがらえない運命の渦のように感じた。歯車がゆっくりと回り出す予感。

「どうした。今宵の相手でも吟味しているのか。叔父上にはあの愛妾が一晩中へばりついている」

青いドレスの女を視線でさしながら、反応のない私を挑発するか

のような台詞が飛んでくる。

「相手に困っているなら、私が買い取ってやろうか？」

からかいが含まれた口調に、怒りすら感じた。だが、乗ったら相手の思う壺だ。冷静に……冷静にならなくては。軽く息をつき、苛立ちを振り払う。そして、挑むように毅然とした態度でカル口を見据えた。

馬鹿みたい。落ち着いてみれば、男の態度を鼻先で笑い飛ばす余裕さえわいてくる。さっきの歌……そうね、私達、嘘をつき合うには絶妙なコンビだわ。くすくすと、込み上げる笑いを噛み殺し、冷やかな口調で言葉を返す。

「残念ですわ。もう先約で埋まっておりますの」

愛の代償（カルロ）

気の強い女だと苦笑いが込み上げる。だが、リユートの腕前と、抜けるような透き通る声色には驚かされた。たまたま飾り物として壁にかけられたリユートに目が止まり、悪戯心で音を重ねてみたのだが……。感性が似ているのであろうか？ 溶け合うように混ざる旋律が不覚にも心地良いと感じてしまった。さすが、ただ見てくれる良いお人形さんでは無いようだ。コルティジャーナの勲章をぶら下げるだけの価値があるらしい。

聡明で美しく、男を惑わす悪女達。奔放に教会や宮廷を我物顔で歩き回り、時には国政にまで意見する。もし彼女達がただ男の慰み者ならば、憐れみの金貨を差し出すだろう。だがコルティジャーナは違うのだ。純血に誇りを持つ高貴な血筋に、時にはとんでもない落とし物を置いていく。その奔放さを尻拭いする者の絶望など、そ知らぬ振りだと言わんばかりに。

わかっている。コルティジャーナなど、何処にでもいる。いつもなら、そつない愛想笑いでエスコートなど容易い事だ。

あのバルコニーより見下ろされた眼差しに触れた瞬間から、何故かモニカを重ねてしまう。優雅で誇り高く咲き誇った伝説のコルティジャーナ……ヴェネチアの紫の薔薇と称された我が母に。

「今日は久し振りに楽しい余興を見せてもらったな」

見事なグラスに満たされたワインが、すっと目の前に差し出される。ムラノ・ガラスで作られたワイングラスは、薄氷のごとく砕けてしまいそうな程に繊細で……。ひと時の酔いを一際甘く引き立てる。芸術を愛でる叔父上らしい目利きだ。水の都ヴェネチアの、うつろいゆく光模様を吸い込んだかの逸品。

「見事なワイングラスですね。眺めているだけで、酔わされてしまいそうだ」

「ゆつくり味わってくれ。フィレンツェから来たばかりのところ、頼み事をして悪かったな。」

だが、やはりお前に任せて正解だったようだ」

叔父上は意味ありげな含み笑いを浮かべながら、視線である方向を示してみせた。広間の隅に置かれた紅色の革張りカナペ（カウチ）。そこに腰掛けたモニカを、数人の男達を取り巻いている。男爵家の集いに相応しい、大した身分の男達。彼女が何かを口にすると、皆がその言葉に耳をそばだてる様が見える。そしてどつと沸くような笑い声が後追いをするのだ。退屈を飼いならした貴族の男達を、一瞬にして虜にする技は鮮やかとしかいいようがない。

「あれは生粋のコルティジャーナだな。遣いにやったのがお前でないければ、

誘惑の多さにここまで辿り着かなかったかもしれない」

誰と重ねているのか、懐かしむような叔父上の眼差しを、すつと青いドレスが遮り立ちはだかった。

「男爵様、あちらで皆様がお待ちしておりますわよ」

闇のように深い黒髪と瞳。琥珀色の白肌に毒々しい程の紅い唇。この女、アンナが叔父上の傍らに、影のように寄り添うのを目にするようになったのはいつからだろう。七年……いやもっと。初めて顔を合わせた時、アンナの魂を吸いとられるような雰囲気息をのんだ事を覚えている。久しく会う女の姿を、まじまじと眺める。

陶器のごとく、冷やりと磨きあげられた肌。三十を越えるという年だというのに、その美しさに陰りひとつ浮かばせてはいない。どうして叔父上はこの女を愛妾として選んだのだろう。ラテン語すら流暢に操る聡明さか？ 感情をあまり覗かせない淡淡とした物腰か？ いや、先程叔父上に挨拶をするモニカを見詰めるアンナの眼差しといったら……青白い炎のようではなかったか。叔父上が他のコルティジャーナに目移りするなど珍しくもなかるうちに、モニカは警戒するに値するともいうのだろうか。

さりげなくアンナの手を取ると、叔父上は愛しそうに口づける。

「カルロに会うのは久し振りなんだよアンナ。兄上の葬儀以来、三年振りだ。今、ちょっと相談事をされてね、ほら、こんな若いんだ。すっかり今日の集いに華を添えるよう呼んだコルティジャーナに心奪われてしまったらしい。今、どんな風になびかせたらいいか密談しているんだよ。もう少しだけ男同士にしてくれないか？」

戯言を……と、口を挟もうとしたが、話を合わせる為、相槌を打つような愛想笑いで応えてみせた。た。あら、とアンナが僅かに唇の端を上げ薄く笑う。

「カルロ様のご帰還を、ずっと心待にしているご婦人が沢山いらっしやるというのに、随分とつれないのですわね」

アンナは満足げに小さく頷くと、人々が賑やかに談笑する輪の方へ去っていった。

「濡れ衣を着せるとは酷い。全く叔父上の策士ぶりには舌を巻く」

悪びれる様子もなく叔父上は、アンナの後ろ姿を見送りながら小さく声を落とし、密談とやらの続きを始める。

「今日でなくてもいい。モニカを私のアトリエに連れてきて欲しいのだ」

「……ブレンタ河沿いのヴィラにある？」

ゆつくりと叔父上が頷く様子を信じられない気持ちで眺める。

「モニカをモデルにして、あのアトリエで絵を描こうと思っている」

「……本気……ですか？」

貴方が女を描いたのは、もう随分と昔の話のはずだ。キャンバスに刻んだ女の死をきっかけに、人物を描くのを止めてしまったのではなかったか。宮殿の広間に掲げられているアドレナ海に戯れる獅子の絵画は、叔父上の作品の中でも傑作と誉れ高い。爵位を継ぐという重荷がなければ、間違いなく己の道を極めたであろうに。

父と母が巡りあった事。その歯車の歪みは、あちこちに波紋を広げた。男爵になるのは父だったはずだ。愛を貫き通す為に爵位を捨てた。……なんともロマンチックな響きではないか。事実、今尚皆が語り継ぐ恋物語。

ならば何故、その証として産まれた私は汚れている？ その血の濁りの為、貴族にもなりきれず、平民にも染まらない曖昧な存在。漠然と違和感を感じながら生きてきた。にもかかわらず、男爵家の血筋の者としてそれなりの恩恵にあやかってきた。母上の面影を受け継ぎ、類い稀なる端麗な容姿とやらのお陰で、女に困る事もなかった。相手は皆、女性ながら特別に外出の自由を許されている、貴族の中でも特に高貴な身分を持つ貴婦人達。平民の身分で戯れの恋を貴族の女と繰り返す。

これではまるで、コルティジャーナと同じではないか。母上の血が流れているのだ…そう思わずにはいられない。高貴な血筋を引く女達の肌にくるまれば、己の汚れが浄化される錯覚に囚われていたとでもいうのだろうか。

父上は三年前、流行り病で胸を患い呆気なく他界した。その死に顔はどことなく幸せそうで……若くして先立つた妻を追う喜びが溢れているようだった。

不思議と悲しみはわいてこなかった。寂しさはあったが、そんな顔を見せられては、静かに見送るしかないという諦めがそれを上回っていた。

そう、あの時だ。自分の正体を本当の意味で理解したのは……。父上の葬列に訪れた人々の波が引いあと、ぼんやりと居間の椅子に座っている時だった。

『大丈夫よカルロ、ひとりぼっちなんかじゃないわ。私がお嫁さんになってずっと傍にいますから』

十三歳になったばかり、まだ幼さの名残を覗かせるふくよかな頬を濡らしながら、ピアンカは跪き私の手を握り締めた。

ヴェネチアの数ある貴族の中でも大貴族と呼ばれ、元老議員を代々務める家柄同士という縁もあり、

ピアンカの父、グリマー二侯爵とは家族同然の関係を父上は持っていた。爵位を放棄した後も、その友情は揺らぐ事などなかった。早くに母を亡くし、兄弟も居ない自分にとって、赤子の頃から知って

いるビアンカは血の繋がった妹のような存在。黄金色の髪に長い睫毛、いつも子猫のごとく足元にまわりつき、上目遣いにこちらを覗きこんでいた可憐な少女。

“大丈夫よカルロ、ひとりぼっちなんかじゃないわ。私がお嫁さんになってずっと傍にいるから”

親という存在を失った今、そんな気遣いをしてくれるビアンカが本当の肉親のように感じられた。だが、なんて答えたらいよいよ……ビアンカの慰めの言葉に、不謹慎ながら小さな笑いが込み上げる。最近は照れがあるのか口になくなったが、小さい頃から何度となく耳にしてきた決め台詞“お嫁さん”

喪服の黒いドレスが、いつそうビアンカの蜂蜜色の髪を際立たせている。その髪を小刻みに震わせながらビアンカは、じっと潤んだ瞳で見据えてくる。痛いほどの真剣な眼差しに一瞬言葉を失い、己の顔に浮かんでいた笑いがすっと引いていくのを感じた。私の知らないビアンカがそこに居た。

『ビアンカ、何度論じたらお前は理解するのだ』

不意打ちに背後から響く男の言葉に、はっと振り返ると、そこにはビアンカの父、グリマー二侯爵が立っていた。げっそりと影を落とす類。親友の死が彼にどんな仕打ちをもたらしたのか、その疲れきった顔が全てを物語っている。

『貴族の娘は貴族の男としか結婚できない法がある。諦めなさい』

娘には甘く、その望みを退けた事など皆無な侯爵がはつきりとその口にした。

『いやっ』

ビアンカは、私の膝に顔を埋めると小さく叫んだ。

『私、もう決めているのよ。ずっと……ずっと前から決めているのっ』
流れる髪が、ビアンカの華奢な背中を覆っている。さめざめと泣き崩れる様に、胸がえぐられる気がした。

『平民の血が混じるカルロは、貴族にはなれんのだ』

貴族になれない……。わかっていた。そんなことはとっくに。け

れども、他人から断言されれば、刃のごとくその事実には胸を切り裂かれる。

『お父様なんて大っ嫌いよ。私を王侯貴族にでも売るおつもりなんだわ。私の価値なんて、侯爵家の為の齒車でしかないのよ』

『いい加減にしなさい。お前のしていることはカルロを追い詰めるだけなのだ』

苦悩を浮かべた面持ちで、グリマー二侯爵が視線をこちらに向ける。

『すまないカルロ、こんな日に…嘘偽りなく君の事を息子のように思っている。だが、我が一族から罪人を出す訳にはいかないのだ』

小さな嗚咽にビアンカの抵抗の言葉がかき消されていく。彼女の興奮を落ち着かせようと、そつと髪を撫であげる。幼い頃、よくそうしてたように……。

手の平にビアンカの温もりが伝わってくる。彼女の体温を指先で吸い取りながら、こんな自分の為には戦っている彼女を守ってあげたいと切に思った。

さらってしまおうか。今までわいたこともない思惑が覆い被さってくる。彼女のように無垢な心で一途に求められる事など、一生無縁に思えた。だが、ビアンカを愛しているのかと問われれば、妹のようにとしか答えられない。ならば与えられるだけではないか。なにを？ そう、自分の居場所を……。私などビアンカから奪うばかりで、分け与えるものなど何も持ち合わせてはいない。

『ビアンカ、侯爵の言う通り罪深い事だ。君に溜め息橋を渡らせるだけの価値など私にはないのだから』

溜め息橋…… 宮殿の裏に造られた牢獄へと導く小さな橋。艶やかなヴェネチアの街並みに別れを告げこの橋を渡る時、罪人は皆足を止め、小さな溜め息をつくという。私との結婚にそんな罰が生まれるという現実。

父と母のように、貴族の立場であるものが男ならば、婚姻相手は貴婦人であろうと娼婦であろうと咎められる事はない。爵位を放棄

したのはその子孫へと家名を継承していく事が困難であるが故。私の存在は何だ？ 関わる人達から、あらゆるものをはぎとっていく。まるで呪いのようなではないか。

「久しぶりのヴェネチアはどうだ？ 魂が生き返るだろう。海に浮かぶ街並みはさながら人生を演じるに相応しい舞台装置のようではないか。人々は誇り高く気さくで、生きる事を楽しむ天才だ。お前は生まれも育ちも生粋のヴェネチア人、他の土地の水は合わぬはずだ。兄上が死んで三年が過ぎた。いい加減、帰って来い」

子供を諭すような柔らかい声。さ迷っていた視線を叔父上に戻すと、父上の面影を匂わせる瞳に捕らわれた。

あの葬儀の後、全てから逃げ出したかった。フィレンツェに渡り、父上が生前手掛けていた貿易商の事業を三年かけて拡大する事に没頭した。未練など……そう自分自身に言い聞かせながらも、ベッドに横たわり瞼を閉じれば、ゆらゆらと海面に映し出されるヴェネチアの街並みが浮かんでくる。母が死に父が死に、ビアンカの桜色の爪が並ぶ白い指も振り払った今、あの街に戻る理由も見つからない。そんなある日、不意打ちに叔父上の使者が手紙を携えて訪れた。たまには顔を見せに来いという短い文面を目にした時、背中を押され安堵している自分がいた。どこかで待っていたのかもしれない。故郷へ引き戻してくれるきっかけを。

「男爵様、同志として忠告しに参りました。あちらのご婦人達にカルロ殿をひとり占めしていると恨まれておりますぞ」

いつの間にか叔父上の背後に忍び寄った建築家の男が、そつと叔父上に耳打ちする。名だたる教会の設計を幾つも手掛け、室内に差し込む光模様まで計算し尽くしたその技術は、まさに神業と絶賛さ

れている。私はかしこまった挨拶を彼に捧げた。

「先程のリュートは素晴らしかった。男爵家は芸術家の血筋ですな」
こんな大芸術家に何て答えていいやら……恐縮した笑顔を向ける

「カルロ殿は今、フィレンツェにいられるとの事。明日のカルネヴァーレ（カーニバル）を楽しむ為に帰還されたのですかな」

……カルネヴァーレ。もうそんな時期か。

「いや、何かとこの甥がいないと華がなく寂しい。だからもう手放さないと口説いていたところです」

真面目な面持ちで叔父上が答えると、その仕草は余計冗談めいて見える。建築家は愉快そうに私の背を力強く叩きながら「色男は大変だな」と笑ってみせた。

「ところで、先程君とリュートを奏でていたご婦人はお知り合いかな。話し掛けてみたいのだが、あんなに沢山のライバルに取り囲まれていては、目の前まで辿り着く事もままならない」

すぐるような眼差しを向けられ、これが話の本筋なのだと確信する。天井に延びる柱一本の優美さで、人々の心を虜にする技を持っている。女の扱いには奥手のようだ。客人の願いを叶えるべく、先程より取り巻きの多くなった紅いカナペ（カウチ）に案内する。

どんなに沢山の人が群れようと、モニカには人目を惹きつける天賦という物が備わっているらしい。取り囲む男達の視線を糧に、より艶やかに咲き誇る大輪の薔薇。カナペ（カウチ）にドレスを広げ、優雅な物腰で寛いでいる。

足元より覗くチョビン（厚底靴）が放つ赤いビロードの光沢。ふわりと凝ったレースの襟ぐりが柔らかく覆う、白い首筋。贅沢な装いから覗く僅かな手足、傾けられた首の角度まで、計算ずくで一番美しく見える術を心得ている。

モニカの長い睫毛が羽のごとくパサリと上下に揺れ動くと、男達は息を潜めしばし彼女に魅入られる。その一瞬の沈黙を狙い、会話を口を挟んだ。

「失礼ですが、お仲間に加えて頂いてもよろしいですか」

モニカの視線がゆつくりとこちらに動く。不思議な色の瞳だ。ガーネットの輝きを忍ばせたブラウンとでもいうのだろうか。宝石にも似たその眼で、金貨を積み上げる男を一瞬にして見抜くのである。彼女の眼差しは私の姿を素通りし、恥かしそうに背後に隠れる建築家の姿を捕らえていた。モニカが挨拶の為腰を浮かせると、いち早く建築家は彼女の足元に跪いた。そして、色素の薄い手の甲にうやうやしく口付ける。

「エンツォと申します、お目にかかれて光栄です。モニカ嬢」

「建築家のエンツォ様？まあ、こちらこそ光栄ですわ。あなた様の手掛けた教会で日々祈りを捧げております」

この男、やる時はやるじゃないか。すっかり取り巻きの一人として溶け込んでいる。叔父上のモデルになる話を切り出すには、人目が多いというものだ。お役目御免と、この場は引き上げようとした時だった。

「では、本当に明日のカルネヴァーレ（カーニバル）で貴女を見つけてられたら、パートナーの座を一晚射止める事が出来るのですか」

取り巻きの一人が、上ずった声色でモニカに伺いを立てている。

「ええ、カルネヴァーレは己の姿をマスケラ（仮面）に隠し、時には身分を越えた恋を実らせるお祭りでもありますわ」

口元を羽根であしらった扇で覆いながら、くすくすと愉快そうにモニカは話を続ける。

「私を見つけ出してくださった方には、無償でひと晩の夢をお贈りします」

「わっ、私も参加してもいいでしょうか」

柄にもなく建築家エンツォが、慌てた様子で名乗りをあげる。

「もちろんですわ。でも、この日の為にヴェネチア中の娘が着飾って街を彩っておりますのよ。」

私なんて色褪せて見えてしまいます。探し出して頂けるか、心もとないですわ」

心にもない謙遜を……そっと胸の中で毒づいたはずなのに、その

言葉を耳にしたとしても言いたげに、モ二力の視線がずっとこちらに流れてくる。ゆらゆらと揺れる、孔雀の羽根の合間から覗く挑戦的な眼差し。

「カル口様は私を探し出して下さるのかしら」

その言葉に触発されたように周りの男達が名乗りをあげる。

「いや、私が見つけてみせますぞ」

「なにを、そのお役目は私にお任せください」

全く大した女だ。無償のひと時の夢とやはらは、これから先、彼女の話題性に類を見ない付加価値をもたらすであろう。折角のご指名だ、社交辞令のひとつと言っても添えねば、周りの貴族に無作法な男爵の甥と汚名を課せられてしまう。

「ガーネットの瞳を探し出してみせます」

私の答えに、ゆらゆらと動く扇が一瞬止まってみせた。妖艶な微笑みの裏で何を企んでいる事か……。挑むような視線を絡ませながら、お互い探るように睨み合っていた。

カルネヴァーレ（モニカ）

享樂的な街。それは、ヴェネチアを語るに相応しい言葉。この街に暮らす人々は、貪欲に楽しむ時間が必然だと悟っている。マスクラ（仮面）に現実を封印し、カルネヴァーレ（カーニバル）に一步足を踏み出せば、ひと時違った人生を味わう事が出来る。淑女が娼婦に、コンドラ漕ぎが大貴族に。家柄も爵位も、平民か貴族かの境界線すら曖昧になる。年齢も、時には性別さえも無意味な存在となる。

ベッドの上に並べた服を眺めながら、込み上げる笑いを噛み締める。真珠色のマスクラは、色とりどりの飾り模様で縁取られている。“カルロ様は私を探し出して下さるのかしら”

問い掛けた瞬間のあの男の顔といったら……何故、自分が？と言いたげな疑問符を眉間の辺りに張り付かせていた。だからそれは、ほんの一瞬。次の瞬間には、耳障りの良い甘い言葉で本音を覆い隠してみせる。

“ガーネットの瞳を探し出してみせます”

カルロが女だったなら、さぞかし売れっ子のコルティジャーナとなるであろう。不思議な男。何故か自分と重なる部分を感じる。あんな男のどこが？感情に振り回されず、常に周囲を見渡す抜かりの無さ。笑顔の下に忍ばせた冷淡な素顔。飼い慣らしてしまった孤独を宿した瞳。頭の中で並べた共通点に、苦笑いが込み上げる。

何を……同じものか。あの男の苦悩など、地獄を覗いた自分の絶望に比べたらどれ程のものだろう。飢えを知るはずもない。愛する者をはぎ取られる喪失感や、見知らぬ男に身体を差し出す屈辱など、貴族の男になど縁もゆかりも無い事。まして男爵を叔父に持つなど、貴族の中でもより高貴な身分ではないか。質の悪い男。馬鹿な方がまだ可愛げがあるというものだ。

だけど、どうしてだろう。あの深碧の瞳に何もかも見透かされて

いるようで、必要以上に意識してしまう。

“ガーネットの瞳を探し出してみせます”

カルネヴァーレに繰り出す頃はもう陽が暮れているだろう。赤味を帯びたブラウンの瞳は闇に紛れてしまはずだ。

ひと捻りした髪を頭の上にまとめると、控えめな羽飾りのついたビロードのベレー帽をかぶる。ふくらみを持たせた肩に入ったスラッシュ（切れ目）から、異なる色のシャツを覗かせるダブレット（上着）を着る。藍色のダブレットのくびれた胴回りに巻きつけられた金色の紐は、優美なデザインを引き立てていた。白いホーズ（タイツ）には少し戸惑ったが、履いてみれば暖かく癖になりそうな温もりを味わえる。そしてそっと手にした付け髭を、鼻の下に乗せてみた。

わかるものか。この装いで悠然とカルロのそばをすり抜けたら、どんなに愉快だろう。ネタばらしは、誰か顔馴染の貴族にでもそつと吹き込んで、今宵の相手にすればよい。無償のひと晩は、金の卵となるだろう。

全ての身支度を整え、鏡の前に立つ。見知らぬ若い男がそこに映っていた。上向きに曲がった口髭を、そつと真つ直ぐに整える。大袈裟に眉を片側だけ上げ、様々な角度で身なりを点検する。

準備万端だ。鏡に向かって微笑むと鏡の中の男も満足げに口元を緩めてみせた。

闇に染まり始めた街は、独特の空気に包まれている。ゴンドラには乗らず、迷路のような裏道を抜けていく。着飾った娘達はマスクラから覗く瞳を輝かせ、より大胆に思わせ振りの眼差しを男達に投げ掛ける。仮染めの恋に溺れる男女の影が、小さな橋の上で人目もはばからずに絡み合う。

なんて妖艶でふしだらな夜。

かかとの低い靴は軽やかに歩幅を広げる。男の装いをしていると歩き方まで大胆になるようだ。小さな井戸のある広場に出たところで、不意に手首を捕まれた。

「随分、細っこい腕だね。こんなで女を抱けるのかい？」

振り払う事も出来たが、立ち止まり声の主を振り返る。乳房を露にする程に胸ぐりの開いたドレスを着た娼婦だった。道端に立つ売春婦達の競争相手は、女装した男娼だ。自らの女性らしさを強調する為に彼女達は客引きする時に豊かな膨らみをさらけ出す事さえいとわない。

「安くしとくからさ、天国を見せてあげるよ……ふふっ」

思わせ振りの含み笑いの後、おもむろに女は掴んだ手首を自分の胸に引き寄せた。その柔らかな甘美な感触。男が女を求める訳が、少しわかった気さえする。

チラリと女の様子に視線を流す。手入れの行き届いた髪。水仕事など縁もゆかりも無い滑らかな指。マスケラの奥では予想外に必死な眼差しが泳いでいる。はすっぱな真似を試みたくところで、およそ道端で客を引く境遇とは縁遠い身分だと伺える。裕福な貿易商の奥方か、もしくは普段は貞淑という衣を纏った貴婦人か……

「貴女との天国も魅惑的だが、カルネヴァーレは始まったばかりだ」低い声色でそつと囁くと、マスケラをずらし、女の手にとつと別れの口づけを落とす。女の落胆する空気が伝わってきた。

大丈夫、周りを見回してごらん。男達が自分の出番はあるのかと、貴女を盗み見ているじゃないの。カルネヴァーレの闇に紛れ、女であることを堪能する夜。それが封印された願いなのだろうか。

女の脇をするりと抜け出し、再び歩き始める。海風にあおられ、肩にかけた黒いマントが蝶のようにひらひらとはためいた。

宮殿では舞踏会が催されていた。艶やかな衣装を着た人々が、マスケラをかぶり踊る様は幻想的でさえある。何百と置かれた燭台が、ゆらゆらと儂い夜を照らし出す。無礼講だ。普段足を踏み入れることすら許されない人々も貴族と肩を並べ祝盃を傾ける。

ああ、そうだ。喉が渴いた。壁際のテーブルに並べられたワイングラスに手を伸ばす。

「……と、失礼」

脇から伸びてきたもうひとつの指とぶつかる。ついと、隣のグラスに狙いを変え、譲る仕草を見せると「グラツイエ（ありがとう）」と呟く男の声がした。立派な身なりだ。服の仕立てを見れば庶民ではないと伺える。一夜漬けでは身に付けられない貫禄。おもむろにマスクラを取ると、一気に男はグラスをあおった。あの男爵家のサロンでカルロに連れられ挨拶にきた建築家・エンツォだった。グラスを飲み干すと、きよろきよろとせわしなく、広間の女達に視線を流している。

「探し人見つからずですか？」

声色を作り、唐突に話しかけてみる。建築家は驚いた顔でこちらを振り向いた。

「いや、まいったな。そんな風に見えるかね」

私はゆっくり頷くと、自分のマスクラを外した。すぐにバレてしまうのではという戸惑いはあったが、ゲームを楽しむにはスリルが必要だ。

コトリ。外したマスクラをテーブルに置くと、秘密のベールをはぎ取る音が小さく響いた。さりげなく口元に手をやり、髭を確認し、帽子を目深に整えるそして軽く息を吸い込み、建築家に笑いかけてみた。

「ご覧なさい、貴方のような立派な殿方に見初められたい娘達がここには溢れている。一人の女に執着するなどもつたいない事」

広間の正面を見据え、諭すよう口にすると、建築家の視線を横顔に感じた。

「いや、他の娘が霞むほどの価値のある女性でね…見過ごしたら生涯後悔する事だろう」

再びマスクラを被ると、建築家はダンスをする人々の群れの中に消えていった。

じらせばじらす程、恋の熱は高まるといふものだ。もう少し間を
おいて、建築家のもとを訪れよう。ネタばらしをすれば、この粋な
演出に、彼は称賛の眼差しを向けるに違いない。

消えたと思っていた建築家の後ろ姿が、ダンスをする人々の隙間
から見え隠れする。誰かと立ち話をしている様子だ。女の姿も混じ
っている。見事なブロードの髪。遠目に見ても可憐な雰囲気を纏い、
はつとするほどの華を持つ年若い女だった。顔はマスクで隠され
てはいたが、横顔から覗く綺麗な顎のラインだけで、美しい顔立ち
が滲み出ていた。

女が腕を絡め寄り添う連れは意外な男だった。頭ひとつ皆より飛
び出す長身。偽りの人生など不要だと言いたげに素顔をさらしてい
るカル口。優しい眼差しで女をエスコートしている。

貴方がそんな顔、出来るなんてね。あの子を取り上げたら、彼は
どんな顔をするのだろう。娘がこちらになびいたら、あの男の眉間
の皺を再び眺められるかもしれない。そんな思い付きに、笑いが込
み上げてくる。マスクをかぶり楽しげに踊る人々の隙間を、軽い
足取りですり抜ける。

「美しいシニョリーナ（お嬢さん）、一曲踊ってくださいますか」
そう話しかけると、三人の視線が一斉にこちらに注がれた。

「……君は……」

建築家がぼつりと呟くと、怪訝な眼差し向けていたカル口の視線
が取り繕ったものに変わった。お知り合いですか？ 建築家にそう
視線で尋ねている。娘はと言うと、どう振る舞ったらいいのか、カ
ル口に困った眼差しを投げ掛けていた。

「一曲だけですから」

返事など不要といわんばかりに、強引に手を引き、至近距離で値
踏みしてみる。白いドレスは金銀の凝った刺繍が施され、襟元や袖
口を飾りたてるレースも繊細な模様を透かしていた。細い鎖に繋が
れた宝石で飾りたてられている眩い金髪。よほどいい家柄の娘なの
であろう。目を見張る程の大粒の真珠を胸元で揺らしている。

コルティジャーナ（高級売春婦）は真珠を身に付ける事を禁じられていた。真珠は貞潔の象徴であるが故、汚れた身体には不釣り合いだと。素知らぬ振りで貴婦人のごとく真珠を身に付けるコルティジャーナは後を絶たない。役人は諦めているらしくお咎めは皆無であつた。だが私は真珠で装つた事は一度もない。自分にはやはり似合わないと思うからだ。

ふと、母の形見となつた真珠の首飾りを、姉の薬代の為に手放した瞬間が脳裏をよぎる。それは結婚の贈り物として父が母に捧げた真珠だつた。父の隣でいつも優しい微笑を絶やさなかつた母。

姉が貴族の男に見初められ嫁ぐ事になつた時、莫大な持参金を両親は無理をして用意した。持参金は花嫁の義務だ。用立てできない女達は神に嫁ぐべく修道院に行くしかない。平民の家柄とはいえ、父は腕の良い医者だつた。そこそこの蓄えもあつたようだ。望まれ、娘が貴族の家に嫁入りするとあつては、家を借金に抵当に入れてでも、身支度を整えてあげようと思うのは親心だつたのであろう。姉の結婚式の日に後ろめたさを感じたのだろうか、母は申し訳なさそうに私に言つた。

『この真珠だけはあなたに捧げましょう』

愛情を感じるにはその言葉だけで十分だと思つた。母には受け取れないと首を横に振つた。真珠の首飾りは母にとても似合つていたから……。結局、一度も私の首にかけられる事もなく、首飾りはその後、運命の悪戯で人手に渡つてしまつた。

薔薇の蕾のようなローズカットダイヤモンドの指輪。輝く数珠で縁取られたロザリオ。金細工が施されたエメラルドのペンダントトップ。

今、私はあらゆる宝飾品を容易く己の力で手に入れることが出来る。けれども、真珠だけは一粒も持つてはいなかつた。コルティジャーナとなつた自分には、やはりその輝きを汚してしまうような気がするのだ。記憶の隅に追いやつた母の思い出さえも一緒に……。

「よく似合っている。貴女のような可憐で清楚な娘にこそ、純潔を

象徴する真珠は相応しい」

その台詞に、カルロから拝借した白いドレスの娘は、困惑した眼差しでうつむいた。そして再びカルロにチラチラと視線を流す。男のあしらい方も知らない箱入り娘。こういう女なら、あの男の興味を引くのであろうか。

心の奥底で、何かがチリチリと焦げ付くような音を立てる。同じだ、貴族なんてみんな同じだ。姉をゴミのように捨てた男と何ら相違ない。身分の違いは、神から与えられた命の重みさえも左右すると勘違いしているのだ。

真珠によつて引き出された過去の記憶が、冷静さを奪っていく。いつの間にか曲は違うものに変わっていた。

「あ、あの」

白いドレスの娘から隠し切れない途惑いが伝わってくる。ダンスを続ける私達に、カルロが一步踏み出してくるのが目の端に見えた。「今宵、貴女に会えて忘れ難い夜になりそうだ」

耳元でそつと甘く囁き、彼女のマスクラに手を伸ばす。剥ぎ取った素顔は、女へと移り変わる手前の美しい娘だった。彼女は驚いた様子で、顔を覆う仕草を見せた。背後から伸びてきた大きな手に肩を掴まれる。

「決闘を申し込んだら、受ける覚悟があつての無作法だろうな」

氷のように冷やかな声だった。

「やめて、カルロ」

私の肩越しに立つカルロを必死で娘はなだめている。その空気に密接なものを感じ取る。

しばし沈黙が訪れる。それは少し違和感を感じるものだった。肩に置かれたカルロの指先から、動揺が伝わってくる。そして小さく呟く声が聞こえた。

「まさか……」

判る筈がない。カルロの前ではマスクラを外してはいない。声色も十分に気を遣った。しかも彼は今、私の後ろに立っているのだ。

面と向き合っている時には、勘付かれてなどいなかったと確信している。

次に耳に届いたのは押し殺した小さな笑い声だった。

「カルロ……どうしたの？」

異様な雰囲気になくなった様子で、彼女はカルロを問いただした。私も、カルロの笑い出した意味が見えず、ただじつと立ち尽くしていた。だが、次の瞬間、すつと襟足を指先でなぞられる感触が擦り抜けたかと思うと……。ばさっ。帽子が取り上げられ、結い上げていた髪がばさりと肩に落ちてきた。

「悪戯が過ぎるなモニカ嬢。男装とは恐れ入った」

脇を擦り抜けカルロは目の前に立ちはだかった。愉快そうに端の上がった唇が、不愉快極まりなく視界に飛び込んでくる。啞然とする私の指先からマスケラをもぎ取ると、カルロはそれを勝利品のように満足げに娘に返した。三人の輪の中に、建築家も驚きを隠せない様子で入り込んできた。

「どうしたカルロ殿、これは一体……モニカとはまさか……」

「意外な演出でしたね。なかなか見抜くのは難しい」

どうして？ どうしてバレたのだろう。疑問は拭えないがそう口にするのは無様に思えた。マスケラを外し睨むようにカルロを見据える。

「その立派な髭も偽物か？」

可笑しくて堪らないといった様子でカルロは笑いを噛み殺している。うなじから指を差し込み、もつれた髪を整える。そして、今更になつた髭を引き剥がした。

「モ……モニカ嬢っ」

大袈裟に驚いた様子で、食い入るように建築家がこちらを眺めている。白いドレスの娘といったら……胸元でマスケラを抱き締め立ち尽くしている。

「カルロの……お知り合いなの？」

不安げな口調でそう言うと、そっとカルロの腕に手を伸ばす。

「叔父上の客人だ。ビアンカ、迎えの召使が来ているぞ。屋敷を抜け出したことがばれたら、お父上にお叱りを受ける。もう帰った方がいい。ほら、人目がある。マスケラをつけなさい」

ビアンカ……そう呼ばれた娘は、壁際に控える黒い肌の召使に悲しげな視線を流した。そしてカル口の腕に絡めた指を、名残惜しうに抜き取った。

「当分こちらにいるのよね？ カル口」

小さな声は懇願するような響きを含ませていた。

「ああ、グリマー二侯爵に挨拶もしなくては。近いうちに伺うよ」
その答えはビアンカに喜びをもたらしたのだろう。彼女は納得したように顔を上げた。

「エンツォ様、失礼致します。お会い出来て光栄でした」

優雅な物腰は見惚れるほど艶やかで、微笑みかけられた建築家は嬉しそくに挨拶を返している。

「ダンスのお相手、楽しかったですわ。まさか女の方だったなんて……驚かせるのがお上手なのね」

ビアンカは表面上は平静を装い笑いかけてきたが、探るような視線は隠しようもない。

「大切な夜をお邪魔してしまい申し訳ございません。まさかもうお帰りとは……カルネヴァーレはこれからですのに」

取り繕った笑顔で応えてみせる。心の内は何故見抜かれたのだろうという疑問がまだ渦巻いていた。

「父に内緒で来ました。過保護すぎて困りますわ」

真っ直ぐに女同士の視線が絡み合う。ビアンカに先程のたどたどしい雰囲気はなく、値踏みするような女の視線で一瞥される。躊躇する事無く私はその視線を受け止めた。

もう一度、ビアンカはドレスの裾をつまみ会釈した。そして、マスケラをつけると召使の方へ歩いていった。

「私もそろそろ退散するよ。隣にいなながら気付かなかっただなんて全く自分が許せない。引き際だけは見苦しく無く振舞いたいものだ。」

モ二力嬢、今度は別の機会にお付き合い願いたい」

言葉とは裏腹に名残惜しそうな眼差しをよこすと、建築家は去っていった。二人きりの状況に置いてきぼりを食った気分させられる。

「さて、では付き合ってもらおうかな」

意外な申し出に「え？」と疑問の声がつい喉元を滑り落ちる。

「とぼけてもらっては困る」

有無を言わせない口調に返す言葉を失う。一步、二歩、歩み寄るカル口は二人の距離を息のかかる隙間にまで縮めてきた。ありきたりの男達が浮かべる欲情の色など、微塵も滲ませはいない瞳に捕られる。

「無償で振舞われる一夜の夢とやらを見せてもらおうか」

蝶の刻印（カルロ）

不思議な痣だ。だが、この女には似合っていると、不覚にも見とれている自分がいた。白いうなじに小さな蝶がとまっているのかと一瞬、目を凝らしてみた。

……

つい先刻まで、紅いカナペ（カウチ）に花模様のドレスを広げ、男達に取り囲まれていた態度とは随分な違いだ。叔父上の令でサロンのがひけた後、再び送っていく羽目になったのだが……。

行きはチョピン（厚底靴）におぼつかない足元を揺らし、この腕にしがみついていたというのに、帰りはエスコートなど不要とでも言いたげな態度で、つかつかと歩き出したのには呆れるを通り越し恐れいった。ゴンドラから降りる時だけは、さすがに差し出した手に指を乗せてきたが、地上に足をつけた途端、再び勝手に歩き出す。この女のリユートを、水路に投げ捨ててやろうかと思った。だが、楽器に罪はない。

思い留まり、モニカのリユートを手に、彼女の後を洪々とついていく。あと数歩で玄関の扉、というところで、モニカの身体がグラリとバランスを崩し横に大きく揺れた。

「危ないっ」

片手を差し出し細い腰を抱き止める。その時だった。

「……イタイっ」

「は？ 足でもくじいたか」

「ちがつ……髪っ」

背中を向けたままモニカは髪を押さえている。視線を辿ると、彼

女の後ろ髪がひと房、こちらのマントの留めボタンに絡み付いていた。

「痛いっ。早く絡んだ髪を取って頂戴」

「動くな。暴れるとまとめて抜けるぞ」

騒ぎを聞き付けたゴンドラ漕ぎが、灯りを手に駆け寄って来る。

そして事態をのみ込むと、モニカと私の間に明かりを向けてくれたゆらり。灯籠が、柔らかいレースの飾り襟に包まれた白いモニカの首筋を照らし出す。……蝶？ うなじの下に、爪先程の青紫の羽い、小さな羽を広げた蝶にも似た痣だった。

染みひとつ許さないのが美女の条件であろうに……肌に張り付いた痣でさえこの女は、魅惑の要素にすり替える事が出来るのか。

「……取れたぞ」

その言葉に安堵したように、モニカの強ばった肩から力が抜けた。振り向いた彼女の結い上げた髪が、ぱらぱらと乱れ崩れていた。唇にまで垂れた前髪を、そとつまみ上げ整えてやる。

「……してよ」

「は？」

拗ねてふて腐れた口調は小さなもので、よく聞き取れない。

「だから、腕を貸して下さるように、頼んでおりますのっ」

全く気の強い女だ。だが、お得意の作り笑顔よりは頂ける。

「足を痛めたか？ その靴は命がけだな。女は妙な代物を好む」

「お陰様で命拾いましたわ。お言葉ですけど、チョコピンなんて、好みでも何でもございません。」

男に寄りかかれなきや歩けないこんな靴なんて……」

そう口にした後モニカは、ふと急に黙り込んだ。絡めた腕にバランスを任せ歩を進める。ゴンドラ漕ぎは気を利かせているつもりなのか、すつと持ち場に戻っていった。

「好みでないのなら、何故こんな物を履く」

玄関のノブに手をかけたまま、モニカは躊躇うように動きを止めた。まだ機嫌を損ねているのか計りかね、とりあえず彼女の手がか

けられたままのドアノブに指を重ね回す。

「かちゃっ。小さな音を立て呆気なく扉は開いた。

ふわり。顎の下でモニカの髪が柔らかく匂い立つ。

すると、金色の花模様のワンピースをなびかせ、腕の隙間を抜け出し扉をくぐると、モニカは振り返り艶やかに微笑んでみせた。

「頼りない靴の淑女を好むのは殿方ではないですか。女はその期待に応えるだけの事」

モニカは手を伸ばしこの腕に抱かれたリキュートをそっと引き取った。

「……今宵はとても楽しかったですわ」

唐突にくすぐすと笑いながら、からかうような眼差しを投げ掛けてよこす。

「エスコートしていただきありがとうございます、カル口様。少し酔ってしまったようで……無作法の数々お許しくださいませね」

つい先程の気の強さなど嘘のように覆い隠し、コルティジャーナーに相応しい笑みを浮かべている。あまりの見事な豹変振りに、返す言葉を失うほどだ。思わせぶりに指先をすり抜けるアゲハのごとく……。

「最初に断っておいたはずだが、私に愛想笑いは不要だ」

ぱさり。私の言葉に、モニカの睫毛がゆっくりと瞬いた。気まぐれに羽を休めた蝶が、再び飛び立つ意思を見せるかのように。

「私、本当の笑顔を忘れてしまいましたの」

ついと手をのばし、モニカはゆっくりと扉を押した。

「お休みなさい、カル口様、今宵貴方の見る夢に神のご加護がありますように。明日のカルネヴァーレが楽しみですね」

幕を降ろすようにゆっくりと、モニカは扉を閉じていく。バタンと響く扉の音が、ぷつりと絡んだ視線を断ち切った。

……

「無償で振る舞われる、一夜の夢とやらを見せて貰おうか」

まさか、あの蝶がこんな所に隠れているとは。ベレー帽の中に髪を押し込んだ男の肩に手を添えたら、襟の隙間からあの蝶が覗いていた。正体を見破られたモニカの顔といったら……言葉も出ないといった様子だった。

「では、行くぞ」

どうして見破られたのかまだ納得のいかない顔で、洪々とモニカは歩き始めた。そんな足取りでは夜が明けてしまふ。今日は歩きやすそうな靴を履いているではないか。

手首を掴み足早に人々の間をすり抜けていく。なんて騒がしく艶やかな夜だろう。ありきたりの日常をマスクラで封印し花開く夢。醒める夢と心得ているからこそ、人々はひと夜の幻を熱く燃やし尽くす。

いつの間にかしつかりと絡みんだ指先が、不思議な感覚を伝えてくる。モニカの指はまるで自分の皮膚のようにしつくりと馴染んでいた。二人で、息を弾ませながら港の方へと抜けていく。走るなんていづぶりだろう。宮殿に向かう人々の波に逆行し走る二人を驚いた様子で皆が振り返っている冷えた夜気が上気した頬を滑りぬけていった。モニカの髪が風に乘ってなびく。

息を弾ませ、お互いの視線が絡むと、どちらからともなく笑いが溢れた。愉快だと思った。何が？ 子供のように息を切らし走り回っている事が、だ。

港に付けてあるゴンドラに飛び乗ると、漕ぎ手が独りワインを呑気に傾けていた。急に乱入してきた客に驚き目を丸くしている。

こんな夜にも働く彼をねぎらい、気前よく金貨を握らせると、どちらまで船を出しましょうかと、愛想よく伺いをたててきた。モニカの耳に届かぬよう、小声で行き先を告げる。滑るようにゴンドラを漕ぎ出したかと思うと、彼は唐突に歌い始めた。

“愛を語るには見詰め合えばいい。何が残るかなど、考えるのは愚かな事。

この夜が全て。触れ合う温もりの他に、確かなものなど何もなくていい。

さあ、漕ぎ出そう、貴方の腕に抱かれて。行き先など必要ない。

さあ、漕ぎ出そう、今宵の夢に。愛があれば陶酔の夜が味わえる

……”

夜の深まりと共に、冷えた空気が降りてくる。小さく震えるモニカの肩に、自分の外衣をかけてやる。

「新調したマントを置いて来ちゃったわ」

貴方のせいで……と言いたげな視線で睨まれる。全く可愛げのない女だ。聞こえない振りをして、モニカの脇に置かれていたマスケラを自分の顔にかぶせてみる。小さな穴の隙間から、居心地が悪そう隣に座るモニカの顔が見えた。

何か言いたげな彼女の口元が、躊躇したように言葉を飲み込んでいる。行き先は何処なのだと、問いただしいのだろう。

狭い船の中、必然と身体が触れ合う。指先が触れると、モニカが突然隙間を埋めるよう擦り寄ってきた。そして、片手でマントを広げると、ふわりと俺の肩を包み込む。

「手が冷え切っていらっしやる。二人で包まった方が暖かいわ」

人の温もりというものは、時に安らぎを時に戸惑いをもたらす。

二人の体温が混ざり合い、僅かな空間を暖めていく。

街の喧騒が遠くなる。陸地を振り返れば、大掛かりな舞台で繰り広げられる喜劇を眺めているようだ。ふと、三年ぶりに再会したピアンカの姿が脳裏をよぎる。

『カルロ、カルロ…会いたかったわ』

マスケラで身分を隠し、飛び込んできた懐かしの子猫は、幼さを残すピアンカではなかった。大人へと脱皮する寸前の危うささえ漂

わせている。

別れたあの日と変わらない眼差しで射ぬかれ胸が痛んだ。その想いに応えられるならば、さらってしまう事もいとわない。だが……傷付けてしまう。誰よりも大切に思っているというのに。

きつと、グリマー二侯爵は既に私がヴェネチアにいることを耳にしているのだろ。会わせたら、ピアノ力が再び私にしがみ付くのを誰よりもよくわかつているのだ。引き剥がすには忍びないと思う親心。だから会わせたくはなかったのだろ。どうやって抜け出してきたやら。

早く屋敷に返さなくては。そう、思った時だったのだ、招かざる客人……いや、最高のタイミングだった。モニカが乱入してきたのは……。

ゴンドラは夜霧に紛れ、ちやぶちやぶと柔らかに揺れながら進んでいく。しばらく漕ぎ進めると、景色が変わり始めた。ブレンダ河沿いに並ぶヴィツラはヴェネチア貴族達のステイタスだ。土地の少ないヴェネチアから離れ、贅沢な庭園を抱く別邸で過ごす休息。富のある者はこぞって田園生活を樂しむ為に、趣向を凝らした館を築いた。

ゴンドラから降り、月明かりに照らされた庭をくぐりぬけると、小振りながら一際目を引く優雅なヴィツラが姿を現す。丸彫りの彫刻が刻まれた三角破風を円柱で支える荘厳な様式。館全体が芸術作品といえるべき氣品を漂わせている。

昨夜、叔父上から預かった鍵で玄関の扉を開く。召使さえ不在のヴィツラは、ひっそりと静まり返っていた。手にした灯油ランプの灯りを頼りに室内を歩く。定期的に手入はしてあるのだろ。大理石の床は鏡のように艶やかだ。緩やかに弧を描きながら三階まで続く階段を上がる。モニカは押し黙ったまま、後をついてきた。

彼女を通した部屋には、小さな暖炉があった。もちろん火の気はない。ここに足を踏み入れるのはいつぶりだろ。十年……それ以

上か。

広々とした部屋の隅に、見覚えのある天涯付きのベッドが置かれている。こんな物を未だに置きっぱなしにしているとは。

じつと、その代物を眺める私に何を勘違いをしたのか、モニカは意を決したように手首を掴んできた。そしてベッドに向かってつかつかと歩き始めた。

どさっ。なだれ込むよう押し倒され、この細腕のどこにこんな力が隠されているのかと感心する。男の衣装を纏ったモニカを眺めていると、自分が女になったような感覚に襲われ苦笑いが込み上げる。上から垂れてくるモニカの髪に頬を撫でられる。

「ベッドに縫い付けられた大人しい女なんて、つまらないものよ。こういうのは好みではないかしら？」

吐息で睫毛がそよぐ程の距離。思わせ振りにモニカは、私の前ボタンを、一つ二つ程外してみせた。

がたんっ。隙をついて体勢を逆転させる。ベッドに、モニカの栗色の髪が流れる様を眺める。

「縫い付けてしまおうか。蝶が飛んでいつてしまわぬように」

はっとした仕草でモニカは自分の首筋に指を伸ばした。皆の前で、正体が暴かれた原因を悟ったようだ。

「……いやらしい男ね。こんな所を覗き見て」

「ならば、首を絞めるように慎ましいドレスを着ることだな。覗き見とは濡れ衣だ」

「貴方って、本当に……」

言葉を途切らせたモニカが、ビクリと身体を跳ね上げ抱きついてきた。何だ？ どうした？

男を誘うにしては随分と唐突な。この女らしくもないと不思議に思いながらも、子供が怯えるように小さく震えだした身体を抱き止める。

「や……嘘っ……怖いわカル口……あんな暗がり……」

モニカの差し示す指先を追うと、そこには白いドレスを纏った女

が立っていた。ああ、貴女でしたか、お久し振りですね。不意打ちの来客に心の中で小さく呟いてみる。ランプの灯りに浮かび上がる姿は、記憶の中となんら相違する箇所もない。自分が大人になった分、年は近づいた筈なのに、何時までも追い付けない隔たりを感じる。

ふと、視線をモニカに移す。いつもこんな風に素直にすがりついてくれば、可愛いものなのにな。種明かしの為、ベッドの脇に置いたランプを手に取り、女の姿を照らし出してみる。ふっと、しがみついていたモニカの腕から力が抜ける感触。

「絵……？」

腕の隙間をぐぐり抜け床に足を伸ばすと、モニカは壁際に恐る恐る歩いていく。それは白いドレスで装った、等身大の女の絵だった。モニカはその前で身じろぎもせず、じっと女を眺めている。

「すごく綺麗な人ね」

モニカが燭台に火を灯すと、部屋は明かりを増し、壁に連なる他の絵画が暗闇から引き出されていく。どれも、これも皆同じ女を描いていた。儚い人生を燃やし尽くす運命を秘めたスマレ色の瞳。目にした男の心を、根こそぎ摘み取るその可憐さ。

「不思議ね、知らない方なのに初めて会った気がしないわ」

首を傾げるモニカの背後にそっと忍び寄る。

「叔父上が描いたひと昔前のコルティジャーナだ。聞いた事があるか？紫の薔薇と称された女の話を」

「耳にしたことはあるわ。この人が、本当に紫の薔薇のコルティジャーナ？」

「ああ、叔父上の専属のモデルだった」

「男爵様の恋人？」

「いや、他の男の妻になった」

「でも、愛していたのね。絵を見ればわかるわ」

きっぱりとモニカは言い切った。女つてやつは本当に勘が鋭い。「お伽話だと思っていたわ。どこぞの大貴族様が爵位を捨てた恋……」

…よね」

「お伽話さ」

呟きと共に首筋に息を吹きつける。モニカの肌が粟立つ気配を漂わせる。鼓膜を愛撫するように、耳元で再び低くそつと囁いてみる。
「奇麗事だ」

華奢な首筋から覗く蝶の痣。吸い寄せられるようにそつと悪戯に唇を寄せてみる。びくりと身体を跳ね上げ、モニカは身を固くした。
「こんな風に永遠に、その美しさを刻みつけたいとは思わないか？」
モニカの背中から腕を回し、そつと顎に手を添え振り向かせる。
「ひと月ほど週に二、三回、ここに通って貰いたいのだ。もちろんそれなりの謝礼は払う」

怪訝な眼差しでモニカはこちらを見上げてきた。何のお話かしら？ 瞳が疑問を投げかけてくる。

「叔父上の絵のモデルになって欲しいのだ。昨夜、そなたの姿に創作意欲をわかせたらしい」

「男爵様の……？」

「この部屋は、叔父上のアトリエなのだ」

モニカはぐるりと部屋を見渡し、窓際のテーブルに並ぶ絵筆に目を留めた。

「もしかして、ここにまで私を連れて来たのはその話をする為に？」

「他に理由などある訳もない」

少し、むっとした表情でモニカは真っ直ぐに睨みつけてきた。言葉が過ぎただろうか。だが、他に言いようもない。

「……そうね、お受けするわ、言っておくけれど、私、決して安くはなかつてよ」

「構わないさ。あの方は美しいものを手に入れる為に、金に糸目をつけない主義だ」

「契約成立ね」

そう言い放つモニカの口元から白い息が漂う。だいぶ冷え込んできたようだ。

「暖炉の薪が切れている。凍えてしまってからベッドに入ろう」

あちこちに装飾を施した堅苦しい衣装を脱ぎ捨て、肌着一枚で先にベッドに潜り込む。モニカは、慣れない衣装を脱ぐのにいつまでも手間取っているようだ。かさかさ響く衣擦れの音が耳障りで、ベッドを抜け出しモニカの服に手を掛ける。

「そんなに緊張する事はない。何もしないから安心しろ。ただ、二人で眠った方が暖かい」

二人でひとつのベッドの隙間に滑り込む。冷えたシーツが柔らかな温もりに染まり出した頃、背を向けていたモニカが思い詰めた顔で振り向いた。

「私、抱く価値もない女かしら。コルティジャーナはお好みではなくって？」

「自分に金貨を積ませる価値があるのは充分理解しているだろう。」

私はただ抱く相手を、金で買う趣味などないだけの事」

じつとモニカはこちらを見ている。まるで珍しいものを眺めるように。

「今宵は無償だと申し上げましたのに」

「タダより高い買い物はない」

可笑しそうにモニカはクスリと笑った。

「そんな事をおっしゃって、実は殿方が趣味ではないのですか」

全く口の減らない女だ。勝手に男色家の烙印を押されては名誉に関わる。

「抱いて欲しくて誘っているなら、その気にさせてみる」

「その気にさせるのなんて容易いですわ。でも、私からおねだりする事などございませんの」

ああ言えばこう言う。口で女に勝てる訳もない。返事をせずに瞼を閉じ、軽い寝息を立ててやる。モニカの視線を感じながら、寝たふりをしていると、いつの間にか本当にうとうとと眠りの淵をさ迷い出す。

ふわり。投げ出した片腕に、モニカが腕を絡め寄り添ってきた。

どうするつもりなのかと、息を潜めていると、顎の下で規則正しく
寝息を立てるモニカの息遣いが聞こえてくる。薄く瞼を開くと、濃
い睫毛を伏せて眠る女の顔があった。

奇妙な夜だ。何故こんな事になった？

ゴンドラは明日にならないと迎えに来ないのだし、くべる薪も尽
きている。自分自身への言い訳を頭の中で反芻しているうちに再び
深い眠気に襲われる。

カルネヴァーレの夜だ。皆、日常とかけ離れた一夜を過ごしてい
る事だろう。ふと先程のゴンドラ漕ぎの唄が脳裏をよぎる。

”触れ合う温もりの他に、確かなものなど何もなくていい”

冷え切った夜だからこそ一層に、分け与えられる温もりが引き立
たされる。心地良く眠りにおちていく感触を味わいながら、そっと
モニカの肩を抱き寄せ再び瞼を閉じてみた。

白百合の誘惑（モ二カ）

男の寝顔をぼんやりと眺めた事などなかった。いつだって目覚めた瞳に、自分の姿をどのように映すのが一番印象深いのか：そんな事を朝日の中で計算していた。けれども、今朝は…。

骨ばったカーブを描く肩のライン。金色に透ける頬の産毛。首の下に差し込まれていた腕の、滑らかな筋肉などを不思議な気持ちで眺めている。

女になってから男と同じベッドでただ眠った事など記憶にない。いつだって目的があつたからこそ相手とシーツの隙間を共有してきたのだ。手を出さないのは、コルティジャーナの私を見下しての戒めかと、一瞬プライドを踏みにじられたようにも感じたのだが、昨夜のカル口から、軽蔑を匂わせる印象は見受けられなかった。

“抱いて欲しくて誘っているなら、その気にさせてみる”

からかっているのか、試しているのか、この男の言葉は計れない。随分、無防備な寝顔なこと。再び、隣で眠る男の顔をまじまじと眺める。

不思議な男。カル口のような男に出会ったのは初めてだ。何もかも見透かしたような冷めた目線を突き刺してくるくせに、己の温もりが染み込んだ外衣を背中に掛けてくれたりする。鎧のごとく隙がないかと思えば、こんな無防備な寝顔を晒してみせたり……だから、こちらも調子が狂うのだ。どんな男相手にだって、感情を露にしないのが常だというのに。

さあ、身支度を整えなければ。こんな下着姿のままで、再び顔を付き合わすには、あまりにも周囲は明るすぎる。河辺に出れば流しのゴンドラを拾えるかもしれない。

家に戻りひと時すると、見覚えのある女が訪ねて来た。痩せた身体を黒い外衣ですっぽりと覆ったその様は、不吉な匂いさえ漂わせている。

「お久しぶりでございます、モニカ様」

その険しい顔つきに嫌な予感が突き上げる。

「なにかあったの？」

女はその問いかけに答えようと一瞬口を開いたが、躊躇するように出かかった台詞を飲み込んだ。その様子に、告げられる事実があまり好ましくはないであろうと伺える。

「ラウラに何かあったの？」

女主人の名を挙げると、彼女は身体をびくりと震わせた。

「ここ二、三ヶ月、奥様のお加減が思わしくないので」

「どこが悪いの？」

……心臓が。消えそうな声で、ラウラの使用人であるその女は答えた。

「奥様はきつとモニカ様に会いたいと願っていらっしやと思うのです。そうは決して口にされませんけれど……」

「会いにはいかないわ。だってラウラに決して帰ってくるなど言われているのだから」

「でも……それは……」

「わざわざ、知らせてくれてありがとう。でも私がお見舞いに行ったりしたら、ラウラは逆に病の重さを感じて気落ちするのではなくて？」

「奥さまは、娘のようにモニカ様を思っておいんです。それだけはお忘れにならないで」

諦め去っていく後ろ姿を見送りながら、違和感のある先程の台詞を頭の中で反芻する。娘のように……ですって？

ラウラは確かに私を導いてくれた。結婚もせず、修道院にも入ら

ず、貧しさと縁遠く己の力で生きていく術を、ひとつづつ丁寧に教えてくれた。だが、我が子を娼婦に導く母親などいるのだろうか。いや、ラウラなら実の娘ですら娼婦に仕立てあげるに違いない。それも筋金入りの、生粋のコルティジャーナへと。

ラウラと初めて出会ったのは三年前。死を決意したあの日、ラウラは私を拾い上げた。人生の歯車は歪み、ささやかな幸せなんてものは、埃を払うように容易く吹き飛んでいた。歯車が歪むきっかけは姉の夫の言い掛かりだった。子供が授からないのは姉に欠陥があるからだと唐突に離婚を申し出たのだ。まだ結婚して一年と経っていないというのに。

貴族の令嬢との不貞にうつつを抜かし、姉から乗り替えようとの画策。持参金は贅沢な逢瀬の為にすっかりと使い果たされていた。身も心もボロボロになって、姉は実家に帰って来たのだ。そして、その弱った身体を病が蝕み始めた。

一階が診療所、上階が住まいという構造上、感染する確率は高かったであろう。性質の悪い流感が流行り出した矢先だった、姉が倒れたのは……。

医者という職業柄、父は用心深かった。けれども、同じ屋根の下に一緒に暮らす姉の病は、あつという間に家族を巻き込んでいった。母が倒れ、そして追うように父が倒れた。診療所の薬はどれも大して役には立たず、激しい咳と高熱が皆の体力を削り取っていく。

姉の持参金の借金返済はまだ終ってはいない。支払いが足りず屋敷は抵当に取られ、家族は四人寒空の下、路頭をさ迷った。

私は養育院で音楽を教えていた。とりわけ声楽を。それが修道院にいかなくても済んでいた理由の一つだ。持参金がなければ……家の嫡男でなければ……ヴェネチアは結婚できない独身者が溢れている。その歪んだ構造の中で産み落とされていく私生児達を収容する養育院では、収入の糧として子供達に音楽を仕込んでいたのだ。

けれども、そんな養育院での音楽教師の収入では、病気の家族を

養っていくのは至難の技だった。小さな陽も当たらない狭いアパートの一室を借りるのが精一杯だった。幸せなんて言葉は相応しくない、どん底の生活。けれども今振り返れば、紛れもなく幸福な日々だったのだと胸が締め付けられる。家族で身を寄せ合い、ささやかな食べ物を分かちながら生きていた。お互いを思う心だけは、貧しさなどに踏みにじられないように……誇り高く生きていこうと誓い合っていた。

けれども……底冷えするような大寒波が、ヴェネチアを呑み込んだのだ。部屋を暖める充分な薪など底を尽きていた。朝になると、窓側のベッドで眠っていた父と母が、寄り添いながら冷たくなっていた。咳で潰れた声を張り上げて泣き叫ぶ姉。家の財産を使い果たし、病を運んできた自分のせいだと。何日も何日もふさぎ込み、ついには病は姉の心さえも蝕んでいった。

私はというと、両親の死を嘆くにはあまりにも心に余裕がなかった。今日のパンの為に働かなくてはいけない。授業を倍こなし、子供のようになってしまった姉の世話に追われた。怖かった。怖くて仕方なかった。身も心もボロ切れのようになった姉が、消えてしまいうそで怖かった。

母の形見の真珠の首飾りを売ったのもこの頃だ。薬を切らす訳にはいかない。質屋に首飾りを品定めされている間中、真珠で装った母の残像が何度も横切っていた。

『お母様の真珠が見当たらないの』

もう売ってしまったのだと何度説明をしても、姉は思い出したように繰り返して部屋の中を探し回る。迷子の子供のように途方に暮れた眼差しで。だが、そんな事をしばらく繰り返しながらも、姉の病は奇跡的にも回復の兆しを見せはじめた。季節が暖かく移り変わった事も要因のひとつかもしれない。身体の回復と共に、心も均衡を保ち始めたかに見えた……確かにそう見えたのだ。

『いいお天気よモニカ、髪を結ってあげるわ』

それは、久しぶりに聞く姉らしい響きを持った声だった。潰れた

喉は治癒し、滑らかな姉らしい声色が、私の眠たい瞼を持ち上げた。部屋は整えられ、テーブルの上では質素ながら暖かいスープが湯気を上げている。誰かに食事を作ってもらうのなんて久しぶりだ。姉の回復にすっかりと気が緩んでしまった。

仕事に行く前の髪を、丁寧に姉が結い上げてくれた。その手の感触は母にそっくりで……懐かしさで零れた涙が、彼女の指を濡らす。『なんだか……ずっとずっと、長い夢を見ていた気がするの』

濡れた指先を眺めながら、姉はポツリとそう口にした。

『お母様とお父様は……もういないのよね？』

念を押すように姉は尋ねてきた。

『そうよ、寒い夜に神様に召されたの。でも、二人一緒にだからきつと天国でも寂しくないわ』

『お母様の真珠の首飾り、今日こそあなたに掛けてあげようと思っただけけども……』

『あれはね、売ったのよ。命を繋ぐ方が大切だったから』

姉はそつと私の手を握った。

『ねえ、モニカ……手がこんなに荒れているわ』

『今、養育院で食事を作るのも手伝っているの。ほら、なんせ子供がいっぱいでしょう、ものすごい量なの。でも、こんな事どうって事ないわ。だって、お姉様が元氣になられたのだから』

『……ごめんなさいね、あなたにばかり……』

姉にそつと抱き寄せられる。嬉しくって、信じられなくて、込み上げる嗚咽をこらえる事など出来なかった。

どうして、あの時私は泣いたりしたのだろう。どうして、正氣を取り戻したばかりの姉に、残酷な現実を覆い隠しもせず晒したりしたのだろう。

どうして、どうして……ドアまで見送ってくれた姉の瞳の奥の絶望に、気付く事が出来なかったのだろう。

“モニカ！アンタの姉さんがっ”

養育院に走りこみ、知らせてくれたのは誰だったのか、もう記憶にはない。ただ、覚えているのは運河から引き上げられた姉の、血の気を失った顔だけだ。額に張り付いた髪には藻が絡んでいた。力なく横たわる姿には生気がなく、袋のように結ばれたスカートの中からは沢山の石が転がっていた。

どうして、私は皆と同じ病にかからなかったのだろう。どうして独りで姉の亡骸を見下ろしているのだろう。

どうして、どうして……

父と母と姉と……ほんの数ヶ月の間に大切な命が皆、無情にも擦り抜けていった。神はいるのだろうか？ 残酷に私から全てを剥ぎ取った訳を、いつの日にか教えてくださるのだろうか。自ら命を絶った姉の魂を、父母の元に導いてくれる慈悲は持ち合わせていらっしやるのだろうか。

薄霧に包まれたサン・ミケール島はひっそりと息を潜め死者達を抱く。サン・ミケール……大天使ミカエルの名を持つこの島は、生ける者ではなく死者のみが休息を許される。連なる墓はまるで、整備された街並のようだ。

善悪を秤る天秤を持つ大天使は、この島で眠る魂を本当に正しく選別しているのであるうか。陽なたで花々を抱く広場に贅沢な墓標を立てた貴族の墓と、土を盛っただけの粗末な墓の違いは？ 安息を求めた魂の居場所までもが、身分や貧富の差で区画される。姉を捨てた貴族が葬られる先はあの陽なたなんて、どうして許せよう。

けれども、あの男を恨みながら生き続ける気力は、もう尽き果てていた。絶望という名の深い闇に、私の魂は囚われてしまった。海を渡り、アパートへ戻るゴンドラはもう必要ない。私の名が刻まれた粗末な墓が家族の隣に並ぶ事はないだろう。身体は海に消えたとしても、魂が天国で巡り会えるのならそれでいいと思えた。墓に

盛られた土を、手のひらで撫でながら、お別れのレクイレム（鎮魂歌）を口ずさむ。呟きの小さな旋律はやがて、残り少ない人生を振り切るかのように高らかに響き渡った。

“死の棘に触れば、花は枯れ果てる。朽ちる命の種を撒き、永久^{とわ}の収獲を夢みよう。

主よあなたの元に導きたまえ。迷える魂を。哀しみの涙をあなたの慰めで、恵みの雨へと変えてください。主よあなたの元に導きたまえ。迷える魂を。ヴェネチアの水底に眠る亡骸を、どうぞすくい上げてください”

ばさり。背後から忍び寄った影が、盛り土の上に白百合の花を供えた。

『せつかく運んできたのだけれど、行き場がないお花なの。よろしかったらこちらに捧げててもよろしいかしら？』

凝った透かし模様の黒いベールで顔を覆った女に話し掛けられる。彼女は膝を付く私の目線まで屈み込み、両手で頬に触れてきた。

『大切な方が亡くなられたのね……可哀相に。涙に枯れ果てた瞳が、絶望で曇っているわ』

ベール越しに覗く顔立ちは美しい女だった。若さを奪われても尚、美しいと思わせる気品が漂っていた。

『悲しい唄だけれど、魂に響く透き通った歌声だった……素晴らしい喉ね。それに……』

姉が死んでから一度も櫛で梳いていない髪を、女は優しく撫で上げる。

『吸い込まれるような瞳も持っていらいっしやる。天使も羨む美貌だわ』

天使のようなのは貴女じゃないの。と、心の中で呟いてみる。微笑む口元にはうっすらと皺が刻まれていたが、女は何もかもを悟ったような神々しさに包まれていた。大天使ミカエルが私の魂を天秤

にかけに來たのではないか。一瞬、そんな妄想が覆い被さる。

『死ぬのはまだ早いわ。行き場がないのなら私の家においでなさい』
それがラウラとの出会いだった。

ヴェネチアの賑わいとは縁遠い郊外に、ラウラと名乗る女の住まいはあった。運河ではなく海に面した窓からは、壮大な夕日を眺める事ができた。部屋を飾りたてる金細工、世話をしてくれる小間使い。『貴族なの？』と尋ねると、ラウラは肩をすくめ、おどけてみせた。

『まさか、そんなつまらない物に私が見えて？』

意外な台詞に口元が緩む。ラウラは母と同じ位の年代だと思う。真実は藪の中だが……。

コトリと、ラウラは不思議な香りがする飲み物を差し出した。これは何だろう？ 黒い液体がカップの中で湯気を立っている。戸惑う私の様子を横目に、ラウラはカップに口をつけた。

『カーファ（コーヒー）って言うのよ。イスラムの僧侶達が飲むお茶なんですって』

カーファ……？ 不思議な響きに心を奪われる。

『夜中までお祈りする僧侶達の眠気覚ましになるのだそうよ。カーファの実を食べた山羊は元気に跳ね回るらしいわ』

僧侶に山羊……随分と逸話のある飲み物だ。カップを持ち上げ唇を寄せると、より濃い香りが鼻腔をくすぐる。

こくり。舌が慣れない苦さを感じ取る。しかし、それは不快なものではなかった。

『自分の為に生きてみなさいな。男を愛した事はある？』

思いがけない質問に、返す言葉を見失う。

“男を愛した事はある？”

言い寄ってくる男達は過去に何人も居たが、そんな物を私は知らない。

『寝たことはあるわ。でもそれだけよ』

挑むような私の返事を、ラウラは可笑しそうに受け止める。

『モニカ、貴女、最高の逸材ね』

逸材？ 何の？

『惨めさなんて、貴女には似合わないわ。コルティジャーナになる気はなくて？』

コルティジャーナ……

『貴族の男と寝るのなんて御免だわ』

声が……声が怒りで震えてしまう。

『踏み台にするのよ』

子供に知恵を授ける母親のように優しい声色で、ラウラは語りかけてくる。

『男も、相手の身分も……』

『そうして何が入るっていうの？』

所詮、ただの娼婦ではないか。道端で客を拾う女達を、アパートの汚い裏路地で何度も見掛けた事がある。今日のパンを買うために……。死んだ方がましではないか。唇を噛み締めラウラを睨み付ける。

『貴女の知っている娼婦とコルティジャーナと一緒にしてもらっては困るわ。ねえ、モニカ、このカーファ（コーヒー）のように先入観とは違う味わいを持つ世界があるものよ』

それにね……話を続けながらラウラはカップにおかわりのカーファを注ぐ。

『手に入れるものは自分の人生よ。神にも夫にもすがらず、己の力で生きて行く人生』

自分の人生……そんなものを考えた事などなかった。知り尽くしたようにそう語る女の顔を、まじまじと眺める。

『奥様、ご用意が出来ました』

痩せた小間使いがそっと、声を掛けてくる。ラウラは私の手を引くと別の部屋に導いた。大きな、大きなたらいに注がれたお湯が湯

気を上げている。服を脱ぐようにとラウラに指示される。服を？

部屋にはラウラの他にさっきの小間使いさえ居る。値踏みされるような視線を感じ、身体が熱くなる。臆したら負けるような気がした。服に手をかけ、躊躇せずに一枚一枚脱いでいく。小間使いは、当たり前のように足元に落とした服を拾い上げていった。

ヴェネティアで真水は贅沢品だ。濁りのないこんなお湯に身体を浸からせる事は初めてだ。

ぽちゃん。

手の平に注いだ香油を、ラウラはお湯の中に落す。滑らかな感触がお湯に溶け込み、私の皮膚を柔らかく包む。

ぽちゃん。

ラウラが丁寧にすくい上げたお湯で私の身体を清めてくれる。絹のように滑らかな指が、体中を優しくすべっていく。首筋を撫でられ、その甘美な感触に不覚にも身体が跳ね上がってしまった。

『ふふ、羨ましいわ。磨けば磨くほどに輝きを増す肌。それに……』
執拗にラウラはうなじの下の一点を悪戯に撫でる。ぞくりと肌が粟立つ。

『こんなところに紫の蝶が留まっていたよ。痣までも貴女は美しいのね』

耳元で囁かれるラウラの声色に鼓膜を溶かされてしまそうだ。生まれつきよ……そう答えようにもにも声が出ない。

“先入観とは違う味がある世界があるものよ”

ラウラは知っているのだ。何もかも…カーファの香りにも似た未知の世界を知り尽くしている。

かなわないと思った。あがらう事を諦め身を任してしまえば、心に棲みついた絶望から逃れられるような気さえした。

悪い夢（カルロ）

羽化したサナギが衣を脱ぎ捨てたように、毛布はモニカの身体を形どったまま空洞になっていた。蝶は既に飛びたった後らしい。独り目覚めたベッドの上でその脱け殻をぼんやりと眺める。あの髭を再び貼り付けて帰ったのだろうか。ひとり、笑いが込み上げる。

モニカの行動は、全く奇想天外だ。淑女のごとくとりすましていくかと思えば、子供のような悪戯を仕掛けてみせる。可愛げの欠片もない憎まれ口を叩いたかと思えば、幽霊に怯えしがみついていた。あの女は苦手だ。そう感じながらも何故か意識してしまう。コルティジャーナか……。

朝陽を浴びた母上の肖像画がこちらを眺めている。からかうように微笑んで見えるのは気のせいだろうか。

そして数日後、モニカはアトリエを訪れた。その送迎役を叔父上は、再び私に言いつけてくる。

「大事な客人、送迎はお前が適任だ」

そう言い放つ叔父上にどんな不満げな眼差しを向けようと、一向に氣にとめる様子もない。

「モニカ嬢を女ひとり人目にさらしてみろ。言い寄ってくる男達に遮られ、ゴンドラが止まってしまうではないか」

「叔父上、私だってそんなに暇な訳ではないのです。仕事だっていつまでも放っておく訳にもいかないですし……」

「絵が描き上がるまで、貿易に長けた優秀な男を代わりに貸してやる。基盤もフィレンツェからヴェネチアへ移すよう、その男に任せておけばよい」

「そんな人任せにするわけにも……」

「そんな事より、どうだ。この絵の構成は。彼女は顎のラインが息

を呑む程に美しい」

キャンバスにはまだ全体像を大まかに示すデッサンが描かれているだけ。だが、ラフに刻まれた木炭の軌跡が、美しい女の姿を浮かべている。

「どうして彼女を？」

訊ねずにはいられない。ずっと人物画から離れていた叔父上が何故？ あんなに長い付き合いの黒髪の愛娼、アンナですら描こうとはしなかったくせに。

「コルティジャーナは男にとっては理想の女神だ。だがモニカ程にその偶像を見事に演じてみせるコルティジャーナは、滅多にいない」
一目惚れだよ……そう言いたげな眼差しを叔父上はキャンバスに向ける。

「……モニカ嬢にモデル以外の役柄をお求めなのですか？」

「随分無粋な事を尋ねるものだな、カルロ。お前らしくもない。気になるのか？」

気になる？ なにが？ ああ、そうだ。知りたかった事は他にある。ずっとずっと、口にする事をはばかれた遠い昔の出来事だ。

「どうして……」

なんだ？ 叔父上の視線が興味深そうに私の口元に注がれる。モニカの話の続きだろうと思っっている彼の瞳には、からかうような色さえ浮かんでいた。

「絵のモデルをしていた頃、母上はあなたのお気に入りコルティジャーナだったのでしょ。愛していたから描いたのですか？ それなのに父上がさらっていった」

決して口にする事はないと思っっていたのに……私は何を言い出しているのだ？ どうして今更こんな事を……。モニカの話だったのではないか。モニカと母上が重なるのかと。だったら、それでいいではないか。所詮、母上もモニカもコルティジャーナなのだ。男達に見せかけの愛を切り売りする、女神の仮面を被った娼婦なのだから。

叔父上の瞳から、茶化すような色合いは消え失せていた。そして視線は私の背後にかけられた、母上の肖像画にゆっくりと移っていた。

「彼女に……お前の母上に心奪われない男などいなかったさ。ただ、運命の糸で結ばれていたのが私ではなかったというだけの事だ。カルロ、私は絵を描くという才能を神が与えてくれた事を、あの頃ほど感謝した事はない。彼女の陽射しのように輝く髪を、すみれ色の瞳を、息づく肌を、この手で写し取る事が出来たのだから」

臆する事無く愛の告白を口にする叔父上の、真剣な眼差しに胸を突かれる。

「では、モニカにも同じ思いを抱いているのですか？」

わざとおどけたように口にしてみた。再び話をモニカに戻している自分に呆れる。もう、いいではないか。何を確かめたい。何を知りたい。思いの他、すると告白された母上への想いが、尚更に心を揺さぶる。その動揺を悟られなくって、冗談めいた口調で尋ねていた。

「画家としてモニカにはこの上なく創作意欲を駆られるのだ。あれだけの逸材、残り少なくなった人生に再び巡り会えるものではないとな。こんな事を考えるなんて、私も年をとったものだ」

叔父上は再び、真っ直ぐにこちらを見据えてきた。

「カルロ、お前は髪や瞳の色は兄上と同じだが、顔立ちは生き写しだな、そなたの母に……実際、心の内を彼女に打ち明けた事などなかったというのに心臓に悪い。モニカに手なんぞ出さないから、そんな風に攻め立てるな。大体、そんな振る舞いをしたらアンナが黙ってははいないというものだ」

「何も攻めてなどしておりません。ただ、送迎役を仰せつかうなら事の真相を知っておきたかったです。それにアンナは叔父上の浮気心なんぞ慣れたものでしょう」

「いや、相手がモニカ程のコレティジャーナとあっては話が違うというものだ。アンナは冷静なようできて燃えるような激しさを秘め

た女だ」

「そこが気に入っているのでしょうか」

からかうように話の流れをアンナに反らしながら、心の奥底で何かを安堵している自分をどう感じたらいのか戸惑っていた。モニカはモデルとしての逸材……叔父上も、それ以上この話に踏込んでこようとはしない。

「男爵様、モニカ様のご用意が来ました」

召使が、髪を結い上げたモニカを連れて部屋に入ってきた。叔父上の指示で髪に花を飾り立てたモニカが……。その装いに満足そうに頷くと、叔父上はベッドに横たわるようモニカに命じる。先日、モニカと眠ったあのベッドにだ。

このベッドは元々母上の為に備え付けられたものだった。病を患い体が弱った母が、このヴィラで過ごす時、何処でも寛げるようにと。特にこのアトリエは母のお気に入りという事だった。

コルセットなどに形どられない寛いだドレスが、モニカの身体のラインを艶かしく浮かび上がらせている。髪に飾られた椿の花が、歩く度に誘うように揺れ動き、匂い立つ。私の横をモニカは擦り抜けていった。一瞬目が合ったが、先程の叔父上とのやりとりが頭に浮かび、噂話をしていたような後ろめたさに視線を反らした。

「私は、下の階で仕事をしております」

このアトリエで自分の存在は必要ない。そう抜け出す言い訳をつくってみる。背中に視線を感じた。だが、それはモニカなのか、叔父上なのか……確かめる事もせず、ドアに手を掛け外へとすり抜けていった。

これで何回目だろう。モニカを出迎える為、見慣れた水路にゴンドラを進めるのは。キャンバスは日々モニカの姿を色濃く染め上げていく。憂鬱だと思った。モニカがではなく、自分自身が……。モニカと並んでゴンドラに揺られていても、言葉を交わす事は稀だった。

た。別に険悪な空気が流れる訳でもないのだが、お互い何かに躊躇するよう口を閉ざしていた。己の不自然な振る舞いに、息が詰まる。他のゴンドラとすれ違う時、橋の下を擦り抜ける時、モニカの姿に目を留める男達の視線をいつも感じた。彼女の存在に魅入られ、しばし奪われた眼差しが、やがて探るように隣にいる自分に注がれる。値踏みされているのがわかった。モニカの隣に相應しい男かどうか。答えの行く末を見届けるより早くゴンドラは流れ、男達を視界から遠ざけていく。いつもモニカはそんなあからさまな眼差しを、髪をなびかせる風のごとく受け流していた。

モニカの住まいのある建物へと、ゴンドラは大きく弧を描きながら迂回する。違和感を感じた。ゴンドラを出迎えるモニカの姿が見えない。いつもなら身支度を整え、船を着ける目印のように立つ彼女の姿が見えるのだが。代わりに一艘のゴンドラがとまっていた。こんな朝に誰だ？

先着しているゴンドラ漕ぎの様子を伺うと、ほんの一時立ち寄ったという雰囲気待ち人の帰りを待っている。一夜を明かした主人を待っているという訳ではなさそうだ。そんな憶測をしている自分に呆れる。どうでもいいではないか、そんな事など。

ガタンとドアの音を立て、見慣れない女が出てきた。すつぽりと黒い外衣に身を包んだ女の痩せた顔は青白く、疲れ果てた表情を浮かべていた。どこぞの召使いだというのは、かもし出す雰囲気でお伺い。無言のまま女はゴンドラに乗り込むと、肩を落とし眉間に手を寄せた。

誰だ？ モニカの客人か？ そうなのであろう。ならば不在の理由がつくというものだ。女のゴンドラが漕ぎ出すのを見届け、陸に降り立つ。建物の入り口の扉に手をかけ、階段をあがり、居間の扉を開く。窓辺に立つモニカの後姿があった。バルコニーへ抜ける扉は開け放たれたまま。振り向きもせずじつと外を眺めている。

この窓からは目の前の水路が見渡せた。モニカに近づき肩越しに外を覗くと、先ほどの女のゴンドラが小さく見えた。身支度は整つ

ているようだ。モニカは青いドレスを纏っていた。たつぷりとした
プリーツでボリウムを出したスカートが優しく膨らんでいる。白
銀の糸が袖口に薔薇の刺繍を描いていた。仕上げに細く締め上げた
ウエストが、隙のない完璧な淑女の装いを演出する。

「お出迎えに間に合わなくて申し訳ありません、カル口様」

振り向いたモニカは不自然な笑顔を向けてくる。

「今日は迂闊にも朝寝坊をしてしまいましたの。ドレスが決まらな
く手間取ってしまいましたわ」

出迎えに間に合わなかったのは客人の相手をしていたからだろう
に。嘘を覆い隠すように饒舌なモニカを、じっと観察する。手にし
ている扇が、小刻みに震えていた。血の気が失われた蒼白な顔色を、
紅を引いた唇がより引き立たせている。ざわりと血が騒ぐ。モニカ
の様子がおかしい。

「何かお飲みになります？カル口様、カーファ（コーヒー）を味見
した事はございますか。癖になりそうな苦味が不思議な味わいです
の……」

私の返事も聞かずに、モニカはテーブルの上に並べてある銀のポ
ットに手をかけた。カップに触れる注ぎ口が、モニカの指の震えを
伝え、カチカチと小さな音を立てる。モニカは慌てた様子で、誤魔
化すように銀のポットをテーブルに置いた……筈だった。

ガチャンッ！ 湯気を立ててモニカの足元に食器が転がり落ちて
いった。モニカは放心したように立ち尽くしている。

「大丈夫かつ？」

思わず発した大きな声に、モニカはびくりと身体を跳ね上げた。
足元に広がるカーファの水溜まりを避けようともしない身体を、こ
ちらに引き寄せる。

「せっかくのお茶を溢してしまいましたわ…嫌ね私、ぼんやりして
……」

気まずそうな微笑を向けてくる。気づかない素振りには限界だと思
った。

「愛想笑いは不要だといった筈だ」

腕を掴んだまま至近距離のモニカを見下ろす。彼女の顔が、ゆっくりと歪んでいくのが見えた。

どんっ。私の身体を押しつけ、モニカは後ずさりをした。信じられない事に、こちらを睨む瞳から溢れ出た涙がモニカの頬を濡らしていた。

「貴方なんて……大っ嫌いよ」

ぞくり。すくうように見据えてくるモニカの視線に打ち抜かれる。その冷たい眼差しに囚われた瞬間、背筋が凍りつくほどにざわめいた。

どうかしている。こんな時に……どうかしている。怒りを孕んだモニカの瞳に、魅入られている自分に気付きうるたえてしまう。

「蔑むといいわ。私の事を。もう、目を合わせるのも言葉を交わすのも汚れる気がするでしょうね」

貴方なんて……小さく呟くモニカの声色が震えている。

「どうした？ 悪い夢でも見たのではないか。私はただ、いつものように迎えに出向いただけだ」

心の動揺を振り払い気持を押し殺し話かけるが、自分でも驚くほど冷めた物言いになってしまう。どうしてこう気の利いた事が言えない。彼女が何かに傷付き、心がささくれだっているのは明らかだというのに。どうして優しい言葉のひとつもかけられない。

絡んだ視線をそらし、モニカは瞼を伏せた。小さく溜め息を吐き、高ぶる感情を封印するよう黙りこむ。そして、ポツリと口にした。

「悪い夢……そうよ悪い夢だわ。けれども私に降り掛かる悪夢は覚める事がないのよ」

噛み締めた唇が耐えきれず小刻みに震えている。病んだ蝶の羽のよう……。

無意識に手を伸ばしていた。傷口を癒すよう、そつとその身体を抱きとめる。拒絶のごとく強ばった身体の感触。だが、次の瞬間あらう事を諦めたのか、モニカから力が抜け落ちた。胸にもたれ掛

かる重みは熱を含み、腕の中の空気は涙のせいかじつとりと重い。

「神は私の大切な人達を特に愛でるの、まるで嫌がらせのように…

…そして代替えに絶望という名の置き土産を下さるのよ」

喘ぐようなモニカの息遣い。背中をさ迷っていた細い指が、居場所を求め服を握り締めてくる。

誰かが亡くなったのか……そう察したが何も尋ねなかった。気の利いた慰めの言葉など思い浮かばない。出来る事といたら、彼女がもたれる場所をひとつ差し出す事のみ。それがモニカにとって必要か否かなど、知るよしもないのだが。

母の死は幼すぎて記憶にない。脳裏をよぎったのは三年前の父上の死顔。葬儀が終わった後、ぼっかり空いた心の隙間を抱き締めてくれたビアンカの温もりが蘇る。あの時、初めてビアンカに愛されている事実を悟った。

愛だと？ 愛とは何だ？ 惜しみなく分け与えられるビアンカの溢れる想いは躊躇いなど微塵も無い。のしかかる哀しみを払おうと、小さな手を伸ばして底い立ち向かうそのひたむきさ。今、自分の心に覆い被さるこの気持は何なのだろう。腕の中で泣く女の哀しみを、癒してあげたいなどと湧き上がる、この想いは何なのだろう。

どれくらいそうしていたのか……落ち着きを取り戻したモニカがするりと腕を擦り抜けた。

「ゴンドラを待たせたままですわ。男爵様もアトリエにいらっしゃるのでしよう。行かなくては」

「断わりの伝言を言付けよう。今日は体調がすぐれず休息が必要だと。叔父上はそんな事に目くじらを立てるほど心の狭いお人ではない」

それでも行くと言い張るモニカを制し、ひとり階段を下る。伝言を伝え、ゴンドラをヴィラへ送り出す。居間に戻ると、モニカの姿は消えていた。入れ替わりに姿を見せた小間使いが、床に散らばった食器を片付けている。バルコニーへ出て、伝言を携えたゴンドラが水路を流れていく様を眺める。肩を落す叔父上の顔が目には浮かん

だ。

モニカが再び姿を現した。黒い喪服に身を包んだモニカが。幾重にもドレスを覆う闇黒のベールが、金色の朝日に透け溶けている。ふわりとなびく薄布と共に、不安げな光が瞳の中で揺らめいていた。

サン・ミケール島に死者を運ぶゴンドラには、溢れるほどの花が積みれ出発を待っていた。春が近いとはいえ、ここまで贅沢に花々を揃えられるとは、故人は資産家だったと伺える。花に埋もれるように横たわる棺に、モニカは自分が用意した花をそつと捧げた。見事な白百合の花。モニカは名残惜しむようにそつと棺を指でなぞる。参列者は早朝見かけたあの召使いだだけだ。

「奥様の遺言で密葬にして欲しいと、最後の仕事を言付かりました。でも……モニカ様にだけは葬儀の件をお知らせしようと、私が勝手にご報告したのです」

「そつ、ラウラは貴女を信頼していたもの。私はここで見送るわ。だから最後までお願いね」

「モニカ様……島には御一緒に来られないのですか？」

「ええ。ラウラはそう望んだ筈よ。でも……知らせてくれてありがとう」

モニカと話をしている女は涙ぐみながら話を続ける。

「奥様は遺言を残されました。モニカ様に……そつ、モニカ様に住居を含む全ての財産を譲り渡すと」

モニカは黙り花に埋もれたゴンドラを降りた。はらりと海風にさらわれた花びらが彼女の髪にひとつふたつ舞い落ちる。

「ラウラの気持ちだけ頂くわ。私には必要ないから……貴女の最後の賃金を、好きなだけそこから受け取って頂戴。そして残りは養育院に寄付してもらえるかしら」

え？ と召使いは首をかしげた。現実離れたモニカの言葉に返事が出来ない、といった様子だ。誰が聞いても耳を疑うだろう。

「天使様はラウラの魂を、どう秤^{はかり}にかけられるのかしらね」

慈愛に満ちたマリア像のごとく、ゴンドラを見送るモニカの柔らかい微笑み。召使いは何度も何度も振り返り、モニカに頭を下げた。子供のように泣きじゃくりながら……。

一歩下がり控えていた私の元にもニカが歩み寄ってくる。顎を上げ、視線を反らさず、真っ直ぐに、誇り高く。たった今、振り払った遺産の事など、お天気の話だったとも言いたげな様子だ。

「暖かいお茶をご馳走して下さる？ カル口様」

……全くこの女は……込み上げる笑いを噛み殺し、エスコートするための腕を差し出す。馴れた仕草でモニカは指を絡めてくる。

彼女にとって金貨は、罪多き男達から巻き上げるからこそ、価値があるものらしい。

真珠の乙女（モニカ）

ラウラが死んだ。告げられた時には現実感がなかった。その時は涙など、一粒も溢しはしなかったというのに、カル口には最後まで取り繕う事ができなかった。

誰かを失うのは初めてではない。神様の気紛れには、もう馴れてしまった。人はいつか死ぬのだから。もう、私は傷付かない。ただ感情をせき止めていた境界線を、あのカル口の一言が呆気なく崩した。

“愛想笑いは不要だ”

自分でも心臓が凍り付くのがわかった。貴方なんて……同じゴンドラに並んでいても、こちらに視線を流そうともしない。重い沈黙に押し潰されそうだった。同じベッドで眠った晩など存在しなかったかの振る舞い。微笑みは仮面だ。^{マスクラ}心から滲む影を覆い隠す、美しくも哀しい仮面。涙に縁取られた憐れな人生など、私の微笑で霞めてしまえばいい。

“愛想笑いは不要だ”

マスクラの下素颜など、もう忘れてしまった。そんな惨めさをさらすくらいなら、舌を噛み切った方がどんなに楽だろう。

カーファ（コーヒー）に濡れた床が、湯気をあげていた。身体を引き寄せられた時、通り過ぎていった男達とカル口が重なった。気紛れに、時には不可解な程の執着心で、私に金貨を積み上げた男達。やめて。嫌悪感に一瞬、身体が強ばるのがわかった。けれどもカル口はそれ以上、腕に力を込める事もなく、身を寄せる空間を差し出してくれるのみ。見返りの代償など期待しない広い胸を、不意打ちに差し出され戸惑ってしまった。

力を抜き、吸い寄せられるよう目の前の温もりにもたれてみる。涙はとりとめもなく流れた。何をやっているのだろう。こうして、こんな男に寄りかかっているのだろう。

“貴方なんて……大っ嫌いよ”

ほんの数分前そう吐き捨てた男の腕で、泣いているだなんておかしいではないか。躊躇いの隙間からひたひたと滲み出る安堵感。振り払うことが出来ないのは、どうしてなのだろう……。

花で埋め尽くされたゴンドラに、ラウラの棺は置かれていた。遺産の話をした時には、彼女の深い愛情を感じ胸がつまった。

ラウラ。ラウラ。母でもない姉でもない。彼女は生きていく道標だった。暗闇に差し込んだ一筋の光。男の持て余し方を、花開く女の生きざまを、そして絶望を微笑みで封印する術を教えてくれた。コルティジャーナとして初めての客をとる夜、ラウラは言った。

『貴方の部屋をリアルト橋の側に用意したわ。もう、ここに帰ってきては駄目』

ラウラは優しく微笑むと、妖しげな香りがする香油を私の耳朶に塗り付けた。多分あの時、私は戸惑った顔をしていたのだと思う。ラウラに突き放されたような気がした。

『笑顔を作りなさい、モニカ。自分の力で歩かなければ人生に深い足跡を残す事は出来ないのよ。それに貴女は優秀過ぎて、私もう教える事がないの』

白百合の花を乗せた棺が、ゆっくりと岸を離れていく。私は一歩離れた場所で見守るカルロを振り返り、彼に向かって歩き出した。カルロの黒髪が海風になびいている。歩み寄る私の姿を捕らえる深緑の瞳。目をそらさずに、顎をあげ、真っ直ぐに一步づつカルロに向かう。辿り着くまでのわずかな道のりは、未だラウラが導いている気がした。わき上がる馬鹿げた感覚に失笑する。運命……なんて陳腐な言葉だろう。

どうかしている。すぐ傍らまで近づいた私を、カルロは神妙な面

持ちで迎え入れた。いいのか？ 瞳がそう語りかけてくる。ラウラの相続の事を言いたいのだろうか。コルティジャーナは金の亡者だという常識を持つ頭には、解読不可能な行動だったのであるう。

嫌味のつもりで口にした。そう、嫌味だ。

「暖かいお茶をご馳走してくださいさる？ カル口様」

カル口は一瞬目を丸くし、皮肉そうに薄く唇だけの笑いを浮かべた。そして、冗談めいた仕草で腕を差し出してみせる。当たり前のようにエスコートの腕に指を絡める。

とくんつ。胸の奥で爪弾かれる何かが、切なく甘美な旋律を小さく奏でる。

“ねえモニカ、男を愛した事はある？”

初めてラウラと出会った日の会話が頭をよぎる。

無いわ、ラウラ。今までも、これから先もずっと……私は愛を売るコルテジャーナなのだから。誰かを想えば、気持を抱え込み、惜しみなく分け与える事など出来なくなるかもしれない。けれども今だけは……ラウラの居なくなった空洞を埋め込む温もりにすがりたくなる。そう、ひと時の戯れだ。自分に言い聞かせ、傍らの腕に甘えるよう寄り添ってみた。

カル口に連れられて辿り着いた場所は、大運河沿いの小さな館だった。ブレンダ河沿いに連なるヴィツラには及ばずとも、土地の狭いヴェネチア中心地でこれほどの中庭を抱く館は贅沢極まりない。庭から階段を登り建物の中に忍び込む。

金色に縁取られる装飾など無縁な、落ち着いた室内。格子型にはめ込まれた大理石の床が、落ち着いた色合いを微妙に変化させながら連なる。濃い艶やかな木の柱が漆喰で白塗りされた壁や天上に映えていた。窓を縁取る形のよい煉瓦。上階に繋がる階段は、濃い紫色の絨毯が敷かれている。霧のように漂う、しんと落ち着いた空気。カル口は壁際に置かれていた小さなテーブルをおもむろに持ち上げると、中庭に運び始めた。突飛な行動が飲み込めず、その様子をただ眺める。中庭から再び戻ったカル口は、今度は椅子をも運び出

す。窓から階下の中庭を見下ろすと、緑の草の上にテーブルがポツリと置かれていた。椅子を抱え階段を下ったカルロが、そこに向かって歩み寄るのが見える。

外で何をしようというのだろうか？疑問が湧きあがるものの、誘われるよう自分も中庭に続く階段を降りていく。カルロが椅子を引いて招いてくれた。思わぬ特等席が、自分のものだという現実に高揚した気分が込み上げる。

カルロが次に用意したのは、暖かいカーファ（コーヒー）だった。ポットから注がれる見慣れた色の液体。だが、自分の家の物とは全く異なる香り漂ってくる。

「カーファにも色々な種類があるのだ」

柔らかい草の感触を足元に感じながら、カルロの淹れたカーファを口にする。この光景に似つかわしい不思議な味わい。鬱蒼と中庭を取り囲む木々の間から、雀の鳴声が響いていた。言葉少なげな私達を氣遣うよう賑やかに。

「ご家族は、お出掛けかしら？」

退屈で陳腐な話題だなんてわかっている。太陽の下、面と向かってテーブルを囲んでいる状況が馴れなくて、苦し紛れに投げ掛けた言葉。

「両親は亡くなっているし、気ままな独り暮らしだ」

……え？ 咄嗟に返す言葉を失った。

「別に気にすることはない。珍しい事でもあるまい。黒死病^{ペスト}、天然痘、コレラ、流感……流行り病はいつだって、呆気なく人が群れる都を飲み込む」

ふと、カルロは視線を館に向けた。誰も居ない抜け殻のような館を。家族を失う苦しみを、この男も味わったのか。不意打ちにさらけだされた過去に、自分と同じ傷跡が覗いている。一瞬忘れていた呼吸。音を忍ばせて深く吸い込むと、喉の奥で小さく息が震えるのがわかった。

「……こんな時につまらない話をしたな」

テーブルの向こうからカルロの手が伸びてくる。ゆっくりと……。ふわりと髪をかすめる指の感触。髪に絡んだ何かを、そっと摘み上げられる。花びらだった。ラウラの棺を飾り立てていた花が落としていったのだろうか。カルロが息を吹きかけると、指に乗せた花びらはくるくると回りながら落ちていった。

「運命を感じる事がある？ 自分の人生に」

私の問い掛けに、カルロは花びらに向けていた視線を上げた。ゆっくりと視線が絡み合う。この瞬間を、この刹那を味わう為、あの時生き延びたのかもしれない。馬鹿馬鹿しいと思いながらも、己の心に湧き上がった慣れない感情を、誤魔化せない自分がいた。

「父上がよく母に出会えたのは運命だと口にしていた。母に先立たれた後もずっとだ」

「幸せなお父様ね」

「全くだ」

「お母様も」

視線は絡んだままだ。絡んだまま「だけど……」とカルロは言葉を続けた。

「己の矛盾だらけの人生に、運命なんて高尚な言葉は似合いそうもない」

投げやりな台詞を、さらりとカルロは言い捨てた。

「モニカ……」

再び、カルロの手が伸びてくる。今度は髪ではなく、大きな手が頬を撫でる。

「そんな目で見るな」

ポツリと漏らされた言葉に、胸が跳ね上がる。その動揺を押し殺し、おどけたように言葉を返す。

「……どんな目かしら？」

「お前を見ていると、母上と重なるのだ。運命などという戯言を、父上に植え付けた母にだ」

憎んでいるのだと言われた気がした。

がたんつ。咄嗟に、椅子から立ち上がり、逃れるように私は歩き始めた。頭が真っ白で、何も考えられない。背後から追いかけてくる足音が聞こえた。目の前に立ちはだかった壁に、肩からぶつかるそれは弾力のある男の胸だった。今朝、私を包みこんだ、カル口の広い胸。

“貴方なんて……大っ嫌いよ”

朝、そうカル口に言い放ったのは私自身ではないか。なのに、言い返された言葉には、ナイフのごとく胸を切り裂かれるなんて。

馬鹿みたいだ。こんな男を運命だと感じた自分を恥じていた。馬鹿みたいだ。他人より遠い関係ではないか。なのに、どうして私を追いかけるの？

「離してよ」

「待て」

「私の事、嫌いだなんて最初から知っていたわ」

「落ち着けモニカ」

「私だって、貴方なんて……」

「……モニカ」

引き寄せる腕の力は朝のそれとは全く異なるものだった。強引な程に強く、息が詰まるほどに激しく抱き寄せられる。眩暈がした。奪われるように口付けられる。熱くて、苦しくて、だけど溢れるほどに満たされていく。心の底からこれが、自分の欲していたものなのだと思い知らされる。その時だった。

バサバサバサバサツ。一斉に連なった雀が、空に逃れるよう飛び立っていく。羽音の方を視線を泳がせると、そこには見覚えのある人影が立っていた。ピアノ力……。彼女の紅潮した頬が、青ざめていく様が見て取れた。カルネヴァーレの夜とは違った、腰を締め上げない薄紫色のドレス。肘から切りかえされたたシルクの薄布が、ピアノ力の細い腕を優しく透かしている。そして首元を飾り立てる二連の真珠の首飾り。小振りながら贅沢に連なった真珠が、太陽の光を吸い込んで光沢を放っている。その眩しさに弾かれそうにな

る。

隠しようもない程に哀しみの色を浮かべる彼女の瞳は、カルロへの深い愛を物語っていた。この純朴な愛に跪かない男などいるのだろうか。打ちひしがれる程の苦境の淵に立つても尚、凜とした気品を崩さないのは高貴な血筋のなせる技か。

所詮、私など猿真似なのだ。着飾り、貴婦人の真似事をしてみたところで貴族になどなれるわけも無いのだから。ビアンカのかもし出す独特の雰囲気。家柄という硬い殻に守り育まれた、一点の汚れ無き真珠にも似た乙女。ビアンカの父の事なのだろう……以前グリマー二侯爵に挨拶をと、カルロは言った。グリマー二侯爵。数あるヴェネチア貴族の中でも大貴族と呼ばれる家柄。カルロの叔父であるバルゾ男爵に勝らずとも劣らない。

貴族には貴族がお似合いだ。姉をしてみるがいい、平民の娘など、ひと時の気紛れにしかならないのだ。コルティジャーナと同じ事。カルロの肩越し、ビアンカに微笑みかけてみる。目の前の現実を硬直した身体でビアンカは凝視していた。人の気配に反応したカルロが、ゆっくりと後ろを振り向いた。ビアンカの姿を認めると、背中に戻された腕からするりと力が抜けた。抱きとめてくれる腕を見失い、私は苦笑いをしながらビアンカのほうに向かって歩き始めた。背中にカルロの視線を感じながら、ゆっくりと歩く。

「いやね、殿方は誘惑に弱くって……ね、ビアンカ様」

優しく、彼女に話し掛ける。馴染んだ笑顔というマスクが、いつの間にか顔の上に被さっていた。

「精算していただくかしら」

唐突にカルロを振り返り、そう言葉を投げかける。彼の瞳が、みる間に曇っていくのが分かった。

「カルロ様は私の唇に、いかほどのお値段をつけて下さるのかしらね」

銀の船（カルロ）

「冗談よ」とモニカは笑った。クスクスと形の良い唇を可笑しそうに歪めながら。

重なった唇の感触が未だ残っている。何故モニカに口付けた？

どうして、こんなに気持ち揺さぶられる？ 毒を仕込まれたかのように、ぴりぴりと唇が熱い。

「お茶代でおあいこですわね」

さらりとそう口にする、モニカは庭を横切り去っていった。そのうしろ姿を見送る視線に、ビアンカの眼差しが絡み付く。

「私に構わないで……追い掛けていいのよ、カルロ」

ぼつりと、溜め息のような弱さでビアンカが呟く。言われるがままに追いかけたかった。だが、この状況でビアンカを独り置いていく事も出来ず……身体はひとつしかないのだから。小さく息を吐き、ビアンカと向き合う。

「いや……それよりどうしたのだ？ たった一人で……父上には言ってきたのか」

ふるふると、ビアンカはうつ向いたまま首を降る。

「時々、帰っているのになってここに様子を見に来てたの。歩ける距離だし。だってカルロ……嘘つきなんだもの」

視線を足元に落とし、ビアンカが小声ながらも棘のある台詞を投げてよこす。

「すまなかった。今、都合で叔父上のヴィッラで過ごすことが多いのだ」

そう……。と、ビアンカは小さく相槌を打つ。まるで何かに怯えるように、視線が泳いでいる。あんな場面を見せてしまい、酷な事をしたと思う。ビアンカを傷付けてしまった。悲しみに覆われた瞳が、ビアンカの心の内を物語っている。大人びてきたとはいえ、男と女の色恋沙汰になど何の免疫も持たない生娘。ましては、一途に

想いを寄せる相手の情事を目にするなど、耐え難い出来事であつた
だろう。だが、時間を戻せるわけでもない。どうにも償いようもな
いのだから。

「カルロ……私を避けないで」

「避けてなど……」

幼い頃、五つ年の離れたビアンカは何処に行くにもまとわりつい
てきて、隠れようものなら大声を張り上げて泣いたものだ。無邪気
に自分を求めてくれる幼い手が、どんなに愛しかったか。

「分かつてるの、あたしちゃんと分かつているわ。お父様が言った
事」

小さな頃のように泣き叫ぶ事もなく、ビアンカは声を押し殺して
言葉を綴る。必死に……。

「お願いカルロ、私を厭わないで……何処に嫁いでも構わない。だけ
ど貴方に嫌われたら私……」

「嫌うなど、そんな事……できる訳もなかつた」

本当に？ ビアンカが視線でそう訴えかけてくる。目を反らさず
真剣にその瞳を見詰め返す。ふわりと、ビアンカの蜂蜜色の髪がな
びくのが見えた。頬に添えられる手の感触。一瞬何が起きたのかわ
からなかった。そつと、柔らかい唇が合わさったかと思うと、する
りとその温もりが通り過ぎていった。走り去っていくうしろ姿が、
啞然と見開いた瞳に映る。

「……ビアンカ」

小さく呼びかけたその声に、華奢な肩をびくりと跳ね上げビアン
カは一瞬立ち止まった。ざわりと風に木々がざわめく。木漏れ日が
切り絵のような透かし模様を、ビアンカのドレスに落としていた。
振り向いたビアンカの顔が、幼い頃の彼女に合わさる。

“どうしたの。隠れんぼのたびに泣いていたら遊びにならないじゃ
ないか、ビアンカ”

“だって……だって……カルロったら隠れるのが上手すぎるのよ”
今、声を立てずに泣くビアンカを、あの頃のように『こっちにお

いで』と抱き寄せてあげられない自分がもどかしい。モニカと同じ道を辿り、ビアンカは走り去っていった。

翌日いつものようモニカを迎える為、ゴンドラに揺られる。船着き場には小間使いが立ち、到着を待っていた。モニカと顔を合わせる瞬間を頭の中で繰り返し返していたので、どこか拍子抜けした気分になされる。ゴンドラを寄せると、小間使いは少し言い辛そうに主人からの伝言を伝えてきた。

「モニカ様は昨夜からお出かけになられていらっしやいまして、今朝は出先から直接、男爵様のヴィツラに向かわれるそうです。今朝は私がここでカルロ様をお迎えして伝言を伝えるようにと、モニカ様より言付かっておりました」

昨夜は戻らなかった……心の奥底でチリチリと、何かが焦げ付く音がした。何を今更、あの女はコルティジャーナではないか。一夜の春を売りさばき、戻らない朝など珍しくも無かるう。

ゴンドラを旋回し叔父上のヴィツラに向かうよう漕ぎ手に指示をする。ちゃぷり、ちゃぷり。馴染んだ水音さえ何故か耳障りに感じる。独り、紅いビロードで覆われた椅子の背もたれに寄り掛かる。細長く狭い船上が、ぽっかりと穴があいたように広く感じた。

お笑い種だ全く。慣れない感情に、苦笑いが込み上げる。

ヴィツラに着いてもアトリエには顔を出さなかった。階下の書斎で、独り机に向かう。叔父上が紹介してくれた男はさすが商才に長け、よく整理された報告書に目を通す。輸入した羊毛で生産する高級毛織物の積み荷は、地中海諸国へと予定通り出港したようだ。インドやアラブから届く贅沢な象牙や香料、宝飾品……。

自ら帆船に飛び乗り、久しぶりに世界の港を巡るのも悪くない。ふと、そんな思い付きが頭をよぎる。それにしても眠い。昨夜は横になったものの白々と朝の気配が漂うまで寝付けなかった。寝酒にあおったワインが未だ頭の片隅に残っているようだ。黒光りする程

に磨き上げられた書斎机に、そつと頬をのせると冷やりとした感触が伝わってくる。

……カタンッ。

何かの物音に、いつの間にかうたた寝していた重い瞼が薄く開く。ぼんやりと焦点が合わない。もう一度瞼を閉じ、再び開ける。書斎のドアの方からゆつくりと、こちらに歩み寄るモニカの姿が見えた。ドクンツと、心臓が跳ね上がる。だが平静を装い、机にまで垂れる己の髪の間隙からその様子を覗き見る。

傍で立ち止まり、すつと伸びてきたモニカの指に、瞼にかかる髪を優しく払い除けられる。さらけ出された瞳から、持て余す感情が滲み出ないよう、寝起きの不機嫌さを演じてみせる。

「タベはお楽しみでしたの？ お互い忙しい身の上ですわね」

モニカが、わざとらしく小さく欠伸をする仕草をしてみせる。

「……一緒にして貰っては困る。貴女のように夜を遊ぶ術など持ち合わせてはいない」

あら、とモニカは肩をすくめてみせた。

「人生の半分は夜ですのに。使い方をご存じ無いだなんて勿体ないですわね」

口の減らない女だ。頬を机につけたまま、うたた寝の続きだとも言いたげに瞼を閉じる。しばらく人のうごめく気配を感じた。何か書棚を漁っているような……。気にかかるものの、無関心を装い瞼を決して震わせないよう神経を集める。

ぱさり。蝶の羽音のような微かな物音が耳元で響いた気がした。

己の髪に何かに触れる違和感。耐えきれず薄く瞼をひらくと…教会での礼拝のごとく床に膝をあて、吐息のかかる距離で机に頬杖をつくモニカがいた。磨かれた卓上に流れるモニカの長い髪が、自分の髪と触れ合っている。じつと注がれる眼差しに、昨日の行いを問われている気がした。

「一緒に探して下さない？」

何を？ 視線でそう返してみる。

「歌劇の題材にする本を探しておりますの。男爵さまに相談しましたらお薦めを御紹介下さって……」

聞き覚えのある本の名前をモニカは言った。ふっくらとした唇が、誘うように形を変えながら言葉を綴る。振り払うよう視線を反らし立ち上がると、部屋をぐるりと囲うように並ぶ書棚に向かう。

几帳面な叔父上らしく、整理分類された本がところ狭しと連なっている。視線を走らせ、御指定の本を抜き取り席に戻る。変わらぬ仕草で頬杖をつくモニカの前に差し出した。

「頭の中に本の居場所が詰まっていらいっしやるの？」

目を丸くしたモニカが、本の表紙に手をかける。

「歌劇に使うとは？」

「エンツォ様が……」

エンツォ……？叔父上のサロンに来ていたあの建築家の？

「彼が設計した劇場が来週、開演するんですって。それで色々これから上演する歌劇の題材を探していらいっしやるって訳」

モニカはパラパラと頁をめくりながら、話を続ける。そして思い出したようにくすりと笑ってみせた。

「劇場の舞台で歌ったら、さぞかし素敵なお気分でしょうね」

「エンツォ殿の推薦で？」

「さあ……」

ふと、モニカは言葉を濁した。視線が絡み合う。

「絵もほとんど仕上がってきたので、男爵様に少し時間を空けてあと二、三回通えば終わりそうだと言われました。今朝のような事がまたあると申し訳ないので、ゴンドラの送迎はもう結構ですわカルロ様」

ずっと本を抱えてモニカは立ち上がった。部屋の扉に向かうモニカの背中を見送りながら、心に湧き出る醜い感情を押し殺している己を感じていた。エンツォ……昨夜の相手はエンツォか。

いや、誰の元にもとまらない、気紛れに甘い蜜を吸っては花を変える夜の蝶。相手を詮索してみたところで意味など無い事。扉の

閉じる音が、妙に遠くの出来事のように感じた。

どうかしている。自分でも、滑稽極まりないと自覚はしている。こんなところに足を運びどうしようというのだ？　いくら叔父上の代役だとはいえ……懷に忍び込ませた封筒にそつと手を添える。

『折角、招待を受けたのだがあいにく所用が出来て行けなくなってしまった。失礼にならないよう、顔だけでも出して欲しいのだ。出席のサインを私の名前で書いてきてくれればいそれでいい』

急な頼みだった。どうしても先約があるのだと断わる事だつて出来たはずなのに。モニカと書斎で話をして以来、十日程が過ぎていた。このまま月日が経てば、ひと時の気の迷いだつたのだと、己を皮肉る事さえ出来る気がした。なのに、こんな場所にわざわざ足を運び、何を期待するといふのだろう。あの女に偶然すれ違ったところで、会話など弾むはずも無いではないか。

劇場の入口で封筒を示し、招待客であるサインを叔父上の名で刻む。お披露目の劇場は、さすが教会建築でその名を馳せるエンツォらしい重厚な風格が漂っていた。幾重にも重なり合う柱廊を携えた石造りの円柱塔。内部には仰ぐほどに高い天井がそびえていた。美しく彩色された円形の天井は、屋外かと錯覚させる青い空が描かれている。弧を描きながら連なる階段式の座席には、この場に相応しい紳士淑女が優美な扇を仰ぎながら開演を待ち詫びていた。

最前列に一際賑やかな人々の輪があつた。その中心で賞賛を浴びる人物、エンツォだった。いつぞや、叔父上のサロンで恥かしそうにこの背に隠れ、モニカを覗き見にしていた人物と同一とは思えない堂々たる風貌。そして誰よりも人目を引くのは、エンツォの腕に導かれ百合の如く傍らに凜と立つモニカだった。これから幕の奥より姿を見せるであろう今宵の歌姫よりも目立ってしまうに違いない。燃え立つような紅いドレスを今一度見詰め、踵を返し歩き始める。

元々人が賑わう場所は苦手な性質だ。このような場所に出向く事ももつ減多にあるまい。そう、自分に言い聞かせてみる。外へと導

く扉へと足を運ぶ。六角形の螺旋階段を降り庭園へと抜けていく。白い回廊がとり囲む庭があった。その中央には噴水が水を満たしている。所々に配置されたランプに照らされるのは、細部にまで手入れの行き届いた植木。

間もなく開演だと案内する声が響くと、来賓は皆建物の中へと消えていった。空を見上げると先ほどの青空は何処へやら、星屑が散りばめられた夜空が広がっていた。出来すぎた演出にどちらが本物の空か一瞬、混乱さえしてしまう。

回廊を横切る人影が目端に見えた。柱と柱の隙間に、紅いドレスがなびいている。庭園へと導く短い階段を降りて来たのは……信じられない事にモニカであった。シルクの紅い光沢が、淫靡なまでの妖しさでドレスの表面を覆っている。螺旋状に編み込んだ髪には、眼状紋を持つ羽根が飾られていた。

「奇遇ですわね、カル口様こんな所で」

モニカの息が僅かに上がっている。つい先程まで客席の最前列、エンツォの隣にいた事を思えば信じられない俊敏さだ。何の用があったて此処に居る？

「歌劇の幕が上がってしまうぞ」

呆れた声色で諭す。だがモニカは気にもとめない様子で、噴水なんぞを感じたように眺めている。

「人の多さに酔ってしまいましたの」

エンツォが探しているのでは……そう思ったが決して口になどしなかった。

「今宵は月が綺麗ですわね」

ゆらゆらと扇を揺らしながら、モニカは夜空を仰ぐ。その視線の先には、青白い光を放つ満月が浮かんでいた。

「ご存知かしら？ 人間に恋をした月の女神の話」

おもむろにモニカが尋ねてくる。

「……いや……」

月明かりがモニカの瞳を蒼く輝かせている。体の奥底から高まる

心音を感じていた。

「孤独で冷徹、そして純潔を誓っていた月の女神セレナは、陽が沈むと東の空に銀の船を浮かべるの」

モニカは噴水の縁に腰を降ろすと、子供に語りかけるようゆっくりと物語を綴り始めた。その言葉の旋律に身を任せると、夜空に浮かぶ銀の船がぼんやりと脳裏に浮かび上がる。

「女神はある日、仕事に疲れ果て岩陰で眠る羊飼いの少年を見初めるの。船より地上に降り立ち、彼女は少年の姿を月明かりで照らしながら歩み寄る。そして無防備に眠る寝顔を間近に見詰め、すっかりその美しさに心奪われてしまったそうよ」

ぱちゃん。モニカは噴水に手を伸ばすと、撫でるように水面を揺らした。ゆったりとした波紋が描かれていく。

「揺り起こすのを躊躇して、女神は少年の夢の中に忍び込むの。口付けを捧げ、やがて二人は夢の中の世界で愛し合うようになる。それからも度々女神は少年の夢を訪ねるわ。何度逢瀬を繰り返しても二人の心が揺らぐ事は無かった。そして女神は己の父、万能の神ゼウスに跪き願い事を乞うの。“年をとっても少年が死ぬ事が無いように”そしてゼウスは授けた。眠り続ける事で、永遠の命と若さが保てるようにと……。そして夢の中の逢引は、ずっと繰り返されたそうよ」

そこまで話をすると、ふとモニカは小さく笑ってみせた。

「ごめんなさい。カル口様はお伽話がお嫌い……だったわね」

相変わらず一言多い女だ。そう心の片隅で毒付いたが、微塵にもそんな素振りは見せず、真剣に話を聞いている振りをした。

「他の神々に誘惑されても、決してなびく事の無かった月の女神が、純潔を捧げてまで羊飼いに想いを寄せたのはどうしてでしょう。いくら美しい少年だったとしても、ただの人間だったというのに。生を受けてからずっと互いに探し求めていた、運命の巡りあわせだったのかしらね」

運命……何故かその言葉に心を揺さぶられる。話はそこで途切れ

た。気の利いた返答をしなくてはと頭を巡らせるが、そんな言葉は何も思い浮かばない。黙り込んだままモニカの隣に腰を降ろし、二人で夜空を見上げる。

「来月は私が舞台にあがりますの。招待状を送ったら来てくださいます？」

喝采を浴びるモニカの姿など安易に想像がつく。人々の視線を集める程に、より艶やかに輝く羽を広げる美しい蝶。舞台の上はモニカには似合いの場だ。そしてその傍らには、エンツォというパトリックが常に控えているのであろう。

「残念だが来月からは仕事で船旅に出る」

あら、とモニカは驚いた仕草をしてみせる。自分でも咄嗟に出た言葉。たまたまそんな事を数日前にふと思い付いたが、何を具体的に決めた訳でもなかったというのに……。エンツォが御膳立てした舞台に立つモニカを、観る気分になどなれそうにない。

「いつ頃お帰りですか？」

「さて、半年か一年か……。もしかしたらヴェネチアにはもう戻らないかもしれない」

モニカはふと黙りこんだ。彼女の何かを訴えるような視線を横顔に感じたが、気付かぬ振りを装い再び夜空に視線を上げる。

こんな事を言いたい訳ではない。まるで意地を張った別れ話ではないか。傍らで小さな溜め息が聞こえた気がした。横顔を捕らえていた視線が、ふと消え失せる感触。月明かりさえもが雲に遮られ、周囲を闇に塗り替えていた。

「私、席に戻りますわ」

おもむろにモニカは立ち上がった。

「エンツォの所へ？」

皮肉に聞こえただろう。だが黙って見送る事などできそうになかった。モニカが睨むようこちらを一瞥する。封印したつもりだった忌まわしい感情が、どろりと滲み出るのを感じていた。乱暴にモニカの手を取ると、庭園の奥にそびえる大木の陰へと引き込む。

「っ……たい」

僅かな抵抗など、タカが外れた男の力の前では、何の役にも立ち
はしない。月明かりにも、ランプにも照らされない死角。その暗闇
へとモニカを追い詰める。記憶の片隅に刻まれた蝶を求め、唇をモ
ニカの首筋に押し当てながら闇の中をさ迷う。モニカが息を呑む空
気が伝わってくる。

「や……カルロっ」

戸惑い上ずった声色に、男の狩猟本能がくすぐられる。だけど……
。違う、そうではない。欲しいものはこんな事ではない。モニカ
の匂い。モニカの温もり、モニカの手触り。知れば罪深いほどに求
めてしまう。その心までも。

この手を離れ他の男の元へと飛んでいってしまうのなら、その羽
をもいでしまおうか。それとも箆にそつと閉じ込めてしまおうか。
羊飼いは何故女神の心を捉えたのだ？ 運命という代物か。

「戻らなくてもいい。今宵は私が買い取ろう。エンツォの倍金貨を
積むぞ」

バシッ。耳元で弾いたその音が何であるのか……即座に頭が回ら
なかった。痛い、というよりは痺れるような熱が頬に広がりはじめ
てやつと、モニカに拒絶された事実を知った。

手の中を擦り抜けていく薄布の感触。飛び立った蝶はもう戻って
はこないだろう。移ろい漂う視線の先に、ぼんやりと浮かぶ銀の船
が見えた気がした。

甘い夢（モニカ）

男の隣で眠るのは、あの夜以来だと言ったら、カルロは鼻先で笑うのだろう。コルテジャーナとして名が売れば売れる程に、身体を売る必要性は必然ではなくなっていた。肉体を使ってもてなす事無く、男の心を満足させる。そんな価値をあらゆる技量で身につけていったからだ。

エンツォが寝息を立てている。するりと隣から抜け出すと、ありのままの姿で床に足を踏み出した。気だるさがまわりついてくる。さっきまで覆い被さっていたこの男の重みがまだ身体に染み付いているようだ。エンツォは大切に扱ってくれた。決して無理強いなどもする事無く……あえて誘ったのは私だ。数日前、一晩共に過ごした時は、芸術話に花を咲かせてしまっただけの事だったというのに。微笑みかけ、相槌を打ち、時には辛辣な意見を投げかけ、その末に絶妙なタイミングで甘え寄り添ってみれば、その時間だけで彼は満足し支払いをしたのだ。……それも気前良く。

なのにどうして？ 時間を重ねればこういう夜も巡ってきたかもしれないが、今宵では決してなかったはずなのに。……カルロの……私を抱き寄せ首筋を辿ったカルロの唇の感触が、堪らなく自分を混乱させた。気が触れそうにもどかしく、身体を熱くさせたのだ。誰かにしがみ付かなければ、カルロの元に帰ってしまいそうで怖かった。中庭でその手を振り払ったのは、自分自身だというのに。

客席に戻ると、幕は既に上がり耳障りなほどに高いソプラノを自慢げに振舞う女の姿があった。

『何処に行っていたのだ』

少しだけ咎める口調でエンツォはたしなめたが、私の顔を間近で眺めると、心配そうに眉間に皺を寄せた。

『どうした。気分でも悪いのか？』

小さく長く息を吸い込み、乱れた呼吸を整える。

『退屈だわ』

吐き捨てるようにわざと口にしてみせる。エンツォの顔が険しくなるのが見て取れた。

『この舞台に相応しい歌姫が何処にいるのか、エンツォ様ならよくご存知でしょうに。でも私、欲張りではございませんの。今宵の観客はたった一人いれば充分ですわ』

耳元に男を酔わせる甘い美酒を注ぎ込む。

『私からの招待状をお受け取りになれますか、エンツォ様』

ヴェネチアングラスで装飾されたミラーに自分の姿を映す。一糸纏わぬ女が、青白い月明かりに照らされて立っていた。食い入るようにその裸体を眺める。首筋にひとつ、唇に吸われた跡が刻まれていた。わかつている。エンツォとの情事の痕跡だなんて。男の気紛れを操るのが仕事だというのに、私は何に翻弄されているのだろう。『今宵は私が買い取ろう。エンツォの倍金貨を積むぞ』

貿易でしこたま稼いでいる男の懷に、仰せのままに手を忍ばせる事などたやすことではないか。

宮廷婦人などともてはやされたところで所詮、娼婦なのだから……。身も心もよろめていく気持に、尻込みしている自分がいた。誰かに抱かれないなどと、思ったことなど一度も無かったというのに。

そつと、指先を首筋に添える。目を瞑りカル口が辿った唇の感触を蘇らせる。胸を締め付けるような甘い疼きが湧き上がるのを感じた。カル口に抱かれたら、自分を見失ってしまうに違いない。そして飽きられるのを恐れながらも平静を装い、いつものようにマスケラの微笑を浮かべるのだ。堪えられないと思った。エンツォの温もりで全てを消し去ったつもりでいたのに。

ビアンカの顔が目の前にちらつく。一目でわかる。その貞操が真珠の殻で未だ守られている事など。近い将来、あの白い首筋にかけられた真珠の首飾りを、カル口の指がそつと外す時がくるのかもしれない。あの二人ならば父と母のように、婚姻の契りを忌まわしいものではなく幸福の種へと変える希少な夫婦となるに違いない。力

ルロだけに染まり、カルロだけを見詰める人生は、ビアンカにとってこの上なく甘美な檻となるだろう。その合間、気紛れに愛されるコルティジャーナとしての役割など……。

それでもいいなどと、思う自分はどうかしている。こんな愚かな女に成り下がるだなんて。いや、男に手を挙げる女など、既に呆れ果てている事だろう。手に入らない珍しい女だから、味見をしたいと思ったただけなのだ。船旅に出るなど、こちらの気を引きたい男の嘘だなんてわかつている。そうではないか。ビアンカが離す筈も無い。あの一途な瞳で引き止められ、その手を振り払える男など皆無だ。

月光が癒すように身体を包み込む。私に月の女神の力があれば……。せめて……。そう、せめて……。カルロ、貴方の夢に忍び込み誰にも邪魔されない世界で愛し合いたい。女神と人間が愛し合えるような、身分に囚われない夢の中で。そして、ゼウスに願うのだ。二人に永久の眠りをお与え下さい。決して現実の世界に戻る事が無いようにと。

人の手は万能の源か。一見、何の変てつもないバルゾ男爵の指先。それがひとつの世界を築き上げていく様を、私は感嘆の念を抱きながら見つめてきた。白い麻布のキャンバスに油彩が施されていく。絵筆を重ねるほどに色彩は透明感を持ち、宝石のような輝きを放ち始めるのだ。頬杖についてベッドに横たわる女。それが男爵が望んだ構図だった。白いドレスの滑らかな生地が体のラインをなぞっている。柔らかく結い上げた髪の後れ毛。耳元を飾る椿の花。シーツが刻むひだ模様。質感すら伝えてくる綿密な描写。控えめに覗く白い肌が、かえって官能的に浮き出て見える。

男爵はたった今、完成した作品をあらゆる角度から眺めると、ここが一番苦労したのだと絵筆の先で示してみせた。それは頬杖をつく手だった。意外な指摘に首を傾げて男爵を見詰める。

「この、こめかみに添えられた人差し指だ」

男爵はさらに細かい部分を示してみせる。

「この存在感で貴女の瞳が、より深い思惑を秘めているよう匂わせるのだ」

その言葉に再びキャンバスを、注意深く眺めてみる。少し伏せた瞼から、光を孕んだ瞳が覗いている。意味ありげな流し目。男を誘うよう、ほのかに微笑んだ唇。鮮やかな色彩をより効果的に引き立たせる手法なのか、背景は薄暗い闇色で塗りつぶされている。コルティジャーナの光と影さえも写し取るかのように……。絵の中の私は何を考えているのだろう。胸の奥に潜めた秘密がキャンバスに溢れ出ているようで、少し落ち着かない気分で絵の中の自分を見詰める。

「旦那様、ビアンカ様がいらっしゃいました」

小間使いが意外な来客を知らせるため、アトリエに入ってきた。

「ビアンカ様が……」

思わず口にした私を、意外な様子で男爵は見返してきた。

「ビアンカ嬢をご存知か？」

「ええ、以前カルロ様とご一緒の時にお会いしましたの」

「ならば、同席しても差し支えなかつた」

男爵は小間使いにビアンカをアトリエに案内するよう指示した。

どんな顔で出迎えたらいいのか……自分の顔が引きつっているのかわかる。

「御無沙汰しております男爵様」

アトリエに顔を出したビアンカは、私の姿を認めると一瞬驚いた顔を見せたものの、直ぐにふわりと笑いかけてきた。邪気の無い笑顔に胸の奥が痛む。先日、あんな顔をさせたのは私だというのに。

「結婚式の日取りが正式に決まりました。男爵様には私から直接招待状を届けるようにと父から言付かりました」

「おお、それは嬉しい知らせだ。こんなところで足を運んで頂き申し訳なかった」

結婚式。二人の会話が急に遠くに感じた。まさか、こんな場面に

自分が出くわすなんて……。偶然か必然か、神様は私に悪戯を仕掛けるのが余程お好ましい。

「私からもお祝いのお言葉をビアンカ様。……おめでとうございます」

「ありがとうございます、モニカ様」

微笑み返してくるものの、その眼差しはどこか寂しげな色を浮かせている。夫となる男が口付けていた相手に祝福されても、複雑な気持ちになるというものだ。

「ハツホ家は歴代ドーシエ（総督）に名を残す家柄。そのご子息なら申し分の無い縁談だ。お父上もさぞかしお喜びの事だろう」

ビアンカは小さく頷き、金色に縁取られた招待状を男爵に手渡した。ハツホ家……話の意味が直ぐには掴めなかった。カル口では……ない……何故？ 男爵は祝いの手紙をしたためるからと、書斎に消えてしまった。アトリエには女二人が取り残される。

「まあ、これモニカ様ね」

不自然な程に明るい声で、ビアンカがそう話し掛けてくる。返す言葉を失ったまま、彼女がキャンバスに歩み寄る様を見守る。

「男爵様がモデルをお願いするなんて……モニカ様は本当にお綺麗ですもの」

ビアンカは絵と私を交互に見比べながらそう呟いた。

「カル口のお母様と並べて飾っても、競うほどの輝きを持っていらっしゃる」

壁にかけられた紫の薔薇のコルティジャーナに、ビアンカは視線を移してみせた。

「カル口の……お母様？ この方が」

このアトリエで長い時間を過ごしても、男爵は不自然なほどに絵画の女について何も語りはしなかった。紫の薔薇のコルティジャーナ。特別な思い入れがあると伺えた。だからあえてこちらもその心に踏み入らないよう言葉をつぐんでいたのだ。爵位をかけた恋。まさか、その逸話の人物が、カル口の両親だなんてどうしてし考えが

及ぼうか。ただ、最初にこの絵を目にした時に感じた違和感を、今再び噛み締める。似ている。そうだカルロに似ているのだ。この美しい貴婦人は。見慣れた絵の女が、全くの別人として瞳に映る。未だ信じられない。カルロの母だなんて。

「羨ましいわモニカ様が……自由に自分らしく生きていらっしやる」
消えそうな声色に我に返る。ビアンカがするような眼差しでこちらを見ていた。

「私、婚姻の相手はカルロ様だと思ひ込んでおりました。だって……そうでしょう？」

「ええ、カルロしか考えられなかった。でもそれは叶わない願いだったのです」

何ていう皮肉。身分に引き裂かれた愛を嘆いているのは、ビアンカだったなんて。

「カルロは最後まで私を妹以上の存在には、思ってくれなかった……」

ビアンカの瞳が哀しみの膜で覆われていく。

妹……意外な告白に返す言葉を見失う。

「カルロが愛してくれないのは身分の壁があるからだ、必死に自分に言い聞かせてきました。」

けれども、それは自分自身をかばう……言い訳に過ぎなかった」

彼女の絞り出すような告白を、ただ啞然と聞いていることしか出来ない。

「貴女を見詰めるカルロを目にして、やっと現実気付きましたの」
話の矛先を不意打ちに向けられ、胸が跳ね上がる。

「私はコルティジャーナですもの。殿方が気紛れに興味を示す存在というだけの事ですわ」

あの夜、この手を引いたカルロの感触が全身に広がっていくのを感じていた。

「お言葉を返すようですが、私、モニカ様よりずっとカルロを知っておりますの」

真っ直ぐに見据えてくるビアンカの視線から、逃げ出す事など許されない気がした。

「……だから、彼の心に貴女が棲みついているなんて、手にとるようにわかるのです」

男爵の手紙を受け取ると、ビアンカは帰っていった。

“羨ましいわモニカ様が……”

ビアンカの言葉が繰り返し頭の中で響いていた。真っ直ぐに愛するひたむきさ。人の心を秤にかける浅ましさを身につけてしまった自分には、一生無縁だと寂しく思う。羨ましいのは……私のほう。けれど、なんと運命とは残酷なのだろう。こんなにも恋焦がれる相手がいながらも、他の男の元に嫁ぐとは。

“自由に自分らしく生きていらっしゃる”

自由？ 私が手に入れた自由とは何だろう。その為にもかしたら、取り返しのつかない代償を払ったのではないだろうか。チャリント、どこかで金貨が立てる音が聞こえた気がした。

「顔色が悪いぞ、何かあったのか？」

黙り込む私に違和感を感じたのだろう。絵筆を片付けながら男爵がそう問い掛けてくる。

「いえ、なにも……」

誤魔化すよう泳いだ視線の先に、紫の薔薇……カル口の母が艶やかに微笑んでいた。カル口の片鱗がその面影に見え隠れする。

「今回はカル口様にも本当にお世話になってしまいましたわ。絵の出来に何てお言葉を下さるかしら」

さりげなく。努めてさりげなく男爵に探りを入れてみる。

「あやつはあまのじゃくだからな……心の中では称賛しても何と言葉を放つやら。ただ、残念な事に当分ここに来ることはあるまい」「どうしてですか？」

ずっと血の気が引いていくのを感じた。その言葉の続きを恐れながらも尋ねずにはいられない。

「しばらく船旅で戻らんのだ。世界中の港を巡ってくるのだなどと

子供のような事を……」

ぐらりと視界が歪む感覚。耐え切れず、その場にしゃがみこんでしまった。

「大丈夫かつ？」

男爵がかがみこみ、癒すよう背中をさすってくれる。

「……っ……」

「どうした？」

押し寄せる馴れない感情に眩暈がする。言葉の代わりに溢れ出たものは、信じられない事に涙だった。男爵を目の前に、自分を取り繕う事が出来なかった。潰されそうな胸で僅かに求める呼吸さえ、哀れに震える音を立てた。

カル口。カル口。大切なものは、いつだってこの手を擦り抜けていく。抱き締めれば砂のごとくさらさらと音も立てずに崩れ落ちる。手を伸ばすのが怖かった。カル口の心に触れてしまえば、歯止めの聞かない運命に翻弄される自分を予感していたから……。

男爵は私の腕をそと取ると、部屋の隅に置かれた力ナペ（カウチ）まで導いてくれた。唐突に溢れ出した女の涙が落ち着くまでしばし、ただ黙り見守ってくれた。

「……愚かな女だと、笑って下さるほうが救われますわ」

「笑うなどと……キャンバスの女の秘密めいた思惑が、カル口に向けられていたとは。描いたのは私だというのに、すっかりいい役どころをカル口にさらわれたようだ」

「娼婦の私など、誰を愛する資格などありませんか」

「人の気持ちに、資格など不要だ。身内をこう言うのも気恥ずかしいものだが、あれは中々、骨のある男。ただ不器用な一面もある……そなたを置いて行くななど馬鹿な男だ」

違う。違う。当然の報いなのだ。身体を売ることに私は後悔などしていない。それが生きていく糧の源。男より非力な女達に、神が与えた武器なのだから。罪は疑心に蝕まれ、カル口の腕を逃げ出し、エンツォの温もりで己を誤魔化そうとした事なのだと噛み締める。

「汚れております、心も……。愛などと、身分不相応な高望みですわ」

男爵はその台詞に一瞬目を見開いてみせた。そしてゆっくりと、首を横に振った。

「何故、彼女と同じ言葉を使う……これは神の悪戯か？」

男爵が向けた視線を辿ると、この部屋で最初に目にした等身大の女の絵があった。

「あの時と同じように、迷える背中を押すのは私の役目なのだろうな」

モニカ……小さく男爵は呟いた。幼子に道を教えるような、そんな響き。

「逃げ出してはいけない。人生を揺さぶるほどの愛に出会える瞬間はそう何度も無いのだから。いや、生涯その存在に出会えず迷う人のなんと多い事か」

「男爵様は……出会えたのですね。幸運にも」

「この手に抱く事は出来なかったが。振り返ればそんな恋心など儚い幻のようにも感じる。けれども彼女を愛した時間は私の人生の誇りだ。あの想いが無ければ違う人生を歩んでいた事だろう」

一瞬、男爵とピアノ力が重なって見えた。

「兄は幸せな男だった。カルロもさすがその運を引き継いでいるらしい。……兄の愛に応える時マリアも躊躇して、自分は汚れているなどと、今のそなたと同じ言葉を溢した。だが、二人で踏み出した人生に汚れなど、一点の曇りすらなかったぞ。ただ、カルロには身分において少し複雑な荷を背負わせてしまった。貴族の家に育ちながらも貴族の身分は与えられなかったのだから」

紫の薔薇。すみれ色の瞳を持つこの美しい人も、私と同じ罪を味わったというのだろうか。ましてや男爵という身分さえ愛する男から剥ぎ取る現実。多くの葛藤があったのだろうか。失ったものに値する幸せを、カルロの父は手に入れたのだろうか。矛盾だらけの人生だと以前カルロは口にした。全ては母がコルティジャーナであった

が故。母と似ているという私は、忌まわしい存在でもあるのかもしれない。

カルロはヴェネチアに戻ってくると男爵は言った。結局はこの街でしか生きられない男なのだと。本当に？ 戻ってくるのだろうか。その日からゴンドラに乗る時は、いつも遠回りをしてカルロの家の前を横切る癖が出来た。次の日も、次の日も。大した用も無いのにゴンドラに揺られ、人気の無い館を横目で眺めながら通り過ぎる。何度かエンツォが遣いをよこしたが、舞台を断わる手紙をしたためると諦めたように連絡は途切れた。

“引き際だけは見苦しく無く振舞いたいものだ”

カルネヴァーレでもそう呟いた男らしい振る舞い。カルロの存在が無ければ、また違った縁があつた男なのかもしれない。

華やかなサロンの招待状も、ここ数日どこからも届かぬ日が続いた。郊外の集合住宅地で黒死病^{ペスト}による死者が発生したという噂を耳にしたが、その警戒なのだろう。病を恐れる人々はひと時、家に閉じ籠つてみたものの、退屈を嫌うヴェネチアの血が騒ぐのか、数日間の沈黙が限界だと、そろりそろりと今日あたりからゴンドラがその姿を復活し始めていた。丁度いい休息だった。己の心を見つめ直す時間を得る事が出来た。一年先、いや何年先でも、私はヴェネチアで暮らしている事だろう。そして、あの館にカルロが帰る日はいつかは巡ってくるのだ。他の国で見初めた女を連れて帰るかもしれない。彼の心から私への想いなど、塵のごとく消え去っているかもしれない。それでも構わないと思った。今より一層、自分に磨きをかけ、他の女などがすめてしまう程の花を咲かせればよい。彼の心に再び火をつける炎を、絶やさず守り続けられたい。

少し吹っ切れた思いで、風に当たるためバルコニーに足を伸ばす。ぼんやりと水辺を染める夕日を眺めていると、一艘のゴンドラが、ゆっくりと近づいてくるのが見える。バルコニーの柵にもたれながら、その船がこちらの建物に向かって弧を描き迂回する様が見て取れた。どくと、胸が波打つ。ちらりとこちらを見上げる深緑の瞳。

帽子のつばに遮られ、ほんの一瞬しかその容姿をかいま見る事が出来なかった。階段を降り、船を迎え入れる柱廊造りのトンネルへと走り寄る。そして、ゴンドラより降り立った人影を凝視する。……カルロ：カルロだった。カルロは、黒い山高帽を頭から取り胸に抱くと、少しばつが悪そうに見詰め返してきた。

「最初の港ドブロブニク（クロアチア）に着いた途端、叔父上の使者が追いかけてきて、男爵が病で危篤だからすぐに帰るようと呼び戻されたのだ」

ペスト……まさか……男爵が……。私の顔色が変わったのを察したのだろう。カルロは肩をすくませておどける仕草をしてみせた。

「今さつき、本宅の方に寄って来た。あの方は悪知恵の働く策士だと忘れていた私が迂闊だった。」

病気の影などどこにも見当たらない程にピンピンしておられた」

ほっと胸を撫で下ろす。呼び戻す口実とはいえ、なんと縁起の悪い。

「今日はゴンドラの数が少なかったので水路がやたら広く感じ……」

いつもより饒舌に話を続ける彼の話を遮ったのは私だ。その胸に飛び込みその存在を確かめる為、強く背中に腕を絡めた。とくりとくりと、カルロの少し早い鼓動が耳元をくすぐる。カルロが戸惑っている空気が伝わってくる。無理も無い。このしたたかなコルティジャーナは男爵以上の策士だと、疑いを拭えないのだろう。

「カルロ……」

他の言葉は続かなかった。滑稽なほどに声が震えていて、自分の無様さに呆れ果てる。あんなにも夢みた再会の瞬間だというのに……。けれども眼差しだけはもう決して見失わないようにと、その深緑の瞳を至近距離で絡め取る。次の瞬間、カルロの長い腕が覆い被さってきた。求め合い満たされる意味をやっと知った瞬間。その感触を深く味わう為に固く瞼を閉じる。

ひと時の後、薄く瞳を開くと、切羽詰った瞳が目の前にあった。彼らしくもない余裕の無さに、愛おしさが募る。訪ねてくれて嬉し

いのだと、素直に囁けばよいものを……つい、強がりをお口にしてみよう。

「男爵様がおっしゃってありました。カルロ様はヴェネチアでしか生きられない男だと。もう、故郷の女が恋しくなりましたの？」

「なにを……失敬な」

カルロの腕が躊躇うようにゆるむ。その隙について、背中に絡めていた腕をすりと首へと流し引き寄せた。甘くて柔らかい口付けを贈る。カルロは身をかがめて素直にそれを受けた。その温もりから離れ難く、カルロのおでこに頬を押し当てていると、落ち着きなく揺れる彼の睫毛が柔らかく皮膚をくすぐる。

「……昔、死のうと思つた事がありましたの」

カルロの髪に指を絡め、鼻先をこめかみに埋めながら掠れた声で呟いてみる。ピクリと彼の体が、一瞬強張るのがわかった。周囲が薄闇に包まれていく。西の空に月の女神が、銀の船を浮かべるであろう夜の足跡が近づいてくる。月明かりの中、ただ素直に身を任せてしまいたい。

「今宵のために生き延びてまいりました。戯言だと笑ってください結構ですわ」

カルロの手が頬に伸びてきた。触れ合う何もかもが痺れるような熱を伝えてくる。

「こうしているだけで……気が狂いそうだ」

カルロの溜息のような告白が、鼓膜を甘美に震わせる。熱い吐息に骨の髄まで侵されていく心地良さ。

主よ、己の不幸に目を奪われ、神を敬う心を見失つた私をお見捨てにならなかったというのですか。絶望のあるところに希望を。闇のあるところに光を。こんな私にも神のお導きで、愛する喜びを与えてくださるのですか。

懺悔いたします。全ての罪を。悔い改めます、己の弱さを。だから奪わないで。……奪わないで。

永遠の愛（カルロ）

母の面影は片鱗すら記憶にはない。身体のあまり丈夫ではなかった母にとつて、出産はまさに命を分け与える行為だった。母子共に助からないと医者も匙を投げた難産の末、神は奇跡の思し召しを下さったのだと父は語った。

抱かれた感触も、呼びかけられる声色も知らない。私にとって母はいつだって、叔父上が描いたキャンバスの中で静かに微笑んでいるだけの存在。だから、こんな遙かな時を経て今更、母上からの伝言があるなどと言われたところで……。

「何の話です唐突に……私が今話をしているのは、何故こんな嘘までついて呼び戻したりしたのかと叔父上に問うているのです」

「だから、今その理由を話したはずだ。マリアの……お前の母からの伝言を伝えるためにだな」

“バルゾ男爵が病の床についておられます。すぐにヴェネチアへお戻りを。手遅れにならぬよう直ぐに”

辿り着いた港を後に逆戻りし、慌てて駆けつけたというのに……病の欠片すら見当たりはしない。よく考えれば、このお方が床に伏せつつている姿など、今だかつて無かったのだ。いや、だからこそ余程の事と、胆を冷やして出戻ったというのに。一体これは何の冗談だ？ しかも、怒りが押さええきれず問い詰めてみれば、今度は母の伝言などと……病は脳を蝕んでいても言うのだからうか。

叔父上は、ことりと小さな音を立てて小箱をテーブルの上に置いた。錫製の小さな箱の蓋には、男爵家の紋章である蜂が掘り込まれている。

「マリアから受け取ったその日から一度も、この箱を開けたことは無い。二十年も歳月が経ったとは……本当にお前にこれを渡す時が来たとは嘘のようだ」

全く予測がつかない。小さな蓋にずっしりと重みを感じるのは気

のせいか。中に入っていたものの、それは女物のリングだった。見事なシードパール（芥子真珠^{ケシ}）が零れるように連なっている。花びらのように連なった小指の先ほどの上質な真珠は、時にしてダイヤよりも貴重と賞賛される逸品。しばし、その優雅さに目を奪われ魅入ってしまった。

「マリアの形見だ。時が来たらカルロ、お前に渡してくれと死の淵にいるマリアから預かっていた」

「……時が来たら？」

「本気で愛する女性が現われたら、その想いを伝える時に愛の証しとして捧げるようにと」

ドクリと胸が鳴る。いるはずの無い母上が、どこかで心の内を見透かしているのかと。

「モニカがお前の帰りを待っているぞ」

「そんな訳が……」

「全くお前はわかっていているようで、肝心な女心の内は読み取る術を持たないらしい」

ちゃぶりちゃぶり。気持が浮き立つと、ゴンドラが立てる水音も心地良く響くとは思議なものだ。待っているなどと叔父上は言ったが、疑心暗鬼でモニカの住まいを訪ねた。バルコニーに姿が見えた時には、高鳴る胸が堪えきれず、つい視線を外してしまったのだ……。船着場に着くなり、階段を駆け下り、出迎えてくれているとは驚かされた。

この手に飛び込んできた身体を受け止めた時、夢を見ているのかと思った。力を込めたらするりと飛び立ってしまいそうな気がして戸惑ってしまった。けれども真っ直ぐに見詰めてくるその視線に囚われた時、決して離すまいとかき抱いてしまった。

カルロ、カルロ……。小さく求められるように囁かれ、口付けられ……身体の内底から湧き上がる熱に体が溶かされてしまう感覚。

「こうしているだけで……気が狂いそうだ」

モニカの頬に添えた手の平に、そつと彼女の指が重なる。父上から贈られた指輪を、母が受け取った時にはどんな時間が流れたのだろうか。

ちゃぷり、ちゃぷり。二人で並んでゴンドラに揺られるのはいつぶりだろう。爪先のような三日月が、控えめに夜空を照らしてる。

「アトリエに避難するほどに病気は蔓延しているのかしら？」

「ヴェネチアの中心地は人が群れすぎている。気休めでも安全の為人のいないヴィツラでしばらく過ごした方がいいと、叔父上が言ってきたのだ。なんでも、昼間訪ねてきた客人がペストを発症させていて、気付いた小間使いが門前払いしたらしい」

「男爵様のお知り合いが？……どなたですの？」

「いや、誰とは決して口にしないのだが」

「では、男爵様も今夜からアトリエのヴィツラにお越しになるのかしら」

「いや、叔父上はもうひとつ所有しているヴィツラに家族と共に移るらしい。あの母上の絵ばかり飾ってあるアトリエに、本妻を連れて行くのはさすがにばつが悪いというものだ」

「あら、男爵様も奥方様には細やかなお気遣いをなさるのね」

「……アトリエのヴィツラは叔父上の聖域なのだ。あの人は一生あそこに囚われて生きて行くのだろう」

ちゃぷり、ちゃぷり。胸元に忍ばせた小箱がゴンドラと共に揺れる。父上を、叔父上を通してしか母の存在を垣間見る事が出来なかった。だから、母にとつて自分の存在も、真っ直ぐに向けられる事など無いのだと思い込んでいた。妻として女として、父との愛を成就させる為に命をかけて子を産み落としたのだと……。母は自分の死期を悟っていたのだろうか。母を失って生きて行く幼子の運命を案じていたというのか。

“本気で愛する女性が現われたら、その想いを伝える時に愛の証しとして捧げるように”

父を通しての存在ではなく、私自身、愛されていた？　コルティ

ジャーナだった母への想いを時として、憎しみにさえ変えていた己の心の歪み。なんと浅ましい。こんなに時間を経て触れた母の思いやりに、込み上げてくる切なさを噛み締める。

狭い水路を通り過ぎ、開けた運河に差し掛かる。月が水面に映った姿から、柔らかな輝きを漂わせている。

「海よ、ヴェネチアは汝と結婚せり……」

ポツリとそう口にする、モニカはそっとより添ってきた。

「海との結婚の式典で、ドージェ（総督）が唱える誓いね。海に投げ入れる金の指輪：水と契りを交わしたこの都らしいロマンティックな祭典だわ」

さりげなく、モニカの肩を温めるように拳で包む。頬に触れる彼女の柔らかな髪。腕に絡む細い指の感触。

愛なんて、滑稽な物語だと思っていた。母に囚われている父上や叔父上の人生をこんな身近に感じながらも、どこか覚めた目で傍観している自分がいた。けれども今、魂を揺さぶられる女を目の前にし、その切なさが愛しさが……こんなにも理性を奪うものだと思えられる。

モニカの瞳に囚われ溺れていく心地良さ。抗う事を諦め、漂う想いに身を任せれば、心を満たすのはただひたすらに甘美な幸福感。小さく息を吸い込むと、瞼を閉じてしばし己の心と向き合う。胸元に忍ばせた小箱が、コツコツと音を立てているような気がした。いや、これは自分の鼓動の音か……。自嘲するような笑いが込み上げる。それを喉の奥でそっと押し殺した。もう、お手上げなのだ。体裁も男の沽券もかなぐり捨ててしまおう。

「モニカ……」

席を立ち彼女の足元に跪く。突然の身のこなしにモニカは、少し戸惑った眼差しを投げてきた。じんわりと。身体の内底から汗が滲み出てくる。彼女にとって、こんな事は日常なのかもしれない。ありきたりの取り巻きの一人に成り下がる行為なのかもしれない。いや、何も考えるまい。今、必要なのは、ただ素直になることだ。

「貴女だけを愛すると誓おう。生涯、私だけのコルティジャーナになつて欲しい」

胸元の小箱からリングをそつと取り出し、モニカの指に滑り込ませる。新しい主の手に飾られ、真珠の粒は月の光を糧に輝き始める。モニカは、じつとうつ向いてそれを眺めた。まるで真珠を初めて目にするかのように……不思議なものを眺めるかのごとく。モニカはそつとリングを撫でた。

「何という純白……私などの指に飾つては汚れてしまう気がいたします。コルティジャーナは真珠で装う事を禁じられているのをご存じかしら」

「耳にしたことはあるが、誰も気に留めない建前だ。コルティジャーナが真珠を買わなければベネチアの宝石商は傾いてしまう」

そうねと、モニカは小さく笑つてみせた

「母の形見なのだ」

「お母様の……」

「母もコルティジャーナだった」

「……ええ、美しいお母様ね」

モニカの真珠で彩られた指がそつと伸びてくる。くしゃり。髪を優しく梳かれ、その心地よい感触に、不覚にも小さな溜息が溢れる。「私の事などまだ大してご存知無いはず……だというのに、このように大切な物を贈られるだなんて、随分と性急な事をされるのね」……後悔なさつてよ……そうモニカは呟くと、頭ひとつ高い位置から挑戦的に此方を見下ろしてきた。怒りにも似た光が宿る瞳に打ち抜かれ、今与えられた甘い温もりに冷水を浴びせられた気分にはさせられる。飴と鞭。すっかりと自分はこの女の手中で、弄ばれているのかもしれない。

けれども、モニカが問いただしてくる事実は確かに的を得ているのだ。生涯の愛を誓う程に、お互いを知り尽くしている訳ではない。寝顔を知っていても、まだ一度も肌すら合わせた事がないのだから理由なんて無い。今この瞬間に渡さなければならぬのだと、本能

がそう囁いた。

「後悔などするはずも無い。何故なら今までもこれから先も、これほど魂を爪弾く女に巡り合うことは無いからだ」

「……思い込みですわ」

「幸福な思い込みだ」

迷いなど微塵も匂わせず、きつぱりと言い放つ。ふっとモニカの攻め立てるような瞳の色が消え失せた。くしゃりと口元を歪めると彼女の目から、涙がこぼれるのが見えた。ガーネットの瞳は溶け出したかのように、次から次へときらめく涙を生み落とていく。モニカの両手に頭を包み込まれる。小刻みに震え、嗚咽を噛み殺す愛しい女の吐息が髪に降り積もる。

「ほら……ね、心と裏腹な強がりばかり口にする可愛げのない女ですのよ」

モニカの体から、とくとくと早く脈打つ鼓動が伝わってくる。

「幸せに慣れていないから、拒む癖がありますの。素直じゃなくつてよ」

「それはよく存じている」

「……嫌味な方ね」

拗ねたような声色。頬を濡らした涙を、モニカは手のひらでさりげなく拭い去っている。気高い彼女が垣間見せる女の脆さに足元をすくわれる。愛しくて、愛しくて。

「ずっと私を捕らえていて。ずっと、よ」

「月の女神に誓おう、永遠の愛を手に入れた月の女神にだ」

髪に顔を埋めていたモニカがそっと首を傾ける。夢げに浮かぶ細い月を眺めているのだろう。

「私もあの三日月に誓いましょう、生涯、貴方だけのコルティジャーナに……」

弾けるように顔を上げ、二人の視線を絡める。額が合わさる程の距離で、お互いの意思を沈黙のままに再び確かめ合う。どちらからともなく、吸い寄せられるよう唇を重ねれば、胸の奥の欲情がざわ

りと音を立てた。

ゴンドラが船着き場に滑り込む。浮き立つ気分で地に足を着けた。初めてモニカと訪れた時のように、ヴィッラは静まり返り人気は無い。絵を描き終えたので召使いには暇を出していると、叔父上は言っていた。明日には誰かを遣わせるから、今宵一晩は我慢しろと。その方がいい。モニカと二人きり誰の目にも触れず、ただひたすらに愛し合う夜を過ごそう。指を絡め、ヴィッラの扉を開き、もどかしい口付けを交わしながら危なげな足取りで螺旋階段を登る。

「カル口様、まだ出来上がった絵を見ていらっしやらないでしょう」直ぐにでも寝室になだれ込みたい男の欲情に、モニカは焦らすような提案を差し出してくる。

「ここに来たなら、先にご覧にならないと駄目」

ひらり、ひらりと、からかうように、この手を擦り抜ける美しい蝶。艶やかな羽模様をちらつかせ、追いかける者の心を昂ぶらせる。モニカは繰り返す接吻で誘いながら、やがて三階にあるアトリエの扉にまで導いた。

ぎいっ。静まり返った館に扉を開く音が響き渡る。そつと中に忍び込み、ランプの明かりで室内を照らし出す。……なんだ？ 違和感を感じた。ほのかな光で照らされる、室内の澱んだ雰囲気。ひらりと、揺らめくものが見える。ベッドを覆う天蓋が風に煽られはためいていた。小間使いが窓をひとつ閉め忘れたのか、バルコニーに抜ける扉がひとつ開け放たれたままになっていた。

「カル口、……絵が。私の絵が……」

モニカの指差す方には叔父上の机があった。画材が並べられた叔父上のいつもの机。その脇に置かれたイーゼルには、キャンバスがひとつ置き去りにされたままになっている。ゆつくりとそこに歩み寄る。信じられない状況に血の気が失せていく感覚。横たわった女が描かれているのは見て取れた。だが、一体これはどういう事だ？ 頬杖をつく腕に乗せられた筈の顔が……無残にも切り刻まれていた。鋭利なナイフで何度も何度も突き刺されたような痕跡。

冷たい汗が流れるのがわかった。壁際の燭台に火を灯す。そしてテーブルの上に注意深くランプを置いた。壁にかけられた母上の絵が、灯りに照らさればんやりと浮かび上がる。どれも損傷をうかがわせるものは無いかに見えた。ただひとつの絵画を除いては……。等身大の見慣れたはずの絵。そこに違う女が描かれていた。母の黄金色の髪が、黒く塗りつぶされている……そして毒々しいほどに赤い唇……。

いや、違う。これは……。これは……。絵の女が、ゆっくりと口の端を持ち上げ、妖しいまでに薄く笑う様が見てとれた。絵ではない……。背筋が凍りつく。隣に立つモニカを、手でうしろに押しのける。ガタンッ！ 黒い影が目にも止まらぬ速さで襲い掛かってきた。一步身を引き、目の前をかすめる刃から逃れた……。つもりでいたのに、逃げ遅れた右足にざっくりと痛みが走る。太股が、焦げ付くように熱い。身体を支えきれず、ぐらりと床に膝をつく。

「カルロっ」

背後からモニカが飛び出そうとするのを両手を広げて制する。次に襲われたら……。けれども、黒い影は、こつこつと靴音を立てて離れていき、イーゼルの脇でこちらを振り返った。

「そなた……アン……ナ？」

叔父上の長年の愛妾、アンナだった。いや、何かがおかしい。何かが違う。じつと招かざる客人の姿を凝視する。いつもと変わらぬ闇色の艶やかな髪と瞳、琥珀色の抜けるように白い肌……。ぞくり悪寒が走った。喪服のごとく闇にまぎれる黒いドレス。そこから覗く肌には、目を覆いたくなるような青黒い斑点が無数に浮かび上がっていたのだ。手に握られた短剣はちらちらと妖しい光を放っている。

「お久しぶりですわね、男爵様。随分と足が遠のかれていますと思ったら、こんなヴィッラに籠っていらっしやたのですか」

「何を言っておられる、叔父上は今ここには居ない」

アンナは鼻先で笑ってみせた。

「男爵様、何をおっしゃいます戯言を。貴方様は今、私の目の前にいらつしやるではないですか」

まっすぐにこちらを見据えてくるものの、その瞳には狂気が滲んでいた。

「お会いしたかった……つれない方。今日は意を決して本宅をお尋ねしましたのに、失礼な召使いに邪魔をされましたの」

アンナ……アンナだったのだ。召使いが門前払いをしたという客人は。ペスト……黒死病という厄疫を携えて訪れたのはこの女だったというのか。病が蝕んでいるのは身体だけではないらしい。演技をしている様子は伺えない。この私を叔父上と思いついていてとは。「決して……一度たりとも私をこのアトリエに呼んでくれたことなど無かったというのに……」

ダンッ！ おもむろに机の上に置かれたペインティングナイフを掴むと、アンナはイーゼルに立てかけられたキャンバスにそれを突き立ててみせた。再びアンナはコツコツと部屋を歩き回る。そして興味深そうに、壁に飾られた母の絵画に視線を走らせた。

「知っておりますわ。この方がヴェネチアの紫の薔薇……そう呼ばれた男爵さまの想い人。でも、私この方へは何も感じませんの。だって、私達が出会うよりずっと前の出来事ですもの。しかも彼女は兄様を愛された。人は誰でも儚い恋心を愛でるものです。どうして今更この方に怒りを向けましょう……それくらいの器量は持ち合わせておりますのよ」

くるりと、アンナはこちらを振り返る。異様に見開かれた瞳、上ずった声色、死神に見初められた女は妖気に包まれている。

「もう二度と人物を描かなかった貴方が、何故ですの、こんな……こんな女につ。私を追い払い、今宵もここで二人、過ごすおつもりだったのですか？ お恨みします男爵様、あまりの仕打ちでございますわ。お戯れが過ぎましてよ、さあ、私と共にいつもの部屋に帰りましょう」

アンナが手を差し伸ばしてくる。気休めでもその手を取り、意の

まま共にこのヴィツラを抜け出れば、モニカだけでも助けられる気がした。目の前に差し出されたアンナの手は、指先までも病の痕跡が蝕んでいる。歩けるだろうか……その手を支えに立ち上がるうと、こちらも腕を伸ばした時だった。目の前にモニカが立ち塞がった。

「汚らしい女ね、そんな手で私の大切なお方に触らないで頂戴」

やめろ……そう諭そうとしたのに……

バシッ！ 乾いた音を立て、モニカはアンナの頬を張り倒した。ガタタタッガタンツツ！ 激しく二人は掴みかかった。髪を掴み、頬を叩き合い、男同士の争いごとなど足元にも及ばない激しさで。アンナの手からいつの間にか短剣消え失せていた。床に転がったのだ。薄暗い床に必死で視線を走らせる。

「お前が奪ったんだっ！ 人の客に手を出しやがって畜生っ」

髪を振り乱し、汚い言葉で罵るアンナの形相には、いつもの優雅さなど微塵も消え失せていた。ドンッ！ 二人の身体が弾け合い、よろよろと女同士は距離をあけた。

「疫病に侵された娼婦など、抱く男がどこにいるの？ ましてや、妻が住む本宅に押しかけるなど……身の程をわきまえなさいな。所詮……ひと時の気紛れに愛された……コルティジャーナだという事よ」
モニカの背中が荒い息に上下している。背後からは彼女がどんな表情なのか、窺い知る事が出来ない。

「多くを望みすぎて……神の怒りに触れたのよ……貴女も私も……」
神の怒り？ 何を言っている、モニカは今宵、月の女神の祝福を受けているのだ。神の怒りなど降りかかる訳も無かるうに。

「男爵様は貴女に目をかけて、長い歳月大切に愛でて……下さったのでしょうか？」

息が上がっているのか、モニカは喘ぐよう途切れ途切れに言葉を綴る。だが声色は駄々をこねた子供に語りかけるよう、優しいものに変わっていた。

「これ以上あのお方を困らせる……つもり？ 今ならまだ……病に儚く消えた愛妾のまま男爵様の……心に残ってよ」

二人の成り行きをモニカの背後からじつと見守る。凶器を持たぬアンナの扱いは、モニカの方が長けている気がした。

「もう、あがらわずに……現実を見るの。ほら……あなたの後ろにある……鏡を覗いて御覧なさいな」

びくりと肩を震わせ、アンナは恐る恐る振り返った。彼女の背後には。姿見の鏡が壁に立て掛けられていた。

「っ……ひっい……っ」

悲鳴ともつめきともつかない声を上げ、アンナは顔を両手で覆い隠す。がくがくと身体中を震わせ、定まらない眼差しを窓の外に向ける。

「……男爵様、男爵様。今宵の舞踏会は青いドレスがよろしいでしょうか」

アンナがうわ言のよう口にしながら、ゆっくりと途方に暮れた眼差しを流してくる。

「……そうだな」

いたたまれない気持ちで、相槌を打ってやる。何故応えてやったのかなど、自分でもよくわからないのだが。アンナは嬉しそうにはしゃいでみせた。

「ふふっ、男爵様は青がお好きね。では私直ぐに着替えて参りますわ。直ぐ……直ぐですわ。だからそこでお待ちになつて……」

ふらふらと、アンナはバルコニーに向かつて歩き出した。途中、一度振り返り、少女のようあどけなく微笑んでみせた。冷淡な雰囲気さをさらに纏う女がこんな顔をするとは。いや、叔父上と二人きりの時にだけのぞかせていた、アンナの知られざる一面なのかもしれない。アンナは何のためらいもなくバルコニーの柵に手をかけると、その上に登り立ち上がった。

「何を……」

止めると口にしようとして、その言葉を飲み込む。この病の壮絶な終焉を思えば胸が詰まった。ドレスの裾をなびかせ、アンナの後ろ姿がぐらりと傾いたかと思うと、頭から飛び込むよう暗闇に落ち

ていくのが見えた。ドスンと、鈍い音が階下より響き渡る。結末を見届ける必要もあるまい。しんとした静寂が全てを物語っているのだから。

「憐れなこと……」

モニカはひと言溢すと、部屋の隅に置かれたカナペ（カウチ）に向かつて歩き始めた。その足取りの不自然さに違和感を感じる。ドサリッ。なだれ込むよう、モニカがそこに腰を降ろす。

……ドクンッ……信じられない。

……ドクンッ……これは悪い夢だと、誰か私を揺り起こしてくれ。

モニカの胸に食い込んでいるもの、それは床に転がったのだと思いついていたアンナの短剣だった。

「モ……ニカッ」

床を這い、彼女の元に向かう。その様子を蒼白な顔で、彼女は放心したままに眺めている。足元に辿り着き、横になるようモニカに命じて祈るような気持で傷口を確認する。傷の深さと突き刺さった場所をみれば、絶望的な状況である事が思い知らされる。深々と埋もれるこの剣を引き抜いたならば、溢れるほどの出血が始まり、あつという間に死に至るであろう。それでもじわりじわりと、薄紫のドレスには血の花模様が刻まれていく。現実とは受け入れ難い。ほんの少し前、永遠を誓い合った命が消えかけているだなんて。

「私の絵……酷いわ。……だから嫉妬深い女は……苦手なのよ」

この異常な状況の中、まるで日常のような会話をモニカは投げかけてくる。

「カルロ……これでああなたの足を止血して、ちゃんと……固く縛らなければ駄目」

するとモニカは髪に飾られていたレースの紐を引き抜き手渡してくる。

血……血……血……。止めなければならぬのは貴女ではないか。

なんて自分は非力なのだろう。胸を痛めている刃ひとつ取除いてやる事が出来ないだなんて。

モニカはじつとこちらを見ている。その視線に促され、お望みのままに足の傷口を縛り上げてみせる。安心したようにモニカはカナペにもたれた。額にそつと手を伸ばし触れると、ぐっしりとした汗が指先を濡らす。

「心を奪われた男と……抱き合うのってどんな気分なのかしら……。ふふ、可笑しいわね。星の数ほど男となんて寝てきたのに……私、馬鹿だったわ。知らないまま終るなんて……」

跪き、モニカの顔を真上から見下ろす。顔に張り付いた髪を、そつと摘み上げて整えてあげる。

「嘘みたい……私達、まだ一度も愛し合ってなかったわね。ほら、あの夜に戻れたら……そう、初めてこのヴィッラを訪れたあの夜……よ。私、こんな私……誰かを愛したりしたら、汚してしまう……大事な人を。怖かったの……怖かった……」

モニカはそつと口付けてきた。その唇の冷たさに、我に返る。この手にモニカが堕ちてきた高揚感。そして味わう間もなく失う恐怖の狭間で、奈落の絶望を噛み締める。

何が起きた？ どうしてこんな事になった？

「カルロ、愛してる……馬鹿ね今ごろ……でも……愛してるわ」

神など信じるものか。愛という名の夢を与えては、無情に剥ぎ取る神なんぞ。腕の中で命尽きようとしている女は誰だ？ だから、こんな女に関わりたくなど無かったのだ。私の心を鷲掴みにしたまま、何処に行こうとしている？

「泣かないで……カルロ……私の為に泣いたりしては……駄目」

突き上げてくる慟哭を堪える事など出来なかった。この身を持って知っている。死というものの意味を。失った時よりもそれは、長い年月をかけて虚無感を積もらせていくもの。温もりも感触も声色も……二度と与えられない現実。全てが風のごとく無になる。気が遠くなる程に果てしない、永遠の無にだ。

モニカが小さく喘ぐ。打ち上げられた魚のように苦しげに。寒い……小さく呟いて、すぐるように寄り添ってくる。冷たくなっている身体を、抱きながら、その華奢な肩をさすってやる事しか出来ない。子供のように泣きじゃくりながら、すぐるような祈りを繰り返す。

奪わないでくれ、奪わないでくれ。この望みが叶うのならば、悪魔にでも跪こう。

「力……ルロ」

吐息のような呼びかけに胸が詰まる。モニカは己の指に輝く真珠にそっと口付けると、甘えるようにその手を差し出してきた。純白の真珠は飛び散った血で染まっていた。両手で温めるように包み込み、何度も何度も祈りを込めてリングに口付ける。

「きつと……また……巡り会っわ。永遠の愛を……誓ったのですもの」

置いていくな。行くな……逝くな。

哀しみ、苦しみ、絶望。闇だ。一筋の光も与えられない、真っ暗な闇。

堕ちていく……堕ちていく……。口を広げた底の見えない奈落にゆっくりと呑み込まれていく。

ガシャンッ！　びくりと身体が跳ね上がる。唐突な目覚めに振り上げた手が、ベッドサイドテーブルに置いてあったウイスキーのグラスを払いのけたようだ。割れはしなかったものの、テーブルの上で横たわるグラスより零れた滴が、濃厚なアルコールの匂いを漂わせている。

夢……？ 夢を見ていたのか、この俺が夢を……。長い夢だった気がする、記憶を辿ろうと自分の額に手を添えると、髪を濡らすほどの寝汗にまみれていた。とんだ様だ……。

天井で回るファンが、窓から入る潮風を優しくかき混ぜている。ギシッ。スプリングの音を軋ませ、上半身起こしたところで、俺は信じられない光景を目のあたりにする事となる。

何故、お前がそこに居る？ 白いバスローブを羽織ったまま、身体を丸めて眠る女の背中があつた。こんな至近距離に近づかれ、この俺が気付かないまま眠り呆けているなど……ありえない。一体どうしたというのだ。寝酒に煽ったウィスキーに何か仕込まれていたとでもうのか。いや、それとも……まさか……この女、何も出来ない振りをして、実は特殊な訓練を受けたテロリストだったりするのではないだろうか。

身構えた体勢で、そつと背中を向けた顔を覗き見る。子供のようにあどけなく唇を尖らせて眠る、女の寝顔があつた。じつと、その様子を眺める。彼女のバスローブの紐は、結び目がないまま、ただぐるりと巻かれ、だらしなく緩まりその機能をはたしていない。大きくはだけた胸元。

ドクンッ。音が聞こえるほどに胸が跳ね上がる。どうして、どうして、どうして……。淡い照明に浮かぶ白い肌。豊かに膨らんだ女の胸。その少し上中央に小さな痣が見て取れた。身体が震えた。あれは……あれは……。一瞬にして波のように押し寄せる夢の記憶の渦。

ただの夢な筈だ、睡眠中に知覚現象を通して現実ではない仮想的な体験を体感する……。夢。羽を広げた小さな蝶。そうだ、先程バスルームで彼女の脇を擦り抜ける時に、垣間見えたではないか。その記憶が勝手に複雑な夢を組み立てたのだ。自分自身にそう言い聞かせながらも、確かめずにいられない。どうしても、どうしてもだ。触れないよう、その身体を乗り越え彼女の向かいに横たわる。バスローブの襟に手を伸ばし、そつと肩までだけさせた。……馬鹿

だ、何を安堵している。こんな自分らしくも無い……。露にされた胸に、傷など見当たらなかった。滑らかな肌、柔らかく膨らんだ女の乳房。血の痕跡などどこにも見当たりはしない。心底胸を撫で下ろし、込み上げてくる嗚咽を喉元で押し殺す。

「う……ん」

女は眉間に皺を寄せると、ゆつくりと丸めていた足を伸ばしてみせた。今、目が覚めたら、この失態を知られてしまうかもしれない息を潜めて女の様子を伺う。もそもそと、動いていた指先がシーツの上を探るように滑ってくる。ふと、指先が触れる感触がしたかと思ったら……。ぐいつと腕を掴まれ引き寄せられた。女の顔が鼻先に触れるような距離。目の前の唇がゆつくりと動く様が見て取れた。

言葉を彼女は綴らなかつた。ただ唇だけを動かし、そして小さな寝息を再び立てた。ぎゅっと、背中に回された女の指に力が込められる。もう離さないのだと誇示すかのように……。

暖かい女の温もりに包まれ、心音までもが触れる肌から伝わってくる。さっき目にした唇の動きを、頭の中で何度も何度も繰り返し読む。読唇法……。俺は唇の動きで全てを読み取る訓練を受けていた。

「リコ……何故その名を知っている？」

小さな声で、彼女の耳元に囁いてみる。何も答えず彼女は素知らぬ振りで眠り続ける。堪えきれず、もう一度声を掛ける。

「リコ……コードNO・38569268・RICO、何故その名を知っている？」

さつき確かに彼女は吐息と共に、こう口にしたのだ。声には出さずに……。唇の動きだけで。

“カルロ…カルロ”

【つつく】

スコール（リコ）

瞼から柔らかい光が透けている。暖かくて、ふんわりとした、目覚めを誘う光。初めてだ。こんなゆったりとした気分で瞼を開けるのは……。

コードナンバーを読み上げる無機質な音声はここに存在しない。自分で目覚める心地よさを再び瞼を閉じて味わってみる。背中にかつて触れた事のない不思議な温もりを感じた。腰に回された腕の感触。

そつと体をよじり、温もりの主と向かい合ってみる。

名前……ナマエ、聞いていない。キーパー（番人）にもギア（歯車）のようなコードナンバーはあるのだろうか。腕、あたしのと全然違う。太くて……力がいっぱいあっていそうな逞しい腕。

くんつ、鼻がひくひく反応する。彼の髪からなんともいえない良い香りが漂ってくる。くんつ。くんつ。あ、バスに浮いていたフワフワの泡。あれと同じ。あの匂い、ずつと身体に残るんだ。寝転んだまま、自分の髪を一束つまみ、鼻に寄せてみる。くんつ。くんつ。あ、あたしもその匂いがするよ。素敵、素敵。

「随分とご機嫌なお目覚めだな」

はつと視線を向けると、直ぐそばに開いた瞳があった。あれ、もしかして眠っていなかった？ 眠気など、微塵も匂わせない、眼差しに囚われる。

「……あたし、知らないわ」

「何をだ」

「あなたの名前」

「別に知る必要もあるまい」

素っ気なく言い放つと、彼はベッドから床に足を伸ばした。

「でも……じゃあ、あたしが勝手につけた名前で呼んでもいい？」

えつとね……。怪訝そうな顔で彼はこちらを眺めている。お尻が柔

らくく埋もれる感触を味わいながらベッドに座り、あれこれと頭を捻らせる。

「ピカソっ」

昨日、そういう名前の魚を覚えてくれた人だから。目の前の彼は何の反応も示さない。だが：あまりお気に召した様子ではなさそうだ。

「ゴッホ、ドガ、シャガール……」

知る限りの名前を並べてみる。彼の眉間に皺が一本刻まれたのは気のせいだろうか。

「力……」

その名を口にしようとしたら、ピクリと、彼の肩が震えた。戸惑いの色が浮かんだ瞳にじっと見つめられる。息を潜めてあたしの言葉の続きを待っているのが分かった。だから、お望みの名がある事を期待しながら、再び思い付くままに名前を綴り始める。

「カシニョール、モディリアーニ、ルノワール……クリムト、ムンク、シャガール」

「……いい加減にしろ」

呆れた溜め息を添えて、彼はまだまだ続く名前の羅列を遮った。

「俺は画家じゃない」

だって、ほとんど他人と接触がないから、他の名前なんて知らないもの。メールフレンドのエリーは女の子の名前だし。

「レオンだ」

「れ……おん」

初めて耳にする響き。レオン。レオン。繰り返し小さく口ずさんでみる。名前を知っただけで、ずっと距離が縮まった気分。

「見て、レオン。どの窓からも海が見えるよ」

朝の太陽を吸い込んで、キラキラ光っている。なんて眩しいのだろう。ウフの窓から遠くに見える太陽とは違う。空を青く、雲を白く、島を取り囲む草花を艶やかに染め上げる光の渦。なんて美しいのだろう。昨日と変わらない、胸を揺さぶるブルーが視界に覆い被

さつてくる。こんな場所にいる事を不思議に思う。そして同じものを眺め、語りかける相手がいる事の喜び。生まれたての朝を味わいに、今日も裸足で飛び出そう。

ほら、綺麗だね。ねえ、風が気持ちいいよ。レオン……レオン……。名を呼び掛ければ、不思議な安堵感が満ちてくる。しかめっ面をされたって、怖くない。だって、ここに二人きりでいる事が、何故か不思議な程に心を穏やかに満たしてくれるから。不思議だね。不思議、不思議……。

「今朝は何故、俺のコテージで寝ていた」

カフェのテーブルに朝食のお皿を置くと、レオンは尋ねてきた。答えようと思うのだが、初めて目にする不思議な食べ物に視線は釘付になってしまう。

「えっと……」

「サンドイッチだ。パンにハムやチーズ、野菜を挟んで食べる」

パン……は食べた事がある。野菜も細かく刻まれスープに浮いたものなら口にした事がある。でも、普段は固形の栄養キューブがほとんど。こんな食べ物を見た事も無い。サンド……イッチ？ 恐る恐るパンとパンの間に挟まっている物体を覗き見る。この黄色いの……それに平べったいピンクの薄いもの、なあに？

「見てろ、こうやって食べるんだ」

挟んだ具を落さないよう、両手でしっかりとパンを押さえ、パクリとレオンは齧ってみせた。クスクス。やだ、思わず笑いが零れる。何だ？ と言いたげな顔を向けられる。

「だって、……大きな口」

「こうやって食べる物なんだ」

こうやって？ レオンの真似をして、サンドイッチを持ち上げる。これくらい？ 口をあけて彼にサイズを確認する。すると、レオンはもう少しと、指の形でジェスチャーしてみせた。

このくらい？ 顎がもちそうにないので、口を閉じるついでにパクリとかじってみる。しゃりしゃりと心地よい葉っぱの食感。ふわ

りと鼻孔をくすぐる濃厚な薫り。初めて口にする味覚が、パンの柔らかさと共に喉元を通り過ぎていく。もっと食べてみたいという欲求に駆られる。

いつもは、小さな栄養キューブひとつ口に放り込めば、食事など終わるというのに。今、食べたサンドイッチは飲み込むことさえ名残惜しいと思えた。昨日だって……パス……タという不思議な食べ物を食べさせられた。長い、びっくりするくらいに。つるつるって食べるの。他にも見た事がないものばかり。

「キーパーはいつもこれ食べてるの？」

「いや、同じ栄養キューブだ。体験としてこういう食べ物を口にした事はあるというだけだ」

「他にはどんな物が？」

「ここにいる間は、キューブでは無い食事でありつけるようだから、自ら味わえばいい。食物庫に食べきれない程の食材が備蓄されているからな。ボタンひとつで暖かくて調理される。そんな事より最初の質問に答える。何故、俺のコテージで眠っていた」

何故って……。もう一口齧りつきたいけれど、そんなにじっと見られていたら、大きな口をあけるのが恥ずかしい気がする。昨日、勝手に彼のコテージに行った事を怒っているのだろうか。だって、だってね。

「……夢を見たの」

ああ、やっぱり怒っているみたいだ。レオンの顔が険しくなった。「どんな……どんな夢だ？」

どんな？ 続きを話そうとしたその時だった。ふわり。風に乗った何かが、視界の端を漂い横切るのが見えた。

「あつ、見てっ」

ふわり、ふわり。花びらにも似た不思議な生き物が、あたしのワンピースの胸元に舞い降りてきた。

「……蝶だ。お前のワンピースの花を、本物と間違えて飛んできたようだ」

「ちょう？」

見た事がある気がした。誰の絵画だったか……すぐには思い出せないけれど。飛ぶんだ。こんな小さな羽で？　すごい、すごい。それになんて複雑な色彩を身体に纏っているのだろう。描いてみたいと思わされる。

ふわり。

「……あつ、待ってっ」

飛びたった蝶を立ち上がり追いかける。本当に綺麗。この島に似つかわしい住人ではないか。しばらく追いかけると、生い茂った葉の間から顔を覗かせる大輪の花にとまった。パタパタと、からかうように羽を揺らしている。急に走ったので、息が上がる。何度か深く空気を吸い込み呼吸を整えようと試みる。そして、レオンに教えてあげようと後ろを振り返ると……。彼はそこに居た。物音ひとつ、呼吸ひとつ乱さず、振り返った視界を遮る程の至近距離に立っていた。がっしりと、大きな手に両手首を捕らわれる。

「きゃっ」

驚き思わず声をあげてしまう。

「答える、どんな夢を見た？」

キーパーの眼差し。私達、ギアを管理し、全てを知り尽くす選ばれし者の瞳。

「……目が覚めると忘れちゃうの」

夢は毎晩見る。いつも、いつもだ。

「それでね、探すの……夢に出てきたはずの誰かを」

手、熱い。レオンの手がじつとりと熱を帯びている。

「いつもはカプセルの中で目覚めて、探しようにも一人きりでしょう？　でも昨夜は……隣のコテージにあなたが居ると思ったら安心しちゃって、そっとお邪魔したの」

話をしていると、昨夜レオンを見つけた時のときめきが蘇ってくる。探して、探して、いつだって見つからなかったものが……。

「やっと見つけたって思った。嬉しくって、隣に横になっていたら、

いつの間にか……」

ふっと、手首を掴み上げていたレオンの指が揺るんだ。

「夜は勝手に出歩くなと言ったはずだ」

淡々とした口調でレオンは釘を刺してくる。

「だって……逃げたりしないのに……それに、レオンは嘘つき」

ぷいっと、彼の手を振り払う。そんな行動をした自分に、驚かすにはいられない。キーパーの命令は絶対、な筈なのに。

「嘘などついた覚えは無いが」

レオンが一步踏み出そうとしたあたしの前に立ちはだかる。

「だって、宝くじ当てたもの。ここにいる間、誰にも命令されない自由をくれるって……言った」

こんな感情は初めてだ。何を訴えたのか、自分自身よくわからない。でも、知ってしまったのだ。目覚めた時、手の届く場所に彼がいる心地よさを。72時間……期日が過ぎればまたひとりきり、カプセルで目覚める朝が繰り返される。

「ここにいる間はレオンと寝る。それなら、逃げられる心配もなくていいでしょ？」

「……は？何を……」

「サンドイツチ食べよ。ねっ」

レオンの手を取り、テーブルに向かって歩き始める。黙りこんだまま、彼は手を引かれている。あたしは……今更に気付いた事実が押し潰されそう。72時間の期限、島での時間は夢のように通り過ぎるひと時の幻。胸が痛い。喉が締め付けられるように息が……苦しい。あたし、どうしちゃったんだろう。

お日様が少しだけ傾いた頃、少し離れた海の真ん中にゆらゆらと揺れる影が、ひとつ、ふたつ、みつっ見えた。跳ねるよう、元気よく並んで泳いでいる。あれ……魚？あんなに大きな魚？

「レオン、見て。すごく大きな魚がいるよ」

「イルカだ。魚に見えるが人間と同じ哺乳類だ」

人間と同じところなど、どこにも見当たらない気がする。もしか

したらここから見えない海の下に、足があったりするのだろうか。
木陰に寝転んでいたレオンが、シャツを脱ぎながら海辺へ歩いていく。綺麗な背中……不意に目にしたレオンの素肌にトクリと鼓動が弾ける。

パシャンっ。大きく跳ね上がった水飛沫が、光を孕んで飛び散る。レオンは、あつという間にイルカの群れに向かって泳いでいった。あんな風に人間が、海の中を自在に泳ぎ回れる事を驚かすには無理ない。レオンの周りをからかうように、イルカ達が取り囲む。そして彼を追うように、今度は連なって後をついていく。ふふっ。思わず笑いが溢れる。……その時だった。

“……リ……コ”

え？ 島を吹き抜けていく海風に、名前を囁かれた気がした。だあれ？ きよろきよろと、辺りを見回すと、見覚えのある羽模様を見つけた。朝、あたしのワンピースに降り立った蝶が、誘うように目の前を横切っていく。ふわり、ふわり。漂いながら美しい羽をちらつかせる。ちよつとだけ……優しくするから、ちよつとだけ……触ってみたい。どんな感触がするのだろう。

待つて。思わせ振りに羽を休めては、ひらりと指先をすり抜けていく。いつの間にか、売店の脇にある、木の扉の前に立っていた。ドアノブに蝶はとまっていた。優雅に羽を揺らすと、朝と同じようにワンピースの胸元に飛んできた。可愛い。意思が通じ合っているみたいだ。

“……リ……コ”

あれ、やっぱり気のせいなんかじゃない。聞こえる、聞こえるよ。……この声は。

ギイツ。木のドアは、手をかけただけで呆気なく開いた。まるで招き入れるかのように。

「あつ、エリーだっ」

テーブルの上に腰をかけたエリーが、こちらを見ている。

「どうして……もしかして、エリーも遊びに来たの。あれっ本物？リアルプレビュー？」

そろそろと近づき、エリーの綿帽子みたいな、蜂蜜色の巻き毛に指を伸ばす。ぱつと、ワンピースから飛び立った蝶が、エリーの身体を真つ直ぐに擦り抜けていった。リアルプレビュー……いつものエリーのような。やっと本物に会えたのかと思ったのに。苦笑いが零れる。

「ハロー」

はにかんだ顔でエリーは笑いかけてくる。

「ハロー」

メールだというのに、いつもの癖でついつい挨拶を返してしまう。

「リコは海、気に入った？」

思わず深く頷いてしまう。気に入ったなんてもんじゃない。想像していたよりも遥かに素敵。くすくす。エリーが笑っている。

「気に入ったはずよ。ね？」

からかうような口調でエリーは話を続ける。

「リコはレオン、気に入った？」

さつきと同じ調子で再び頷こうとして……ぴたりとその動作を止めた。

「気に入ったはずよ。ね？」

可笑しそうにくすくすと、エリーはまた笑いを噛み殺す。海、素敵。気に入った。レオンは……レオンは？

バタンツ！ 胸が跳ね上がるような音を立てて、木のドアが勢いよく開いた。レオンの黒い影。背後から差し込む光が悪戯に彼を黒く染め上げている。だから、レオンの表情がわからなかった。今の、聞かれていないよね。

“レオンは気に入った？”

顔が熱くなる。エリーは何でも知っている。何故か不思議な程に昔から、あたしの事を知り尽くしているのだ。一步、二歩、レオンがこちらに歩み寄って来て初めて、射抜くような鋭い眼差しを向け

られてる事に気付かされる。

「ここで何をしている」

何の感情も見せない淡々とした声色に、ぞっとするほどの冷淡な瞳。……怖い。レオンが怖い。

「……エリーがメールをくれたの」

「なんの話だ？」

「メールフレンドのエリーが……」

「ここまで俺を誤魔化し続けられたというのに、随分とお粗末な嘘をつくものだな」

「嘘なんて……」

助けを求め、テーブルに視線を移すが、エリーの姿は何処にも無かった。テーブルの上では次の指示を待つメッセージが浮かんで消えている。

「どうやってオンラインを立ち上げた。一部のものしか知らないコードを入力しなければアクセスできないはずだ」

「だって初めから立ち上がっていたもの」

「とんだ食わせ者だ。アートヒューマンの中にお前のような危険分子が紛れているとは迂闊だった。

かなり、調べ上げたつもりだったが……」

危険分子……？ 違う。違う。あたし、そんなのじゃない。何か言わなくちゃ。ちゃんとレオンにわかってもらえるように。そう焦れば焦るほど言葉が何も出てこない。ただ彼の目を見ながら、ふるふると首を振ることしか出来なかった。

「来い」

手首をぐつと掴まれる。

「……やっ」

どうして？ もしかしたら今すぐウフに送り返されるのかもしれない。必死に両足を踏ん張り、抵抗してみせる。帰りたくない。きつとレオンにはもう二度と会えないに決まっている。このまま……誤解されたまま離れるのなんて嫌だ。嫌。片方の手で、開け放たれ

たドアの縁にしがみ付く。

「いやっ、いやっ！帰りたくないっ。離してっ、離して……っ！！」

涙が溢れた。自分の叫び声に嗚咽が混じり、驚くほどの大声を張り上げていた。痛いくらいに握り締められたレオンの指が、ふと緩む。

「誰も帰るとは言っていない。落ち着け」

呆れ果てた声。

「リコ……」

レオンは小さく溜息をつく、さっきまでの様子が嘘のように優しい声で話し掛けてくる。

「こっちにおいで。一緒に散歩へ行こう」

もう怒っていない？ 本当に？ おずおずとレオンの顔色をうかがう。彼の瞳から冷たい炎は消え失せていた。差し伸べられた手に指を伸ばす。大きな手……この島で見つけたあたしの宝物。さくさくと柔らかな砂に、二人の足跡を刻みながら歩き始める。なかなか収まらない小さな嗚咽が、繰り返し込み上げる。嫌われたと思ったでも、こうしてまた手を繋いで島を歩いている事実、心の底から安堵する。

あの部屋には入っちゃ駄目。もう絶対に入らないと誓おう。エリには、ウフに戻ってから返事を送ればいい。ここにいる間は、ちよつとだけサヨナラしていよう。……ごめんね、エリー。だって、だって、離したくないの。時間はどんどん過ぎていく。今だけ、今だけだから。レオンとただ一緒にいたい。

見上げた空に違和感のあるものが浮いている。目が覚めるような青空に、黒い雲が吸い寄せられるよう集まってくる。ざわり、ざわり。花模様のワンピースの裾が、風に乗ってなびく。帽子、ビーチの木陰に置きっぱなしだ。この風に飛ばされないだろうか。気になるけれども、今はただレオンの指に導かれていたい。ぽつぽつと、空から何かが降ってきた。足元の砂一面に、小さな模様を塗り付け

ていく。

「レオン、空からシャワーが……」

「雨というんだ」

あめ？ ぽつ、ぽつ、ぽつ、ぽつ。可愛らしい音を響かせて、海に浮かぶコテージを繋ぐ木の橋にも、雨は砂浜と同じ模様を刻んでいく。陽射しは変わらず照り付けている。太陽の光が水の粒になって、落ちてきているのだろうか。綺麗、綺麗。胸のわくわくが高鳴っていく。ウフハ毎日が晴れた。判を押したように変わらない天気。が擦りガラスの向こうにぼんやりと見えるのみ。

水上コテージを通り過ぎ、木の橋の先端までレオンは連れて行ってくれた。昨日は危ないからと止められた、海の先っぽにまで手を引かれる。この先端を境に、海のブルーがぐっと深い色になっている。

砂地が透けて見えるような水が、その先端からストンと深くなっていた。光が届かない程に……。影を混ぜ合わせたブルーに、ふと心を奪われる。そして漂う、色とりどりの魚の群れ。すごい数だ。波打ち際とは全然違う世界。

「レオン見て、魚が沢山、数え切れないくらいいっぱい」

興奮のせいか、さっきまでしゃくりあげていた息づかいは、どこかに行ってしまった。海に落ちていく雨は、砂に染み込んでいく様とは違い、小さく跳ね上がり踊っている。一体、幾つ落ちてくるのだろう。ぼんやりとそんな事を思った。

さっきまで泳いでいたレオンの髪は、ぐっしりと濡れている。すると、裸の上半身を、水粒が滑り落ちていく。あ、まただ。自分の鼓動がトクリトクリと、少しずつ早くなっていくのがわかる。熱を帯びた頬に打ち付ける、雨のひんやりとした感触が心地いい。

「リコ、ほらあそこにさっきのイルカが見えるぞ」

レオンが海を指差す。

「え、どこに？」

遠くまで見えるよう背伸びをして、視線を泳がせる。……その時

だった。

ドンッ。背中に衝撃が走った。ふわりと宙に身体が浮く感覚……。ザブンッ！ 何が起きたのか一瞬わからなかった。

ゴボッ。水から顔を上げたら、棧橋の上にいるレオンが見えた。あの瞳に戻ったレオンが、見下すようにじっとこちらを眺めている。仲直りできたと思ったのに、やっぱりまだ怒っていたんだ。どうして？ どうして……。水を含んだワンピースが、身体に纏わりついてくる。

ごぼっ。息をしようと思うのだが、もがく程にどんどん沈んでいく。ザアツツ……。勢いを増した雨が降り注いできた。昨日浴びたシャワーと違うのは、何処にも足がつかないという事だろうか。

ごぼっ。海の中で聞く雨の音色は悲しい響きだった。一緒にレオンが泳いでくれたならば、きっと全然違ったリズムに聞こえたのかもしれない。この広い海に一人きり。橋の上から見えた綺麗な魚達も、雨から逃れるように深く深く潜っていつてしまった。もう、自分が何処にいるのかわからない。波にもまれ、方向感覚が全く失われてしまった。

ごぼっ。見上げると、波に揺れる太陽の光が水越しに見えた。ゆらりゆらり。水の中から覗く太陽は、もうすぐ黒い雲に呑み込まれようとしている。もがく事を諦め、流れに身を任すとしんと静まり返った静寂が訪れた。夢の中に入り込む時にも似た、堕ちる感覚に包まれる。目が覚めたら……。あたしは何処にいるのだろう。

レオン、レオン。さっきの優しい声色を必死に思い返してみる。

“リコ……こっちにおいで”

目が覚めたら、あなたは隣にいてくれるのだろうか。光が消えた海の中で、そうだいいいな……と、呟いてみた。

蝶の温もり（レオン）

心拍停止。氣道を確保する為にリコの顎を持ち上げる。ワンピースの胸元をはだき、両手を添えて心臓マッサージを行った。即座に唇を近づける。血の氣を失った紫色の唇。合わせれば、ひんやりとした体温を伝えてきた。

時間は見計らったつもりだ。溺れるという先入観が皆無だった事が災いしたのか、リコはなすがままに海の中へと沈んでしまった。だからほんの一、二分その身体を探し当てるのに時間がかかってしまったのだ。この状況での数十秒は生死を分ける。

ぐつしよりと濡れた身体に浮かび上がる胸元の蝶の痣。同じだ。

あの夢に出てきた女、モニカの襟足の小さな蝶と……。死の淵をさ迷うモニカの冷たい唇が甦る。あれは夢だ。俺が生きているのは、ペストが蔓延した中世などではない。

動け。息をしろ。強く胸を押すたびに、リコの身体が力なく揺れる。俺は何をした？ 確かめたのだ、リコの裏の顔を。全てが演技かもしれない。何も知らない仕草、小さな出来事に目を丸くしてみせる、あどけない笑顔さえも。

あのオンラインのパスワードを探り当てるなど、個人の力では到底無理なこと。それなりの組織が絡んだ画策だと伺えた。ならばリコ自身、何らかの訓練を受けた工作人員という事になる。どんなに完璧に取り繕い仮面を被ってみたところで、命に関わるような窮地に立たされれば、生きる本能が優先される。その術を身体に塗りこまれているのならば、必ず行動に移すはず。もしくは命乞いと共に、罪を告白するかもしれない。背中を押され海に落ちていくリコの、無防備な様子が繰り返し脳裏を横切っていく。海に漂いながら見上げてきた哀しげな眼差し。

政府中枢の幹部にのみ解放されたヘブン。万が一の時、シエルターにも変わるここのシステムは、マザーコンピューター・エリザベ

スに直結している。アクセスする権限はキーパーである俺にさえない。今の状態は向こうからの呼び掛けが無い限り、オンラインは立ち上がらないはずなのだ。

メールフレンドとは何者だ？ リコに関する身辺調査は徹底して行った。個人的なメールなど、やり取りしている痕跡は何処にも無かった。過去二十年間、一通もだ。

唇を重ね繰り返し息を吹き込む。

「戻ってこいっ……リコっ！」

思わず喉元を滑り落ちた己の叫びに我に返る。瞼が熱い。スコールが椰子の葉を伝い、更に粒を膨らませて滴り落ちてくる。沸き上がる焦燥感は何だ？ 頬を濡らし顎から滴るものは雨なのだろうか。ふわり。何もかもを濡らす空間を、一匹の蝶が舞い降りてきた。

信じられない。華奢な羽で、スコールの中を飛び回る事など有り得ない状況ではないか。リコのおでこに優雅に羽を休め、二・三度小さく体を震わせてみせる。その時だった……。

ゴボツ。リコの喉が音を立てて、海水を吐き出したのだ。慌てて喉をつまらせないよう、顔を傾けさせ胸を再び押してみる。

ゴボツもう一度、リコは海水を吐き出した。息を吹き込むと、呼吸を始めた息遣いが聞こえる。祈るよう握り締めた拳を額に当て、リコに覆い被さる自分がいた。早く部屋に運んで身体を暖めなくては。唇を覗き込むと、僅かに明るい色を取り戻し始めている。

リコのおでこから、蝶がひらりと飛び立った。反射的に羽に手を伸ばしたその瞬間……するりと蝶は手のひらを通り過ぎた。逃げたのではない。俺の肉体が存在しないかのよう、すり抜けていったのだ。リアルプレビュー……信じられない。ちらちらと羽模様が乱れたかと思うと、目の前でかき消えていく。深く考える猶予など今は無い。リコの身体を抱き上げ、スコールが降りしきる中、コテージへと向かい走り出した。

肌に張り付いたワンピースを引き剥がす。タオルでリコの身体を

包み込み、ベッドの上にそっと横たえた。滴るほどに濡れた髪から、丁寧に水分を拭き取ってやる。そしてすばやく薄手のブランケットで、再びリコの身体を包みなおす。冷たい、冷たい身体。

蘇生させることが優先だったとはいえ、椰子の木陰ではスコールをしのぎきれず、リコの体温を奪ってしまったようだ。耳を傾けると、安定した呼吸を確認できた。あと必要な処置は復温か。裸になり、リコのブランケットをめくると、そっと中に忍び込む。ひんやりとした身体。どこもかしこも頼りなく柔らかい、女の肌を抱き締める。

「っ……………れ……………おん……………」

リコの柔らかな曲線を描いた睫毛が細かく震える。安心させるため、背中をそっと擦り上げてやる。リコの細い腕が、そっとこちらにしがみ付いてくる。

「ごめ……………さい……………、れお……………ん。も……………おこ……………ないで……………」

熱帯の雨にも似た大粒の涙がひとつ、リコの頬を流れ落ちた。胸の奥がずきりと痛む。うわ言を呟くリコの顔を、じっと凝視する。目を覚ます気配は無い。再び静かな寝息を立て始める。しばらくそうしていると、リコの唇が更に明るく色を含み始めた。そっとその唇に指を伸ばす。先程何度も触れた柔らかい感触が、指先に伝わってくる。

リコは男など知る由もない。男女を問わず性欲は、日々の栄養キユーブの中に含まれた薬剤で管理されている。自然妊娠など過去の遺物だ。健康な卵子や精子を人工的に受精させ、あらゆる見解から適切な受精卵のみがガプセルの中で育てられる。更に万が一の間違いがないよう、卵子精子提供者に選ばれなかった者は避妊処置が施行される。アートヒューマンはその独自性の遺伝子を守るため、優先的に種の保存対象になっていると耳にした事がある。

そしてキーパー（番人）の中でも俺のように特殊部隊に所属する者は、また違った扱いを受ける。戦闘状態において人間は、アドレナリン分泌とともに性腺が異常刺激され、性欲が過剰に高まるとさ

れている。だが、性欲を薬で押さえ込むのは男の闘争心を下降させる。だから冷静さを欠かないよう、精神力で性欲を制御する事を要求されるのだ。

「れ……ん」

再びリコは小さく喘ぎ、ぴつたりと身体を擦り寄せてくる。俺がかつて訓練で相手にしてきた女達は、男の本能をくすぐる術を身に付けていた。彼女達はあらゆる媚態を尽くし、男をベッドへと誘い込む。恍惚とした快楽の海に放たれながらも、合図ひとつで瞬時に兵士の仮面を被る精神力が要求される。

彩られた爪、赤い唇、淫靡な身体に張り付いたドレス。候補生の2/3は快楽に溺れ、脱落する甘美な訓練。そんな女達と、同じ性とは思えないリコのあどけない抱擁。駆け引きなど微塵も匂わせずに手を伸ばしてくる無頓着な仕草が、こんなにも男の理性をかき乱すのものと、身をもつて思い知らされる。

「……ん」

リコが薄く瞼を開いた。こちらに視線を上げ、ぼんやりとした眼差しでふんわりと笑ってみせた。甘えるように俺の肩に額をそつと乗せてくる。

「一緒……ねようね、お歌う……ってあげるから」

寝ぼけた声でボソボソと、耳朵に唇が触れる距離で囁いてくる。

「C'est……vraiment……merveilleux……（本当になんて素敵）」

最初、リコの口が眠気に回っていないのだと思っていた。

「tant de……bleu（こんなに青いなんて）」

いや、違う……これはフランス語ではないのか。英語を原型にした世界共通語になってから二世記。脳内チップの瞬時通訳がなければ今や解読不能の言語だ。何故リコが……。

彼女の顔を覗き見ると再び瞼を閉じている。唇が溜息のような子守唄をゆつくりと綴っている。今、問わなくては……そう思うのだが、目眩にも似た睡魔に包まれる。瞼の裏側で、あの蝶の羽模様が

チラチラと浮かんでは消えていく。昨夜と……あの時と同じ感覚だ。ぼんやりと漂う意識。夢と現実の狭間をさ迷う。

遠くから音楽が響いている。滑らかに響く音色、いくつもの楽器がマーチを陽気に奏でている。視界がぼやける。……霧……いや、あれは何の煙だ？ 長く連なり黒光りする機首。その頭にそびえる煙突からは、もうもうと白煙が立ち上っていた。脳内チップが検索を始める。

Steam Locomotive（蒸気機関車）。

駅とは思えない広野に、それは停車している。薄汚れた貨車の扉が開くと、お粗末なプラットホームに人の群れがぞくぞくと降りたつ。よろよると足元から崩れ落ちる者も少なくない。おびえた眼差し、憔悴しきった顔、皆すぎるように家族とおぼしき者と身を寄せ合っている。

こんなに小さな貨車に、これほどの人数が詰め込まれているとは……異常な状況を更に際立たせるのは、彼らを出迎えるリズムカルなハーモニーだ。バイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバス……フルート、トロンボーン、アコーディオン。土煙が漂う中、十人程の演奏者は皆、観客の前に立つとは思えない、よれた服を纏っている。だが汽車より降り立つ人々の中には、この賑やかな音色に安堵の色を見せる者も少なくない。到着した場所は地獄ではないのだと、自分に言いきかせるかのように。

赤い腕章をぶら下げた軍服の男が、人々をより分けている。右の列には老人と子供、左の列にはそれ以外の者。人々は流れるままに列を成し建物へと歩いていく。ここはどこだ？ 蒸気機関車が走る時代を上空から見下ろす。煉瓦を積み上げた門をくぐり、黒光りする一台の車が到着した。兵士達が敬礼をしている姿を見ると、彼らの上官といったところか。

二人の男が車から降り立つ。黒い軍服に飾られた勲章を見れば、中年の男はかなりの身分だと伺える。そして連なるよう姿を現した若い男に視線が奪われた。緑色の軍服、乗馬用ズボン、黒いロング

ブーツ。背の高い男だ。青い瞳、撫で付けた金色の髪。歳は三十手前といったところか。

ぐんつ。意識がその男に吸い寄せられる。磨きあげられたロングブーツと、爪先を合わせる程の距離に向かい立つ。幾多もの修羅場を垣間見てきた戦士の瞳がそこにあつた。蒼い瞳に漂う深い闇。車を降りた二人は、楽団に視線を泳がせながら会話を始めた。

「テイル・ハイルマン、よく遙々訪ねてきてくれた。今夜は我が家で歓迎のパーティを開くつもりだ。

姪が君に会いたがつていてな。噂の英雄……我が命の恩人にだ」

「任務を遂行したまでです、コーネン所長」

「ほう……だが上官の為とはいえなかなか命を張れるものではない。怪我はどうだ。背中に二発も銃弾を浴びたまま、私を背負える部下は君くらいなものだ。一生の借りが出来た。お礼がしたいのだが、君は何も望まないときている」

「階級が飛び越して二つもあがりました。しかも極寒のソビエト前線から配属を変えてくださったのはコーネン所長、貴方ではないのですか」

貨物車から出てくる人の列が途切れた。兵士が合図をすると、縞模様の上下を着た男達が入り、何かを運び出している。あれは……死体か？家畜のごとく運送され、過酷な環境に力尽きた屍の山子供、老人……妊婦と思われる女まで混じっている。男達は見慣れた光景だと言わんばかりに、淡々と死体を運ぶ作業を進めるだけだ。マーチは続く。まるで人々の重い足取りを軽くするかのように、美しい旋律が繰り返し奏でられる。……と、その時だ。一瞬、音がひとつ調子を外して響きわたった。コーネン所長と呼ばれていた男が、鋭い目付きで楽団に視線を流す。脇に控えていた兵士が、楽団の中に分け入っていった。そしてすぐにひとりの男を引きずるように連行してきた。バイオリンを抱き締め、真っ青な顔をしたその男の膝は、情けない程に震えている。兵士は男の手からバイオリンを取り上げると、腕を捻り上げ、その手のひらを皆にさらしてみせた。一

文字に刻まれた傷。血が滲み痛々しい。

「えっ……演奏前に調整していたら、弦が……きつ切れてしまつて手を……すぐに治りますから明日は傷も塞がり、きつとっ……」

コーネンは兵士に小声で指令を下している。バイオリニストは両脇を抱え、引きずられて行つた。兵士が人の群れに向かい、叫び始める。

「バイオリンを弾ける者はいるかつ。楽団にひとつ空きができたぞ」兵士と目が合わないように、人々は視線を落としている。引きずられていったバイオリニストの行く末を思えば、手など挙げる気も失せるというものだ。静まり返つた中、行列を離れ一人の女が手を上げながら歩み寄ってくる。

見事なプラチナブロンド。だがレディとは言い難い程に、結い上げた髪は乱れていた。仕立ての良さそうなツーピースも皺が無数に刻まれている。

爪先を合わせて向かい合っている男……ティル・ハイルマンが息をのむ気配が伝わってくる。近づく女の姿を、食い入るように凝視している。そして無意識にもっとよく見えるようにと、ティルが一歩足を踏み出した時だった。この男の肉体と、俺の意識がひとつに重なる。

……感じる。ティルの驚き、戸惑い……何もかもをだ。暗い穴に吸い込まれていく。また始まるのか？ こんな狂気の舞台で、一体何が始まるというのか。

リコ……こんな状況でも彼女より伝わる体温が、不安を癒すよう纏わりついてくる。脳内チップが分析を続ける。

兵士達の腕を飾り立てる赤い腕章には、黒の鉤十字^{かぎ}が張り付いている。襟章は稻妻を連想させるSSの文字。トーテンコップ……^ド髑髏^{くわ}の徽章付き制帽。

カタッ……最後の検索をチップが弾き出す。カタッ……意識が途絶える音が遠くで聴こえた気がした。

ナチスドイツ親衛隊（SS＝Schutzstaffel）ホ口

コースト……ギリシャ語でそれは「焼かれた生贄」の意味を持つ。
なんて忌まわしい。ここは民族抹殺を目的とし構築された、人類の
罪深き汚点の地、死の収容所。

タンゴの調べ（ジャンヌ）

「何か一曲弾いてみる。コーネン所長が直々に審査してください」
ドイツ人兵士が楽器を手渡ししてくる。ヴァイオリンを手にし、そつと左手で指を揉み解す。失敗すれば、先程のヴァイオリニストと変わらぬ運命が待っている事だろう。

だが何を躊躇する必要がある？ もう二度と楽器を手に出来ないのだと、あの貨車に乗り込む瞬間感じた絶望を思えば、これは神が授けてくれた最後のチャンスに違いない。

真つ直ぐに黒い軍服の男を見詰める。その時だった、斜め前に立つ制帽を目深に被った男が視線に入りこんだのは……。どくんつ。と、心臓が大きく跳ね上がる。

悪い癖。記憶の片隅に刻まれた男と似ている人に、つい目をとめてしまふ。こんな時にまで。演奏前だ。心をかき乱さぬよう小さく息を吐き瞼を閉じる。だが瞼の裏から色褪せる事無く、彼はいつだって私の心に覆い被さる。

人生最期の演奏になるかもしれない。ならば、せめてこの曲を捧げる相手は素直に心委ねるままに。とりあえずは命を繋ぐため、招かざる観客に向かってお辞儀をする。そして顎にヴァイオリンを添え、一氣に弓を引いた。

選曲はChaconne……バッハ、「パルティータ第2番二短調 第5楽章シャコンヌ」

四本の弦を同時に弾く事が出来ないヴァイオリンに、あえてこの曲は三重四重の重音を要求してくる。音を微妙にずらしながら、連ね奏でる高度な技法。だが冒頭のほんの数小節で、観客を虜にする魔力が秘められている。

もしもバッハがこの一曲しか作曲せずにこの世を去ったとしても、彼は大作作曲家として後世にまで名を残したであろう。ヴァイオリンの持つあらゆる技法を組み合わせ、極限にまで高めた傑作。運命を、

宿命を…… たったひとつの楽器が魂の叫びを響かせる。旋律と一体化する至福のひと時。何処に立っているのかなどという感覚は、あつという間に消え失せていた。観客がナチでもゲシュタポでもヒトラーでも、そんな事はどうでもいい。生きている。ただこの瞬間を、和音進行257小節の中に燃やし尽くす。

「クラッセ（素晴らしい）」

パンパンと響く低い拍手に我に返る。拍手の贈り主は、意外にもコーネン所長と呼ばれていた黒い軍服の男だった。額に流れる汗を手甲で拭い初めて、最後まで演奏し終わったことに気付く。十五分以上もあるこの曲を、聞き届けてもらえるとは思ってもみなかった。

「ドイツの誇る偉大な作曲家バッハを選ぶとは、なかなか身の程をわきまえている。どこのオーケストラに所属していた」

「いえ、音楽院の学生です、オーケストラに所属する機会にはまだ

……」

貴方達の戦争のせいだ。その一言はぐつと飲み込んだ。この男が、全てを握っている。私の命の行く末そのものさえ。視線を流してはいけない。気になる隣の親衛隊員に視線を移そうものなら、どんな言い掛かりをつけられるか分からない。

「この女を今晚のパーティの演奏者に混ぜる。収容所には今日は連れて行かずに、監視人のシャワーにでも放りこんで、その薄汚れたなりを整えさせる」

カシッ。コーネンの言葉に踵を合わせ兵士が敬礼をする。とにかく、審査は通過したらしい。

右と左。どちらの列にも並ぶ事なく、訳が分からないままに、歩き出すようにと兵士に背中を押される。視線を背後に感じながら、頭の中では先程視線を奪われた親衛隊の男が、ヴァイオリンの音色と共に繰返し浮かんでは消えていた。

似ていた…… 七年前の記憶の彼に。いつの間にそんなにも月日は

経ってしまったのか。薄い唇。滑らかな顎の形。制帽に遮られ、他は比べようもなかったけれど。こんな場所でさえ、彼の面影に惑わされるだなんて。しかも見間違えた相手は、侵略者ナチス親衛隊の男ではないか。

ナチス、ナチス。私から全てを剥ぎ取り、ユダヤ人の烙印を押した張本人。ほんの一週間前まで私は音楽院に通うありふれたパリジエンヌだった。そう、ほんの一週間前までは……。

かつて国王の首と引き換えに手にしたフランスの自由は、一体何処に消え失せたというのだろう。ナチスドイツ占領下パリの人々は、一見平静を装いながらも、容赦無い監視と干渉に神経を高ぶらせていた。服従の姿勢を崩さなければ、侵略者達は紳士的ですらあった。だがそこからはみ出した者や、ユダヤ人に対しての扱いは常軌を逸するものがある。

音楽院では、見慣れた教授や生徒が、ある日突然胸にユダヤの印、黄色い星を縫い付ける事を強要された。才能溢れる彼等が目立たぬようにと息を殺している……魂を抜かれたように。そしてある日、忽然と姿を消すのである。安全な場所へ身を潜めているのだと願いたい。だが何人ものユダヤ人が、ゲシュタポ（秘密警察）に連行されていく姿を日常的に目にしていた。

悲しい出来事だと胸を痛めながらも、所詮私は傍観者であった。自分がユダヤ人狩りの対象になるなどと、夢にも思っていなかった。きっかけは父が残してくれた遺産のひとつ、セーヌ河を眺められ洒落た外観で人目を引く高級アパートメント。ただここにナチの将校達が、居心地の良い住居を構えたいと思い付いただけなのだ。アパートメントの住人は徹底して身元を洗われ、言いがかりとしか思えない理由で次々と追いたてられた。抵抗をすれば反ナチ主義、黙りこめばレジスタンスだと密告された。適当な……けれども抜け目のない理由を掲げ住人を追い立て、奴等はカッコウの雛のように他人の巣に居座るのだ。

今すぐにフランスを出よう。スイスあたりへ戦争が終るまで、身

を置くのも悪くない。音楽院はまた平和な時代に復学すればよいのだ。そう覚悟を決め、身支度を始めようとした時だった……呼び鈴が鳴ったのは。武装した三人の兵士を従えたドイツ人将校が、薄い笑いを浮かべて立っていた。

「ジャンヌ・ブルーニだな。21歳、パリ・エコール・ノルマル音楽院在学」

値踏みするような灰色の瞳に、ドイツ軍人特有の冷淡さが滲んでいる。

「マドモアゼル、貴女はご自分にユダヤの血が混じっている事をご存知だったかな？」

言い掛かりだ。血の気が引いていくのがわかった。

「……この私の何処にユダヤの血が混じっているというのですか」
あまりの衝撃に、声が震えていた。

「貴女は母方の祖父母の事を、何処まで知っている？」

「母の……？会った事もないですわ。私が生まれるより以前に、亡くなられたと聞かされていました」

「母上がオランダ人だということは？」

「知っています。でも、母も私が十歳になる前に他界しておりますの」

頭が上手く回らない。質問に答える自分の声が、他人のもののように感じていた。

「母方の祖父母はオランダ人でユダヤ教徒だった。つまり貴女は、一親等ユダヤ混血児ということになる」

「こんな……こんな事は言い掛かりに違いない。私をここから追出す為の作り話だ。」

「母上は、フランスに来てから改宗している。国をまたがり結婚している家系で、貴女のような半ユダヤ人の認定は難しくてね。全くタチが悪い。ちゃっかり皆の中に紛れ込み、普通の市民のような顔で生活しているのだからな」

忌々しいとも言いたげな口調。そう、私の存在自体が。ぞくり。

背筋が寒くなる。

「私、今日このアパートメントを引き払う予定ですよ。家具も置いていきますから、お好きに使って下さって結構ですわ」

「おやおや、これは物分りの良いお嬢さんだ。なにも連行しに来た訳ではない。一親等ユダヤ混血児は、自身がユダヤ教を信仰していない限り、ユダヤ人とは区別している」

強制収容所への連行対象ではないのか……ほっと胸を撫で下ろす。ずいっと、軍服の男が歩を進め、互いの距離を狭めてくる。そして、息がかかるような距離で値踏みするような眼差しを向けてきた。

「プラチナブロンドにグリーンアイズ。貴女のように美しいパリジエンヌをユダヤ系だと疑う者は皆無だったはず。いや、もう一度良く調べてみるか。もしかしたら万が一の間違いということもありえる。

汚名を晴らすチャンスがあるかもしれない。ただ、貴女が私をその気にしてくれると言うのなら……だが」

その気？ 回らない頭で。ぼんやりと頬に伸びてくる男の指を眺める。ねっとりとした男の指の感触で我に返り、反射的にその手を乱暴に振り払っていた。

「女を口説くのに条件を出すなんて……だから、ドイツの男は野暮なのよ」

……しまった、と思った時には遅かった。口は災いの元、けれども時、既に遅しだ。惘然とした表情で男は肩をすばませて見せた。けれども、部下の前で恥をかかれた怒りが、瞳から滲んでいた。彼はコツコツとブーツの踵を響かせリビングの中に入っていく。蓄音機の脇の棚に並べられたレコードを眺めては、一枚、二枚と抜き取り、テーブルに並べはじめた。

「音楽院生だそうですね。さすが、レコードのコレクションが充実している。……だが」

男の唇の端がゆっくりと持ち上げる。

「やはり、あなたの身体に流れるユダヤの血は隠しようもないらし

い。これらユダヤ人が作曲した退廃音楽はヒトラー元帥より排除令が出ているはず」

ドイツ将校が並べたレコードに視線を走らせる。マーラ、メンデルスゾーン、シェーンベルク……。机の上の作曲家達がユダヤ人なのだと意識した事もなかった。音楽を人種で区分けすることなど無意味だ。魂にどう響くか、それが全てではないのか。

「マドモアゼル、残念です。他のレコードは私が大切にお預かりいたしましょう。貴女が再びここに帰ってくる日までね。一親等ユダヤ混血児である上にユダヤ人の退廃音楽を保護している事实は、貴女を最終的にユダヤ人として認識する有力な証拠となってしまうた。ユダヤ人は有害だ。一般市民からは隔離する必要がある。持てる荷物は鞆ひとつ。十五分で新しい生活の為の荷造りをして頂こう」

私はこの瞬間からユダヤ人になった。そしてパリの街から姿を忽然と消す、ありふれた運命をなぞる事となる。私はこの収容所までの数日間で悟ってしまった。戦争という名の狂気がどんなに人を残虐にできるのか、また命の価値を石ころのように変えてしまうのかを。

忽然と姿を消したパリのユダヤ人達は、フランス国内の収容所に一時皆集められる。そして各収容所へと振り分けられるまでの数日間で、死と馴れ合いになるという異常な感覚を身に付けてから汽車に乗り込むのだ。パリ市民の前で、ナチによる公然とした残虐行為は控えられていた。実際に連れ去られた人達がどんな目にあうのか……様々な噂はあつたが、どれも到底信じられない話だった。だが全ては現実だった。

堀の中では人間の尊厳は剥ぎ取られ射殺は日常、裁判もなく看守の判断ひとつで命が弄ばれる。そして更なる地獄と噂されるこんな場所に辿り着いてしまった。絶望の中、降りたつたこの地で軽快なマーチに出迎えられ、自らもヴァイオリンを奏でる事になるとは。人生とは思わぬ出来事がきっかけで、全く予想もしない歯車が回るものだ。

「もたもたするな。シャワーが済んだらこれに着替えるんだよ。コーネン所長のお宅にシラミなんか落としてきたら、ただじゃすまないからねっ」

シャワー室についてきた女監視員が、舌打ちを鳴らし服を投げつけてくる。何もかも顔のパーツが大きい、野暮ったいドイツ女。口のききかたをみれば、教養の無さがわかるというものだ。無知な者ほど権力に溺れ、声を張り上げて己の優位性を誇示してみせる。けれども、こんな女ですら私の命を誰の許可も取らずに弄ぶ事が出来るのだ。

狂っているおかしいではないかと、声を張り上げ言いたい事は山のように積み重なっている。けれども口にすれば、行く末には死があるのみ。私は死ぬ事が恐いのか。一体、何に未練があるというのか。自分でもよくわからない。

女監視員に渡された服は、質素ながらも清潔な黒いワンピースだった。袖を通し髪を整えると、更に別室へと連れて行かれる。同じワンピースを纏った女性奏者が二人、チェロとピアノの音合わせをしていた。

ちらりとさえ彼女達は、新参者の私を見ようとしめない。お互いに、挨拶を交わす事もなく黙り込んだまま楽器を鳴らし始める。窓の外は、夕日が空を染め始めていた。なんと長い一日だろう。つまらなそうな様子で椅子に座っていた女監視員が、ふと部屋の外に出て行った。重苦しい空気の隙間で深い溜息をつく。

「ボンジュール（こんにちは）ジャンヌよ。今日ここに着いたの」ドイツ語でも英語でもなく、今宵のパートナー達にフランス語で声を掛けてみる。二人は顔を見合わせると、少し安堵した様子を見せた。

「……さつきプラットホームで貴方が演奏したシャコンヌ、素晴らしかったわ」

小さく声を落としてチェロリストが、少したどたどしいフランス語で囁いてくる。

「今日のパーティに出られるなんてついてるわよ。ほんの少しだけど、甘いものを口にできるの」

ちらちらとドアに警戒した視線を泳がせながら、流暢なフランス語でピアノストが笑いかけてくる。二人とも若く、世代も同じくらいだと伺えた。チェロリストはカリス、オランダ人。ピアノストはマリ、フランス人。ここがパリのカフェならば女同士、おしゃべりに花を咲かせる事だろう。

「綺麗な髪、でも目立つわよ。これで隠した方がいいわ。ここではね人目を引くというだけで、死に結びつく事があるの」

マリが自分の髪を覆っていた黒いスカーフを手渡してくる。露になったマリーの黒髪は随分と短いものだった。私の視線を感じたのだろう、マリが「これでも大分伸びたのよ」とおどけてみせた。「ジャンヌ、あなた、皆と違って列に並ばずにそのままここに連れて来られたから、切られなかったのね。最初、女でも髪を刈られるの。まるで男のように……それにほら」

マリはそう震える声で話をしながら、袖をまくり細腕をさらして見せた。彼女の白く細い腕には、刺青された数桁の英数字が並んでいた。

コーネン所長の屋敷は、収容所から車で数分ほどのところにあつた。車になど乗らずとも、収容所の門まで歩ける距離だ。優雅な外観、美しく連なる外灯。まるで別世界だ。すぐ隣に飢えと暴力が渦巻く強制収容所が存在するとは信じられない。室内では既に着飾った人々が賑やかに談笑していた。

磨き抜かれたピアノの前で、いつどのように演奏を始めてよいのかわからず、女三人背筋を伸ばした立ち尽くす。限られた時間でありおこなった先程のリハーサルは、上出来と言っているいい仕上がりだった。渡された楽譜には意外な選曲もあり、演奏する楽しみさえ

湧いてくる。堅苦しいクラシックだけではなく、雑食とも言える好奇心で様々なジャンルに手を出した経験が、こんなところで役に立つとは。

一人の男が見慣れない楽器を手に近づいてきた。アコーディオン？いや鍵盤がない、これはバンドネオンだ。話し掛けられた言葉はドイツ語だった。日常会話程度なら理解できる。

「アンタが新入り？ 大丈夫かよ、俺、今日は他の収容所に借り出されていてさ……一緒にリハーサルもできないままだったけど」

囚人なのだろうか？ 白いシャツを纏い身なりは整っている。ブラウンの髪を長めになびかせ、中性的な顔立ちをしていた。唇を尖らせ不機嫌を装う子供のような仕草に違和感を感じさせないなんて、不思議な印象を受けた。年は同じくらい……だろうか。

「リードしてください？ ついていくから」

男は椅子に座るとバンドネオンを手に小さく息を吐いた。

「グリユース・ゴット（あなたに神のご加護がありますように）」

私の耳元でそう小さく呟くと、始めるぞと皆に目配せをよこす。

マリーは素早くピアノの前に腰を降ろした。

唐突に鳴り響いた旋律はタンゴ。皆の視線が一斉にこちらに注がれるのがわかる。独特なタンゴのリズムを、歯切れよく細かく刻んでいくバンドネオン。情熱を叩き出すピアノ、哀愁を帯びたヴァイオリンとチェロの音色が絡み合い、酔うような雰囲気をついていく。肩を露にするドレスを華奢な紐で吊った異国の女達が、軍服を纏った男達に誘うような眼差しで手を差し伸ばす。彼らの妻と言うには色香が溢れすぎていた。何処から調達してきた女達なのか。

切ない音色、タンゴは男と女の色恋沙汰をなぞるよう、時には優しく、時には激しく鳴り響く。恋を奏でるのに、これ以上相応しい音色があるだろうか。そして、それは淡い恋の日々をも回想させる。この旋律を耳にするといつも、潮風の香りがした。裸足のまま、タンゴのステップを踏んだ柔らかい砂浜の感触が蘇る。あの人も覚えていたのだろうか。何処かでタンゴの音色を聴いた時に、私が絡

めた指の感触を思い起こしてくれるのだろうか。

あ、いた。あの男だ……。ダンスフロアの向こう端に、あの親衛隊の制服を着た男はいた。背の高さと金色の髪の色合いで私の目を引いた。ボーイからシャンパングラスを受け取っている。うしろ姿まで似ているだなんてね……。苦笑いを噛み殺す。

彼に女がひとり近づいていく。途中、女は助けを求めるように振り回り、コーネン所長に目配せをした。コーネンは笑いながら立ち上がり、女の手を引くと彼の背後へと近づいていった。

バンドネオン奏者がちらりと合図を送ってくる。その意図を読み取り、楽譜より早いタイミングでエンディングのフレーズを奏でる。不自然さの欠片も匂わせず、完璧にドラマティックに。音色が途切れるのと共に拍手がおこった。その称賛を自分のものだとも言いたげに手を挙げながら、コーネン所長がフロアの中央に歩み出る。

「お集まりの皆様に紹介したい人物が二人おります。一人はこの美しい乙女、姪のソフィー。独り身の私を案じてベルリンから遊びに来てくれました。そしてこちらは陸軍の英雄を、私が親衛隊に引き抜いたティル・ハイルマン大佐。大佐には収容所の親衛隊員に特別訓練を叩き込む為、一ヶ月の期限付きで来ていただいた。最近親衛隊入隊の規定が緩くなったのか、ひ弱な輩が多い。軍人の鏡であるハイルマン君に、皆の根性を叩き直していただきたい」

ティル……ハイルマン。

どくりと、心臓が跳ね上がる。鼓膜にまで響く心音を、沸きあがる拍手がかき消していく。拍手に応え、男が制帽に手をかけた。

ティル・ハイルマン。

感情を見透かせない蒼い瞳が露になる。まさか、まさか。

「おい、大丈夫かよ。震えているぜ」

バンドネオン奏者が、そつと耳打ちをしてくる。

「なにか暖かいものでも飲むか？」

「……大丈夫よ……」

目が離せない、食い入るようにティルと呼ばれた男を見つめる。

七年の歳月は彼をより完璧な大人に仕立てていた。私の知っているティルとはどこか……いや、何もかもが違って見えた。

腕を前方上方に伸ばし踵を合わせると、ティルは客人に向かい「ジーク ハイル（勝利万歳）」と、ドイツ軍人らしい挨拶をした。

「本日、コーネン所長よりお招きいただき、初めてこちらに足を踏み入れました。統制の取れた誇るべきドイツ帝国の収容所です。ただ、先日囚人に襲われ歯を折った者がいるとか。前線と変わらずにここも、小さな戦場であることを忘れてはいけません。己を高めなければそこには死あるのみ」

女達が熱を帯びた眼差しでティルを見つめている。ヒトラーが賞賛するような完璧なアーリア人がそこにいた。背が高く強靱な肉体を持ち金髪蒼眼、そして一点の濁りもない白い肌。これらの要素を持つものは少なくはない。だが全てがバランスよく、美しさをも漂わせる男となれば稀な存在だ。

前途有望な親衛隊のエリート。いつだって若さと美しさを武器にする女達は、より居心地の良い男の腕を探している。ティルは女達の熱い視線の中で、再び話を続けた。

「芸術を愛でるコーネン所長の演出に相応しく、収容所の入口ではバッハの音色に出迎えられました。

優秀なゲルマン民族はあらゆる分野で輝いている。戦いの合間に音楽で心の豊かさを味わうような余裕も必要です」

心の豊かさ？ あれは混乱した人々を音楽で操る為に奏でられているのではないか。死の収容所へ向かう行進の為にレクイエムではないのか。シャンパングラスを運ぶボーイが、バンドネオン奏者に何か伝言を伝えてくる。彼は頷くと素早くグラスをひとつ取り、ちやっかりと口をつけた。

「アンタも飲む？」

バンドネオン奏者が飲みかけのグラスを差し出してくる。周囲を見回すと皆の視線は主賓に向いていた。ぐいっと、彼の指の上から

手を添えて、グラスを傾け一気に飲み干す。シャンパンの香りがふわりと鼻腔をくすぐった。

「アンタの出番だってさ、大佐から直々のリクエストだ。“シャコンヌ”だってよ……やれるか？」

ティルがリクエストをしてきた。私の存在に気づいている。その事実が胸が高鳴った。

ナチス親衛隊とユダヤ人の女。喜劇のようではないか。でもそんな運命の悪戯が、私達には似合っている。

あの頃14歳の少女だった私は、目配せひとつでこの男を跪かせる術を持っていた。ベッドの上で愛し合う代わりに、いつでも望めば彼は口付けてくれた。彼は既に大人だった。そう、今の私と同じくらいの年。けれども私の従順なる奴隷だった。甘美な屈辱に溺れてもがいていた。あがらい苦しむ彼の姿が愛しくて……愛しくて、まだ膨らみさえ控えめな胸をときめかせた。

再び巡り会えると信じていた。ねえ、もう跪かなくてもいいわ。ヒールを履き背伸びをすれば、今なら貴方の唇に届くかもしれない。私が初めて愛した男。いや、あれを愛だったと当時、彼には理解出来ただろうか。

愛を語るには私は幼すぎ、だが純真で残酷だった。

ミモザの冠（テイル）

バイオリンの音色が響く。豊かな音域は、ジャンヌの成熟さを物語っているようだ。まさか、こんな……こんな場所で再会するとは。囚人リストには、ユダヤ人と記されていた。ジャンヌがユダヤ人？有り得ない。ユダヤ人狩りの人数合わせのために、フランスでは一般市民でさえ無作為にユダヤの烙印が押されているとでもいうのか。

ジャンヌ……記憶の中の彼女は、まだあどけなささえ残す少女。彼女と過ごした時間に思いをはせれば、いつだって蘇るのは……。もがいても、もがいても、蜂蜜の糸のように甘美な快樂が身体を絡め取る。逃れられない……。理性と本能の狭間で気が狂いそうだった。固い蕾がゆつくりとほころんでいく様を眺める高揚感。一体何人の男が、こんな魅惑の官能に堪える事が出来るのか。この上ない幸福と底無しの絶望を、常に背中合わせに感じていた。

「テイルって呼んでもいいかしら？ 叔父からいつもお噂は聞かされてましたの。お会い出来る日を楽しみにしてたのよ。私、ソフィです……ああ、まずお礼を……。命懸けで叔父を救ってくださったのよね、勇敢でいらっしやる」

コーネン所長が先程姪だと紹介していた女を眺める。ドイツ女にしては小柄な体。遠慮深い口調を装いながらも勝ち気な眼差しはコーネン所長にそっくりだ。悪くはない、清楚さが好みのヒットラーには受けないかもしれないが、男ならそそられる奔放そうな美人だった。

「お礼など。ドイツに欠けてはならない人材を守っただけの事です」ソフィは満足気な含み笑いをこぼした。

「あの方……囚人？ には見えないわ。ここはユダヤ人以外の者も捕らわれているのかしらね」

ソフィは演奏するジャンヌに視線を流した。地味な黒いワンピース。だがそんな装いだからこそ、一層ジャンヌの美しい肌とプラチナブロンドは控えめな照明の中で妖しく浮き上がる。息を潜め闇に紛れれば、蛍のように美しくも儚い輝きで目にする者を魅了するのだ。変わらない……七年前と何一つ。

弓を大きく振り上げて、ジャンヌは“シャコンヌ”を締め括った。称賛の溜め息が部屋を包む。

「バイオリニストをここに」

給仕をしているボーイに声を掛けると、彼はジャンヌを従えてこちらに戻ってきた。

「この女はなかなか掘り出しものだったな」

ソフィの脇に立ったコーネン所長が満足気に呟く。目の前まで辿り着いたジャンヌは、全く感情をみせない表情で息を殺し立っている。こんな至近距離で顔を突き合わせても、感情を全く伺わせない無表情な眼差し。

「コーネン所長、今更ですが是非ひとつお願いがあるのですが……」

「なんだ改まって」

俺の言葉に興味深そうに耳を傾けてながら、コーネンの口元がゆつくりと持ち上がる。

「今日から一ヶ月、こちらの屋敷でお世話になる訳ですが、メイドを一人つけて頂きたい」

「メイドを？ 別に構わんが」

「この囚人を指名したいのですが」

意外な申し出だったのだろう、きょとんとした眼差しを向ける。そして、一瞬黙り込んだあと、可笑しそうに笑い始めた。

「この女をね……いや、無理もない。確かに興味をそそられる女だ。だが、ユダヤ人の女と関係を持つのは君も知っていると思うが」

会話を交わす間に挟まれているソフィーが、明らかに居心地の悪そうな顔をしている。自分を差し置いて、他の女が注目されるのはお気に召さないらしい。

「関係？ 男と女のですか。とんでもない、そんな事したらゲルマン民族の血が汚れてしまう」

そう俺は判で押したような、ヒットラーの思想を復唱してみせた。「私はこの女の世話をさせられていた事があるのです。戦争が始まる前、ほんのひと時ですが」

「世話を？ まあ、この方テイルのお知り合いだったの」
心底驚いた様子で、ソフィーが話に分け入ってくる。

「まるで奴隷のようにこき使われたのです。まだ子供みたいな年だったこの女にね。その家は南フランスでは有名なワイン畑を持つ資産家で……出稼ぎの私は奴隷のように働かされたのです。こんな偶然に自分でも驚いています、あの時のツケを精算する絶好のチャンスなのかもしれない。私にとって人生の汚点ともいえる時代だった。下働きなど縁もゆかりもないこのブルジョワ娘に、俺の歩いた床を磨かせるのですよ。ユダヤ人である自分の立場ってモノを思い知らせるいい機会だ」

「ほう、こんな場所での再会とは偶然だな。しかも、テイル・ハイルマンを奴隷のようにこき使っていたとは恐れ入った」

コーネンは興味深げにじろじろと、ジャンヌを舐めるように眺めている。どう決断を下したらよいのか考えているようだ。

俺はベルトからぶら下げたダガー（短剣）を抜き取ると、おもむろにジャンヌの目の前にかざしてみせた。手入の行き届いた刀身に、刻まれた親衛隊のモットーが浮かび上がる。

“ 忠誠こそ我が名誉 ”

「 跪け 」

低い声でそう令を下すと、ジャンヌは躊躇う事無く従った。ピン一本で結い上げていた髪を崩し、乱暴にひと房手に取る。隣に座るソフィーが息を呑む空気が伝わってきた。

ザクッ、ザクッ。

切り取ったジャンヌの髪が、はらはらと床へと舞い落ちる。
ザクッ、ザクッ。

途惑うことなく淡々と髪をナイフで切り刻んでいく。

「この長い髪でどれだけ男達をたぶらかせてきた？ …だからユダヤの女には悪魔が宿っていると言われるのだ。どうだ、今のお前に相応しい髪にしてやったぞ」

顎のラインでジャンヌの髪はぷつりと断ち切られた。ダガー（短剣）のせいか、長さが不揃いになっている。彼女は一切の抵抗をしなかった。生き延びる為の立ち振る舞いは心得ているらしい。

「いい趣味だな、テイル。お前を奴隷のようにこき使ったユダヤ女への復讐とは面白い。この女はここにいて、お前の世話に使うがいい。収容所から通わせるとシラミを持ち込まれる。屋根裏の女中部屋がひとつ空いているから、そこで寝泊りさせる」

ゆつくりとジャンヌは立ち上がった。そして何もなかったような落ち着きのある足取りで、ピアノの前へと戻っていった。自分の手に握り締めていたジャンヌの髪をそつとポケットにしのばせる。

「随分と手荒な事をなさるのね」

途惑った表情でソフィーが話し掛けてくる。

「相手によりけりですよ。私はちゃんとしたレディーには紳士だ」

思わせぶりの視線でソフィーを見つめると、その台詞は彼女の自尊心をくすぐったようだ。満足げにシャンパングラスを傾け視線を絡めてくる。

ソフィーのものとは違う視線を感じた。ピアノの方角…バンドネオンを抱えた男が、こちらを見据えて歩み寄ってくる。

ぞくり、青白い炎のようだ。この男、ただのバンドネオン奏者という訳ではなさそうだ。

「コーネン所長、お望みのものを手に入れて参りました」

男はふいに視線をコーネンに向け、一瞬にして愛想の良い笑顔を溢してみせた。ボソボソと、コーネンの耳元で声を潜めなにやら囁いている。男が差し出した葉巻を、コーネンは満足げに受け取る。そして、先端をナイフでカットすると差し出されたマッチで火を付けた。

この香り、コイーバではないか。キューバ産の最高級だ。戦況の行き詰まった今、やすやすと手に入るものではない。

「大佐殿もいかがですか？」

男が不意に話し掛けてくる。コーネンに向けていた時と同じ笑顔。

「いや、私は煙草はやらないので結構だ」

「ではコニヤックはいかがですか？ フランス産の最高級物をお持ちしますか」

ブラウンの髪を無造作に伸ばし、長い睫毛で視線を流されると女に誘われているような気さえする。体つきを見てみれば、線が細いながらも男らしい筋肉が服越しに伺える。

「カール、もう一曲タンゴを弾いてくれ。女が情熱的になるようなやつをだ」

コーネン所長が、そうリクエストをすると、カールと呼ばれた男はうやうやしくお辞儀をした。そのうしろ姿を見送りながら探りを入れてみる。

「あの男……何者ですか？ こんな葉巻を一体何処から」

「ポーランド育ちのドイツ人だ。街でドイツ兵を相手に洒落たナイトクラブを経営している。色々はこの物資不足のご時世に役に立つ男でな、まあ、ここポーランドでは顔が広いのだろう。何かと欲しいものを調達してくれるのだ。しかもバンドネオンも得意だというので、パーティがあるとたまに演奏を頼んでいる」

ポーランド育ちのドイツ人……。ドイツ主要の強制収容所はほとんど、占領国であるこのポーランドに点在する。あちこちの収容所で、闇市から仕入れた高級品を売りさばいているという事か。だが、侮れない男だ。本能がそう囁いてくる。

演奏者達の居る場所に奴が近づいていく。ジャンヌの脇を通り過ぎ様に、奴はそつと彼女の肩をいたわるかのように触れた。先程の騒ぎで、ジャンヌにユダヤ人の烙印が押されている事は承知のはずなのにだ。再びタンゴの音色が響く。

「踊ってくださいる？」

ソフィーが立ち上がり手を差し伸ばしてくる。

「喜んで」

指を絡め、頬を合わせ、タンゴの小気味のいいリズムに身を任せ、力を抜いてソフィーをリードする。バイオリンの音だけが際立って鼓膜を揺らす。ジャンヌ、君の奏でるタンゴで他の女と身体を寄せ合うとは……一体どんな運命の悪戯だ？

夕陽が落ちる浜辺で、君にタンゴを教えた。ちぐはぐな背の違い。この胸に頬をすり寄せ、裸足の君が悪戯に脚を絡めてくる感触が蘇る。どんな女も代わりにはならない。ソフィーと踊りながらそれを改めて噛み締める。

ジャンヌがボーイに連れられ部屋に連れて行かれる後姿を見届け、自分もあてがわれた三階の角部屋へと戻る。大きくせり出したバルコニーからは、収容所の灯りが眺められた。何重もの有刺鉄線に囲まれた建物が不気味に広がっている。

冬はマイナス二十度にも気温が下がるこの地も、まだ夏の名残を感じさせ風は心地良く頬を撫でる。ポケットに手を入れると、ジャンヌの柔らかい髪が指先をくすぐった。そと取り出し、手の平をひらくと、夜風にばらばらとさらわれていく。

ジャンヌ、ジャンヌ。この僅か数百メートル向こうの敷地で、どんな悲劇が繰り返されているか……。想像を絶する。口にするのもおぞましい光景だった。戦争とは全く関係ない無意味な殺戮。人間とは思えない程にやせ細り、生気を抜き取られた人々の群れ。

嫌悪感で吐きそうにさえた。悪魔に心売り払ってでも、あんなところにジャンヌを行かせるわけにはいかない。真っ直ぐに見つめてくるジャンヌの眼差しは、ガラス球のように静かなものだった。

俺との再会をどんな気持で受け止めたのだろう。彼女にとって一緒に過ごしたあのひとは、ほんの戯れのお遊びだったかもしれない。目の前に現われたのは、ただ忌まわしいナチスの男だと、心の

底から俺を嫌悪しているかもしれない

憎まれてもいい。それが彼女を生かす道ならば。ひと時、収容所行きを免れたとはいえ、ここはあの隙のないコーネン所長の屋敷。ここで監視の目が光っているか気を許せない状況だ。

ジャンヌにすら悟らせてはならない。彼女の命を守る為に俺が画策している事を。

出逢いは南フランスの片田舎だった。高台に広がる町をミモザの花が染め上げていた。黄色いボンボンにも似た花弁は春の柔らかな陽射しを含み、ふわふわと悪戯に揺れている。溢れるほどにその花を纏った木の下で、ジャンヌは片膝を抱えて座っていた。

学生服に相応しく髪を三つ綱に編んでいたが、その装いとは不釣り合いな大人びた眼差しを向けてくる。街に向かう小道に人影はなく、時間が止まったかのような午後。俺は海沿いの道よりバスを降り立ち、右も左もわからない状況で街を目指し坂を登り始めたところだった。何故、こんな所に少女が座っているのか不思議に思った。彼女の頭上でミモザの花が、黄金色の冠のように垂れ下がっている。視線が絡む。ここで出逢うと知っていた……そんな不思議な感覚に包まれる。一歩づつ坂を登り、少女に近づいていく高揚感。変な外国人だと怪しまれるのではないか。そう自覚しながらも視線を反らせられない自分がいた。

鞆を握りしめる自分の掌が、汗でじつとりと濡れている。何を意識している。たかが子供みたいな女ではないか。彼女の視線がふと俺の肩越しの海に流れる。潮風が、昂ぶる神経を優しく撫でていく。その風さえも彼女に操られている錯覚。

何に翻弄されている、湧きあがる心のざわめきは一体なんだ？ 彼女の横を素通りする事ができなかった。立ち止まり、真正面からその姿を捕らえる。投げ出した片足の白さが、眩しいほどの若さを

物語っていた。緩く編み込んだ三つ網が、彼女の両頬で揺れている。白いブラウス、紺色のプリーツスカート、ジャケットには凝った金ボタンが並ぶ……こんな田舎町には不釣り合いな学生服だと思えた。

「見ない顔ね、旅行者？」

「いや、働きに来ただ」

「こんな街で働きたいなんて、物好きな人がいるのね」

からかうような声色。ルージュなど引いてはいないものの、果実のようにふつくらとした唇。どうかしている……。覗き見をした時のような罪悪感さえ湧いてくる。

「足をくじいちゃったのよ、これじゃあ、歩けないわ」

そっと、少女は指先で足首を撫でた。蝶が……彼女の手の甲に小さな蝶が止まっている。無意識に視線は囚われていた。その眼差しに気づいたのか、もっとよく見えるようにと彼女は手を差し出してみせた。

「私の小さなパピオンに挨拶してくださいさる？」

パピオン……フランス語で蝶を意味する。彼女の手の甲で羽を休めているのは、決して飛び立つ事のない蝶の形をした痣だった。

「この痣……足をくじいた時にぶつけたのか？」

「いいえ、生まれつきよ」

“私の小さなパピオンにご挨拶してくださいさる？”

頭の中でさっきの台詞がこだまする。レディのように差し出された手に、気付けばそっと口付けていた。

「あたしジャンヌよ、あなたフランス人じゃないわね。でもフランス語、上手だわ」

つられて、自分の名を告げていた。

「テイルだ……家は遠いのか？」

ジャンヌは言葉で答える代わりに、指で示した。坂の下の海岸線に広がる……あれは葡萄畑か？ 広大な敷地。

「ねえ私、イエスが背負った十字架よりは軽いわよ」

一瞬、唐突なその言葉が意図するものが掴めなかった。ジャンヌ

はくすくすと笑いを噛み殺している。まさか、おぶって連れて行け
といたいのか。登ってきた坂道を再び下れと？

「俺が君を背負う？ 十字架を背負うみたいにか。一体どんな罪で
だ」

ジャンヌは唇の端を上げてみせた。いっぱしの大人の女のように
艶やかに、だ。

「年端のいかない女に、欲情した罪よ」

コーヒーの匂いが漂う。香りに誘われ、目覚めの余韻に浸る。背
を向けた女が、テーブルに朝食を並べていた。乱雑に切りそろえら
れた髪から青白い首筋が覗いている。昨夜と同じ黒いワンピースに
腰を包む白いエプロン。

夢を見ていた。懐かしいミモザの花が溢れていた。三つ網のおさ
げ。初めて口付けたジャンヌの皮膚の感触。

ギシッ。身体を横に傾けると、ベッドのスプリングが僅かな音を
立てた。びくりとメイドの肩が跳ね上がる。そしてゆっくりと振り
向いた。

「……グーテン・モアゲン」

随分と他人行儀な朝の挨拶をドイツ語でしてくる。幼さなど微塵
もない、大人の女に変貌したジャンヌがそこに居た。ベッドから裸
の上半身を起こすと、ジャンヌは椅子にかけてあつた薄手のガウン
を肩にかけてくれた。添えられた白い手の甲には…あの時と変わら
ないパピオン（蝶）の痣が刻まれていた。懐かしさに眩暈がする。
俺の世話を焼きながら、ひらひらと飛び回る紫の蝶。

「ジャンヌ、靴を磨いた事はあるか」

その問いかけに、彼女はゆっくりと首を横に振った。ジャンヌの
細い手首を掴み、引きずるようにバルコニーに連れて行く。そして
収容所の一角から煙を流す、煙突を指差してみせた。

「何の煙かわかるか？」

ジャンヌは再びゆつくりと、首を横に振ってみせた。

「役に立たないユダヤ人を焼却している。お前もあの仲間に入りた
いか？」

ジャンヌはじつと収容所を眺めた。その瞳からは、恐怖やおびえた様子は伺えない。ただ真実を確かめようと、食い入るように収容所の煙突を眺めている。

「俺は昼間、仕事で出掛けている。その間メイドの仕事を他の者からじつくりと教えてもらえ。何も出来なければ役に立たない人間として、辿り着く先はあの焼却炉だ」

…… 本当は、抱き締めてしまいたいのに。小さな君のパピオン（蝶）に、再会の口付けを捧げたい。こんな異常な状況でさえ、彼女を求める火種をくすぶらせるとは。

まだ夜気の名残のある朝の空気が、さらさらとジャンヌの短くなつた髪をなびかせる。あそこまでのパフォーマンスをみせなければ、コーネンはジャンヌをメイドにする事に興味を示さなかつただろう。ジャンヌが俺の視線をはぐらかすように、すつと部屋に戻っていた。見つめすぎたのかもしれない。その時だった、ドアをノックする音が響いたのは。訪れたのはソフィーだった。既に着替え、化粧まで済ませてある。

「ねえ、よかつたら、一緒に朝食をいかがかしら？」

気をつけなければ、そう、特に同じ屋根の下で一緒に過ごすソフィーには。女は勘が鋭い。釘を刺しておく必要があるそうだ。

「彼女の朝食をこちらの部屋のお運びしろ」

そつけなく言い放つと俺は立ち上がり、レディの為に椅子を引いた。

「こんな寝起きで失礼。今朝は少し朝寝坊をしてしまった」

いいのよ。そうソフィーは口にすると、いつもの自分をもっと遅くに起きるのだと告白してくる。ここにいる間は家族みたいなものよ。堅苦しいのは私趣味じゃないの。こんな女はお嫌いかしら？」

「……いや、大歓迎だ」

ジャンヌがソフィーの分の朝食を運び込んでくる。黙々と静かに、意外にも手馴れた様子でメイドの役を見事に演じている。時々ソフィーがジャンヌの様子をチラリと盗み見ている。明るい色のワンピースを艶やかに纏う女の隣で、影のように色を潜めながらもジャンヌは美しい。気になるのだろう。女のサガというものだ。

「おい、朝食の準備が済んだらさっさと靴を持っていけ。三十分後には綺麗に磨き上げてここに運んで来い」

部屋の隅に置いてあった軍服用のブーツを、俺はわざと乱暴にジャンヌの足元に投げつけた。ジャンヌがかがんでそれを拾い上げる。自分の椅子に戻る前に、そっとソフィーの背後に忍び寄る。アッシュブロンドの巻き毛。その髪をひと房すくい上げると、意味ありげに口付けてみた。

「テイル……くすぐつたいわ」

媚を匂わせる甘えた声でソフィーは顔を赤らめた。媚を含んで見上げてくる瞳はシルバーグレイに輝いている。黙り込んだままジャンヌが、靴を抱え部屋を出て行くのが目の端に映る。

どこかで安堵している自分がいた。だが、観客が退散しても続ければ。ソフィーが期待している気配が伝わってくる。

そっと目を閉じると、夢の続きが浮かんで消えた。瞼の奥の残像は、三つ網をほどこいたジャンヌのウェーブを描くプラチナブロンド。柔らかな髪をこの手で梳いた感触が蘇る。身体の奥底でぶすぶすと、欲情の火種がくすぶる。

たまらない気分でソフィーの髪に、鼻先を埋め再び口付ける。けれども俺の鼓膜を蕩けさせる、あの甘い吐息とは違う女の息づかいが聞こえるだけ。

ミモザの花は何処にもない。短い夏を終え冬に向かえば、何もかもが死に絶える、荒れた大地が広がる事だろう。

魔法の指輪（ジャンヌ）

あの頃の私は、乾いていた。ひび割れるほど干からびた心に、一滴の恵みの雨が落ちる日をじっと待ちわびていた。

坂道を登ってくる男の姿を見たあの瞬間。海からそよぐ潮風も、ミモザの木陰が作る影模様も、時が止まったかのような私の心に焼き付けられた。くじいた足など大した事はなかったのだ。ただテイルという名の背の高い男を、繋ぎ止めるいい口実にはなった。

学校の男の子達とは違う、パパとも違う、大人の男。私と出会ってしまった戸惑いを、瞳に滲ませ立ち尽くす姿が愛しいと思った。そんな瞳で真っ直ぐに射ぬかれた瞬間……私はこの男に選ばれたと感じた。必要とされているのだと。それは私の身体の奥底を爪弾いた。震える振動は甘い渦きを伝えてくる。

逢いたかった。

初めて出逢った見ず知らずの外国人に、どうして懐かしいなどという感情が芽生えるのか。

逢いたかった。

今日まで、ずっとずっと見失った何かを探し求めていた気がする。私を背負う広い男の背中の中。温もり。ひたひたと心を満たしていく安堵感。そっと背後から男の肩に顎を乗せてみる。

話はとつくと途絶えていた。だが沈黙は決して重苦しくのしかかる種類のものでなく、私は少し早い彼の呼吸に耳を傾けた。

庭番のジョンが私達の姿を認めると、慌てた様子で走りよって来る。私が子供の頃からずっとこの家に務めている古株の使用人だ。口調が田舎者丸出しだったが、のんびりとした様子がこの土地らしさを物語っている。

「お嬢さま、どうされた。またお迎えの車をまいて歩いて帰られたんですかい。転ばれたのか？ おや、どこぞ怪我をされた？ 大変じゃ」

幼い頃からよく知るこの庭番は、しおらしく私が男の背におぶわれているとは信じ難く、余程の怪我を負っているのだと勘違いしてしまっただけらしい。

「大した事ないわ。足をちよっとくじいちゃったのよ」

ティルの背中から降り、ひよこひよここと歩いてみせる。

「どうもお嬢様がお世話になって……おや、あまり見掛けない顔だね、旅の方ですかい」

「いや、ホテルに職があるというので働きに来たのです。道の途中に荷物を置きっぱなしなので、これで失礼を」

ティルの旅行鞆は私を背負っては持てないので、ミザモの木の影に隠してきた。あんな年季の入った鞆、誰も盗らないわよ。引き返そうと急ぐティルに、心の中でそう毒付く。

「ホテルですかい。なんてホテルかね」

「……サンセット・ヴィレッジ」

「えっ、そりや大変だ」

すっとんきょうな声を出してジョンは目を丸くしてみせた。

「何か？」

怪訝そうな顔でティルは短く問いたです。ジョンは言いづらそうに答えた。

「二週間ほど前あのホテルはひと騒動あつてね、なんでも奥方が愛人と売り上げを持ち出して駆け落ちしたそうだな。旦那は月末の支払いに首が回らないわ、いい笑いものだわで、ホテルは人に譲ることにしたって噂を聞いたがね」

「そんな……従兄が仕事があるからと……こんなところまで足を伸ばしたというのに」

「その従兄って口髭生やした黒髪のドイツ人かい」

ティルが肩をすぼめながら頷く。

「そいつだよ、奥方の愛人は。一年前から住込みであのホテルで働いていた」

ティルは黙り込んだまま踵を返し、2・3歩進むと立ち止まった。

私達に背を向け、押し殺した声でドイツ語を呟いた。

「Zum Teufel（畜生）」

夕陽が彼の髪を金色に染め上げている。苛立ちに震える男の背中に、そつと手を添えてあげたい。大丈夫よ、私が守ってあげるから。けれども、意外にも救いの手を先に差し伸べたのは、世話好きでお人よしのジョンだった。

「あんた、どこから来たんだい？」

「ドイツ。ベルリン……だ」

「そりやまた遠くから来たんだねえ。まあ、若いうちは国を出て色んなところで働いてみたいもんだ。

良かったら、しばらく葡萄畑で働いてみたらどうだね。ワイン工場の方も人手はいつも足りない」

「え……」

ティルは驚いた顔で振り向いた。きょとんとした顔でジョンを見詰め、そして途惑った眼差しを私に向けた。

「あ、でも住込み用の部屋は余っていたっけな」

ジョンが今更に困った顔をしてみせる。私はさりげなく助け船をだしてあげる。努めて素っ気なく、だ。

「ボート小屋の休憩室を使ってもいいわよ」

あとはジョンに任せればいい。皆に、ティルを紹介してまわるのだろう。

偶然の運命で絡み合ったティルとの接点。だけど、不思議とそれは約束されていたものなのだなと思えた。もつともつと、彼に関わりたい……。けれども、どう振る舞っていいのか分からなかった。意識する程に、冷静を装ってしまう。

「私、部屋に戻るわ。運転手にあなたの鞆を運ばせるから取りに戻らなくてもいいわよ」

くじいた足のせいにして、わざとゆっくりと歩き出す。背後でティルとジョンの話し声が聞こえる。

「……ン又お嬢様ですかい、来月十五歳になれるんじゃないかった

かの」

余計なお喋りを……舌打ちしたい気分で振り返った。ジョンは背を向けている。その肩越しに見えるティルと視線が絡んだ。

私の噂話はそのくらいにして。そう言いたげな眼差しで、人差し指を口元に立てる仕草をしてみせる。ティルは最初出逢った時と同じ困惑を浮かばせている。大人びた真似をしても、所詮まだ子供だったのかと、呆れているのかもしれない。

そう、子供だ。同じ年頃の男の子達と交わす、おふざけのキスしか知らない。未知の快楽に足を踏み入れる高揚感で、少年等は相手の心中など探る余裕など無い。ためらいや、戸惑い、困惑などを漂わせた男の瞳で、女の背中を優しく撫でる術など持ち合わせてはいない。

ティルの瞳に溺れる息苦しさ。初めての感覚なのに何故か懐かしと感じた。

首元で途切れた髪が、首筋を悪戯に撫でる。短くしたのは初めてだ。髪を掴まれるときに触れたティルの指の感触……殺してくれるのかと思っただのに。チラチラと光を弾くダガー（短剣）が鼻先に触れた時、恍惚とその冷たさを味わった。

収容所まで辿り着く道ので思い知らされた。人の命が虫けら以下と見下される狂気が存在する事を。おもちゃのように他人に運命が弄ばれる。私は煙突から立ち昇る煙になんてなりたくはない。

ティル、ティル……。いつかその日が来たら、貴方の手で私を楽しみにしてくれるのよね？ 自分が奏でるヴァイオリンの音に揺れる、ティルと女のシルエツトが脳裏をよぎる。二人の為に朝食の皿を運ばされた。馬鹿ね。何とも無いわ、こんな事で私は傷付いたりなんてしない。

心を閉ざそう。何を目にしても、何を聞いても感じる心を凍らせ

てしまえば、固い殻が私を守ってくれる。彼の為に靴を磨く、シーツを洗う、床を磨く。

ティル、ティル……。今回は、貴方の為に私が跪く番。喜んでその役目をこなしてみせよう。だって……ねえ目を閉じると浮かんでくるでしょう？ あのボート小屋の窓から覗いていた海の色が。ブルーいや紺碧^{アジユール}。どんな過酷な環境にしようとも、南仏の温暖な陽射しを映す碧い海が、幸福のため息を添えて瞼の裏を覆い尽くす。

屋敷の裏庭を抜けると、海岸に面して建てられたボート小屋があった。数隻のヨットが収納され、海に面したテラスを持つ居間がひとつ作りつけられている。初めて出逢った日よりティルは、波音に包まれた小さな部屋に住みついた。テラスの先からのびる棧橋は、海へと続いている。突き出た岩に囲まれた小さな入り江には人氣が無く、いつもひっそりと静まり返っていた。パパが夏にパリより訪れる日まで、このボート小屋からヨットが出航する事は無い。棧橋は私のお気に入り場所だ。そこに立ち、海に向かってヴァイオリンを奏でると、波音が伴奏をつけてくれる。

砂浜が夕陽に染め上げられる頃、仕事を追えたティルが葡萄畑から小屋に戻ってくる。そのタイミングを見計らい、私はボート小屋の扉をノックした。思わぬ来客だったのだろう、ティルは突然目の前に現われた私を、どう扱ったらいいのか途惑っていた。まだ仕事を始めて三日目だというのに、彼の顔は最初に会った時よりも随分と日焼けして見えた。

「あなた、車の運転は出来る？」

唐突に尋ねた質問に、ティルは返事もせず不機嫌さを漂わせる。

そして小さなため息と共に、吐き出すよう口にした。

「お嬢様の気紛れに、振り回されるのはこりごりだな」

ティルの髪は濡れていた。葡萄畑の脇にある、樽をぶら下げた使

用人用のシャワーを使ってきたのだろう。前髪からポタポタと落ちる滴が、彼の肩を濡らしていた。

「街の本屋に行きたいのよ。なのに運転手はさっき帰ってしまったの。奥さんが急に産気づいたのですって」

ティルの瞳から威嚇するような鋭さが消えた。身構えすぎたバツの悪さからか、絡んでいた視線をはぐらかす。

「……運転できる者は他にもいるでしょう。何でわざわざ俺なんか……」

「あなたがいいのよ」

私はまっすぐに、背の高い彼を見上げた。不意討ちに投げつけた告白は、彼を一瞬放心させたようだ。呆然とした眼差しは無垢な少年のようで、私の心を摘みあげる。

「ベルリンの話なんて聞いてみたいもの、ねっ」

無邪気を装う事で、先程の思わせ振りの台詞を誤魔化してみる。

ティルは観念したように扉の外に足を踏み出した。

ミザモの花が咲き乱れる道を、車はゆっくりと駆け抜ける。高台より海を見渡せる小さな田舎町へと向かう。パリの洒落た空気に馴染んだ私にとって、欠伸が出そうな程に退屈な場所。

「旦那様はパリに住んでいるんだってね。どうして君一人こんな所で暮らしているんだい？」

手馴れた様子でハンドルをさばきながら、ティルは後部座席に座る私に話しかけてくる。狭い空間の中での沈黙は、居心地が悪いようだ。ぴつたりと身体を張り付かせていた三日前には、言葉など必要なかったはずなのに。

「パパを自由にしてあげるためよ。パパにね恋人が出来たの。ずっとママの死に囚われていたパパが、やっと他の人を愛し始めたって訳」

意外な台詞だったのだろう。ティルは返す言葉を失い黙りこんだ。開け放った窓から忍び込む風が、彼の悪戯に髪をもてあそぶ。背負われた時、頬に触れていた髪感触が蘇る。風に吹かれすっかりと

乾いたティルの襟足を、眺めながら話を続けた。

「自分の命が尽きるまで、生涯愛するとママに誓ったのに……そんな呪縛がパパを苦しめ始めたの。」

いいのに、他の人を愛しても。パパが幸せならばそれでいいじゃない。馬鹿みたいに真面目で不器用な人」

でも、そんなパパだったから私はすんなりと、新たな恋人の存在を受け入れられたのかもしれない。

「私ね、死んだ母によく似ているの。年を重ねるほどにママに似ていく私の存在は、もうパパにとって微笑ましい愛の証ではなくなくなってしまうたつて訳。罪悪感を蘇らせる憂鬱の種なのよ」

葡萄畑を携えるワイン工場は、父の生家だ。祖父母が亡くなってからは、夏のヴァカンスを楽しむ別荘として使用していた。葡萄園と醸造所は、昔から勤める腕の立つ職人達に任せておけば安心だ。パパはパリに暮らしながら、生産した最高級ワインを世界中に売りさばいていた。ミモザの花を描いたラベルが目印のボディ。パリのどんな高級レストランにも、うやうやしくそれは並べられていた。

丁度、この街の外れにパリ音楽院管弦楽団を引退したヴァイオリニストが一人住んでいた。そんな偶然も、この町で暮らす決意を後押ししてくれたのかもしれない。先生は個人レッスンを申込むと快く引き受けてくれた。他に生徒はいない。有能な先生を独り占めとは贅沢な事。半年前からここに住みはじめた。学校は馴染めない。でも独りが好きな私にはそんな事はどうでもいい。

町の本屋は雑貨屋やカフェも兼ねている。別に欲しいものなど無かった。ただ、ティルを連れ出すきっかけが欲しかったただけ。店の前に止めた黒塗りの高級車に、女店員はちらりと視線を向けた。この店に足を踏み入れる事など滅多に無い。珍しい客が来たものだと思っっているのだろう。

ちらりと、彼女は店の隅に立つティルを盗み見ている。値踏みするような視線。合格だとその眼差しが物語っている。

「アイスキャンディー頂戴、ふたつよ」

視線を遮るよう、私は注文を申し付けた。彼女は曖昧に頷くと、のろのろとストッカーから品物を取り出した。

「ねえ、お宅の運転手……最近ベルリンから来たっていうあの人の？」
気になって仕方が無いという様子で、彼女は私に探りを入れてくる。ベルリンから来た……狭い町ではもうテイルの存在は広まっているようだ。

「そうよ、でも手を出さないでね、私の恋人にするんだから」
彼女は一瞬目を丸くして、そして可笑しそうにクスクスと笑い出した。冗談だと思っているのだろう。

「あら、素敵な指輪ね」

代金を差し出す私の手に彼女は注目した。女は本当にこういう物には目ざとい。

「すごいわ、小さい石なのに良く見るといろいろな色が浮き上がってくるのね」

「特別な指輪なの。オパールよ」

しばらく眺めた後、彼女は肩をすくめて見せた。

「でも、まだアイスクャンディーが恋しいお嬢ちゃんには早いんじゃない？」

からかうような声色。私はむっとした顔で彼女を睨み、失礼な女の姿を眺める。豊かに成熟した身体が、透かし模様の入ったコットンブラウスに包まれている。唇の存在を主張する赤いルーージュ。

あなたなんて……。

この指輪はママの形見だ。小さな頃からこの不思議な石を、憧れの眼差しで眺めてきた。爪先程の小さなオパールが、リングの曲線に沿って五つ連なっている。七色に滲むグラデーションが、願い事を口ずさめと語りかけてくる。魔法の石だからと。

早く大人になりたいと思った。テイルを誘惑する女達がかすむような大人の女に。そして、彼を跪かせるのだ。お金が沢山あっても心の底から欲したものなど記憶に無い。けれどもテイルの全てが欲しいと、私の中で本能がこの石に囁きかける。

お釣りを受け取ると、真っ直ぐにティルに向かって歩く。私が近づく様子を、彼は壁にもたれながら眺めている。と、その時だった。背後から私を追い越した男が、ティルの胸ぐらを掴んで外に引きずり出したのだ。

ガタンっ！ けたたましいドアの音に、私にからかいの眼差しを向けていた店員も目を丸くしている。ドアの外に飛び出すと、車の陰で男がティルに向かって拳を振り上げるのが見えた。思わず体が強張り、手にしていたアイスクャンディは足元にぽとりと落ちていった。

ティルの頬に向かって勢い良く飛んでいく拳が、鈍い音を響かせるかに思われた。が、ティルは寸前のところでヒラリと身をかわしてみせた。

「……の、ドイツ野郎っ」

ティルに襲い掛かる男の声は少し酔っているようだ。やみくもに拳を振り下ろすものの、ティルは弄ぶようにその攻撃を避けてみせる。

「お前、あの男の従兄なんだってな。落とし前はつけてもらうぜ。よくノコノコと、この町に顔を出せたもんだ」

肩で息をしながら、男はそう吐き出した。男は、ティルが最初目指していたホテルの主人だったのだ。もう、殴りつけるのは無駄だと悟ったのだろう。赤らめた顔で恨めしそうにティルを睨みつけてくる。

「あの男が持ち出した金を精算してもらおうか。それでなけりゃ、ドイツまで出向いて奴の親に掛け合うまでだ」

「何を……」

「まったく、いい笑いもんだぜ。女房までそそのかされてよあ……この町にやもう暮らしちゃいけねえや。このまんま泣き寝入るするなんざ、腹の虫がおさまらねんだよっ。あいつが持ち出した金の額を知っているか？ ホテルを改装する為に貯めていた、有り金全部持っていつちまったんだぜ」

黙って話を聞いていたティルが、おもむろに頭を下げた。

「……申し訳なかった」

その様子を目にし、調子付いた男は更に声を荒げて言葉を続ける。
「頭なんか下げられたってどうしようもねえんだよっ」

だが、ティルは更に深く頭を垂れた。

「あいつの実家には年老いた母親がいるだけだ。代わりに金は、俺が働いて返す」

きよとんと、目を見開くと、男は顔を歪めて笑い始めた。

「ああ？ 少しづつ返しますなんて、お涙頂戴のこと言ってるんじゃないよなあ」

雑貨屋の客達が、窓からこちらの様子を伺い見ている。騒ぎを大きくしても面倒だ。私は二人の間に割って入った。

「話の続きは車の中でしょう。お宅までお送りしますから」

小娘が……と男が、喉元まで出かかっている言葉を飲み込む気配が感じられた。あのワイン工場の令嬢だと、臆するものが彼の言葉を閉じ込めたようだ。

ティルは男を車に乗せることを拒んだ。「お嬢さんには関係ないことだ」小さく押し殺した声色で私を諭す。

「昼間と違って私、こんな夜道を歩いて帰る趣味は無いの。こんなところで騒いでいたって埒があかないでしょう？ それに皆が見ているわ。私、さらし者になるのなんて真つ平ごめんですからね」

走り出した車の中には、男が吐き出す酒の匂いがすぐに漂い始めた。さりげなく窓をおろし、後部座席で居心地悪そうに座る男の顔を間近に見据える。この男はとんだ拾い物に違いない。素晴らしいと言う意味でだ。込み上げる笑いを押し殺し、私は子供だと見くびられないよう、顎を上げて男と向かい合う。

「精算するわ、利子をつけてね」

中指にはめてあったオパール指輪を、そっと抜き取る。

「どれだけ価値があるものか、まさか私の持ち物を疑ったりはしないわよね？ この町で売れるような代物じゃないわ。それなりの宝

石店でちゃんと鑑定してもらって頂戴」

親指と人差し指で摘んだリングを、男の目の前にちらつかせる。

男の喉がごくりと上下するのが見えた。

「へっ、いやもうそういう事ならば……さすがブルー二家のお嬢様だ。話がわかるってもんだ」

男は物欲しげに手の平をさらしてみせた。早くこの上に置いてくれと言わんばかりに。

「彼女は関係ないだろう！ お嬢さん、あんたもあんだだよ。大人の話に口を出すのは止めてくれて言ってるんだっ」

動揺しているのだろう、ハンドルさばきを誤ったのか、車は一瞬ぐらりと揺れた。キキッと、甲高いタイヤの叫びが暗い夜道に響き渡る。

「ちゃんと運転して頂戴。この町には腕の立つ医者はいないのよ」

この商談にテイルは邪魔者だった。彼に深いかかわりがある出来事だというのに、本人を疎外したまま話は続いた。まだ……まだだ。思わせぶりに手の平に指輪を落す素振りを見せながら、私は条件をひとつ提示してみせる。

「明日には町を出て行って欲しいの。ホテルはもう買い手が付いたそうね。それから今夜のことは他言無用よ。皆が噂好きなのは知っているでしょう。あなただって、下手に喋って損はしたくないはずよね？」

「……そりゃごもつともで」

この尋常ではない行為が知れ渡ったら、ウチの人間が指輪を取り返しにくるかもしれない。男は酔っていないながらも、金勘定をすることを回路に残っているようだ。

「とめてくれっ」

男の叫び声にテイルはブレーキを踏んだ。

「お嬢さんの気紛れが変わったらたまねえや。今からでも町を出ますぜ」

男は素早く車の扉を手をかけると、勢いよく外へと飛び出した。

「おいっ、待てよ！」

ティルは慌てた様子で車を降りた……が、もう夜の闇に紛れて、男の姿ははるか遠くに消えていた。興奮の為か、息を荒げていた男の酒臭さが再び車内で鼻につく。新鮮な空気を味わう為に、私も外に足を踏み出した。

「……取り返してくる」

独り言のように呟き、走り出そうとするティルを私は制した。

「こんな所に私を置き去りにする気？」

「いい加減にしてくれよっ！」

暗い車のライトに照らされたティルの瞳には、苛立ちが滲んでいた。けれどもそんな威嚇に私はひるんだりはしない。リングをあの手で落とした瞬間、身体の奥底に潜んでいた隙間が埋められていく安堵感に包まれた。高揚感に眩暈がしそうだ。

「さつき、店員に話していただろう？ 大事な指輪じゃないか。金は俺がなんとか……」

「あら、あげた訳じゃないのよ。ちゃんと返していただくわ。ただし、時間外労働だね」

予想もしない台詞だったのだろう、ティルは言葉を失い立ち尽くしている。

「私のために働いてもらっわ、支払いが終るまで……ずっとよ」

何をしろというんだ？ 言葉の代わりにティルはそんな眼差しを投げかけてくる。怯えさえ伺わせる彼の戸惑いが、ただ愛しい。

大切な指輪だった。かけがいのない程に。けれども願い事と引き換えに、虹色の魔法の指輪は消えただけの事。ありがちな童話のようだ。

「私、すごく退屈しているのよ。遊び相手が欲しいの」

「……遊び相手」

「葡萄畑で働いている間は声をかけないわ。でもそれ以外で私があなたを欲したらいつでも側に来て。それが仕事の内容よ」

「……よく……分からないな。そんな仕事は経験がない」

「もう賃金は先に払い済みよ。あなたもさっきの男みたいに逃げ出す？ 私、追い掛けたりなんかしないわよ」

からかうように口の端を持ち上げ、ティルに笑いかけてみる。

「俺は逃げたりなんかしない。ただ何をしたらいいのか具体的に教えて欲しいと言っているんだ」

覚悟を決めたのか、きつぱりとした口調で挑むようティルは言った。

やっと捕まえた。私はもう夢中だった。これから始まる日々を思うと鼓動の音さえ早まっていくな。

「お嬢様の気紛れに、日々付き合ってくればいいだけの事よ」

さあ、行きましようよ。と、ティルの手を取る。大きな手。私のものだ、手の平の温もりも、戸惑いさ迷う指先も。迷子の子供が手を引かれるよう、ティルは私に従っている。

私はあなたと出逢ったほんの一瞬で、悟ってしまった。運命だなんて陳腐な存在を。でもきつとあなたはまだ、その本当の意味に気づいていないのでしょうか？ だから導いてあげる。あなたの為に私が存在しているって気付く場所にまで。

ざわめく夜の隙間から、運命の歯車が絡みあう音が、静かに響き渡ってくるような気がした。

絡み合う時間（テイル）

“お嬢様の気紛れに、日々付き合ってくれればいいだけの事よ”

彼女が何を求めているのかだなんて、全く見当もつかない。そして再び指定された行き先は、先程の雑貨店だった。車で待機するようになつて、ジャンヌは一人店へ入っていく。しばらくして戻ってきた彼女の手に、握られているものは……アイスクャンディだった。それも二つだ。

さつき食べそびれたから、再び買いに戻ったと言うのか。肩から力が抜けるのを感じた。大人ぶってみたところで、やはりまだ年相応の少女なのだ。

「車を出して頂戴、言う通りに走ってね」

とけてしまうからと、片手にアイスクャンディを持たされ、舐めながら運転をさせられる。ミルクの香り。こんなものを齧るのはいつぶりだろう。車はすぐに目的地に着いた。アイスクャンディはまだ半分程残っている。ライトをつけたまま車を降り、外気に触れる町一番、見晴らしのよい高台なのだとジャンヌは言った。遠目に広がる海は闇に吞まれている。ポツリポツリと光って見えるのは……船だろうか。

「とけちゃうわよ」

からかう声色にはっとしたのと、棒を伝って流れてくる液体が指を濡らしたのは同時だった。いつの間に平らげたのか、とつくに食べ終えたジャンヌが、くすくすと笑いながらこちらを眺めている。

「ね、手伝ってあげる」

手伝う……何を？ そんな疑問を頭に浮かべながら彼女を見詰め返すと、白くて華奢な腕が伸びてきた。アイスクャンディを持つ指に、ジャンヌの指が絡まる。彼女は俺の手と一緒にアイスクャンディを自分の口元に引き寄せると、ぺろりと舐めてみせた。

「なっ……」

予期せぬ行動に体が硬直する。

シャリシャリシャリ。とけかかった氷を噛み砕く振動が伝わってくる。

シャリシャリシャリ。ジャンヌの唇が、アイスの棒を握り締める指先にかすかに触れる。僅かな間の出来事。けれども時間の感覚がぐらりと歪んだ気がした。

「ご馳走様」

するりと俺の手から、ジャンヌの指がすり抜けてく。

「……随分とお行儀の悪いお嬢さんだな」

そう口にしてみせるのが精一杯だった。どくどくと波打つ心臓が、喉元までせりあがる感覚に息が詰まる。

「風が出てきたわ、そろそろ帰りましょう」

何事も無かったかのよう素っ気無く、ジャンヌは踵を返し車に向かう。自分の役目を思い出し、俺は足早に彼女を追いかけた。

ガチャツ。車のドアを開き、ジャンヌを中に招き入れる。俺の脇を通り過ぎる時、ジャンヌの長い髪がふわりとなびくのが見えた。月明かりに輝きを放つプラチナブロード。ちらつく残像を振り払い、運転席につく。扉を勢いよく閉じると、車内は静寂に包まれた。

プジョー402。黒光りする美しい車は、車内までもが隙の無いモダンさを漂わせている。たかが少女の送迎に走らせるには、不釣り合いな高級車。いや、後部座席に座るジャンヌを見ても。いっぱいしのレディのように、とりすましてたたずんでいる。ついさっきまでこの手から、甘いお菓子をついばんでいた事なんて、素知らぬ振りだと言わんばかりだ。

俺はどうかしている。こんな子供に振り回されているだなんて。だが彼女は自分の持ち物で、借金を清算してしまったのだ。返済するためには働かなくては。

“お嬢様の気紛れに、日々付き合ってくれればいいだけの事よ”

これが彼女の望みだというのか。大人の男をからかい冷やかす事がか？ 大人びた仕草の狭間に、少女のあどけなささえまだ見え隠

れする……そんなジャンヌに惹かれてしまう背徳感。ベルリンからはるか遠い南フランスの地まで……これではジャンヌに会うが為に、旅して来たようではないか。ジャンヌに出会う為に……。ハンドルを握り締め、悟られないよう小さく息を吐く。息苦しい。この甘美な息苦しさに溺れてしまいそうだ。

コーネン所長の屋敷では、頻繁に贅沢な夜会が催された。強制収容所を視察にくる高官は後を絶たなかったし、もともとコーネンはお祭り騒ぎが好きな男だった。その度にジャンヌは演奏に借り出され、俺を睨みつけたあのバンドネオン奏者もよく顔を見せた。

パーティはあまり趣味ではない。人の波を抜け、独り外のテラス席に避難する。室内の喧騒とは違い、テラスはひっそりと静まり返っている。

ポケットに忍ばせていた煙草を取り出し、火をつける。窓越しにジャンヌの姿が見えた。演奏の合間の休憩だろうか、椅子に座り、じつと足元に視線を落としている。

そうだ、それでいい。好奇心で周りを見渡していたりすれば、誰にどんな言いがかりをつけられるのかわからない。ここに来て数日で、ジャンヌは見事なまでに周りに溶け込む術を身につけていた。ブーツを磨き上げる時間も、随分と短くなっている。こんな風に、人目を気にすることなくじつくりと、彼女を見詰めたのは再会してから初めてかもしれない。室内からこのベランダを覗く者がいても月明かりさえ無いこんな夜は、ただの暗がりに見えるだろう。

煙草を深く吸い込むと、赤々と小さな火種が色を放つ。外に人が立っているのがばれてしまう。この明かりは命取りだ。苦笑いを噛み殺しブーツの先で煙草を踏み潰す。

ジャンヌ……ジャンヌ……。

彼女の魅力は発展途上の少女特有の、危うさから醸し出されるものなのだと思うっていた。蕾だからこそどんな花を咲かせるのか、思い巡らせる事が魅惑の源なのだと。だが大人になり花開いた彼女を目の前にし、この奇跡に感嘆せずにはいられない。

ヴァイオリンを弾きこなす時には、燐と咲く大輪の花。息を潜め視線を落す姿は、風の赴くままに揺れるミモザ。視界の端に映るだけで、その美しさに釘付けにされる。

「煙草はお嫌いかと思っていました」

不意に背後からかけられた台詞に、全身冷や水を浴びせられたような衝撃が走る。振り向かなくてもわかる。この声……あのバンドネオン奏者だ。

コイツは本当に何者だ？ 振り返ると、奴は涼しい顔でほんの数歩背後に立っていた。存在感ひとつ匂わせることもなく、暗闇に溶け込んでいる。もしここが戦場ならば、俺は頭を撃ち抜かれていたかもしれない。

「まあ、気晴らしに一服もしたくもなりますよね。強制収容所通いは気分が滅入るでしょう」

俺は眉をひそめてみせた。そう心の中で思っても、ナチの政策に批判的な発言を親衛隊相手に公然と口にしてみせるとは、随分な度胸だ。ただの馬鹿か、それとも……。

「西にあるアウシュビッツ収容所には行ったことがありますか」

「……いや」

「あそこに比べたら、ここはまだ天国ですよ」

にこりと笑顔を向けられる。男の癖に柔らかく何処か慈悲に溢れた笑み。癖のある波打つ髪、白い肌、闇夜を溶かした瞳。どこかの壁画に描かれた大きな翼を広げた天使のようだ。そんな顔で、より地獄に近い収容所があるのだと微笑まれても……優美な男の裏に潜む冷淡さを、覗き見た気持ちにさせられる。

「今夜は一段と賑やかな夜だ。ああ、失礼。そろそろ演奏に戻らなくでは」

カール……そうだ、この男の名はカールといった。カールは、真っ直ぐな視線で俺を射抜く。親衛隊に媚びへつらう、愛想笑いがそこには無かった。

「……カール」

パーティの喧騒に戻る為、俺の脇をすり抜けていく男の背に声をかける。

「君は地獄と天国、どちらがお好みかな」

奴は振り返った……ゆつくりと、薄い笑みさえ浮かべてだ。ガラスから漏れる部屋の灯りが、カールの頬を染めている。

「俺は生粋の商売人ですから、天国でも地獄でも金となる木が生い茂っている方に惹かれますね」

にやりと意味深な目配せを注がれ、ついこちらも自嘲するような笑いが零れる。面白い、だがやはり油断なら無い男だ。

部屋に入っていく奴の姿を目線で追う。カールは椅子に座るジャンヌに真っ直ぐに近づいていった。うつむき無表情だったジャンヌの顔が、ほころぶ様が見て取れる。胸の奥で、何かがチリチリと音を立てる。懐かしい痛みだと感じた。

馬鹿な……たかがこんな事で。嫉妬。ジャンヌの微笑みの欠片でさえ、誰かに分け与える事が嫌なのだと、子供じみた独占欲。自分にも、こんな感情があるのだと、七年前ジャンヌは俺に知らしめた。そして再び時を経て、この思いを噛み締めようとは。

お前だけだ。

ジャンヌ、俺の心をかき乱す事ができるのは、いつまで経っても……お前だけだ。

町へと続く坂道を登る。初めてジャンヌと出逢ったミザモの木を通り過ぎる。たった数日前の出来事だというのに、あの時の自分を遠くを感じる。ジャンヌを知る前と知った後、自分の人生がそこで

線引きされただなんて…… どうしてそんな感覚に囚われてしまうのか。

坂はなだらかに続く。バイオリンのレッスンに迎えに来いというのだが……何故わざわざ徒歩で？ 葡萄畑からジャンヌが指定した場所までは、歩いて三、四十分はかかる。まさか、またおぶつて帰れなどと言い出すわけでもあるまい。海から吹き上げてくる潮風が、ひと時の癒しをもたらしてくれる。

あとひと息だ。指示された建物へと続く道を曲がると、滑らかなバイオリンの音色が響いてきた。音の源は鬱蒼と生い茂る木々に包まれた、音楽家らしい情緒豊かな館。レッスンはまだ終る様子が無い。少し周囲を散歩してみるかと踵を返す。

木々の間から漏れてくる夕陽が、地面に描く不思議な模様を踏みしめながら歩く。高台の町からは、何処からも海を眺める事が出来た。ベルリンには海は無い。縁遠い風景なはずなのに……海を感じながらの生活に、不思議と懐かしさを噛み締めていた。

寝泊まりしているボート小屋のベッドには毎夜、潮風がそよぐ。海を彩る太陽の移りゆく様。そして、ちゃぷりちゃぷりと棧橋に打ち寄せる波が奏でる水音。今まで自分が生活していた環境と、こんなにも違う場所だというのに、胸がざわめく。かつて味わった事の無い切なさを添えて。

しばらく歩いて再び元の道に辿り着く。ヴァイオリンの音はいつの間にか途絶えていた。レッスンは終わったようだ。講師の家に歩み寄り、ふと人影に気付き足を止める。聞こえてきた声はジャンヌのものだった。

「馬鹿ね、いつだって学校で会えるじゃない。こんなところまで私をつけ回さないで頂戴」

「ヴァイオリンを習ってみたいと思ったから、見学に來ただけだ」

「あなたがバイオリンを？」

隣に居るのはジャンヌと同じ年頃に見える男だ。片手で自転車を支えている。二人は道端に立ち止まり、話をしていた。ここに傍觀

者がいる事になど、微塵も気付いていない様子だ。

「この間の話……いつまで経っても返事をくれないじゃないか」

「何の話かしら」

「来週、隣町で祭りがあつて広場に移動遊園地も来るんだ。一緒に行かないかつて誘っただろう？」

「ああ、その話ね」

クスクスとジャンヌは笑ってみせた。思春期のカップルらしい初々しい雰囲気微笑ましい。自分が迎えになど、来る必要など無かったのではないか……そう思った途端、胸の奥からドロリとした馴染みの無い感情が顔を覗かせた。ギシギシと、鈍い音を立てて心が軋む。男がジャンヌの腕に手を伸ばす。その仕草を見た途端、理性より行動が先走った。

「お嬢様、お迎えにあがりました」

二人の会話に割り込むよう、有無を言わせぬ口調で声をかける。

驚いた男は、びくりと肩を跳ね上げジャンヌから手を引いた。

「……また今度な」

奴はひらりと自転車に飛び乗ると、恨めしそうに横目で睨みながら、俺の脇を通り過ぎていく。フランス人は恋愛体質だ。こんなガキでも一人前に女を誘う術を身に付けている。苛立っている自分に気付き狼狽した。馬鹿みたいだ、あんなガキを相手に……

絶対にこんな自分を悟られたくない。平静を装いジャンヌに歩み寄り、彼女が手にしているバイオリンのケースを引き取った。

「帰りましょう、お嬢さん。お望み通り歩いて……」

二、三步進んでふと振り返ると、ジャンヌはまだぼんやりと立ち尽くしている。どうした？ 足を踏み出さないジャンヌを怪訝に思う。

「なん……でもないわ。行きましょう」

ジャンヌの声はわずかに上ずり震えていた。どうしたっていうんだ？ 今にも泣き出しそうなジャンヌの眼差しに貫かれ、狼狽する。やがてジャンヌは歩き始めた。足を止めた俺を追い越し通り過ぎ

ていく彼女の横顔から、その心理を汲み取ろうとしたがわかるはずも無い。一定の距離を保ったまま、俺は彼女の背を追いかけた。町を過ぎ、海岸へと降りて行く坂道に差し掛かる。その頃にはすっかりと日は落ち、薄闇が周囲を包み始めていた。

ここまでの道のり。ジャンヌは一度もこちらを振り返ろうとはしなかった。俺という存在を忘れているかのように黙々と歩いていく。そんな彼女がふと歩調を緩め、俺の隣を歩き始める。

「不思議ね……私きつと夢で見たのよ」

「夢？」

唐突に話始めたジャンヌの意外な告白に、気の利いた返事など返せるはずも無く、俺はオウムのように“夢”と言葉をなぞるだけ。

「あなたが私のヴァイオリンケースを持ってくれた時、ああ、これって昔見た気がするって思ったの」

「知っている気がする……そういう事は、たまにあるものだ」

「あなたも？」

俺よりもはるかに背の低いジャンヌが、すくうように見上げてくる。

“昔見た気がするって思ったの”

ジャンヌの眩くような声色が、頭の中で繰り返し響き渡る。そうさ、同じだ。たった今でさえ、俺を捕らえて離さないその瞳の輝きを知っている錯覚に襲われる。堪らず目を逸らし空を見上げると、月がこちらを見下ろしていた。当たり前の夜空。だがジャンヌと一緒にいると、こんなありきたりな風景でさえ記憶の奥底から湧き出る色彩に塗り替えられる。

銀色……そう彼女と出会ってから月は銀色の衣を纏って光を放つ。ひんやりと冷たい指先が、俺の手に触れた。ジャンヌが手を繋いできたのだ。手の平を指でなぞった後、一本一本の指の隙間にジャンヌは細指を絡めてくる。どくりと高鳴る胸が、大きな鼓動を全身に伝えてきた。

「人に見られたら、変な噂をたてられる」

「あら、こんな町外れの夜道なんて、誰も通らないわよ」

ジャンヌの言う通り、海から続く田舎道には歩いている者など何処にもいない。まさかこんな悪戯をする為に、歩いて来いと言ったのではないだろうな。

繋がれた指が、ジャンヌの存在を伝えてくる。俺よりもはるかに小さな手。触れる僅かな面積で、二人の体温が混ざり合う。これだけで…理性をかき乱されるだなんて。

もつと彼女に触れてしまったならば、男の本能に自分を見失い、この華奢な身体を壊してしまうかもしれない。自分が恐ろしいと思った。俺はどうかしている。まだ少女のような女に、こんな欲望を抱くだなんて。

「ねえ、恋人いるの？」

唐突に投げつけられた質問に我に返る。

恋人。

「……ベルリンに」

ここに来てから一度も思い出さなかった。なんて薄情な男だ。

「どんな人？ 置いてきぼりなんてひどいのね」

男と女が手を繋ぎながら交わす会話とは思えない。ジャンヌは無邪気に尋ねてくる。

「俺には勿体ないくらいの女だよ。これからの為に少しは金を貯めなきゃならないからな……ベルリンはまだ失業者だらけだ」

のろけてみせた訳ではない。本当にそう答えるに相応しい女だ。

頭がよくて優しい……二つ年上の大人の女。

「あら、勿体ないなんて……ふふっ」

ジャンヌはクスクスと笑いを溢している。そして甘えるように、そつと俺の腕に寄り添ってきた。柔らかい髪が、悪戯に腕を撫でながら揺れている。

「じゃあ、お似合いとは言い難いって事じゃない」

思いもしない結論を、ジャンヌはさりとて言い放った。どういう思考回路で噛み砕いたら、こういう答えに辿り着くのだろうか。

「あなたと私ならぴったりよ。まるで二つに割ったコインを張り合わせたようにね。私達、元々はひとつだったの」

きっぱりとそう言い切るジャンヌに呆れた視線を流す。まるで月には兎が住んでいるのだと、自慢気に語る子供と同じだ。

知らないの？ 彼女は得意気に、からかうような口調であおってさえみせる。真実を悟らせるのは、無邪気な夢を踏みにするような罪悪感。

けれどもジャンヌ、君にはわからないのだろうか。どんなに俺が君にとって不釣り合いな男かを。抜き取られた指輪の代わりを、捧げることすら叶わない。あんな黒塗りの高級車を走らせたところで、行き先を自分で決める特権になど、一生縁遠い男だ。生まれ落ちた瞬間から、人は人生という名の喜劇を演じる。だが、ふたりが上がる舞台は決して同じ場所にはないのだと、いつか君も気付く日が来るのだろう。だけど……

“私達、元々はひとつだったの”

銀色の月明かりに照らされたこんな夜くらいは、おとぎ話に付き合うのも悪くない。

割れたコインを繋ぎ合わせよう。絡めた指先に、そつと力をこめてみた。

戸惑い（ジャンヌ）

開け放った窓からは、ささやかな波音が滑り込んでくる。ティルが眠るボート小屋では、同じリズムが耳元で響いて聞こえるのだろう。

レッスンからの帰り道、恋人がいるのかと尋ねたら、彼は忘れ物でも思い出したかのように一瞬黙り込み、そしてさざりと言った。

“……ベルリンに”

どんな女かと尋ねると、自分には勿体無いくらいの人だとティルは告白していた。大人で、思いやりに溢れ、頭のいい、きつと美しい人。

ベッドの上で枕を抱え、こみ上げる笑いをそつと堪える。いいじゃない。そうでなければ……ね。今までティルを通り過ぎていった様々な女達は、彼を磨きあげる踏み台だったと思えばいい。そして私のもとに辿り着いた。

あの時、一度だけティルは私の手を握り返してきた。横顔をそつと覗きこむと、何かに堪えるように真つ直ぐに前を見据える瞳があった。私の存在は彼に苦悩を埋め込んでいる。愛しい男が途方に暮れる姿が、こんなに女心をくすぐるだなんて。歯を食いしばり、理性を保とうと必死にあがいている。

まだ男と寝た事も無いというのに、そんな彼に欲情する自分いた。二人を隔てるものを全て取除き素肌を合わせ抱き締めてあげたら、私の腕の中で彼はどんな顔を見せてくれるのだろうか。

キャビア、シャンパン、エスカルゴ、彩り鮮やかなオードブル。本物のコーヒーさえ一般市民は何ヶ月も口に出来ないというのに、

ここは別世界だ。いや、立派な軍服を纏ったドイツ人将校でさえワインを手にとって唸っている。カールが闇市から仕入れてくる様々な物資は、コーネンを鼻高々にする舞台に一役買っていた。

カール……不思議な男だ。所詮ナチスに媚を売る男だと、向けられる笑顔も疑心暗鬼な気持で眺めていた。けれど、彼の奏でるバンドネオンは、包み込むような豊かな音色でヴァイオリンをリードする。音楽で触れ合えば、その人柄というものも滲み出て感じるものだ。視線を絡め、即興でのやり取り。彼は心の底から演奏する事を楽しんでいた。澄んだ瞳に秘密めいた妖しさはあるものの、人殺しを楽しむナチスのような狂気はそこには無かった。

音合わせをする別室にカールが現われると、気が散るからと監視を追いやり、甘いお菓子などを差し入れてくれた。それでもドイツ人だ。女三人気軽に話し掛ける事はしなかったが、気を許している事は確かだった。

外でひと息ついていたのだろうか。テラスに抜けるガラス扉を開けて、カールが居間に入ってきた。私に向かって真っ直ぐに歩いてくる。後ろ手に悪戯を隠し持った子供のような笑顔。女のような繊細な顔立ちと裏腹に、少年のような邪気の無い笑顔をカールは見せることがある。こんな時は私も警戒心を失って、ついつられて微笑んでしまう。

夜が更けるにつれ宴は淫靡な空気を漂わせ始める。着飾った女達を一人……いや時には数人引き連れて客人たちは部屋へと消えていく。これもコーネンが用意した特別なもてなしだ。ティルが女と消える姿をまだ一度も見た事は無かった。取り囲む女達を、いつもさりげなく他の将校たちに譲り、そっと部屋へと引き上げてしまう。けれども今夜はコーネンの姪、ソフィーに捕まってしまったようだ。随分と酔った様子で、ソフィーはティルを話に付き合わせている。

楽団もこの時間になるとおひらきだ。マーリーのピアノだけが、耳障りの良い静かな曲を奏で続けている。

「今日は人手が足りなくて……ジャンヌ、書斎にブランデーを用意してくれ。コーネン所長が十分後に部屋を使うとおっしゃっている」
ホールを担当するボーイに頼まれ、私は二階にあるコーネンの書斎に向かった。階段を登って右の廊下にはコーネンの仕事部屋が連なり、さすがにこの時間に人影は無い。廊下を歩きながら、先程甘えるようにテイルに寄りかかっていたソフィーの姿が頭をよぎった。上等なシルクのドレス。結い上げた髪が露にする耳元には、光り輝くダイヤのイヤリングが揺れていた。

あの頃、早く大人になりたいと願った。彼に似つかわしい大人の女に。今の自分はどうか彼の瞳に映っているのだろうか。

上の空だった。迂闊にもノックさえ忘れ、おもむろに書斎の扉を開いてしまった。誰もいないはずの暗い室内。けれども、書斎机のライトが消し忘れられていた。ブランデーの瓶とグラスをソファア席に並べると、再び違和感を感じ書斎机に視線を流す。消し忘れ……いや、机の後ろにかがみこみ、身を潜める男の姿があった。見覚えのあるシャツ。

「……カール？　ここで何をしているの」

ガタンツ。そつと後ろ手に何かを隠し、カールが立ち上がった。

「いや、コーネン所長に頼まれ事をされてさ」

不自然な笑顔。開いたコーネンの引き出し。隠し持った書類。コーネンはもうすぐ客人を連れてこの部屋に来るはずだ。

「早くそれを元の場所に戻してっ。所長がすぐにここに来るわ。廊下に出て左に行くと、外に抜けられる別階段がある。そこから出て行くのよ、誰にも気付かれないように」

カールは素早い動作で手にした書類を机の中に忍ばせると、ドアの前に立つ私のほうに足早に歩み寄ってくる。

「こつちよ」と、扉を開けて廊下に導いた時だった。

「おい、その二人何をしている」

廊下の向こうから咎めるような男の声が響いた。見なくてもわかる……コーネンの声だ。カールと二人、書斎のドアの前で立ち尽く

す。これから先何が起こるのかと考えると、心臓がひやりと凍り付く。鼻先にあるカールの顔が強ばっているのが見て取れた。

視線が絡み合う。一瞬カールは片目をつぶり何かの合図をよこした。その意図が掴めず、もう一度すぎるようにカールの顔を覗き込もうとした時だった。

ドンツ。カールが私の身体を唐突にドアに押し付けてきた。不意打ちの行動によるめき、ただされるがままになっていた。そして次の瞬間……おもむろにカールの長い睫毛が近づいてきた。唇を塞がれる。息が詰まるほどに深く、だ。

「……んっ」

濃厚な口付けにぐらりと視界が歪んだ。

「カールか？ お前、そこで何をしている」

今その声に気付いたという様子で、カールが唇を離し、うしろを振り返ってみせた。

「いや……コーネン所長……まいったな、こんなところを見られちゃって……」

酔いを装ったおどけた口調。だが、私を押し潰すその胸からは、明らかに早い鼓動が波打っているのを感じた。

「お前が女を連れ出すだなんて珍しいな……いや、その女……」

そつと、カールが私から身体を離す。彼の胸に遮られていた視界がひらけると、そこには目を丸く見開いたコーネンがいた。そしてその隣には……ティル。感情を見透かせない無表情な彼が立っている。

「ジャンヌか……。カール、お前のお陰でパーティはいつも華を添えさせてもらっている。だから、どの女を選んで連れていこうが文句など言いはしない。だが知っていると思うが、この女はユダヤ人だ。そんな女を選ぶとは、あまり感心せんな」

コーネンの声は低く威圧的な響きを持っている。そんなコーネンに臆することなくカールは言葉を返した。

「このチケットをここでも使えるのかと、ジャンヌに尋ねていたん

ですよ」

「チケットだと？」

カールはごそごそとポケットを探ると、小さな紙切れを差し出した。

「アウシユビッツの親衛隊員に貰ったんです。ポーカで負けた支払いの代わりにと」

コーネンは、目を細めてその紙切れを覗き込んでいたが、おもむろに愉快そうに笑い始めた。

「ふっ……ハッ傑作だな。アウシユビッツではこんなものが出回っているのか。あそこはなかなか趣向を凝らした出し物をするんだな。見てみる、ティルこれを」

ティルは手渡されたチケットを一瞥すると、不愉快そうな様子でカールにそれを返してきた。

「アウシユビッツには労働意欲を高める為に女性囚人による売春宿まであるんですよ。もちろんそこを使えるのはユダヤ人ではなくドイツ人の囚人ですがね。それで、そのチケットを持って早速品定めをしにいったのですが……ロクな女がない」

「それで、そのチケットがジャンヌに使えるか尋ねていたというのは？ ハハハッ、ジャンヌはなんて答えていた？」

「答えを聞く前に、あなた方に邪魔をされましたよ」

カールは肩をすくめてみせた。その様子は益々コーネンの笑いを誘ったようだ。

「ああ、でもすっかり悪酔いしたようだ。ジャンヌはハイルマン大佐のお抱えでしたね。今夜はもう退散いたしましたでしょう。外に待たせている運転手が眠りこけてしまう」

カールは会釈をすると、おぼつかない足取りでコーネンとティルの間をすり抜けた。

「……待て」

その背中を呼び止めたのはティルだった。

「お抱えとは随分な言い草だな。お前のように、ユダヤを手籠め

にする為にこの女をメイドにしている訳ではない。一緒にしてもらっては困る」

カールはゆっくりと振り向いた。形の良い唇を片側だけ持ち上げ、真っ直ぐな眼差しでティルを見詰め返してみせた。

「彼女の美しさに我を忘れてしまった。愚かな男の気の迷いだと、どうぞお見逃し願いたい」

ティルは何も答えずに、冷たい視線を返すだけだ。カールは、苦笑いを溢すと去っていった。

「悪い男じゃないんだ、大目に見てやってくれ」

コーネンは、そうティルに声をかけると、書斎のドアに歩を進める。さつと道を譲り頭を垂れて、二人が通り過ぎるのを待った。その時だった。耳元でヒュンと風を切る音が聞こえ、頬に痛烈な一撃が降ってきた。

パンツ。耐え切れず転がるように尻餅をつく。

「お前に隙があるからつけこまれるのだ。俺に恥をかかせる気が」頬を叩いた手の持ち主は……ティルだった。唇の端から滲んだ血が舌を濡らす。熱を帯びる頬を抑える事など許されはしない。私は立ち上がり、再び頭を垂れて足元に視線を落とした。

誰かに殴られた事などあるはずも無い。耳元にまで這い上がる脈打つ痛みを噛み締める。書斎のドアが閉まる音を聞き届け、歩き始める。いつもよりもこの廊下が長く感じられた。

ぼんやりとしていたせいか、階段の手すりに背を預け立つ女がソフィーだとは随分と近づくまでわからなかった。ソフィーは探るような眼差しで、じつとこちらを見ている。その視線をすり抜け、足早に階段を登っていく。三階の廊下を横切り、一番端にまで歩くと明らかに他の部屋のものとは異なる木のドアがある。その扉を開くと、屋根裏へと続く粗末な階段があった。

ギシッ。足を乗せると木が軋む音をたてる。

ギシッ。登りきると、この階段が導くに相応しい屋根裏部屋が連なる廊下に出た。

部屋は三人でひとつの相部屋だ。お情け程度に設置された肌電球に、淡い光を灯す。まだ誰も部屋には戻っていない。のろのろと服を脱ぎスリッパ一枚になると、窓ガラスが映す己の姿をじっと見つめる。頬の赤みまではガラスで確認できない。そつと指先で頬をなぞると、ぴりぴりと痺れるような疼きを伝えてくる。息を深く吸い込む。そして呪文のように繰り返す。大した事ではない。大丈夫よジャンヌ、大丈夫だから……頬に触れていた指先を唇に移す。

カール……。戦争中は、誰もが裏の顔を持つ。様々な歯車が歪み、人は思いもかけない人生を歩むことになるのだ。詮索はしまい、ただ言えることは、ナチスの敵であるというならば私の敵ではないということだ。奪われた唇は、激励の接吻だったと思えばいい。ティルの目の前だというのが、意外な展開ではあったが。

ティル……。憎んでいるのだろうか、私の事を。それでも構わないと思った。再び巡り会えた。神が授けた偶然のもと、あなたはこんなにも傍で息づいている。

ボート小屋を包む波音は、畑仕事に疲れたティルの子守唄になる。寄せては引いていく地球の息づかいが、ティルの寝息と重なる。彼の寝顔を暗闇からすくい上げる銀色の月光。伏せられた瞼の裏に潜む瞳の色を知っている。海にも似た蒼。空にも似た青。

真夜中に忍び込んだ私は、ベッド脇の椅子に座りながら、ティルに悪戯を仕掛ける。シーツに投げ出された手のひらに、自分の手を重ねてみる。大きな手、男のくせに長い指。そつと手を離し、代わりに自分の頬を彼の手のひらに乗せてみた。

ギシッ。身体をティルの隣に横たえる。葡萄畑で大地に触れている手が、私の枕になる。違和感を感じたのか、ティルの眉間に皺が刻まれた。その様子を笑いを堪えながら見つめる。手のひらの枕は、眠るティルの鼻先にあった。寝息が、私のおでこをくすぐる感触。

瞼を閉じ、彼の温もりを深く味わう。

ふと途切れた息づかいに瞳を開くと、ぼんやりと寝ぼけた眼差しのティルと目が合った。

「……お嬢さん、一体何時だと思っているんだ」

寝起きの掠れた声が呆れた色を含んでいる。

「お休みのキスを貰いに来ただけよ」

ふふつ、と語尾に意味深な笑いを挟み込む。ティルはノロノロと上半身を起こすと枕がわりにさせられていた手を引き抜き、眠気を振り払うために、小さく首を振ってみせた。

「……あんたさ」

不機嫌な声。普段冷静を取り繕った男が見せる素の感情は、不思議なほどに心地良い。

「いっぱしな振りをしたって、なんにも知らないお嬢ちゃんだろ？男を舐めたら痛い目に合う。初めての時の女っていうのは血にまみれるんだ。俺は優しくなんて出来そうにない。だからこんな真似はもう止めた方がいい」

威圧する眼差しは怒りで青白い炎をちらつかせていた。私の肩を押さえ込み、ティルは立場を誇示してみせる。

「初めてよ。だけど優しくなんてしてくれなくていいわ」

手を伸ばしティルの頬を撫でる。その顔が絶望に歪む様が見て取れた。

「……君は幼すぎて、俺の言葉が持つ意味を、よくわかっていないんだ」

「だって、経験しなくちゃ、学べないわ」

ねえ、よくわかっていないのは、あたなの方なのよ。途方に暮れる瞳を導く、母親のような気分させられる。

「借金の肩代わりをしたのは、こんな事を望んで……なのか？」

「そうよ」

呆氣に取られ、ティルはすぐに次の言葉がみつからなうようだ。渴いた喉をぐくりと鳴らし、彼はやっと言葉を繋げる。

「そんな事を……」

語尾を濁すと、ティルは頬に触れている私の手に指を伸ばしそつと触れてきた。手の甲をなぞられると、その感触に小さな蝶ハビオンの痣がぞくりと疼く。

ゆつくりと、触れるか触れないかのじれったさで、腕を伝い彼の指が降りてくる。鎖骨を越え、首筋を横切り、ティルの指先が顎をおずおずと登ってきた。やがて唇に辿り着くとティルは、小さな溜め息で震える口元を歪めた。

「…出来ない」

それは懇願だった。許しを請い彼は覆い被さってくる。

「こんな華奢な身体で……まだ無理だ。壊してしまいそうで……俺には出来ない」

「いいのよ」

ティルの髪に指を差し入れ、そつと抱き締める。

「私はね、慎み深いクリスチャンよ。一度に欲張ると神様に咎められるって、ちゃんと知っているの」

ティルはゆつくりと顔をあげ、少し安堵した溜め息をついてみせた。そしてこの苦しみからの解放を願い、息を潜め私の更なる言葉をじつと待ちわびる。薄い涙の膜で覆われた彼の瞳を、下から見上げた。七色に輝くオパールと引き換えに手に入れた、私だけの秘宝なのだとその価値を噛み締める。

そつと瞼を閉じる。彼がどんな顔で私を見下ろしているのかが、容易に思い浮かべる事が出来た。

「用事を済ませたら帰るわ」

「……用事って？」

「言ったでしょ、お休みのキスを貰いに来ただけだって」

瞼は開かない。静まり返った部屋には、さつきより波音が際立って響いている。

ギシッ。ベッドのスプリングが音をたてる。まるで何かの合図のように。ティルの唇がおでこに触れる。けれども、それでも瞼を開

かない私に観念したのか、崩れ落ちるような口付けを落としてきた。塞がれた唇に呼吸さえ奪われ、恍惚としたひと時を味わう。やがて少し乱れた呼吸で彼はこう呟いた。

「部屋に戻るんだ……ジャンヌ」

まだ男を知りもしない身体で漠然と私は悟ってしまった。耳元に吹き込まれる彼の困惑は、ありきたりに営まれる男と女の情事よりも、甘い快楽を私の心に産み落とすのだと。

移動遊園地（テイル）

コーネンの書斎を出た後、真っ直ぐに部屋に戻り軍服を脱ぎ捨てる。ガウンを羽織り、グラスにウィスキーを注いだ。一体、あの二人はコーネンの書斎で何をしていた？ カールがジャンヌを売春宿の女達と、同じ扱いをするはずもない。コーネンには愉快な話だったかもしれないが、疑いの目を持って見れば、不自然極まりない状況だった。カールの機転でジョークに話が転ばなければ、行く末には銃殺もありえたのだ。あの身のこなし……ただ者ではないと感じてはいたが、やはりそれなりの訓練を受けた作業員という事か。ソビエトか、イギリスか、アメリカか、どこの回し者だ？

いや、そんな事はどうでもいい。ジャンヌを巻き込む事だけは見逃せない。ただでさえ、ユダヤ人のレッテルを貼られ、明日の命さえ保証されない状況だというのに。手のひらに染み付いている。ジャンヌの頬を弾いた感触が。白い肌が見る間に赤く染まっていく様子が脳裏に焼き付いていた。

パリンッ！ 握りしめていたグラスが手の中で音をたてて砕ける。
「……っ」

グラスの破片が手のひらを突き刺さす痛みなど、胸をえぐるこの葛藤に比べれば他愛ない事。

“ジャンヌはハイルマン大佐のお抱えでしたね”

そんな甘い認識は徹底して覆さなくてはいけない。だから手をあげたのだ。指先で触れるだけでも愛しさに震えるであろう、彼女の頬を殴り飛ばした。

コンコンっ。ドアを叩く音で我に返る。もしかしたらジャンヌが仕事を片付けに来たのかもしれない。いや、そう装って、あの頃のようにお休みのキスをねだりにきたのかも。

ジャンヌ……ジャンヌ……。

様々な感情が絡みあい、思考が混乱する。抱き締めてひざまづき、

君に許しを乞おう。扉の向こうに立つのがもし君ならば、追われるのを覚悟で地の果てまで逃げてもいい。高揚した気分であノブに手を伸ばす。茶番は終わりだ。この手にかき抱き、離しはしない。もう二度と……永遠に二人きりだ。

ガチャッ。だが、目の前に立っていたのは、ソフィだった。華奢な肩紐で吊ったワインレッドのドレス。指先には紫煙を漂わせる細巻きの煙草。夢物語から現実に取り戻される。

「……眠れなくて……」

ソフィはバツが悪そうに笑ってみせたが、俺の手元に視線を流すとその笑顔はかき消えた。

「ティル、怪我をしてるわ！どうしたのっ」

「ああ、グラスを割ってしまっ」

大した事はないさと、心の動揺を押し隠し、努めて素っ気なく言い放つ。

「大丈夫なんかじゃないわ。待っていて」

ソフィは神妙な顔で踵を返すと、直ぐに薬箱を手に戻ってきた。椅子に座り彼女より治療を受ける。ソフィはまるで自分が傷付いたような痛々しい面持ちで、包帯を巻く。

「こんな時間に面倒をかけて、すまない」

ソフィは俺の言葉に弾けるよう顔を上げ、ふるふると力なく首を横に振ってみせた。

「押し掛けたのは私よ」

「ああ……何か話でも？」

「こんな怪我をした時でも、あなたって冷静なのね」
机の上に広げた薬類を片付けながら、ソフィは苦笑いを溢している。

「ねえ……あの子の事、愛してるの？」

「あの子？」

「バイオリニストのあの子……よ」

ドクンッと胸が跳ね上がる。

「何を突然」

「だって、ぶつたあなたが傷付いたように見えたから」

「俺が？」

冗談じゃないといった仕草で、ソフィを見詰める。だが躊躇することなく真っ直ぐに、ソフィは視線を返してきた。

「君には、俺の気持ちなど理解できないだろうな」

あえて突き放すように、わざとそっけなく言い放つ。心外だった表情で、ソフィの顔が一瞬にして曇る様が見て取れた。

「俺が大学に行く年まで、親父は小さいながらも親族で営む製紙会社の社長をしていてね、事業は程々うまくいっていた。だが不意打ちの不渡を掴まされるハメになって……呆気なく会社は潰れてしまった。」

無責任な事に親父は借金を抱えたまま自殺。会社に関わっていた親族は皆、自分の持ち分の借金を清算するために出稼ぎに出たんだ。

ベルリンはまだ失業者も多く職はなかなか見つからないかった……」

唐突に身の上話を始めた俺に、ソフィはじつと耳を傾けている。

「家庭教師くらいは経験があったが、本当の意味で働くのなんて初めてだった。大学を中退し突然の環境に納得がいなくて、どうして自分がこんな惨めな生活をと、悪夢のように感じていた」

ソフィはそつと手を伸ばすと、包帯が巻かれた俺の手を癒すように撫でてくる。

「葡萄畑で土にまみれながら、貧富の差という屈辱をこの身をもって味わったんだ。戦争が始まり軍人という職業で、やっと自分の歪んだ人生を修復できた。忘れたかに錯覚していた、そんな惨めな時代があった事を……けれどもあのユダヤ女と再会して、全く自分の中でそれが整理なんて出来ていないことに気付かされた。刻み込まれた過去の自分を葬り去ろうと、彼女を……ジャンヌをメイドになどにしてみたが、こき使われる彼女があ頃の自分と重なって、嫌悪感すら抱くことさえある。けれども同時に今の己の優位な立場を噛み締めてもいる。……いや、こんな歪んだ感情はソフィー、君には

理解し難いはずだ」

ソフィーは立ち上がると、そつとその胸に俺の頭を引き寄せた。お涙頂戴の同情を得るほどに悲惨な人生だろうか。だが真実だった。ただひとつ、ジャンヌに心奪われてしまった自分を隠している事を除けば。

「ごめんなさい、辛い話をさせて……私が馬鹿だったわ。ティル、許して頂戴」

その行為に便乗し、俺は彼女の身体にもたれかかる。もう二度とジャンヌを愛しているのではないかなど、ソフィーに疑問を抱かせてはいけない。女の嫉妬は、思いがけない結果を招くものだ。今の状況、それはジャンヌの死さえ現実させる。ジャンヌの為になら、俺は悪魔にでも魂を委ねよう。

「ソフィー、君といると安らぐ気がするのはどうしてだろう」

俺に気があるのはわかっていた。それを逆手に取り、罠を仕掛ける。本当に？ そう言いたげな眼差しが目の前で問い掛けてくる。

「いつも冷静を取り繕い誰も信じられない。そんな俺が、君といると寛げるだなんて。いや、酔っているんだ。君が優しいから、調子に乗ってしまったている」

そつと離れようとしたその時だった。延びてきた指先に腕を掴まれる。

「私もよ、ティル。あなたの事すごく気になって。だからあの子の事を引き合いに試すような事を……嫌だわ。いいのよ、あの子を利用する事であなだが救われるなら。殴ったりするのは……仕方ないわ。だって彼女はユダヤ人なもの」

ユダヤ人……ドイツ人の多くが錯覚している。善良な一市民のソフィーでさえ、ヒトラーに吹き込まれた妄想に洗脳されているのだ。戦争による様々な負担を国民に強いる時、溢れるであろう不満をナチスに向けさせない為のはけ口を作ってやっただけの事。ユダヤ人という蔑む対象がいるというだけで、人は己よりまだ救われな

い人間がいるのだと安堵感を覚える。

何という浅ましさ。だが、この収容所で行われている地獄は想像を絶する。ヒットラーの底知れぬ狂気が渦巻いていた。ソフィーになど想像もつかないであろう、すっかりと見慣れた収容所の煙突。列車から降り立ち、収容所に吸い込まれていく人々の、あれが唯一の出口だなんて。

「テイル、ねえ私を見て」

唐突にソフィーに口付けられる。

「欲しいものは手に入れる主義なの。全然慎ましい女なんかじゃないくつてよ」

甘い吐息を吹き掛けながら、彼女は耳元で囁きかけてくる。

「……俺もだ」

ソフィーのドレスの肩紐に手をかける。するりと薄布が足元に滑り落ち、白い裸体がさらけ出された。悪くない。誘うようなキスを返す。その世界に引きずり込む、淫靡な香りが漂う深い口付け。ソフィーは戸惑うことなく、俺のガウンの襟に手をかけてきた。絡み合うようにベッドにもつれ込む。ソフィーの柔らかな身体を押し潰しながら自分に問い掛ける。

この女とジャンヌのどこが違うというのだろうか？ ……何もかもだ。俺にとって女はジャンヌかそれ以外、そのたった二種類しかないのだから。

「初めてよ。だけど優しくなんてしてくれなくていいわ」

ジャンヌは全く予測できない台詞で俺の思考回路を混乱させる。真夜中に男の部屋に忍び込んできた、この世間知らずなお嬢ちゃんを、脅すつもりで凄んでみせたというのに。思いもかけない返答に、こちらが狼狽させられるだなんて。

男を知らない少女の無防備さ……いや、ジャンヌは知り尽くしている、欲するものが何であるかを。こんな事が目的で、俺の借金の

肩代わりをしたのかと問うと、涼しい顔でそうだと素直に認めてみせた。

「そんな事を……」

返す言葉を見失う。頬に触れるジャンヌの手のひらへ、すぐるよう指を伸ばす。なぜ俺を？ 何もかもが華奢な体……確かめるようそつと指でなぞってみた。まだ男を知らない肌が、指に吸い付いてくる。その感触にじわじわと理性が剥ぎ取られていく。誘うような艶を瞳に浮かばせ、ジャンヌが下からこちらを見上げてくる。

ああ、この瞳だ。これから十五歳になろうという少女を、年不相応に塗り替えてしまう妖しい光を帯びている。そしてジャンヌは、おやつをねだる子供のように、ちろりと紅い舌さえ覗かせてみせるのだ。このまま流されて抱いてしまえばいい。欲望が満ちていくのを感じながら、指先がジャンヌの唇にへとたどり着いた時だった。

さつきよりもいつそう明るさを増した月明かりが窓から差し込み、ジャンヌの身体のラインを柔らかく浮かび上がらせる。俺の腕の中で横たわる身体が、自分のひと回りも……いや、ふた回りも小さいのだと改めて気付かされた。

「……出来ない」

寝る相手に困った事などない。恋人でも行きずりでも、だ。だが、いま腕の中に佇む女の抱き方を俺は知らない。

「こんな華奢な身体で……まだ無理だ。壊してしまいそうで……俺には出来ない」

無様な男だと笑われても仕方がない。けれども許しを乞う罪人のように、うな垂れるしかなかった。

「いいのよ」

転んだ子供をいたわるような優しい声色でジャンヌは言った。救われた気持でおずおずと顔を上げる。慎み深いクリスチャンなのだからと語るジャンヌは、おどけた仕草さえ見せていた。全てはちよつと度の過ぎた冗談なのだと、そう彼女が口にするのをじっと待ちわびる。だが、ジャンヌは静かに瞼を伏せてみせたのだ。痛いほど

に真っ直ぐな眼差しから解放はされたものの、ペーパームーンのよ
うに、柔らかな曲線を描く睫毛に視線は奪われたまま。

そして彼女が最後に求めてきたもの、それはお休みのキスだった。
お望みのまま、おでこにそっと触れるだけの口付けを落す。けれど
も、ジャンヌは瞳を開こうとはしない。子供だましなどでは誤魔化
されないのだと、無言の抗議が空気を震わせる。

これ以上、あがらうことなど許されない。彼女は雇い主なのだか
ら。そう言い訳を試みれば、強ばった身体から力が抜け落ちるの
を感じた。ジャンヌに覆い被さりお休みのキスを捧げる。ほんの一
瞬のつもりが……溶け合うような唇の感触に、すっかりと理性を失
っていた。二人の隙間から洩れる溜め息が絡み合い、熱を帯びた空
気がベッドの上を漂う。ジャンヌから分け与えられるわずかな空気
で、この瞬間を生きながらえる喜び。もうこれ以上触れ合っていた
ら、我を失いジャンヌの身体を引き裂いてしまう。合わさった身体
を離す時に、目に見えない金色の糸が淫らに引くのさえ感じた。

「部屋に戻るんだ……ジャンヌ」

身体の内からくすぶる熱に堪えながら、やっとの思いでそう呟く。
「また明日来るわ」

悪びれもせず、ジャンヌは微笑んでみせた。かつて味わった事な
い罰を下された絶望感。

“私達、元々はひとつだったの”

バイオリンのレッスンからの帰り道、ジャンヌが口にした言葉が
頭をよぎる。その意味の奥深さをこんな形で思い知らされるとは。
再び巡り来る官能のひと時を、待ち望む自分を誤魔化す事など出来
ない。甘美な首輪に繋がれてしまった。手綱の先を握るのは、言う
までもなくこの少女。

ジャンヌ……ジャンヌ……。

コーヒーの香りが漂う。カチカチと食器の音を響かせ、ジャンヌが朝食の皿を窓際のテーブルに並べている。いつか眠っている振りをしながら、その一連の作業を盗み見ていたことがあるが、ちらりと彼女がベッドに視線を流したりはしなかった。俺が起きている気配を感じれば、振り返り挨拶の為に頭を下げるが、そうでなければ一心に仕事をこなすメイド役を演じている。

「……ねえ、私はカフェオレがいいわ」

背中から、細い腕が甘えるように抱きついてくる。昨夜、そのままソフィーがこのベッドで眠っていた事をすっかりと忘れていた。ガチャンツ！注文を申し付ける予期せぬ声色に驚いたのか、ジャンヌが手元を狂わせ食器の音を立てた。ゆっくりとジャンヌがこちらを振り返る。その頬が赤く腫れているのを目にし、ズキリとした痛みが胸を貫く。

「あと、クロワッサンを二つ頂戴。何だか今朝はお腹がすいちゃったわ……あなたのせいよティル」

からかうような声色でソフィーは腕を絡めてくる。

「それから、私の部屋からガウンを持ってきてくれない？昨夜の服じゃ皺くちゃだわ」

枕に頬杖をつき、ソフィーは惜しげも無く一糸纏わぬ素肌をさらしている。まるで昨夜の情事の痕跡を、ジャンヌに見せ付けるかのように。ジャンヌは顔色ひとつ変えずに淡々と仕事をこなしてみせた。ソフィーのシルクのガウンなど、丁重に肩から羽織らせてさえしてくれる。その物腰に安堵しながらも、何故そんなに冷静なのかと、問いただしたい衝動に襲われる。俺と同じように仮面をかぶっているのか、どうしてもよい他人事だと感じているのか。

「ねえティル、昨夜の話、本気にしてもいいのかしら」

ジャンヌが引く椅子に腰掛けながら、確かめるような口調でソフィーが尋ねてくる。

「叔父様に私達の事……言ってもいいのよね？」

「勿論だ」

どうせバレる。それに、よりコーネンの懷に近づく立場が必要なのだ。

「叔父様ってあたしの事となると自分の娘のように大袈裟なのよ。婚約しろとか騒ぎ出すわ…きつと」

「……じゃあ、そうしようか」

その台詞に、ソフィは驚いたよう目を丸くしてみせた。すぐ隣に立つジャンヌが、銀のポットから俺のカップにコーヒーを注ぐ。手を震わせる事もなく、湯気をたてて弧を描き、コーヒーはカップに流れた。ジャンヌの手にとまる蝶の痣を眺めながら、こんな現実には夢ではないのかと叫び出したくなる。だがその慟哭を喉元で押し殺し、平静を装い話を続けた。

「……もちろんソフィ、君さえ良ければの話だが」

テーブルの向こうから、ソフィは満足げに微笑みかけてくる。

「ティル、ここの仕事が終わったらベルリンに戻るのかしら？」

「多分、戦局によっては配属が変わるかもしれない」

「じゃあ、確実に一緒にいられる今のうちに、お披露目のパーティを開きましょうよ。ほんの小さなパーティでいいわ。そうだわ、これから一時間ほどのところに、前に叔父様が連れて行ってくれた山荘があるの。軍の幹部だけが使える素晴らしく見晴らしがいい山荘なの。パーティはそこでやりましょうよ」

俺の気が変わるとでも疑っているのか、随分と性急に話を薦めてくる。いや、それでいい。もうここに居られる時間はわずしかないのだ。俺がいる間に、ジャンヌの身の安全を確保しなくてはならない。その為になら、どんな芝居でも打ってみせよう。

「ジャンヌ、婚約に相応しい曲を知っているか？」

給士をする為に、後ろに控えたジャンヌに振り返らずに声をかける。

「パーティで一曲弾いてくれ。幸福の門出に相応しい曲を」

“私達、元々はひとつだったの”

あの時と同じ気持ちで欠片でもジャンヌが抱いていたら…今俺が

している仕打ちはどんなに罪深い事か。だが、見てみるソフィの安堵した顔を。やはり心の奥底では、どこか拭えない疑心がこびりついていたに違いない。婚約の日にはジャンヌにバイオリンを弾かせるという俺の提案は、その疑心を振り払う決定的な証拠になったようだ。今や憐れみさえ、ジャンヌを見詰める瞳には漂っている。愛されているという確信は、慈悲深ささえ生み出す源となるのか。

俺の本心を知ったら、ソフィは傷付くだろう。だが、その傷を癒す男に彼女なら、やがて巡り合うに違いない。だがジャンヌは……この先の人生の保証すらないのだ。こんなやり方は、ジャンヌもソフィも深く傷つけてしまうとわかっている。だが手段など選ぶ余裕など、あるはずもないのだ。

ジャンヌ、いつか君に償うから。あの頃のように君に繋がれ、気紛れな杖に振り回されてもいい……だから。

「愛の挨拶」なんて素敵だと思えますわ」

背後から響いた声が、誰のものかすぐには理解できなかった。再会して初めてジャンヌが意味のある会話を俺に投げかけてくる。

「あら、素敵な曲名ね。どんな旋律かしら」

ソフィが興味深そうに、ジャンヌに問い掛ける。

「愛妻家で知られる作曲家、エドワード・エルガーが妻に捧げた曲なんです。お祝いの席に相応しい、美しく輝くような旋律ですわ」
その場面を思い描いたのか、ソフィは遠い眼差しで小さな幸福の溜め息を洩らす。

振り返り、ジャンヌの表情を確かめずにはいらなかった。彼女は……微笑んでいた。頭を垂れ視線をはぐらかすいつもの姿はそこにはない。真っ直ぐにこちらを見据え、友人の幸せを願うような眼差しで微笑を携え立っていた。眩しいものを見た時のよう、目を細め息をのむ。

“私達、元々はひとつだったの”

本当にジャンヌは忘れてしまったのかもしれない。あの日々を胸に抱き、愛しさに切なさを噛み締めているのは、俺だけなのかもしれ

ない。

「九時になったら戻るわ。それまであなたも好きにしていいていいわよ」

広場は様々な出し物で賑わっていた。臨時に設置されたスクリーンに映し出される映画。ミニチュアながらも線路が広場に一周設置され、子供達が小さな蒸気機関車に群がっている。電飾で彩られた小さなメリーゴーランド、様々な出店、町の皆が着飾って楽しいひと時を過ごす移動遊園地の夜。

ジャンヌは白地に黄色い小花模様のワンピースを着ていた。半袖の袖口からは凝ったレースが覗き、俺が開いた車のドアから蝶のようになびき舞い降りる。

「ジャンヌ！」

親しげに彼女の名を呼びながら、待ち伏せをしていたかのように見覚えのある顔が近づいてくる。自転車に乗った、ジャンヌの同級生だ。

「あなたここまで自転車で来たの？ 随分と遠かったでしょう」

ジャンヌが呆れた声色でからかってみせた。

「一時間くらいだよ。海沿いを真っ直ぐに走ると気持ちいいんだぜ」

ちらりと奴は俺に視線を流す。邪魔者だと言いたげな眼差し。この男の誘いを、結局ジャンヌは受けたのだと今更に気付かされる。

そしてデートの場所まで俺は、ジャンヌを運ぶ役を仰せつかったという訳だ。

行くなど、腕をつかみたい衝動をじっと押し殺す。いや、彼女には遊園地なんかで年相応の男と遊んでみる経験が必要ではないのか。毎夜、キスをねだりに異国の男の部屋に忍び込むなんて……どうかしている。その異常な状況に、すっかりと囚われてしまった俺は一体何なのか。

「あつちに観覧車があるんだ、行こう」

奴の指が、ジャンヌの手を取る。ちらりとジャンヌは俺を振り返った。だがそれに気付かない振りをして、車に向かう。二人の後姿を、眺めている事に堪えられない自分がいた。

昼間の農作業の疲れが、車のシートにもたれているとじわじわと身体を這い上がってくる。馬鹿だ俺は。ジャンヌが指定したこの場所に辿り着いたとき、何故か二人の為にここに来たのだと思い込んでしまった。ジャンヌを連れて歩くのは自分なのだと疑ってもみなかった。浮き立つ気分を悟られまいと、わざと慥然と振舞ってさえみせた。馬鹿だ俺は。大馬鹿者だ。車のシートに深く座り、目を閉じ現実から逃避する。

どのくらい眠ってしまったのか……ぼやける視界にキラキラときらめく電飾の明かりが映りこんでくる。その輝きを引き立てる夜の闇が、すっかりと経過した時間を物語っていた。時計に目をやると、もう九時を少し回っている。

ジャンヌはどこだ？車を降り広場に足を踏み入れる。楽しい夜に時間の経過など忘れていただけだなんてわかつてる。広場を走る蒸気機関車は、子供達がそろそろお休みの時間のせいかな、すっかりと人氣がまばらになっていた。九時も過ぎれば大人の時間だ。一番の賑わいは野外映画だった。暗がりでは恋人達が寄り添い、甘いラブロマンスを眺めている。

ジャンヌはどこだ？ 映写機が置かれたテントの裏に雑木林があった。その木の影から、白地のスカートがなびいているのが見えた。あれはジャンヌの……？

木に重なり彼女の存在を伝えるのは、スカートの裾だけ。だが、その向かいに覆い被さる男の姿があった。状況を考えれば、キスのひとつでも味わっているという事か。

馬鹿だ俺は。ジャンヌの唇に触れる特権をもっているのは、自分だけだと自惚れていたなんて。静かにこの場を立ち去り、身の程をわきまえ、主人の帰りを車の中で待てばいい。そう自分に言い聞

かせ、目をそらそうとした時だった。男の手が、スカートの裾に躊躇無く伸びていくのが見えた。

「……っおい!!!!」

気付いた時には走り寄り、男の胸ぐらを掴もうとしていた。

「きゃっ」

驚いた女の声色に我に返る。……ジャンヌじゃない。カップルは、啞然とした顔で乱入してきた俺を眺めている。

「失礼……人違いだった」

ふざけるなど、舌打ちする男の怒鳴り声。

「すまない」

頭を下げその場を後にする。どくんどくと脈打つ鼓動が全身を包む。一体、何をやっているのだ。羞恥心で顔が熱くなるのがわかった。ジャンヌの事となると、どうしてこんなにも冷静でいられない。苦笑いが零れる。こんなにも心奪われるだなんて。

屋台に群がる人のざわめきが聞こえる。

「ほらほら、こっちのお兄ちゃんは有り金全部はたいて何度も挑戦しているんだ。狙いの品は最大の難関、ダイヤの指輪だよ！真正正銘ピカピカのダイヤモンドだ」

バキユンと空気を震わせる発砲音のあと、人々がはやし立て騒いでいる。射的場だった。様々な品が並べられ、おもちゃの空気銃で商品を撃ち落す。人の輪の中心は……ジャンヌとあの男だった。

「ぼうず、もっと大きい品物を狙いなよ。ダイヤの指輪なんざ十年早いんだよ」

「うるせえなっ、最後の一発なんだ、気が散るんだよおっさん！黙って見てろよ」

どっと、笑い声が響く。ジャンヌはカウンターに肩肘をついて可笑しそうにその様子を眺めている。手前の棚ほど当たりやすいキラメルの箱などが並び、遠くになるほどに品物は小さく撃ち落しにくくなっている。そして客引きの目玉なのだろう、ダイヤのリングが棚の一番上に、剥き身のまま小さな台座に置かれていた。こんな

おもちゃの銃であれを撃ち落すなど、素人には針の穴に弾を通すようなものだ。

バキユン！　ダイヤの指輪はピクリとも動かない。再び人々の落胆した声が響き渡る。

指輪……指輪……。ダイヤだなんて嘘に決まっている。程度のいい硝子玉だなんてわかっているというのに。

「オヤジ、弾をくれ」

小銭をポケットから取り出しカウンターに置くと、うな垂れた男から銃をもぎ取った。

「あんた……」

「子供には銃より自転車の方が似合ってるぞ」

カチンとした顔で奴は俺を睨みつけてくる。ジャンヌは変わらぬ仕草でカウンターに肩肘をついて、男同士の小競り合いを笑いを噛み殺し眺めている。

バキユン！　弾は弧を描いて飛んでいった。

「全然、駄目じゃん。俺よりのが外れているぜ」

隣で奴が、安堵したように、にやりと口の端を上げてみせる。

「随分と、酷い銃だな」

「負け惜しみはいい大人がみつともないよ」

「そうだな」

突然乱入した俺に、人々の好奇の目が絡みつく。小さく息を吐き、気持ちを集中させると、人々の喧騒が引潮のようにさらわれて、無音の世界に放り込まれる。軽い銃声と共に、弾が飛んでいくのが見えた。細工がしてあるのだろう、真っ直ぐに飛ばずに僅かに弧を描いて小さな的に向かっていく。

弾道は先程見極めたつもりだ。小さな光が弾け飛ぶのが見えた。どつと沸きあがる歓声、ジャンヌが両手を合わせ手を叩く仕草が見えた。

……やっぱり安物だ。入れ物を見れば中身の価値など大体わかる。ダイヤの指輪はそんな箱に入れられ手渡された。

「アンタすごいよ、たった二発で撃ち落すなんてさ」

さっきまでの忌々しい視線はどこへやら、ジャンヌのボーイフレンドは羨望の眼差しで俺の後をついてくる。

「車で送って欲しいのか？自転車は積めないぞ」

はっとした顔で奴は立ち止まった。

「ジャンヌをここまで送っただけだ」

「お休み、ダニエル。ダイヤの指輪残念だったわね」

「来年は撃ち落してみせるさ」

屈託無く笑う顔はやはり年相応の少年のものだった。踵を返し自転車に向かう後姿を眺めながら、こんな子供と張り合ってしまった自分を恥じる気持ちが湧いてくる。

車に戻りエンジンをかける。心の中ではいつこれをジャンヌに渡そうかと思いを巡らせていた。……こんな安物を彼女に？すぐに渡せばよかったのだ。キラメルを手に入れた調子で気軽に、だ。

改まって渡すにはあまりにもお粗末な代物に思えた。けれども、こんなものを俺が持っていては仕方がないではないか。

運転席から車を降り、後部座席のドアを開く。ジャンヌがきょとんとした仕草でこちらに首を傾ける。一度も腰を降ろした事のないその座席に忍び込み、ジャンヌの隣に座ってみる。

「……君に」

重みのない安っぽい箱を、彼女の前に差し出す。

「あら、ベルリンの恋人にあげなくてもいいの？」

「……いいんだ」

ジャンヌは黙って箱を受け取り、蓋を開けた。広場から漏れてくる電飾の灯りが、小さな硝子玉をキラキラと輝かせてくれる。

「ねえ、はめて頂戴」

え？ と驚く俺に彼女はくすりと笑って見せた。

「ほら、あの映画みたいによ」

野外のスクリーンはラストシーンを映し出していた。ヒロインがウェディングドレスを纏い、牧師の前で永遠の愛を誓っている。ジ

ヤンヌの指を取りそつと指輪を滑り込ませる。まだ華奢すぎるその指には、サイズが全然合わなかったようだ。映画のように完璧に事は運ばない。落胆した気分に見られる。

「大事にするわ。死ぬまで……一生よ」

思いもかけない言葉に、どくりと胸が跳ね上がる。大袈裟な……と笑って誤魔化そうとしたが、ジャンヌの瞳の端にふくらむ涙の粒を目にした途端そんな思惑はかき消された。彼女はゆっくりと瞼を閉じた。はらりと彼女の顔に落ちた前髪を、花嫁のベールを上げる気分でそつと摘み上げる。

いつか本当のダイヤモンドを君に……せめて、この夜を特別に仕立て上げる口付けを捧げよう。何度も唇を押し付ける。優しく激しく。体温にゆっくりと溶けるシヨコラのように、ジャンヌの唇は柔らかに形を変え甘い匂いを漂わせる。このまま食べ尽くしてしまいたい。

「ねえ……」

耳朶に唇が触れる距離でジャンヌが囁いてくる。

「もつと早く迎えに来るかと思っていたのに、あなたって強情なのね」

試されていたのだと悟った。どのくらいで痺れを切らした俺が追いかけてくるのかと、ジャンヌが仕掛けたゲームだったとは。眠りこけて正解だったのだ。この小さな悪女もそこまでは読めなかったというわけだ。少しはこの我侭なお嬢さんに、世の中は思う通りには運ばないと教えてやるのも悪くない。実は眠ってしまったなどと、決して口にするものか。

ジャンヌがそつと指輪に口付ける。そして甘えるようその指を俺に差し出してきた。お望みのままに小さな石に口付ける。まるで儀式のように。その瞬間、何ともいえない不安に駆り立てられ、無意識のうちに乱暴なほどに強くジャンヌを引き寄せていた。この満たされた気持と引き換えに、彼女が消えてしまうような気がして……。『テイル?』

ジャンヌを愛し始めている自分を認めざる得ない。けれどもそれと同時に俺は失う恐怖との葛藤をも背負ったのだ。もう、離せない。俺は幸福なのか不幸なのか……彼女との未来図など、舞台が違うとは百も承知だ。この一瞬が永遠の意味を持つ。二人で過ごせる僅かな時間を、繋ぎ合わせて生きていけばいい。

あの時、俺はジャンヌを愛していた。そして愛されていた。世界中にありふれた感情が、こんなにも全てを支配するだなんて。

どうしてこんな事になった？ 再びめぐり合った地が、人の命を弄ぶ地獄とは……これは神の悪戯か？ ジャンヌの髪を刈り上げ、頬を殴り、跪かせ、昨夜抱いた女の世話をさせる。

どうしてこんな事になった？ 俺は無力だ。けれどもこのままジャンヌが煙へと消えていくのを傍観する事など出来ない。

彼女は幼かった。離れていた七年は、精神的にも肉体的にも女としてジャンヌの全てを塗り替える歳月だったはずだ。何もかもが変わってしまったとしても、全てを受け入れよう。けれどもこの異常な状況で今の俺を支える源はやはり……。

あの時、俺はジャンヌを愛していた。そして愛されていた。これが全てなのだと。

真珠色のドレス（ジャンヌ）

「愛の挨拶」なんて素敵だと思いますわ」

するりと喉元を滑り落ちた曲の旋律が、脳裏でゆっくりと流れ始める。昨夜テイルに抱かれた女は、うつとりとした眼差しでその宴を思い描いている。ソフィがテイルに、特別な想いを寄せているのだなんて判っていた。ねえ、彼はあなたを満足させてくれた？ いや、そんな質問は無粋というものだ。潤い輝く彼女の肌が、全てを物語っている。

小さく息をのむ。大した事ではない、ねえ、ジャンヌ、気にすることなんてないわ。誰にも邪魔をされない夜が巡って来たら、あの頃のように彼のベッドに忍び込み全てを塗り替えてしまえばいい。彼の肌に刻まれたどんな女の軌跡も、私の舌で削り取ってあげる。ほんの気紛れのお遊びに、目くじらを立ててどうするというのだ。

“婚約の門出に相應しい曲を弾いてくれ”

私に祝って欲しいの？ それがあなたの望み？

弾くわ、願いを込めて。ほんのひと時の戯れの後、再びあなたが私の元に戻る日を夢見て。……ねえ、ジャンヌ……ほら、テイルがこちらを振り返る。極上の微笑みで出迎えよう。今日の私が、テイルの瞼に艶やかに焼き付くようにと。

音合わせの控え室に、今や監視の目はない。綺麗な包み紙にくるまれたウイスキーボンボン、リボンで彩られたチョコレート。大柄なドイツ女の看守は、カールが運ぶプレゼントにすっかり上機嫌だ。

「先日は……突然すまなかった」

ヴァイオリンのチューニングの為、糸巻き（ペグ）を、いじっていると、隣に腰掛けたカールがボソリと耳打ちしてくる。私は、聞えない振りをして黙々と弦を弾き、その音響に耳をそばだてる。

「ジャンヌ……怒ってるのか？」

まるでご機嫌を伺う子供のようにチラチラと視線を泳がせて、力

ールはこちらの様子を気にしている。ピアニストのマリーとチェオリストのカリスは、今日はまだ姿を見せない。

「いつか利子をつけて返してもらうからいいわ。私の唇に、その価値があるならの話だけだ」

大した出来事ではないと言いたげな口調で、一瞥し話を切り上げる。予想もしない返答だったのだろう、カールがきよとした顔で啞然とこちらを眺めている。そしておもむろに、口元を歪め笑い始めた。

「ふっ……ハハッ。いいねジャンヌ、君のその高飛車な態度、メイド姿との格差がまた……」

カールにはすっかりと気を抜いて素の自分をさらしてしまった。誘い文句のつもりなど無かったのだが、彼のツボにはまったようだ。カールはいつまでも笑いを噛み殺している。

隣に座るカールと、至近距離で視線が絡む。期待するような意味ありげな光が、カールの瞳をオブラートしている。躊躇する事なく、真っ直ぐに彼の瞳を見詰め返す。吸い込まれるようなダークブラウンの瞳。

「勝気な方が似合っている。そそられるね」

カールは欲するものに忠実な子犬のようだ。そう、毛並みのよい可愛い子犬。甘えた眼差しで見つめれば、望む物は手に堕ちてくるのだと自惚れている。男によっては鼻につく、自信過剰な態度だがそれに見合う独特の魅力を、不思議とカールは持ち合わせている。

「唇は盗めても心までは無理よ」

あと数センチ……という所まで近づいてきたカールの動きがぴたりと止まった。

「……好きな男でもいるのか？ どこかで君の帰ってくるのを待っている？」

私を待っている……だろうか？ すぐに返事をしない様子に、カールは勝手な解釈をつけたようだ。

「待てない男など、忘れてしまえばいい」

大きな男の手に、肩を引き寄せられる。カールに優しく唇を塞がれながら、どうしてここにいるのはあの人ではないのだろうとぼんやりと考える。今ごろはフィアンセとなるソフィーに、甘い接吻を捧げているのかもしれない。

「君がここを逃げ出せるように、手立てを考えよう。もうすぐきつと戦争は……」

話を遮るよう、立てた人差し指をそつとカールの唇に寄せる。

「私はどこにも行かないわ」

信じられないといった眼差しで、カールは言葉を見失っている。

「彼を置き去りになんて出来ないのよ。やっと会えたのに」

「ジャンヌ……君はたまたまコーネンの館にいるから、まだまとまな暮らしが出来ている。」

だが、あの収容所にもし君の恋人がいるならば、酷な事を言うようだが……生きては出られない。終戦までの日数をあそこで生き延びる者は、ほとんど居ないはずだ」

恋人が収容所に……カールの勘違いをあえて修正する必要もない。ただ私の為に手を尽くしてくれると、言ってくれる彼の心遣いが嬉しかった。カールの頬に親愛のキスを贈る。

「気持ちだけで充分救われるわ。あなたは私のナイトね」

そろそろ、マリー達がやって来る。“愛の挨拶”の出だしを思い浮かべながら、ヴァイオリンを顎に添え弓を手にした。

指輪、指輪、指輪。サイズの合わないダイヤの指輪が、私の指をくるくると回る。小さな石に口付けた時の、不安気なティルの瞳。そんな顔をしないで。私、何処にも行かないわ。引き留めるような抱擁に、母親の気分にさせられる。

ティル……ティル。あなたが口付けたダイヤには、命が吹き込まれた。死ぬまで大事にすると告げた時に、ティルはこんな物を？
と言いたげな顔を見せたけれど。小さな輝きに誓ったのだ。愛するのは、生涯ただ一人だと。

月が照らす小さなボート小屋で、秘密の逢瀬は繰り返された。全ての主導権はティルではなく、私にあった。小屋の扉を開くと、卓上のランプひとつ灯された部屋はいつも薄暗い。いまだに戸惑いを滲ませる彼の横顔がぼんやりと照らし出されていた。足音を忍ばせ、そつと傍らに歩み寄る。何度繰り返しても快楽への前奏曲のようなこの一瞬には、酔うような高揚感が伴う。

お休みのキスの前に、ひとつだけティルに囁くおねだり。いや、決して拒めない命令を下すのだ。彼は息を呑んでその指示を待受ける。ベッドの縁に腰掛け、三つ網にした髪をほどく。もったいぶるようゆっくりと、髪を指先でかきあげ、視線でティルをこちらに呼び寄せる。彼は私の足元に膝まづき、許しを乞う眼差しで見上げてくる。毎晩、繰り返されるささやかな抵抗。

愛しくて、愛しくて。彼の理性を残酷に無視することが、私の愛の形。人差し指を立て、彼に注文を申し付ける。指で差し示した場所、それは首筋だ。ティルは諦めの色を瞳に浮かべ、おずおずと手を伸ばす。ふわりと石鹸の香りが鼻先をかすめる。

ねえ、知っているの私。知っているのよ。

私が訪れる時間の前に、あなたが何度も手を洗っていることを。葡萄畑の土がこびりついた手。樽から滴る使用人のシャワーでは充分に洗い流すことが困難なのか……ボート小屋のベランダに備えられた足を洗うための蛇口の前で、ティルが爪先までも泡立てた石鹸で、丁寧に洗う姿を覗き見してしまった事がある。私の為……だなんて思うのは自惚れだろうか。

首筋にかかる髪を、ティルはそつと背中へと流す。壊れ物を扱うよう、優しく摘み上げながら。露になった首筋に彼の視線を感じる。息がかかるだけで、ぞくりと肌が栗立つ。彼の唇がそつと触れる。

邪魔な髪をひと房握った手が私の後頭部を支える。赤ちゃんが指しやぶりをするような可愛らしい音と共に、唇でついばまれる心地よさ。時々悪戯に伸ばされる柔らかな舌が、カタツムリの足跡を皮膚に残す。ふわりと足元が浮く感覚。上りつめた体温にうつすらと汗をかく。

決してこの行為に、ティルは激しさを混ぜ合わせない。指差す場所は、毎晩私の気紛れで変わった。耳朵、うなじ…寝着をたくしあげた膝小僧の時もある。裸にならなければ辿り着かないような場所はある。求めて求めなかった。いつか肌を重ね合うその時の為に、未知の場所を隠し持っているのも悪くない。一線を越える決断は彼に託していた。私を求め踏み越える瞬間を見届けたかったから。じんわりと滲み出る蜜を舌ですくい味わうようなこの儀式に、私は満足していた。美味しいオードブルを繰り返し味わうのも悪くない。

ぼんやりと甘い膜がかかった思考に、彼のいつもの囁きが響く。

「お休み、ジャンヌ……部屋に戻るんだ」

最後に柔らかな唇で塞がれ、私は彼の瞳を見つめ返す。先程彼に示した人差し指で、薬指にぶら下がる指輪を確かめるよう撫であげると、満たされた幸福感がわき上がった。

「お休みなさい、ティル。いい夢を」

永遠と繰り返される波の息づかいと共に、こんな夜がずっと続くのだと信じていた。そんな私はやはり幼すぎたのだろうか。あの頃すでに大人だった彼は、この儀式をどう受け止めていたのだろうか。

コーネン所長は上機嫌だった。結婚していない彼にとって、ソフィーはまさに娘といえる存在のようだ。以前からティルを気に入っている様子は伺えたものの、身内になるといえばまた格別な思いなのだろう。しかも自分が引き合わせた縁だ。

婚約パーティの日取りは慌しく決まった。ソフィーの両親もベルリンから駆けつけるとの事だった。ドイツの戦況は思わしくないようだ。立ち話をするドイツ人将校たちが、パリでナチスへ対する暴動が起こったという噂をしているのを耳にした。

“もうすぐきつと戦争は……”

あの時そう口にしたカールの言葉は本当なのかもしれない。戦争が終わったら、世の中はどうなるのだろう。私とテイルの関係も形を変えるに違いない。

早朝、他のメイド達とパーティの準備をするために屋敷を車で出発する。一時間ほどで到着した山荘は贅沢なものだった。重厚感が漂う歴史の刻まれた建物が、もとの持ち主はナチスなどではないのだと訴えかけてくる。下階は木材のみで組み合わされた壁、上階は白壁に黒い木組みが美しいハーモニーで外観を彩っている。足を踏み入れた室内も、贅の尽くされたものであった。象牙色の壁と濃い柱の対比が素晴らしく優美だ。凝ったランプがあちこちに備え付けられている。特に居間から続く広々としたデッキからは、高台より見下ろす絶景が広がっていた。周囲には鬱蒼と生い茂る山々が連なり、遠目に小川が流れている様も見て取れる。

コック達は下ごしらえをコーネンの屋敷である程度終えてから、こちらに向かうという事で、最初の一陣は私と運転手の他は、僅か三人という少人数だった。最近は滅多に使われないという屋敷は、意外にも隅々まで手入が行き届いている。定期的に部屋の清掃は行われているらしい。それでも屋外にあるデッキは念入りの清掃の必要がある。バケツに水を汲み運ぶと、私はデッキの床を磨き始めた。日が暮れる頃には、テイルとソフィーの為の宴が始まる。私が奏でるヴァイオリンの音と共に。

「何だか空模様がおかしいねえ、嵐にでもなるんじゃないかい」

テーブルをデッキに運びながら、メイド達が心配そうに空を見上げる。もしも雨が降るならば、居間の方にテーブルを配置し直さなければならぬ。その場合も考慮し、メイド達は黙々と己の仕事を

こなしている。

「ジャンヌ、ついすっかり忘れてたよ。ソフィー様のドレスを箱から取り出して掛けておいてくれ。」

皺になつたりしたらとんでもない大目玉を食つちまう」

玄関のホールに積み重なった箱を三階の角部屋に運ぶ。大きな箱に手をかけると、中から真珠色のイヴニングドレスが現われた。大きく背中を開いた薄いシルク地。清楚な色ながらも、派手好きのソフィーらしい大胆なデザイン。ビーズがあしらわれた胸元は華やかさを纏い、たつぷりとした優美な曲線を描くスカートは主役に相応しい装いだ。姿身の鏡の脇にハンガーで吊るし、他のアクセサリー類はドレッサーの前に並べた。天蓋のついたベッドが視界に入る。今夜この部屋で繰り広げられる情事を、覗き見たような居心地の悪さを感じた。

居間に戻る為に階段を降りる。玄関ホールを横切ろうとした時だった、ティルが扉を開け外から入ってきたのは。不意打ちの姿に胸が高鳴る。軍服姿のティルの顔にも驚く表情が見て取れた。女中が三人揃つてこちらに歩いてくる。

「ティル様、お早いご到着ですね、ソフィー様も一緒ですか？」

女中頭の問い掛けに、ティルは首を横に振った。

「町に用があつて一人出ていたのだ。ソフィーは昨夜到着したご両親と共に、ここに来るはずだ」

「あの、私達もう一度屋敷に引き返さなくてはなりませんの。厨房の手が足りなくなつて、こちらの清掃は終つたので手伝いに戻らなくてはならないのです」

「全員で行くのか？」

「いえ、ティル様のお世話の為にジャンヌは残していきますから、二時過ぎにはコック達とこちらに戻つてまいりますので」

バタバタと慌しく彼女達は去つていった。広い屋敷にティルと二人取り残される。ソフィー達はいつ到着するのだろう。

「……俺は少し眠る。二時間ほどしたら起こしてくれ。支度は自分

で出来るから構わなくていい。俺の部屋はどこだ」

「三階の角部屋のお隣になります」

昨夜はあまり眠っていないのだろうか、ティルは少し疲れの滲んだ顔つきをしていた。宴は夜中まで続くはずだ。徒労が溜まってい
るならば休息が必要だ。それまで誰も来なければいい。心の中でそ
う呟いてみる。

それから一時間程してからだ、雨が降り始めたのは。ぼつりぼつ
りと滴る大粒の雨が、さつき綺麗に拭き取ったデッキの床に水玉模
様を描いていく。真つ黒な雨雲に覆われた空は太陽の陽射しを遮り、
昼間だというのに薄暗い影が山荘を包み込んでいった。やる仕事は
もうない。客室のベッドメーカーキングも全て終えてしまった。再びソ
フィーのドレスが飾られた角部屋へと足を踏み入れる。誰もいない、
その事実が背中を押した。姿身の大きな鏡の脇にかけた白いドレス
に手を伸ばす。高級ブティックでドレスを選ぶ時のよう、肩紐を摘
みそつと自分の身体にあてがってみる。

ふわりと足元をドレスの薄布がくすぐる。こんな服を着て、ティ
ルの腕に指を絡める自分を思い描いてみる。すつとずっと、夢みて
いた情景。どれくらいそうしていただろう。窓から差し込む強烈な
閃光に視界を奪われ我に返る。雷だった。バリバリと切り裂くよう
な轟音とんがが外で鳴り響く。慌ててドレスを元に戻し、階下に下りてい
った。殴りつけるような雨が、デッキに抜ける大きな窓ガラスを叩
いていた。まるで嵐だ。ぼんやりと窓ガラスに弾ける雨粒を眺める。
背後に人の気配を感じ振り返ると、寝起きのティルが立っていた。
雷の青白い閃光が、ティルの頬を一瞬照らし出す。あのボート小屋
での日々が脳裏に覆い被さり、時間の感覚がグラリと歪んだ。変わ
らない、あの頃と同じ困惑した横顔がそこにあった。

「コーヒーでもお入れしますわ。昼食はお召し上がりになりますか」
メイドの顔を崩さず、そう伺いを立てる。

「……ジャンヌ」

ティルの手が伸びてきた。あの頃のように、迷いを含んだ仕草で。

ジンジンジンっ！ ジンジンジンっ！

雷の音よりも胸が跳ね上がるけたましい響きは、居間の端にある電話のベルだった。伸ばしていた指先を握り締めると、踵を返し無言でティルはそちらへ歩んでいった。

「はい、ティル・ハイルマンです。……ええ、もうお耳に入っておりますか。十九日にパリの警視庁が奪還された後……ずっと激しい戦闘が続いていましたが……ディートリッヒ・フォン・ホールティッツ將軍は降伏を宣言されたそうです。先程、支部へ顔を出してまいりましたが、混乱しております。……コーネン所長はこちらに何時ごろ来られますか？ ……え、土砂崩れですか？ はい、ああ、どちらにしても今日はパーティという状況ではないですから。私はベルリンのほうへ緊急の召集命令が出ました。

道路も寸断されているならばそちらへは戻らずに、明日一番の電車で発ちます。ソフィーには……ええ、近いうちにベルリンで会おうと伝えてください」

今、ティルは何と言った？ ベルリンへ召集命令……

今日の婚約パーティが中止だとか、パリが解放されたとか、そんな事はどうでもいい。ティルが行ってしまう。やっと巡り会えたのに……手の届かない場所に消えてしまう。

ジンジンジンっ！ ジンジンジンっ！ 再び電話が鳴り響く。ティルはまた受話器を上げた。

「ティル・ハイルマンです。……君か。いや、収容所の側で土砂崩れがあつたそうでパーティは中止になった。コーネン所長とは話をしていないのか？ ……そうか、いや、丁度良かったカール、君に大事な話がある。いや、電話では出来ないんだ。俺は明日朝一番でベルリン行きの電車に乗るから、この雨が落ち着いたら……夜中になるかもしれないが、君のところへ伺う。この嵐では山道を下るのに道路が淹のようになってるだろうから、今は車を動かせそうになり。すまない、急に……大事な話なんだ」

ティルがカールに？ そんなに急いで何の用事があるというのだ

ろ。頭が回らない、いや、大事な事は今ここにテイルがいるという事だ。誰にも邪魔されず、二人きりで。

「……ちよつと道路の様子を見てくる。土砂崩れなど起こしてないか確認しなくては」

呼び止める間もなくテイルは外へ飛び出していった。大きな音と共に扉が閉まる。一瞬の静寂の後、再び雨の音に包まれる。山荘が大きな楽器のようだ。雨に叩かれ不思議な音色を奏でている。

階段をのぼり、持ち主を見失った部屋へと足を運ぶ。白いドレスが私を誘っている。バスルームへ入り、お湯のコックを捻った。特別な日に似つかわしく、自分を磨き上げよう。

七年前の最後の日を覚えている？ どうしてあなたが私から逃げ出したのか、ちゃんとわかってるわ。あの時積み重ねた時間は、今へと続く前奏曲に過ぎなかった。二人だけの秘密を守る為に、私たちは別れた。以外にも呆気なく。

あなたを迎えに来たベルリンの恋人、綺麗な人だったわね。でも、私は受け止めたの。あのボート小屋で、あなたがあの人を抱く様子を、雨が降りしきる中じつと窓の外から覗き見していた。どこもかしこも成熟した大人の女。あなたに抱かれ、包まれ、甘い吐息を溢していた。

でも気付いたの、あなたがベッドの上で私を探しているって。彼女を抱きながら、目をつぶり思い描いている女の顔……それは私だ。窓の外にいる私と視線が絡んだとき、絶望の中であなは、私の名前を口ずさんでいた。聞えたわ……聞えたの、あなたの声が。あの時も、薬指にぶら下がったダイヤの指輪を撫でていた。くると、私の指を回るリングの感触。もう少し……もう少し待っていて、この指輪がピッタリと似合う女に変貌するまで。

きつとまた巡り会える。きつときつと……。

バスにのんびりと身を浸らせたのはいつぶりだろう。ふわふわのバスローブが、濡れた身体から水分を吸い上げる。クローゼットを開けると、さつき私が整えたソフィーの荷物が並んでいた。たった一晚のパーティーの為に、随分たいそうな身支度なこと。翌日の為のワンピースも、選びきれなかったのか数着用意されていた。新品の下着、真珠のネックレス、おそろいのイヤリング。珊瑚色のルージュは気に入った。あとは素肌に羽織るこのシルクのドレスがあればいい。

櫛を器用に使い、不揃いの髪は細かく分けて結い上げた。ドレスと同じ色の靴に足を忍ばせるが、頂けないと脱ぎ捨てる。彼女、小柄だと思っていたが足だけはドイツ人サイズらしい。床はどこかしこも磨いたばかりだ。裸足が心地良いに違いない。

さつきまで身に付けていた、粗末なメイド服を手に取り、スカートの裾をゴソゴソとまさぐる。折り返し縫い上げた裾の中に、小さな異物を見つけ糸をほぐし取り出す。コーネンの屋敷で最初の日、屋根裏に案内されるなり荷物は全て取り上げられた。身分証も、僅かに持ち出した金品も。あの時とつさにこの指輪だけは、隙を見て口に含み難を逃れたのだ。

そつと指に通す。シンデレラの靴のようにピッタリと、それは私の薬指にはめられた。

指輪、指輪、指輪。ティルの不在を何年も慰めてくれた、ダイヤの指輪。

ティルが帰って来た様子はまだない。この嵐の中、びしょ濡れで戻ってくるに違いない。私が暖めてあげる。そんな想像に笑いを噛み締める。

鏡の中をもう一度覗き見る。懐かしいパリジェンヌの私が幸福そうに微笑んでいた。

ジュテーム（テイル）

「追加の注文は一名と聞いとりますが……」

怪訝そうな顔で、囚人服の男はためらいがちに尋ねてきた。その口を封じる為に、煙草の箱を差し出す。こんな物では不足だろうと、更なる貢物を手に取り奴の足元に置いてみせる。

ゴトリッ。それは靴だった。目の前の男は、拍子抜けした表情を誤魔化す為に、素早く視線を自分の手元に落とす。

「君はまだこの冬を経験してないそうだな。想像できるか？ 氷点下の中、穴のあいた靴で雪の中を歩き回る感触を。凍傷というのは体の先端……まず指などから壊死していくものだ」
はつとした顔で男は顔をあげてみせた。

「目立つので、わざと汚してあるがこれは新品だ。しかも靴の底は防寒の為、特別に厚い物を選んである。もちろん、君にピッタリのサイズでだ」

男はくつくと笑い出した。お手上げだといった調子で。

「いや噂通りさすがですね、ハイルマン大佐殿」

「ほう、噂とは？」

「親衛隊の見本のような方だと」

「囚人に賄賂を貢ぐのがか？」

「……こんな気のきいた物を頂くのは初めてで。靴のサイズまでご存じとは」

男はすつと手を伸ばし、机の上に置かれた赤い学生証を摘まみ上げた。

「こちらの女性はドイツ人の証明書、そしてハイルマン大佐殿は、イギリス人の……でよろしいですね」

「俺のは間に合わなければ省いていい。女の方を緊急に頼む」

「了解しやした。パリ・エコール・ノルマル音楽院……とは将来有望なお嬢さんですね。写真はこれを剥がして上手く加工しやす。それ

にしても別嬪さんだ。収容所暮らしの身には刺激が強いつてもんだ…… あ、とんだ減らず口を。もちろん他言無用でさ。職業柄、口は神父より固いですからご安心を」

男は隙間だけの歯を見せ、にやりと意味深な笑いを投げ掛けてくる。男の胸には囚人の分別の為に色分けされた緑色の三角バッジが貼り付けられている。緑は刑事犯を表す。この男、ドイツ人の癖にユダヤ人の金持ちに偽の身分証を売りさばいている罪で収容所送りとなった。

この男を俺に紹介したのは意外にもコーネンだ。今の時代、何が起きるか分からない。保険のつもりで偽りの身分証を作っておくと敵国の身分証など、軍部に知れば厳しい処罰も免れない裏切り行為。こんな門外不出の話を、俺に耳打ちしてくるとは、身内と見なしているからこそ扱い。

これから先もコーネンは、色々な裏道をお披露目してくれる事だろう。ジャンヌを生かす道をそこから拾い出せばいい。

ドイツ人と偽るジャンヌの身分証明書は、婚約パーティの朝に出来上がった。俺のは更に二日後と言われ、再び出直しとなる。先日プレゼントした靴を履いた男は、申し訳無さそうに頭を垂れた。

「すみません。おおつびらに作業をできないもんで、皆の目を盗める時間が僅かしかないもんですから……」

「いや、これが出来たなら充分だ」

ジャンヌの身分証にはドイツ人らしい名前が書かれている。少し色褪せた雰囲気といい、申し分ない出来だ。

「ハイルマン大佐殿、本日ご婚約とか、おめでとうございます」

不意打ちな挨拶に苦笑いを返す。

「よく知っているな」

「俺の耳は地獄耳でね。所長の姪ごさんとか……」

囚人の耳に入るほど噂は広まっているのだろう。昇進狙いの……と尾ひれをつけて。自分で車を運転し、収容所の門を抜ける。朝一番で新しい荷物が到着したらしく、停車した蒸気機関車から降り立

ったユダヤ人の列が出来ていた。お決まりの楽団が奏でる陽気なマーチが響く。ジャンヌと再会した瞬間が、ふと脳裏をよぎった。

顔馴染の親衛隊の男が、手を上げて近寄ってくる。一度車を降り、その男の元に歩み寄る。

「ハイルマン大佐、楽しみにしているよ。名誉な事にコーネン所長からご招待いただいたんだ」

「お忙しい中、私事にお付き合い頂き申し訳ない」

「何を言う。賑やかな夜になりそうだ。ただ、空模様が気がかりだな。最近随分と天気が荒れている」

彼は、厚い雲に覆われた空を仰いだ。

「これから、支部のほうに足を伸ばしてきます」

俺の行先に彼は興味を示した。

「フランスは随分とヤバイ状況らしいな……戦況の詳しい報告を頼む」

小さく頷くと踵を合わせ、お互いお決まりの挨拶を交わし別れる。車を出そうとすると、兵士が目の前に溢れるユダヤ人の群れを蹴散らかし道をあけてくれた。

ブルンツ。ゆつくりと徐行しながら車を走らせる。婚約パーティーは夕方からだ。支部に顔を出し、山荘に到着するのは昼頃になるだろうか。ジャンヌ……彼女の奏でるヴァイオリンに祝福される婚約パーティなど、平常心が保てるのか。思い描くだけでも心が乱れる。内ポケットにしまったジャンヌの身分証に手を当てる。小さな安堵の溜め息が溢れた。彼女を生かす道がひとつ開かれたのだ。あとは逃げ道を探し出すまでだ。既に収容所に勤務する予定の期限は過ぎている。ソフィーと婚約の件もあって、収容所での仕事は延長願いが出され受理されていた。けれども、戦況の悪化で親衛隊員も戦場へと借り出され始めたらしい。ゲシュタポだ、軍だ、親衛隊だなどという境界線はもはやこたわってなどいられないのだろう。戦争に負ければ何の意味も持たない集団に成り下がる。

「……マ……マ」

空耳か？ 今子供の声が聞こえた気がする。シッ、と咎めるような押し殺した声が背後から響く。キキッ。車を急停車させ、後部座席に視線を走らせた。誰もいるはずがない。後部座席はもぬけの殻だ。……いや。身体を小さくかがめ、座席の足元に身を潜める人影が見えた。銃を手に取り、身構える。

「誰だ。撃ち殺されたくなければ顔を見せろ」

ゆっくりと招かざる客は影から姿を現した。庇うように五、六才の少女を抱きかかえた女だった。先程、到着した汽車に乗っていたのだろう。一体いつの間に……さつき立ち話をしていた隙に潜り込みに違いない。女は青い顔でこちらを見据えている。どうあがいても助からないのは、わかり切っていると言いたげな眼差し。少女はそんな母親に手を伸ばし、ぎゅっと抱きついてみせた。

ブルンッ。車を発進させる。まだ後方には機関車が見える。こんな所にいつまでも停車しては不審に思われるというものだ。

「……そこにチョコレートがある。食べていいぞ」

「本当に？ あたし、チョコ大好き。ありがとう、おじちゃん」

バックミラーに映る母親は信じられないといった顔で、こちらの様子を伺っている。信じられないだろう、ナチスの軍人がこんな事をするとは。俺は一体何をしている？ このまま収容所に戻り、こんなお荷物は降ろしてしまえばいいというのに。

「……ユダヤ人か？」

「わっ、私、ドイツ人の身分証を持っているんです。」（ユダヤ人の印）を押されていない、ちゃんとした証明書を」

「では、何故ここに送られた」

女は黙りこんだ。この場をどう切り抜けようかと思い描いている。だが、嘘などついたところで通用しないと観念したのか、泳がせていた視線をこちらに定めた。

「密告されたの。ずっと隠れ家に潜んでいたのだけれど」

「どこから送られてきた」

「オランダよ」

「……それにしても随分と達者なドイツ語だな」

「夫がドイツ人なの。彼がオランダ留学中に知り合って……夫が教えてくれたから、子供も母国語のようにドイツ語が話せるわ。ドイツ人の身分証は、いざという時の為にとって夫が手配してくれたのよ。随分と法外な値段でやつと手に入れたというのに……使う暇もなく隠れ家にゲシュタボがやってきて……」

「では、ご主人も収容所に？」

「……射殺されたわ……私達を守ろうとして」

彼女の声は震えていたが、凜とした気丈さが含まれていた。

「証明証を見せてみる」

彼女はゴソゴソと小さな鞆の中からそれを取り出し、運転する俺の脇に差し出してきた。

「子供だけでいいの、子供だけ……本当にドイツ人の血が半分でも流れているのですもの……」

証明証は、俺がさっき収容所で受け取ったジャンヌのものと相違ないものだった。どこにでもこういったものは出回るのだ。足元を見た値段で。

バックミラー越しに女の姿を眺める。まだ30手前といったところか、金持ちだったのだらう身なりは整っていた。捕まってここに辿り着くまでにそんなに時間はかかってないらしく、不潔な様子もない。ユダヤ人は黒髪が多いという偏見に反し、彼女達の髪は幸にもブロンドだった。

「化粧道具は持っているか？」

「……少しなら」

女は怪訝そうに答える。

「今から駅に寄ってやる。不審に思われないように身支度しろ」

どうして、こんな事を……言い放った後、既に少し後悔していた。けれども自らの手でこの二人を地獄に落とす事などすれば、神はジャンヌを道連れにする気がしたのだ。

神なんて、神なんて。あの収容所の光景を思い描けば、その存在

など塵のように儚い希望に成り下がる。けれども……

「親衛隊にあなたのような人もいるのね。信じられないわ」

「俺も初めてだ。こんな事をするのは」

「どうして？」

「さあ、成り行きだろう。三十分ほどで到着するぞ、いいから早く身支度するんだ。その子の髪も綺麗に結ってやれ」

バレれば、俺もただでは済まない。ハンドルを握りながら、一体どうやって切り抜けようかと試行錯誤を繰り返した。駅の周囲は、ドイツ兵で溢れていた。

「これを襟元につける」

俺は、カギ十字のマークが刻まれたバッジを女に手渡す。

「これも持っていけ」

彼女は俺が差し出した紙幣を見ると、首を横に振った。

「そこまで……頂けないわ」

「ナチスが、君達ユダヤ人から巻き上げた金を返してもらっただけだと思えばいい」

いくぞ、と目で合図し車を降りる。俺は後部座席のドアを開けると、車から降りる彼女をエスコートした。

「電車を乗り継いでチェコに行くんだ。いいな？」

彼女は小さく頷いてみせた。俺は少女の目線にまで腰をかがめ、ドイツ流の挨拶を教えてやる。

「わかったわ、おじちゃん」と、少女は恥かしそうにはにかんでいる。

切符を買い、すでにホームで煙を上げる蒸気機関車に走り寄る。親衛隊の制服を着た俺が一緒との事もあり、大したチェックも無くここまで来る事が出来た。座席まで見送るために車内に乗り込むと、あちこちに監視の目を光らせたドイツ兵が立っている。その中の一人に俺はあえて声を掛けた。

「テイル・ハイルマン大佐だ、君に大切な仕事をひとつお願いしたい」

声を掛けた兵士は、不意打ちの任務に驚いたのか、大袈裟なほどに踵を鳴らし敬礼をしてみせた。

「こちらのご婦人の護衛を頼む。とある収容所所長の大切な客人なのだ。どの……とはちよつと言えないのだが」

多くを語らなくてもわかるだろう？ と、意味深な目配せをする。最初、兵士はきょとんとした顔をしていたが、女が向ける艶っぽい笑顔にやつと状況を理解したようだ。どこぞの所長の愛人が、お忍びで密会にきたのだ。しかも子供をこさえるほどに親密な関係なのだ。俺は、そつと兵士の懷にチップを忍ばせる。

「なに、ただ何も知らない他の兵士が失礼な質問などを彼女にしないよう、気にかけてくれれば言いだけの事だ。君が汽車に乗っている間だけでいい」

神妙な顔つきで彼は頷いてみせた。

「では、私はこれで失礼します」

上官の妻に対する態度で、俺は礼儀を尽くした別れの挨拶を送る。すると、少女がお遊戯のように可愛らしい手を前にかざし、先程教えたドイツ流の挨拶をしてみせた。

「ごきげんよう、おじちゃん。ハイル・ヒトラー！」

車内にいた他の乗客達からも、その愛らしい仕草に笑いが零れる。なかなかの役者だ。俺も同じ挨拶を返すと、列車を降り発車を見送る。

助けたなどという感情は思ひ上がりだ。もともと普通に生活する権利を、意味も無く剥奪しているのは、我々ナチスなのだから。

ジャンヌの父親が現われたのは、本当に不意打ちだった。いや、この屋敷の主なのだからいつ姿を見せても当然といえば当然の事。だが彼女との秘密の関係を思えば、後ろめたい思いに襲われた。ポルト小屋からヨットを出航させる事は無かったが、さすがに父親

が宿泊したその夜、ジャンヌは俺の元を訪れなかった。

夜が長く感じた。来ればきつとうるたえてしまっただろうに、彼女の不在は俺の心に、その存在の大きさを思い知らせる。このままパリに連れ去られてしまうのかもしれない。いや、それでいいのではないか。こんな関係がいつまでも続くわけが無いのだから。氣持の葛藤に押し潰されそうだ。

翌日の夕方、仕事を終えボート小屋に戻るとジャンヌが既に部屋に入り込んでいて驚かされる。ジャンヌが持ち込んだのだろうか、タンゴの旋律を奏でるレコードが回っていた。

「パパの荷物から拝借したの。ね、教えて頂戴。あなた踊れる？」
砂浜に靴を脱ぎ捨てると、ジャンヌは俺の手に自分の手の平を合わせてきた。

「タンゴは男がリードするダンスだ。女性はその身を委ねればいい」
「あら、そうなの？ 情熱的に女が男を誘うダンスかと思っていたわ」

「女が美しく映えるように見せるのも、リードする男次第なんだ」
「あなたに全てを委ねるわ」

ジャンヌがそつと頬を俺の胸に預けてくる。その温もりを噛み締めながら、屋敷の方角へと視線を走らせる。

「パパはもう帰ったわ。結婚の報告に来ただけ」

「結婚……」

「パパの恋人、もうすぐ子供が生まれるんですって」

彼女の手を包み腕を水平に差し出すと、ジャンヌの背中に腕を回す。

「君もパリに帰るの？」

バンドネオンが小気味良く刻むリズムを聞きながら、探るようジャンヌの耳元に囁きかける。

「そうね、パパは一緒になんて言っていたけれど、新しい生活に立ち入る気なんてないわ」

ジャンヌのつま先を足で挟み込みながら体重を移動させ、さりげ

なく彼女の身体を反転させる。ジャンヌは楽しそうにはしゃいでみせた。

「すごいわ、あなたに任せていると、それらしく踊れちゃうのね」
俺もタンゴなんて、ほんの少し齧っただけなのだ。ジャンヌは勘がいいのだろう、教えていくステップを次の瞬間軽やかに踏んでみせる。裸足で踏みしめる砂の感触、繋がれた指先、胸に触れるジャンヌの柔らかい頬。オレンジ色の夕陽が、絡み合う二人の影を砂浜に伸ばす。もう限界だと思った。離れがたいと思う気持ちに揺さぶられ、自分自身を抑えられそうに無い。このままボート小屋に連れ込み、ジャンヌの全てを食べ尽くしてしまいたい。

結末は見えていた。もっと彼女に溺れ、俺はどうしようもない男に成り下がってしまうに違いない。タンゴのステップを身につけるように、ジャンヌは俺が与える快楽をあつという間に吸い取ってしまっただろう。未知の世界だからこそ、興味を示し俺を求めてくるだけの事。全てを知ってしまったら、他の男に目移りするのは自然な事に思えた。

「ティル、どうしたの？」

ジャンヌが真っ直ぐな眼差しで俺を覗きこんでくる。何の迷いもなく、俺を映すエメラルドにも似たグリーンアイズ。再びステップを踏みジャンヌをリードする。腕の中で踊る彼女がただ愛しくて。

ジャンヌ……ジャンヌ……。ずっと俺だけを見ていて欲しい。君を導く事が出来るのは、俺だけなのだと思いついて欲しい。けれどもそんな甘い夢に身を委ねられるほど、俺は無知ではない。現実の残酷さを知り尽くしている。

それから数日してからだ。イレエネが尋ねてきたのは。庭番のジョンが「ドイツから客人が来た」と、葡萄畑のはしで作業する俺をわざわざ呼びに来てくれた。今日はもう上がっていいと気を使ってくれ、俺は一足先に仕事を切り上げて、樽のシャワーを浴びる。

一体誰が……髪から落ちる水滴をタオルで拭いながら歩いていくと、ボート小屋から伸びる栈橋に女が二人立っていた。一人は後ろ

姿でもすぐに分かる、ジャンヌだ。学校から戻ったばかりなのだろう、白いブラウスに髪は三つ網のままの装い。女達は楽しげに海を指差し、クスクスと笑い合っている。俺の足音に二人が振り返る。背の高いもう一人の女は……

「日に焼けたのね、ふふっ、何だか私の知っているティルじゃないみたいだわ」

久しぶりに会うイレネは、長旅の疲れも見せずにふんわりと優しく笑ってみせた。紺と白のストライプのワンピース。白い帽子から零れる黒髪の巻き毛。

「あなた、住所は知らせてくれたけれども、それっきり手紙の返事すらくれないんですもの」

彼女は歩み寄り、俺に口付けた。ジャンヌが見ている……そう思わずにはられない。

「可愛い子ね。彼女がドイツ語を話してくれて、助かったわ。庭番の人には私の下手くそなフランス語が全然通じなくて……困っていたら助けてくれたの」

俺の首に腕を回すイレネの肩越しに、ジャンヌを見つめる。

「レッスンの迎え、今日はいいわよ」

早口のフランス語でジャンヌは話しかけてくる。イレネにはジャンヌの声色が、不思議な音楽のように聞こえているかもしれない。「あなたの事をベルリンへ連れて帰る為に、来たのですって」

ベルリンに？ その言葉はジャンヌとの離別を意味するものとして耳に届く。イレネの腰に手を添えながら、ジャンヌの真っ直ぐな眼差しにただ立ち尽くす。

「あなたの借金、ダイヤの指輪で清算するわ。解放してあげる。そして、どちらを選ぶのかはあなたの自由よ」

精算？ あんなおもちゃのようなダイヤで……ジャンヌはこちらに歩み寄り、イレネの肩に触れた。

「ティルに会えてよかったわね」微笑みを添えてそう囁く。

「^{ダンケ}Danke」

イレエネは感謝の言葉をジャンヌに返すと、再び俺に口付ける。去っていくジャンヌの後姿を横目で追いつけながら、ただ啞然と見送ることしか出来ない。会いたかったわ……そう呟くイレエネの聲が、夢の中の出来事のように遠くに聞こえた。

“どちらを選ぶのかはあなたの自由よ”

俺は卑怯者だ。ジャンヌに求められる事に身を任せ、全ての言い訳にしていた。彼女が足音を忍ばせボート小屋の扉に触れる音を、聞き逃した事など無いにせよ。口付ける場所を示す人差し指がゆっくりと動く様を、恍惚とした高揚感の中、眺めていたにせよ。君が求めるから逆らえないのだと、背徳への懺悔にそんな理由をなすりつけ己を保っていた。

「ねえティル、町を案内して頂戴。南フランスは初めてなんですもの」

イレエネの頼み事に我に返る。はるばるベルリンから訪ねて来てくれた恋人。彼女が望むささやかな願い事に小さく頷くと、その手を取り俺は歩き始めた。

初めてジャンヌと出会った坂道を登り、町へと向かう。高台より見下ろす海にイレエネがはしゃいでみせる。喉が渴いたという彼女を連れ、カフェを兼ねたあの雑貨屋に立ち寄る。

「ね、あのレジの彼女……」

外に置かれたベンチに並び冷たいカフェオレを飲む。

「レジの彼女？」

窓ガラスをちらりと覗き込み、イレエネはクスリと笑ってみせた。「レジの女の子、私が隣にいるのを見て面白くなさそうな顔をしていたわよ」

「……彼女とは話をしたことも無い」

「ティル、あなたってモテるのに鈍感なのよね。この二ヶ月あんまりにも連絡が無いから、他に恋人でも出来たんじゃないかって私、心配してたのよ」

恋人……。いや、ジャンヌはそういう存在ではない。そんな言葉

では表せない。宿命などと口にすれば、なんて陳腐なと、笑われるに違いない。けれどもどんなに取り繕ったところで、自分自身は誤魔化しようも無いではないか。ジャンヌは、魂さえ揺さぶられる存在なのだ。彼女を知ってしまい、もう無知だった頃の自分には戻れない現実には打ちのめされる。

「一緒にベルリンへ帰りましょう。いい仕事を見つけたの。ヒトラー・ユーゲントで講師を募集してるのよ。去年のアマチュア・ボクシングチャンピオンのあなたが職を探していると相談したらすごく興味を持たれてね。知性と身体能力両方を兼ね備えた人材は理想だつて。ねえティル、あなたはこんな土にまみれ、農夫の真似事なんて似合う人じゃないわ」

ヒトラー・ユーゲント……ヒトラーの理想に叶う青少年の育成を目的としたドイツの教育システム。去年から国家組織として強制的に青少年は加入義務を背負い、違反したものは裁かれる。

「ボクシングは趣味だ。俺は共産主義者ではないが、ヒトラーなど好きじゃない」

じわじわと思想さえ束縛していくやり口に、違和感を拭えない。芝居がかった過激な弁舌。あの男に権力など持たせてはいけない。

反自由主義、反民主主義、反個人主義。国益の為には他の全てを踏みにじるナチズムの慣れの果てに、待ち受けるものは破滅ではないのか？

「ティル、そんな事を口に出しては駄目」

声を潜め、イレーネは辺りに警戒の視線を走らせる。こんな南フランスの片田舎で、ドイツの政治などに興味のある者がいるものか。「職場はあなたの家からも近いし、賃金も悪くないのよ。お母様、気落ちされて体調も崩しているの、側にいてあげるべきだわ」

俺は黙りこんだ。イレーネは俺がナチ党へ良い印象を持たないが故に、考え込んでいるのだと勘違いしたらしい。一生懸命、ナチ党が行った経済政策の効果が成果をあげ始めてきた話を続けている。

逃げ出すよう自殺した夫に絶望する母。職があり側に居てやれる

状況ならば、そうするべきだろう。俺は人一倍視力がいい。その身体能力を生かし、ボクシングでは意外なまでの結果をもたらしていた。プロへの誘いもあったが、職にするには身体に受けるダメージに対して一生を賭ける熱意が必要だ。俺にはそれが欠けていたのだらう。

だがヒトラー・ユーゲントの講師……仕事の内容だけ思い描けば、素人に護身術を授けるだけで特技を生かせる理想の職とも言えるかもしれない。雇い主がナチ党だろうが共産党だろうが、きちんと賃金さえ支払ってくれば、仕事と思い割り切るなど、他愛ない事だ。路頭に迷うよりは。葡萄畑でどれだけはいつくばって見たところで、その先があるわけでもなく、大人になっていくジャンヌに、そんな惨めな姿をさらして生きていくのか？

物陰から垣間見たジャンヌの父、ただの金持ちとは風格が違う雰囲気纏っていた。庭師のジョンが、ジャンヌの家系はフランス革命を逃れてきた大貴族の末裔だと語っていたのを思い出す。俺ごときが宿命などと思い込み、どんなに彼女を欲したところで、この手に堕ちてくる女ではないのだ。思春期の興味深き年頃に、たまたま出会った異国の男が物珍しいだけの事。でも、あの瞳に囚われていると、自分が特別に選ばれた男なのなどと錯覚させられる。

“私達、元々はひとつだったの”

彼女が囁いた言葉が幾つも浮かんでは消えていく。ジャンヌも同じ宿命を俺に感じているなんて……とんだ妄想に違いない。いや、懇願だった。そうであって欲しいと。

「テイル、雨が降ってきたわ、本降りになる前に帰りましょう」
ぽつり、ぽつりと空から雨粒が落ちてきた。まるで俺の心の内を代弁するかの空模様。

“どちらを選ぶのかはあなたの自由よ”

今、彼女の前から消えたならば、味わい尽くせなかった魅惑の男として小さな胸に刻みこまれる事だろう。選ばれなかったという心の傷痕は、時に彼女の奥底で小さな痛みを疼かせるかもしれない。

忘れ去らないで欲しいと儚い希望にすぎるなど……なんて女々しい男だ。けれども彼女の側にいながらにして、色褪せていく自分の存在を眺めるのは耐えられない。堪えられないのだ。

ボート小屋に辿り着く頃には、イレーネと二人ずぶ濡れになっていた。ワンピースの薄布が、彼女の豊かな肉体を透かしている。

「脱がせて……ティル」

媚びるような女の眼差し。イレーネは俺のシャツのボタンに指を伸ばしてきた。何も心を揺さぶられない。あるのはただ喉の渴きを癒したいという男の欲情。

「寒いわ、早く暖めて頂戴」

お望みのままにイレーネのワンピースを引き剥がす。成熟した女が待ちきれないといった様子で、俺の身体に纏わりついてくる。始めてしまえば、なんて事の無いありきたりな情事。けれどもジャンヌを目の前にすると、どうしてもここまで進むことが出来なかった。イレーネと比べれば、ジャンヌがどんなにまだ女として幼く、蕾であるのかが思い知らされる。無理をし傷付けてまで、彼女を抱きたくは無かった。そんな事をしなくても、見詰め合うだけで、とろけるような甘い海を漂う事が出来たのだから。

ジャンヌ……ジャンヌ。別れは予感していた。こんな日がいつか来るのではないかと、それを望みそして怯えていた。

ジャンヌ……ジャンヌ。言い訳なんだ何もかもが、本当は君の全てが欲しかった。この腕に抱き、君と素肌を合わせたら、きつと離れられなくなる。唇に触れるほんの少しの温もりで、俺の理性をここまでかき乱す女。手に入らないのなら、殺めてしま^{あや}う事すら俺はためらわないかもしれない。君の魂を、塞いだ口付けで吸い取ってしまいたいと望むだろう。こんな狂った自分から逃げ出すのだ。愛しているから……ジャンヌ、君を愛しているから。

ベッドに押し倒したイレーネを、欲望のままに弄ぶ。満たされない想いは、ひと時の快楽に紛れ薄れていく。殴りつけるような雨音が、雷の轟音に一瞬掻き消えた。雷光が窓ガラスを透かし、そこに

一瞬浮かび上がった人影に俺は息を呑んだ。ジャンヌ…。

視線が絡む。雨にぐっしりと濡れたジャンヌの髪が彼女の頬に張り付いていた。彼女の小さな唇が動く。言葉の届かぬ俺に語りかけるよう、ゆっくりと。ジャンヌの唇は同じ単語を繰り返していた。何度も、何度も。

je t'aime…^{ジュテーム} フランス語でここまで美しい綴りがあるだろうか。

je t'aime… je t'aime…（愛してる…愛してる）

「ティル、愛してるわ」

同じ意味を持つ言葉を、腕の中の女がドイツ語で囁いてくる。

「ich liebe dich（イヒ・リーベ・ディツヒ）、ティル…」

喘ぐよう、ソフィーは甘い声色を俺の耳元に注ぎ込んでくる。ぐらりと眩暈がした。俺は何をしているのだろう。目を凝らし再び窓に目をやると、もうそこにジャンヌの姿はなかった。幻だったのかもしれない。こんな雨の中、ジャンヌが立っているはずが無いではないか。

だが、あれがジャンヌとの別れだった。屋敷を発つ時にも彼女は俺の前に姿を見せなかった。国から恋人が迎えにきたのならば仕方がないと、庭番のジョンは気持ちよく門から見送ってくれた。ジャンヌは学校へ行ってしまったのだろうか。黒塗りの車が、いつもの場所から消えていた。

もう二度と、巡り会う事など叶わないと思っていたのに。月日が巡り、あの南フランスでの日々は、激動の時代の流れに埋もれていた。結婚話が進まない俺との関係に、いつしかイレエネも愛想を尽かし去っていた。それから何人の女が通り過ぎていっただろう。ただどいつだって誰かと肌を重ねれば、感じる違和感が君の存在を蘇らせる。

ジャンヌじゃない。ジャンヌじゃない。

山荘から続く坂道は、滝のように雨を滑らせていた。三十分ほど徒歩で下り、見える範囲で土砂崩れが無い事を確認する。まだ雨は続くだろう。この坂道を車で登ってくるのは無理だ。来客は誰も来ないのだと確信する。これで良かったのだ。俺はきつとベルリンに戻り次第、戦線に送られるはずだ。ソフィーとあちらで再会するなと叶わぬ絵空事。生きて帰れる確率など儚いものだろう。婚約パーティなど中止になって幸いなのだ。これ以上ソフィーを巻き添えにしないで済む。

山荘に戻ると、居間のカーテンが全ておろされ、室内は夜のような雰囲気であふれていた。天上から吊るされたシャンデリアが、美しい室内を控えめに照らし出す。火のくべられていない暖炉の前のソファアの端から、寝転んでいる女の脚が見えた。背もたれに遮られその姿は見えない。白いドレスの裾から、チラチラと覗く素足だけが、そこに人がいるということを知らせている。

ソフィーが？ 信じられない。一体いつの間にこの雨の中、辿り着いたというのだろう。お行儀悪くつま先に引っかけた華奢なハイヒールが、カタリと小さな音を立てて床に落ちるのが見えた。

「やっぱり駄目ね。ドイツ女の靴はサイズが合わないわ」

その声色にドクリと胸が跳ね上がる。ソフィーじゃない……この声……この声は……。フラフラとその足元に吸い寄せられる。朱色に染められた革のソファアに、頬杖をつき横たわる白いドレスの女。ジャンヌだった。赤いルージュが、大人になった彼女の口元を何の違和感も無く彩っている。

「ねえティル。私、もういい子の振りをするのはうんざりよ」
ソファアの肘掛に脚を乗せて、つま先をぶらぶらと弄びながら、ジャンヌがぐすりと笑いを噛み殺す。時間が後戻りを始めた。ああ、ジャンヌだ。あのジャンヌだ。俺の知っているジャンヌが息を吹き

返した。

「テイル」

七年ぶりに呼ばれる自分の名に我に返る。ゆっくりと足元に跪く。身体が強ばり膝が震えた。口の端を持ち上げ、妖艶な笑顔を作ると、ジャンヌは人差し指を立ててみせた。彼女が指差した場所は、先程から落ち着き無く動き回るつま先。そつと足首を手に取り唇を寄せると、ピクリと足の親指が跳ね上がるのが見えた。もう誰にも邪魔される事は無い。二人きり……二人きりだ。

「ねえ、私の蝶^{バビオン}への挨拶はまだ？」

ジャンヌが手を差し伸ばしてくる。手の甲に刻まれた小さな蝶がひらり、ひらりと、俺を誘う。その薬指に小さく光る指輪を目にし、心臓を驚掴みにされる。はじけるように顔を上げ、ジャンヌと息がかかる距離で見つめ合う。

「指輪はシンデレラの靴のようにぴったりよ。私、あなたに相応しい女になれたかしら」

ジャンヌの蝶^{バビオン}に口付ける。何度も……何度も。そつと手を伸ばし、短いながらも結び上げられた彼女の髪に触れる。

背中まであつた見事なプラチナブロンドを、切り落としたのは俺。ジャンヌの滑らかな頬に触れる。倒れるほどの勢いで、手を上げたのは俺。

「……懺悔は必要ないわ。生き残る為の儀式だったと思えばいいのよ」

こつちに来て。彼女の瞳がそう訴えかけてくる。堪えきれずジャンヌに覆い被さるうとしたが、滴るほどにずぶ濡れの自分に気付き躊躇する。ジャンヌは上半身を起こし、お行儀よくソファアに座り直した。

「ねえテイル……私、他の女性のように、あなたを恋人にしたいなんて望んでいる訳じゃないのよ」

思いがけない一言に、頭が真っ白になる。やはり俺の思い上がりだったのか。

「全てが欲しいわ、あなたの全てが……身体も人生も……何もかもよ」

食い入るような眼差しに囚われ、ぞくりと肌が栗立つ。ジャンヌの赤い唇から押し出される言葉が、甘い糸を引いて絡み付いてくる。押し寄せる熱い想いに、身体中が焦げ付くようだ。

俺は咎められるのを覚悟で、彼女の膝に、濡れた頭を埋めた。ジャンヌの細い指が、髪の間隙に優しく潜り込んでくる。満たされた幸福感に嗚咽がこぼれそうになり、慌ててそれを飲み込んだ。

「……初めて出会ったあの瞬間から、ずっと君のものだ」

髪から滴る水滴が、肌触りの良いドレスに染み込んでいく。柔らかな太股が、張り付いた薄衣に透かされ淫靡な存在感を伝えてくる。ジャンヌの脚は膝までしか知らない。許しを乞うよう見上げる。あの頃と違うのは、願いがその先を望むという意味を持つ事だ。

「もう男を知らない少女じゃないのよ」

ジャンヌの告白に胸の奥がズキリと痛む。

「だけど、私もずっとあなたの物よ。他の男に抱かれていた時も……私にはあなただけだったの」

同じだったなんて。ジャンヌも自分と同じ想いを抱え生きてきたのだなんて。

“私達、元々はひとつだったの”

いや、ジャンヌは知っていたのだ。最初から全てを。俺の疑心でこんな運命の悪戯に身を投じ、全てを歪めてしまったのだ。

ジャンヌが俺の手を取る。そしてそつとひとつづつ、湿った太股に導いた。ジャンヌの熱を帯びた体温が薄い布越しに伝わってくる。ゆっくりとジャンヌは足を開いた。ほんの少しだけ、鍵を解き放つように。そして俺の手の甲を優しく握り、太股から滑るようにドレスの上から体のラインを辿らせる。

ジャンヌの細くくびれた腰、谷のような臍の窪み、豊かに膨らんだ胸、細い首筋……形の良い顎を登り、俺の旅は彼女の赤く染められた唇で休息を許される。

「あなたの好きなように抱いて。それが私の望みよ」

ほら、こんなにも簡単にジャンヌは俺の魂に息を吹き込む。生きている理由を、この世に生まれ落ちた訳を、特別な意味があるものへと変えてしまう。

そう、全ては君と愛し合う為に……

羽化（ジャンヌ）

唇に導いたティルの指先が首筋にのびてくる。激しく抱きすくめられ、軍服に染み込んだ雨の匂いに包まれる。待っていた。この瞬間を……伝たわるだろうか、あなたに抱かれる日をどんなに夢見ていたかなんて。気の遠くなるような歳月。それは空白の七年などというものではなく、遙か昔から待ち望んでいた肌の温もりなのだと漠然と感じた。

全てが欲しい。吐息さえも私のものだ。言葉で語り尽くせぬ想いなら、身体で伝えればいい。おでこに触れる位置にあるティルの顎を、上目遣いに見上げ視線を交える。ぞくぞくとした痺れが、欲情と共に背筋を伝い這い上がってくる。

もつと、そばに来て。もつと、もつとよ。もどかしい気持ちでティルの軍服に手をかける。だが、彼の方が女のドレスを脱がせる手腕に長けているようだ。あつという間に裸にされ、私はそんな姿のまま、もたつく指を懸命にティルの固いボタンに絡ませた。

ふと、幼い頃大好きだったキャンディの包み紙を、小さな指で懸命にこじあげた記憶が蘇る。味わうために、薄いセロファンに辛抱強く不器用な指を絡ませた。私はきつと今、あの時と同じ顔をしているに違いない。

ぶちんつという鈍い音と共にボタンが弾けた。口に含む寸前でキャンディが足元に落ちたような絶望感に襲われる。昔からヴァイオリンの弓は器用に動かせるくせに、他の事に関しては呆れる程に不器用だった。大体、男の服を脱がせることなど初めてなのだ。今まで寝た相手の中に、そこまで手間をかけたなどと思わされる男など他にはいなかった。求められ、値踏みし、楽しませてくれそうな男達を選んできただけの事。経験を積み、大人の女になった自分をお披露目するつもりが何て不様な……と、泣きたい気持ちでティルに視線を流す。けれども、思いがけず本当に泣き出しそうな瞳と出

くわし、ドクリと胸が跳ね上がった。

「もう……降参だジャンヌ……焦らすのは……」

上ずり震えるティルの言葉が、耳元にとろりと流れ込む。

「こうしているだけで、気が狂いそうだ」

懇願交じりの溜息が、ねだるよう首筋に吹き付けられる。……この台詞を、知っている。誰？ 過去に誰が私にそう囁いたのだろうか。鼓膜の奥底を甘美に震わせる記憶。言葉ひとつで私をこんなに昂ぶらせるのはティルしかない。けれどもあの頃の彼は、瞳ではそう訴えながらも決してそんな台詞を口になどしなかった。

“こうしているだけで、気が狂いそうだ”

思い出そうと目を閉じれば、水面に揺れる銀色の月が揺れる様が浮かんで消えた。ティルの手の平に頬を包まれる。瞼の下をそっと吸い上げられ初めて、自分が涙を流していることに気付かされる。壊れ物を扱うよう唇を塞がれる。繰り返すティルの唇に包まれる心地良さ。だが、やがてそれは奪うような激しさを帯びていく。

口付けを交わしながら、ティルは軍服のボタンを片手で器用に外してみせた。彼の皮膚が覆い被さってきた時、馴染んだ羽毛に全身を包まれた気がした。体温を混ぜ合わせる素肌の感触……もう二人を隔てるものは何もない。空気すら入り込む隙間も許さぬ程に肌をぴったりと擦り合わせる。

割れたコインが合わさる。ひとつに繋がって、私たちはやっとありのままの姿を取り戻す。

左右に広がる蝶の羽のよう、片方だけでは今まで飛び立つことなど叶わなかった。けれども今、甘く切ない産声をあげ、鼓動のリズムをひとつに重ねながら私達は羽化する。新しい肉体に生まれ変わる感覚。男でも女でもない。愛で繋がった完璧な生命。

ティル……ティル。私達、やっとひとつになれた。上から垂れてくる彼の髪が、私のうぶ毛を悪戯に撫でていく。快楽に震える身体から、七色に輝く燐粉が溢れ、はらはらと二人の肩に舞い落ちる。

ジュテーム……je t'aime……うわ言のよう繰り返す。

ジューテーム…… j e t a i m e …… 永遠にあなたの鎖で囚われていたい。

もしかしたら私は、少し眠っていたのかもしれない。情事の後の気だるさに投げ出した腕が、ソファから床へと垂れ下がっていた。髪を優しく撫でる指の感触に薄目を開く。床に座り、ソファに片肘をつくティルがこちらをのぞきこんでいた。目を覚ました私に、安堵した表情を見せる彼にどうしたのかと問い掛ける。

「息をしていないのかと不安になった」

指の背で確かめるよう頬を撫でられる。

「今、死ねたら幸せかもしれないわ。あの屋敷でどのくらい生き長らえるかわからないもの」

「……もう、あそこには戻らなくてもいい」

「二人で逃げるの？」

知らずと声が弾んだ。だがティルは黙り込み立ち上がると裸のまま窓辺に向かつて歩いていく。のろのろと起き上がりその後ろ姿を見送る。と、視界に見馴れないものが映った。今まで気付かなかった、彼の腰の辺りに……これは何だろう。カーテンの隙間から外を伺い雨足を確認すると、ティルは再びこちらに戻ってきた。

「この傷、どうしたの？」

隣に腰を降ろしたティルの背に手を添え、そつと彼の身体を覗き見る。

「弾痕だ。以前ソ連兵に二発打ち込まれた」

ケロイド状に引きつった弾痕が二つ、腰の上に並んでいた再会した最初の朝、背中にガウンを羽織らせてあげた時には気付かなかった……あの時の私は、斜め後ろから伺える彼の横顔にばかり視線を奪われていたのだから。こんな傷を負っても彼は生き延びた。今日、この時の為に。

「変わった痕跡は他にもある」

ティルは腕を上げ脇の下を指し示した。Aと文字が刻まれている。

「これは？」

「ナチスの親衛隊員は皆、腕に血液型の刺青を刻まれている。優先的に輸血がされるようにと。だけど実際戦場の混乱に巻き込まれたら、こんな所をいちいち確認するのか疑問だがね」

「あなたが撃たれた時に、この刺青が役に立ったのではないの？」

「あの時は陸軍の兵士でまだ親衛隊に所属しては無かった。それでも輸血はしてもらえた」

ティルは口の端を上げ、皮肉な笑みを浮かべた。

「……君の腕が綺麗なままで良かった」

強制収容所の囚人は皆、番号を刺青される。ピアニストのマリーが以前見せてくれた、腕に刻まれた数字の羅列を思い出す。ティル、あなたが守ってくれた。様々な仕打ちが私の命を救う画策だったのだと今更に思い知る。憎まれているのかもしれないと、一瞬でも思った私はなんて愚かだったのだろう。

美しい筋肉で覆われたティルの背中へと手の平を添える。南フランスの潮風が漂う坂道で、彼に背負われながら鼻先をすり寄せた襟足へと唇を寄せる。少しずつ背骨を辿りながら、口付けを落としていく。そして辿り着いた弾痕をそつと唇で塞いでみせると、ティルの体がびくりと跳ね上がった。

「……まだ痛い？」

「半年も前の傷だ。痛くなど無いが……」

首をこちらに回し、ティルは懇願の眼差しで訴えてくる。悪戯はやめてくれと。けれども再び宿った欲情の色を、私は見逃しはしない。

私は人差し指を立てると、真上を差した。ティルはその望みを叶える為に、おもむろに私の身体を軽々と抱き上げる。不意打ちに足元がふわりと宙に浮く感覚に、思わずしがみ付く。

「あの頃より重くなった」

「……レディに失礼ね」

「お望みの場所は二階のベッドルームでいいのかな？」

ティルは全てを心得ている。指先が指し示す意味を……どんな願いを込めているかを。

「俺もさつきは……夢中で……」

まだ続く激しい雨音に掠れたティルの囁きが混じり合う。降り続く雨はこの密会を覆い隠すよう、幾重にも重なりあった雫のカーテンで山荘を包み込む。

「今度は……もっとゆっくり、君を愛させてくれ……」

彼の言葉を噛み締めながら瞼を閉じる。

“二人で逃げるの？”

先程の問い掛けに、結局はティルは答えなかった。いいわ、何も言わないで。今はただ、あなたの温もりを感じていたい。

五月のセントラルパークは抜けるような青空と向き合い広がっている。この空の何処かで、未だ戦争が続いているだなんて嘘のようだ。

「あのドイツでさえ降伏したっていうのに、日本なんて東洋の小さな島が、まだアメリカを手こづらせているだなんて不思議ね」

ベンチに並んで腰を降ろした老婦人がフランス語で話しかけてくる。

「ええ……本当に」

二週間前にドイツは無条件降伏をした。新聞は派手な見出しをつけ、ヒトラーの自殺を伝えた。首に巻いていたシルクのスカーフが風にさらわれ、ふわりと芝生の上に舞い落ちる。立ち上がるうとする私を婦人は制止し、ゆつたりとした動作で代わりに拾ってくれた。「そんなに急に立ち上がったら、お腹に障るわ。大事にしながら」

彼女は私の知らない結びかたで、スカーフを首に巻いてくれた。そして愛しそうに、そつと私の膨らんだお腹を撫でた。

「女にとって子供を持つ事は最高の悦びよ。きつと顔立ちの綺麗な赤ちゃんに間違いないくつてよ。あなたも旦那さまも美男美女ですもの」

「あら、彼はマダムのお好みかしら」

「ウイ（ええ）。亡くなった夫と同じ瞳の色でときめいてしまうわ。あなた達を見ると五十年前の私達を見ているようで……すごく幸せな気持ちになるのよ。ニューヨークを離れる前に、素敵なお夫婦とお友達になれて嬉しいわ。あら噂をすれば……よ。」

歩道を隔てて並列した木々は、上部で新芽を抱いた枝を寄せ合い、隙間だらけのトンネルを描く。そんなザ・モール（並木道）を彼がこちらに向かつて歩いてくる。

「ボンジュール マダム」

白髪の老婦人に人懐こい笑顔で、彼は親愛のキスを贈る。彼女の瞳に添い遂げた夫の姿がよぎるのがわかる。はにかむ笑顔がまるで少女のようで、私は微笑ましい気持ちで老婦人の横顔を見つめた。

「ジャンヌ、春とはいえベンチは冷えるよ。これを」

見慣れたラベンダー色のショールを差し出してきた。受け取る為に指が触れ合うと同時に、彼の唇が頬をかすめる。

「今日は天気がいいし、カメラを持ってきた」

彼はお気に入りのレイカのカメラを私達に向け、シャッターを押した。

「あらっ、あらあら大変！ だったらもっとお洒落してくればよかったわ」

彼女は恥かしそうに手で髪を整える仕草をしてみせる。

「ありのままがいいんですよ。パリジェンヌの美女が二人、文句無しに被写体だ」

心地良いシャッター音が、繰り返し響き渡る。

「こんなおばあちゃんに、フィルムがもったいないわ。ほらほら今

度は私が撮ってあげる。ここを押せばいいのね？」

彼女にもつと寄り添うようにと注文をつけられ、仰せのままにカメラの前に立つ。一生懸命ファインファアを覗き込む姿が健気で可愛らしく、自然と笑いがこぼれる。

カシャッ！

「すぐいい写真が撮れたと思うのよ。あなたの大きなお腹もちやんと写したわ。三人も子供を産んだのに、考えてみれば妊婦の時の写真は一枚も無いの。今からじゃもう無理だし……勿体無い事をしたわ」

カメラを返ししながら彼女は寂しそうにため息をついた。だがすぐに気を取り直し、話を続ける。

「そうそうあなた達、結婚して何年経つの？」

彼がその質問に答えようとするより先に、私はさらりと口にする。

「丁度、一年ですわ」

「まあ素敵、薔薇色の人生ね」

そう微笑むと彼女は、はっとしたように品のいい腕時計を覗き込んだ。

「大変、こんな時間だわ。娘夫婦が今日こちらに到着するの。家にいないと怒られてしまう。……パリジェンヌの私が、最後に行きつく先がカリフォルニアだなんて、数奇な運命ね。向こうでフランス語を使う事なんてもう無いかもしれないわ。ジャンヌ、短い間だったけれど、こんなおばあちゃんの話相手になってくれてありがとう」

メルシー（ありがとう）と、もう一度繰り返し返すと、彼女はベンチから立ち上がった。大きなお腹越しに別れの挨拶を交わす。住所を書いてくれれば写真を送ると手帳を差し出すと、嬉しそうにカリフォルニアの住所を綴ってくれた。去っていく後姿を二人並んで見送っている、肩にかけたショールをそつと彼が整えてくれる。

「あなた優しい旦那様ね、カール」

「いつだって、君の為に跪くよ」

片目をつぶって、カールはおどけてみせた。ゆっくりと二人で並

んで歩き始める。お腹の重みでおぼつかない足元の私に、カールは腕を差し出してくる。その肘に腕を絡ませ、私達は緑溢れる草花の向こうにそびえ立つニューヨークの摩天楼を眺めた。

「品のいい方だったね。パリジェンヌはおばあちゃんになっても華がある」

「旦那さんが亡くなって、二年一人暮らしをしていたんだけど、カリフォルニアに住む娘さんといっしょに暮らすことになったのですって。一週間だけのお付き合いだったけれど、何だか寂しくなっちゃうわ」

そう、ベンチでフランス語の小説を読んでいたら彼女が声を掛けてきたのだ。ボンジュール、って。英語が飛び交う日常の中、母国語で話し掛けられ嬉しかった事を思い出す。

「ジャンヌ、君の英語は俺のフランス語よりはるかに上手いよ。でも君が望むなら二人の会話はフランス語にしようか、僕もいい勉強になる」

数ヶ月前まで、カールと交わっていた会話はドイツ語だった。だが今回の選択肢にその言語は含まれない。公園のあちこちで見掛ける軍服姿のアメリカ兵が、戦争が未だ終わっていない事を物語っていた。

「いいのよ英語で。私もう少し上達しないと」

カールは「ウィ（わかった）」とフランス語でからかうように相槌をうつてみせる。笑い合い、緑豊かな公園の中を寄り添いながら家路に向かう。あの老婦人にもこんな時代があったのだろうか。年老いるまで添い遂げ、愛を貫き通した時、人は何を悟るのだろうか。少女のようあどけなく微笑んだ、彼女の顔が脳裏をよぎった。

肩にカールの腕が添えられる。手の平の温度がいつもより熱く感じ、不思議な気分で彼の横顔に視線を流す。カールは少し照れ臭そうな眼差しでこちらを見つめ返してきた。

「結婚して丁度一年前なんて君が言うから……驚いたよ」

「あら、ごめんなさいね」

くすくすと、込み上げる笑いを噛み殺す。

「だってあの方、あなたと亡くなった旦那様がよく似ているって……私の事も、パリから遙々アメリカに嫁いできた花嫁だと思い込んでいるものだから、新婚の頃の自分と重なるっていつも嬉しそうに言うのよ。だから、今更夫婦じゃないなんて言い辛くて……ね」

「勘違いされたままでも、俺は全然構わないけれど」

カールは真っ直ぐな眼差しに射抜かれ、返す言葉を見失う。

「……君を口説いている現場を見つかったら、ハイルマン大佐に大目玉を食らうな」

カールは肩をすくめておどけてみせた。

「……そうよ。妊婦を口説くなんて、あなた余程変わった趣味をしているわ」

大きな口を開けて、カールは可笑しそうに笑った。この人の優しさに甘えている。そんな自分は卑怯者だと思う。

一あの嵐の日、雨足が止んだ明け方に山荘を抜け出すとテイルはカールの自宅を訪ねた。ノックをする前に扉は音も立てずに開いた。夜も明けぬ早朝にも関わらず、カールは眠っていた様子も見せない。「……ジャンヌが一緒とは驚いたな」

カールは神妙な顔でテイルを見つめた。

「君がこんな時間に俺を訪ねてくる程の用件だ。ただ事ではないと心得ている。けどこの状況は予測もしてなかったね、一体どういう話かな？」

居間と呼ぶにはあまりにも殺風景な部屋で、密談は始まった。

「コーネン所長へ用立てしている物資を見れば、カール、君が闇ルートに強力なパイプを持っているのは一目瞭然だ」

それで？　と言いたげな眼差しで、カールは煙草に火を移しながら話の先を促してくる。

「女一人、闇で他国に流すことなど君には容易い事だろう。手間を省く為に身分証は用意した。彼女を安全な場所に移して欲しい」

カールは目を見開き言葉を失っている。けれどしばらくすると口の端を歪め薄く笑ってみせた。

「ジャンヌ……か、確かに彼女には男の理性をかき乱す妖しさがあ
る。だが親衛隊の君とあろう者が随分と酔狂な……ソフィと婚約が決
まったばかりだということにもう愛人づくりとは、さすが抜け目のな
い男だ」

「姑息な輩だと笑われるのは覚悟の上だ。報酬は持ち運びの勝手が
いいものを用意した」

軍服の内ポケットから黒い布を取り出すと、ティルはパラリと開
いてみせた。見事な小振りのダイヤが数粒、見せびらかすような光
を放つ。

「……やめてティル……」

唇が不甲斐なく震える。

「こんな場所でやっと再会出来たというのに……あなたの知らない
所に行くのなんて……嫌。私あなたが守ってくれなくても、ちゃん
とあの屋敷で上手く生き延びてみせるわ。戦争が終わるまで待つて
いるから……迎えに来て頂戴」

「知り合いだったのか？ だったら何故ジャンヌにあんな仕打ちを
……守るため？……まさか、わざとあんな事を？」

信じられないと小さく呟き、青ざめた顔色でカールは立ち尽くし
ている。

「俺はこれからベルリンに召集される。その先は最悪前線に送られ
るかもしれない。そこまでドイツの戦況は悪化しているようだ。あ
の忌まわしい行いを隠すために敗戦時ナチスはユダヤ人に何をする
かわからない」

「どうしてジャンヌと一緒に逃げない」

責め立てる口調で、カールはティルに問いただしてくる。

「脱走するのが彼女だけならば、コーネンは苦々しく思いながらも

執拗に追いかけてはしないだろう。だがソフィを裏切り親衛隊である俺が、ジャンヌと逃亡したとなれば話は違う。奴が見逃すと思うか？ 特別な捜査網を張り巡らせ徹底して追いかけるはずだ。そんな茶番にジャンヌを巻き込みたくはない」

私は死ぬことなど恐くはないのに、胸を締め付ける恐怖は永遠にあなたを失う事だ。耐えられない、ねえ、それだけは耐えられない。「親衛隊員には血液型の刺青が刻まれている。見つければ逃れようのない証拠になる。……皮肉なものだ、優先的に救われる為に刻まれた印が、今は命を脅かす」

ティルの言葉が遠くに聞えた。泳がせた視界に、軍服のボタンがひとつ千切れているのが入り込む。情事の痕跡をそこに見た気がして、身体の奥底でティルの体温が蘇る。そっと手を伸ばし、無くしたボタンの存在を指でなぞってみた。ほんのひと時の別れ道だ。そう自分に言い聞かせる。七年待った。いつか巡り会えると絡んだ運命を信じて。あと数年待つことなど大した回り道ではない。永遠に失う事を思えば……久しぶりにはめた指輪をそっと指先で撫でながら、息を吸い込む。

「私、カールと行くわ」

そうきっぱりと言い放つと、しんとした沈黙が部屋を包んだ。

「居場所が落ちていたら……そうね庭番のジョンに伝えておくわ。覚えている？ 彼を」

ティルは小さく頷いて真っ直ぐに私を見つめた。視線を絡め、私達は心の中でお互いの決意を確かめ合う。私はその視線を一度足元に落とすと、ティルの隣に立つカールに目を向ける。

「ね、カール。今日の私、いつもと違うって気付いている？」

「え……」

おもむろに話の矛先を変えた私に、カールは戸惑いを隠せない様子で慌てている。私はくるりと踊るように柔らかな生地のスカートを翻してみせた。

「喪服みたいなメイド服は、もう懲り懲りだわ」

戦争を始めるのはいつも男達だ。女は、子供を恋人を夫を父親を……奪われた悲しみに耐え忍ぶ。今、誰かの帰りを待つ女達が世界中にどれくらい溢れているのだろう。愛する人が家の扉を叩くその瞬間を、息を潜め待ちわびているに違いない。

私の知らない東洋の小さな島で、まだ戦争は続いていると老婦人は言っていた。けれどもナチスは命尽き、ドイツの戦争は終わったのだ。テイルは私を見つけ出す事が出来るだろうか。庭番のジョンに手紙でニューヨークにいる事を伝えてある。誰かに私の居場所を尋ねられたら、答えるようにと頼んでおいた。

南フランスの果樹園の屋敷では、父の後妻と弟が暮らしている。父が事故で他界した今となっては、二人は縁遠く、交流は途絶え何年も経ってしまった。嫌いじゃない。小さな弟は愛らしく思う。けれどもやはり、あそこはもう私の帰る家ではない。間もなく臨月を迎える身体はずっしりと重かった。

窓辺の椅子に座り、銀のポットからお茶を注ぐ。窓の外にはビルの間から覗くセントラルパークが見渡せた。マンハッタンの一等地で私はカールと暮らしている。一緒に住むことになるとは予想だにしていなかった。職場の持ち物で家族向けだが、丁度空きが出たのだとカールは言った。

妊娠が発覚し、つわりで寝込んでいた私を一人には出来ない、なかば強引に連れてこられた。無事引き渡すまでの報酬を、ハイルマン大佐から受け取ってしまったのだからと、カールはもっともらしい言い訳をしてみた。

広々としたダイニング、リビング、ベッドルームが三つ。アパートの入り口には制服に身を包んだ守衛がドアを開けてくれる。時折カールを送迎する車がアパートの外で待機している事がある。運転

手付の黒塗りの車。その先端に小さな星条旗がなびいているのが見えた。国家機関に関わる仕事なのだと悟った。だけど私は何も尋ねない。そしてカールも多くを語らなかつた。

ドイツの敗戦を新聞よりも早く私に伝えたのは、カールだ。ティルの消息を掴む為に手を尽くすから、私一人で何処かへ探しに行ったりしないってくれと彼は言った。こんな大きなお腹で、私が他の国へ飛び出していくと思っているのだろうか。いや、そこに居るのだと知ってしまったえば、やはり私は飛んでいってしまうに違いない。ティルに会う時に、もう子供は生まれているだろうか。突然、父親になる事実を、彼はどう受け止めるのだろうか。

チリリンと電話が鳴る。アパートの看守からだった。告げられた来客の名はカールの友人だった。カールの不在を告げると、届けものがあるようなのだが、ではここで預かっておきましようかと尋ねてきた。私が受けとるから、看守に彼を通すようにと許可を与える。「ここの看守はよく教育されているね。俺の顔は知っているくせに決して馴れ合いで通してくれたりはいしない」

スマートにスーツを着こなしたカールの友人が、苦笑いをしながら部屋に入ってきた。部屋の引越しをした時に手伝ってくれた、カールの職場の同僚だ。

「これを渡して欲しいんだ。頼まれていた探し物が見つかったと言ってくればわかるから」

黒い革の書類ケースから、彼は茶封筒を取り出した。

「ちゃんとあいつに手渡したいのだが、僕はこれから急遽イギリスに出張になってしまつて、多分帰国するのは来週末になってしまひそうだから……」

「カールは仕事であなたと一緒にではないの？」

「今は同じ仕事ではないんだ。あいつは優秀だからね、エリートコース真つしぐらつてやつでさ。僕なんて足元にも及ばないよ」

「あら、カールって私の前じゃふざけてばかりで、全然エリートになんて見えなかつたわ。能ある鷹は爪を隠すのね」

話を茶化し笑ってみせた。

「……そう、アイツはいつも隠し事ばかりだ」

意味深な眼差しで彼はこちらにちらりと視線を流してみせた。

「おっと、留守の間にあなたに言い寄ったと、怒られてしまう。僕はそろそろ……」

「あ、今お茶を」

「いや、残念だけど急ぐから今日はこれで。そうそう、最近僕の妹も子供を産んでね、おてんばだった彼女がすっかり母親の顔をしている。女性はずいね」

優しく微笑む笑顔を見て、この人がカールの友人である訳を悟った気がした。帰り際、茶色い封筒を差し出される。話に夢中で肝心な物を渡しそびれるところだったと、彼は苦笑いをしながら去っていった。

封筒の上から中身の形が伺える。長方形の……手帳のように感じた。興味本位に詮索するのは止めよう。普段は足を踏み入れないカールの書斎に入り、机の上に封筒を置く。

チクリとお腹が痛んだ。と、同時に背筋に悪寒が走る。春が来たかと思えば、今日は急に寒さがぶり返していた。ニューヨークの春は不安定な気候だ。ティルの友人が訪ねてくる少し前、散歩がてらにセントラルパークに出向き、ベンチでひとり本を読んでいた。あの老婦人がいないと、すっかりと本だけに集中してしまい時間の感覚を忘れてしまう。向かいのベンチ越し、少し奥まったところにミモザの木が花をつけていた。枝をもたげるほどに黄色い花をつけ、際立った存在を匂わせている。ミモザの木が連なるあの懐かしい坂道は、今も変わらないのだろうか。そんな事をぼんやりと考えていたら、冷たい風が吹き始めたのだ。本を閉じ、いつもより早く切り上げ帰宅したつもりだったが、迂闊だったのかもしれない。妊婦は風邪薬など飲めない。自分一人の身体ではないのだ。もっと気を使わなくては。冷えた書斎から早々に退散する。居間で温かいお茶をもう一杯頂く事にしよう。

カールが帰宅したのは夕方だ。近くのビストロに食事に行こうと誘われたが、少し風邪気味だからと断わった。

「身体が温まるようになってオニオンスープを作ったの、大した夕食じゃないけれどあなたも食べる？」

「調子が悪い時に、料理なんかしなくていいのに。そういう時は僕が作るよ。知ってるだろう？いい腕しているって」

「ええ、あなたのパスタは最高だわ」

「昔、イタリア料理屋でアルバイトをしていた事があるんだ」

自慢げに語るカールは、新しいおもちゃの自動車をお披露目する子供のようだ。はたから見れば私達は仲睦まじい夫婦に見えるのかもしれない。こんな風に恋人でもない男と暮らすのはやはりおかしな事だろう。誰も知らない国で、妊娠という状況に翻弄される中、カールは心のよりどころだった。いや、さりげなく一緒に暮らしながらも距離を保ち、彼が私の居心地の良い空間を作ってくれていたのだ。

「だけど私は……どうしてテイルでなければ駄目なのだろう。こんなに魅力溢れる男が傍らにいながらも、心が決して奪われないのはどうしてなのだろう。ねえ、早く迎えに来て。私はカールを傷付けてしまう。」

“アイツはいつも隠し事ばかりだ”

カールの友人の台詞が頭をよぎった。

「ああ、ごめんなさい。すぐに言うのを忘れていたわ。あなたに渡して欲しいって届いたものがあるの」

「俺に？」

「ほら、引越しの日に手伝ってくれた……」

その名を告げると、カールは怪訝そうな顔をした。

「あなたに頼まれていたものだって言ってた。彼、急な出張で留守にするから取り急ぎ届けてくれたみたい。書斎の机の上に置いておいたわ」

はっとした顔でカールはスーツの上着を脱ぐ手を止めると、私か

ら視線をそらした。

「ちよつと、見てくる」

ぱさりと、リビングの椅子に上着を掛け、カールは部屋を出て行った。すぐに戻ってくるかと、スープを温めていたが、煮詰まってしまうほどの時間が経ってしまい一度鍋を火からおろした。どうしたのだろう。よっぽど大切な内容だったのだろうか。

大きな窓硝子に歩み寄り、外を伺う。セントラルパークは闇に包まれ、ビルの中に漂う大きな湖のように見えた。今、テイルは何処にいるのだろう。彼のそばにある窓の外には、どんな風景が広がっているのだろう。

窓硝子が暗い鏡のように私の姿を映し出す。目を凝らすと背後に立つカールが浮かび上がって見えた。いつの間に……全然気が付かなかった。きつと私を驚かすつもりなんだわ。かくれんぼの鬼が足跡を忍ばせ近づいてくる。知らんぷりを装う事が愉快に感じた。一歩先回りをしているのだという子供じみた優越感。前にも同じ手口で驚かされた事がある。その時は全然後ろに忍び寄ったカールに気付かなくて、不意打ちにほつたをつねられ大声を上げてしまったのだ。懲りない人。あの時こっぴどく叱りつけたら「ごめんなさいママ」とカールは大袈裟にうな垂れてみせた。

カールは私を笑わせたり驚かせたり、退屈を吹き飛ばす才能を持っている。私は瞼を閉じた。カールが触れるより先に振り返り驚かせてやろうとタイミングを見計らう。だけど背後から伸びてきたのはいつもの指先ではなかった。振り向くより早く、私の身体を包み込む彼の腕に絡めとられていた。

「どうしたの？カール」

平静を取り繕い薄く目を開く。背後から私の肩に顎を乗せ、うつ向く顔から表情は読み取れなかった。決して踏み込んでこなかった二人の隙間。彼の背を押したものは何？

「……ジャンヌ……」

小さくその名を囁かれる。愛している、振り向いてほしい、言葉

にしなくてもそんな想いが彼の震える吐息に溢れている。この一歩が二人の関係を崩すものだとかールは悟っているはずだ。何故今なのだろう。帰宅した時にはいつものカールだった。私がスープを温めている間に、彼に何があったというのか。

「君……熱がないか？」

「あら、じゃあそれはきつとあなたのせいね。ハンサムなアメリカ人に迫られたらパリジェンヌも形無しだわ」

「……ごめん」

カールははつとしたように、いつもの距離まで身体を引いた。

「カール……」

彼の頬に手を添える。叱られてうつ向く子供に手を差し伸べる。

「あなたは魅力的だから、女なら皆あなたに愛されたいと願うわ。本当よ」

「君以外は、ね」

拗ねた目で睨まれる。その仕草にはいつもの愛嬌が含まれていて、少しだけ救われた気分になせられる。

「甘えんぼさんは、泥だらけかしら」

え？ と目を丸くしカールがきよとした顔をした。

「あなた汗臭いわ。まさかスーツで一日走り回っていたんじゃないでしょうね」

「まさか」

クンクンとシャツの袖に鼻先を当てて、カールは慌てている。

「妊婦は匂いに敏感なの。スープを温め直す間にシャワーを浴びてきて」

カールは素直にバスルームに消えていった。水音が響くのを確かめると、私はそつと廊下に出て書斎の扉を開く。汗臭いなどとは言いがかりだ。封筒の中身を確認する時間を作るのが嘘だった。ごめんなさい、カール。だけど確かめずにはられない。私とカールの隙間にはティルがいる。その境界線が崩れた訳がそこにある気がした。

机の上に置かれた封筒の中身は空になっていた。連なつた引き出しを上から順番に探っていく。整えられた書類の隙間に、黒い手帳が不自然に挟みこまれていた。形、大きさ、厚み……これだと直感した。カールの物ではない、その表面は随分と薄汚れていた。

ぞくぞくとした悪寒が足元から這い上がってくる。きゅつとした痛みが二、三度、腹部を締め付ける。口をすばめ、短い息継ぎを繰り返しながら片手でお腹を擦り、震える手で表紙をめくった。最初の頁はオランダ語らしい単語が綴られていた。途中から記述は英語に変わっていた。日付の後に幾つかの名前が連なっている。五月七日ドイツ降伏の日からそれは始まっていた。『ナチス狩りリスト』、そうタイトルがつけられていた。

ぱらりと震える手で頁をめくと、紙に飛び散った小さな染みを見つける。その赤黒いものが血であるなどと、繋ぎ合わせようとする思考を振り払う。

五月十日……銃殺、テイル・ハイルマン大佐。四つ並んだドイツ兵の名の中に、その綴りを見つける。テイル・ハイルマン……。あのテイルであるはずがない。同姓同名の別人だ。テイル・ハイルマン大佐、階級まで同じテイル・ハイルマン。

ポーランドの収容所へ向かう列車に乗り込む時、大声を張り上げ、叫びはじめた老人に、ドイツ兵が銃口を向けた瞬間を見たことがある。乾いた銃声。崩れ落ちた身体。こめかみから吹き出した血が兵士の頬にまで飛び散っていた。

五月十日……銃殺、テイル・ハイルマン大佐。身体中が凍り付いた。込み上げる嗚咽を塞ごうと、両手で強く唇を覆う。

嘘だ、嘘だ、嘘だ。テイルは私を置いていったりはしない。私が潮風と共に扉を開くのを、今でもあのボート小屋で待っているに違いない。すぐに行くわ。あなたに会うために。けれども唐突に下腹部を貫いた鈍いの痛みに、視界がぐらりと歪んだ。

「うつ……」

自分のものと思えないくぐもった呻き声が、繰り返し部屋の中に

響く。赤ちゃん……赤ちゃん。テイルと私が愛し合った証。

嵐の中、繰り返し彼の背中に腕を回した感触が蘇る。テイルという毛布に包まれ、汗ばむほどに体温は熱を帯びた。溶けてしまう。満たされた幸福感に身体中をかき回され愛する人に抱かれる悦びを噛み締めた。あれは幻だったのだろうか。もっと欲しいと強く抱き返したら、砂のごとくこの手からすり抜ける。

痛い、痛い、痛い。身体を引き裂くような激痛に膝から崩れ落ちる。ひんやりとした床に頬が触れた時、ドアを開く振動が伝わってきた。私の名を叫ぶカールの声……。

何度も何度も呼びかけられるその声が、濁った闇の中でこだまして聞えた。

幸福に似た夢（ティル）

あの時と同じように、扉は音も立てずに開いた。目の前に立つ男の顔色が、蒼白になっていく様が見てとれる。この男に歓迎されると期待などしてはいなかったが、まるで死人に遭遇したかのような眼差し。

「門番の看守にジャンヌの部屋をと頼んだのだが、ルームナンバーを聞き違えたらしい」

「いや、看守からの電話を受けて、部屋に通すよう言ったのは俺だ。

……ティル……ハイルマン……」

男は絞り出すような声色で、やっと俺の名を呟いた。

「カール、久し振りだな」

手にしたブーケをさりげなく後ろ手に隠す。何故この男がここに居る。疑問に思ったが、平静を装い疲れた顔のカールを正面から見据えた。ジャンヌは？ 視線でそう探りを入れる。

カールは押し黙ったまま、俺を部屋の中に通した。暗く重い空気が二人にのしかかる。招かざる客人だったのだと感じ取る。だが、そんな事はどうでもいい。ジャンヌの居場所を聞きさえすれば、早々に退散するまでの話。その意味も込め、勧められた椅子に腰をおろすこともせず、居間を取り囲む大きな窓硝子に歩み寄る。

空襲で叩きのめされたベルリンの街とは何もかもが違う、ニューヨークの摩天楼。そのビル群の谷間には広大な緑のオアシスが、アメリカの余裕を象徴するかのように広がっている。ふと、窓辺に置かれたキャビネットの上に、写真が立て掛けられている事に気付く。その脇には綺麗にたたまれたラズベリー色のショールが置かれていた。女物の……。歩み寄り銀の額縁に入れられた写真を手にとる。肩まで伸びたプラチナブロンドをなびかせたジャンヌがそこにいた。机に置かれている物と同じ、ラズベリー色のショール。

愛しさに胸が高鳴る。けれども次の瞬間、冷水を浴びたように血

の気が引いていった。腹部に手を添えた不自然な姿勢。まさか。まさか。春の日差しの中、寄り添う二人は何の違和感もない幸せそうな夫婦に見えた。ふと、アパートの看守にジャンヌの名を告げた時の、意味ありげな眼差しが頭をよぎる。恋人気取りの男は、さぞかし奇妙な来客に見えたことだろう。

この男にジャンヌを託したのは俺だ。あの時、もう離ればなれになるのは嫌だと、すがってきたジャンヌを振り払ったのも俺。

子供……当たり前ではないか。ジャンヌの男はこの世に自分一人だとしても自惚れていたというのか。そうだ、自惚れていた。あの嵐の夜に確信したからだ。ジャンヌに愛されている事実を。一点の汚れもなく、真っ直ぐに愛を注がれた。

子供……あの暗黒の時代を乗り越え、平穏な地に辿り着いた彼女が、女としてのささやかな幸せを望んだとして、どうして攻められる？ 儚い希望にすぎり、愛する男の不在を噛み締め絶望を抱きながら生きていく人生など幸せであるはずもない。今、生きて俺がここにいる事自体が奇跡の産物なのだ。偶然の重なり合いで死の淵から這い出ただけの事。

カールに寄り添い、微笑みを向けるジャンヌの写真を再び見つめる。幸せそうで、良かった。ひたひたと押し寄せる悲しみよりも、愛する女の幸福が嬉しかった。戦争に全てを奪われ、煙突の煙と化していった人々の無念を思えば、当たり前前の人生がなんと素晴らしく価値があるものか思い知らされる。親衛隊の刻印が身体に刻まれた俺など、一生縁遠い生活。これで良かったのだと自分に言い聞かせる。ジャンヌがこんな顔で暮らせる日常がここにあるのなら、死んでしまった男を演じ続けるのも悪くない。

海を見るたび、タンゴの音色を耳にするたびに、彼女は小さな痛みを感じるかもしれない。甘い疼きを添えて……。心に突き刺さる棘の欠片でもいい。この後に及んで、そんな事を願う俺は女々しい男だろうか。

ジャンヌが帰る前に姿を消そう。名残惜しむようラズベリー色の

ストールをそつと指でなぞる。振り返ると、いつの間にかカールの姿は消え失せていた。何処に行った？ 長居は無用だ。カールにとって俺の存在は、やはり家族の幸せをかき乱す疫病神以外の何者でもないはず。このまま声もかけずに立ち去るのが相応しい。どんな痕跡も残すべきではない。そう自分に言い聞かせ、手にしていたブーケを握りしめる。

忌まわしく背負った罪を償えというのなら、それが俺が生き長らえた真意なのだろう。だがどんな仕打ちをされようと、神でさえも引き剥がせない己の聖域を俺は守りぬいてみせる。ジャンヌを愛し続ける。誰の妻になろうと、二度と会うことがなかるうとも、俺の心を永遠に捕らえるたつた一人の女。同じ銀の月をジャンヌも眺めているかもしれない。そう思いをはせる夜があれば、生きる糧となる。

ジャンヌ、ジャンヌ、君を愛し続ける。今までもそうであつたよう、これからもこの想いが変わる事はない。そう……ただ、それだけ。

小さな音を立て、居間の扉が開く。ジャンヌかと思い、ドクリと胸が跳ね上がった。カールだった。思い詰めた顔で、つかつかと此方に歩み寄ってくる。無言のまま奴は何かを差し出した。その指先が小刻みに震えているのを見逃しはしない。

何だ？ 一体何だというのだ。カールが差し出したものは何の変鉄もない黒い手帳だった。怪訝な気分を受けとり、視線に促されるまま、パラリと頁をめくる。知っている名ばかりが連なっていた。オランダで終戦まで任務を共にした親衛隊員ばかり。手帳には皆の身体を貫いた銃弾の返り血が、模様のように染み付いている箇所すらある。そこに、己の名を見つける。

“五月十日、銃殺、ティル・ハイルマン大佐”

運命の歯車が力チリと音を立て、死神が差し出した手が、するりとすり抜けたあの瞬間。……どこかで紙を滑るペンの音がする。そうだ、黒い手帳だ。この手帳に書き込むペンの音が、あの時耳鳴

りと共に鼓膜を震わしていた。

「……テイル・ハイルマン大佐殿か」

腕の太い男が、軍服から抜き取った身分証を眺めながら、黒い手帳にその名を書き込む。

「……うっ……」

頭が割れるような激痛を訴えてくる。さっき殴られた拍子に、軽い脳震盪をおこしたようだ。何が起こった？ そうだ、敗戦の混乱の中、ドイツへと撤退する引き揚げ船に乗り込むため車を走らせいる時、武装した民間人に襲撃され捕らえられたのだ。連行された場所^{レジスタンス}は、町外れの廃屋の地下室。奴等の言動からオランダ人反ナチ勢力だと伺えた。

こめかみを押さるため手を上げようと、手首を縛られている事を今更に思い出す。からかうよう、男が俺の軍帽を摘み上げる。

「冠を取られちまったんじゃ、裸の王様も同然だな」

訛りのあるドイツ語で皮肉った口調には、忌々しさが滲んでいた。「へえ、見てみるよコイツの顔」

乾いた血を拳にこびりつけた男の指に顎を掴まれる。

「見事までの金髪蒼眼だぜ。女みたいな白い肌をしゃがって、まさにヒトラーが賞賛したアーリア人って面をしてやがる」

取り囲むよう男たちが群がり、ゲスな笑いを漂わせる。口々にはやしたてる言語に、オランダ語が混じる。

「皆、こいつらの前じゃ下手でもいいからドイツ語を話せ。助けてもらえるかもしれないなんていう希望の欠片すら持たせない為に、冥土の土産に俺達は何を言っているのか、知らしめてやるんだ」

男たちは頷くと、咳払いをし仕切り直した。

「よお、アンタその綺麗なお顔で、何人のオランダ女をたぶらかせ

た？」

再びどつと笑いがおきる。黙り、男の視線を真っ直ぐに睨み返すと、分厚い手のひらに頬を張り飛ばされた。

ドカツ。同じように手首を縛られ転がされた親衛隊員の脇になだれ込む。よく知った顔が腫れ上がり、鼻の周りを血だらけに染めながら虚ろな眼差しをこちらに向けた。自分もまた殴られると思ったのか、奴は怯えた眼差しで俺から視線を反らすと、床に頭をつけたままブルブルと震えだす。ひと月前、連行する途中に逃げ出したレジスタンスを、薄笑さえ浮かべ撃ち殺した男と同一人物とは思えない。

「ひっ、止めてくれっ。俺は違う、コイツとは違うっ。ほら、見てくれ髪だって黒だし瞳だって青くなんかない。だから……だから……っ」

バスンっという鈍い銃声と共に、そいつの身体が跳ね上がる。

「けっ、ヘドが出るぜ。まるで密告屋だ。こういう野郎に何人の仲間が売られたか……」

「おい、コイツの名前はもう書いたっけな」

「今日は四人だ。全員書き記した。あと生きているのは、その色男だけだ」

「誰が殺る？俺は今日はもう二人仕留めたから他に譲るぜ」

先程発砲した男が、拳銃を弄びながら皆の前に差し出すと、数人の男達の瞳に殺意が宿るのが見てとれた。その時だった。地下室の分厚い鉄扉が、不自然なリズムで叩かれた。一人の男が踵を返し、隠し穴から確認すると、引きずるような音を立て鉄扉を開いた。入ってきた人物に、男達の視線が集中する。俺の軍帽をふざけてかぶっていた奴が慌ててそれを隠す仕草をみせる。登場した男は、リーダー格なのだろうと理解する。鋭い眼光を際立たせるよう、顔に無数の古傷が刻まれていた。

緊張した空気が周囲を包む。男は床に投げ出された親衛隊員の死体にチラリと視線を流すと、あの黒い手帳を持つ男に歩み寄る。命

令調の短いオランダ語。声を掛けられた男は、おずおずと手帳を差し出した。

「……ティル……ハイルマン……」

手帳を眺めながら交わされるオランダ語の会話の合間に、自分の名が挟み込まれる。俺の軍帽を手にした男が、こいつだと差し示すよう、こちらに指先を向けた。

ゴツリ、ゴツリ。床に着けた頭に、歩み寄る靴音が響く。あの射るような眼光を、真上から注がれ、俺は死を意識しながら視線を絡めた。男は身を屈めると、至近距離で俺を眺める。声を落とし、この中の誰よりも完璧なドイツ語の発音で奴は話掛けてくる。

「お前、本当にティル・ハイルマンか？」

「……偽者が横行するほど有名ではないつもりだが」

俺の皮肉に、男は口元だけで薄く冷笑する。胸ぐらを捕まれ乱暴に引き寄せられる。そして内緒話のような唇をこちらの耳元に近づけ、小さな……俺だけに聞き取れる程の小さな声で囁いた。

「ポーランドで拾い物をしただろう。親子だ、幼女を連れた親子だよ。あの子に変わった挨拶を教えたのを覚えているか、アンタ、何て仕込んだ？」

……収容所から逃げるため、俺の車に乗り込んでいたあの親子か？ 何故この男がそんな事をしている。疑問に思ったが、頭がうまく回らない。

「どんな挨拶を教えたのかを、答えろ……ティル・ハイルマン」

仰せのままに答えを口にする。ヤケクソのよう、声を張り上げて、だ。

「っハイル、ヒトラー……！」

バスンッと鈍い銃声が響く。胸ぐらを掴んでいる男ではない。親衛隊員を射殺していたあの男が、天井に向かって引き金を引いた音だった。怒りに理性を失った目付きで、銃口を此方に向けながら歩み寄ってくる。

「手を出すな。この男は俺が始末する」

銃を振り回していた男が、その言葉に制され、ピタリと足を止める。

「連れて帰り、俺が始末する……俺のやり方でだ」

威圧する低い声に、文句などつける者は誰もいない。奴は俺の襟足を掴むと、もの凄い力で引きずり始めた。男達は道を空け、固唾を飲んで見送っている。哀れむような眼差しさえ投げ掛けてくる者がいて、生き地獄という名の切符を手にしてしまったのだと悟る。

ブルンツ。泥だらけの車の後部座席に転がされ、走り始めた車の振動に頭を揺さぶられる。逃げなければ……ジャンヌの姿が脳裏を横切りもがいてみたが、身体中殴られた傷が今更のように疼き出す。ジャンヌが待っている。俺が迎えに行くのを待っている。ぐらりと視界が歪んだ。遠のく意識の向こうで、ジャンヌの微笑みがかき消えていった。

目が覚めたのは意外にもベッドの上だった。さっきまで拘束していたロープも手首から消えている。ここはどこだ？

「起きたか」

低い声色に心臓が跳ね上がる。声の主は、机に脚を乗せ、一人用のカウチに背をもたれながらこちらを見ていた。顔に無数の古傷……

あの男だ。

「手荒に扱ったな。ま、命があっただけでもめっけもんだ」

「……一体どういう事だ？」

「まさか実際のテイル・ハイルマンに会うとは、しかもあんな場所で……運命とは悪戯なものだな」

この男の話している事が、全く理解できない。のろのろと起き上がり、床に足をつける。

「本物かどうか、さっきは試させてもらった。見事合格だったな」

「ハイル・ヒトラーが？」

男が意味ありげな眼差しを俺の背後に投げる。その視線を辿ると壁に掛けられた写真が目にとまった。赤ん坊を抱えた夫婦が映って

いた。夫と思われる男は、目の前の男とは全く違う人物だ。この女……。

「俺の妹だ。子供はそこまで小さいとわからないだろうな」

おじちゃん、おじちゃんと、無邪気にこちらを覗きこんでいた少女の瞳を思い出す。

「妹の夫は、ドイツ人だったが俺等の活動を支持してくれた。率先して、ナチスの盗聴も手伝ってくれた。いい男だった」

“夫は……射殺されたわ……私達を守ろうとして”

あの時、震える声で彼女が語った言葉を思い出す。

「二人は無事にチェコへ？」

「ああ、来月にはこちらへ帰ってくる」

男は、懐かしむような眼差しを見せた。

「あちらに逃れていた仲間が、先日妹からの手紙を届けてくれた。それに書いてあった、どんな成り行きで収容所を抜け出たのか。ア
ンタの名前もな」

「……俺の名前が？」

名前など名乗っただろうか？ ああ、列車の中で兵士に声を掛けた時、自分の名と階級を告げた事を思い出す。

「その軍服では襲って下さいと言っているようなもんだ。ドイツにもぐりこめる国境まで、送っていいこう。自分で立ち上げられるか？」

パサリと男は私物と思われる服を投げてよこした。取り上げられたと思っていた身分証もその上に置かれる。

「…… Dank ユーウェル（ありがとう）」

半年以上駐留し、その間に覚えた数少ない挨拶のひとつを、オランダ語で口にする。男は、相槌を打つこともせず俺を見据えた。そして一言、淡々とした口調で言い放った。

「妹の事だが……俺はナチに礼など言う気は無い。ただ、借りを返すまでだ」

「何故、この手帳がここに？」

俺の問いかけにカールは肩をすくめた。

「経緯は語れない。ただ、君の捜索をある機関に依頼をしていた。とはいえ、偶然手に入れたものだ」

ただ者ではないと思っていたが……だが、もう戦争は終わったのだ。詮索するに及ばない。この暮らし振り、ジャンヌと家庭を築く男として、申し分の無い立場にいるのだろう。

アメリカまでの旅費、入国する為に闇で手に入れた偽の身分証……ここに辿り着くまでに俺は全てを使い果たしてきた。こんな俺が、彼女にどんな生活を与えられるというのか。働いて働いて、ささやかな暮らしでも、二人が共に生きていけるのなら幸せなのだと、そう信じて……。

「亡霊が現われたとあっては、驚かせたな、カール。これで失礼する」

手帳を置き、歩き出したところでカールに腕を掴まれる。

「何を言っている。ジャンヌに会いにはるばる来たのだろうか？」

怒りを滲ませた瞳に捕らえられ、俺は混乱した。

「……会えるのか？」

すぐるよう問いかけた言葉に、カールの顔が強張る。返事をする代わりに、奴は俺の腕を引いた。

ここはセントラルパークの一部なのだろうか？ 車に少し揺られ降り立った所から、広大な芝生の合間に敷設された道の上を歩かされる。所々に天使の彫像が立ち、静かに通り過ぎる俺達を見守っている。セントラルパークには回轉木馬や湖までもがあると聞いたことがある。こんな場所まで付属しているとは……。公園に来たついでに気軽に立ち寄れるようにと、アメリカ得意の合理主義というやつか。だが、ここを抜ければ向こう側に、子供が遊べるような遊戯

場でもあるのかもしれない。そこでジャンヌは赤ん坊を抱え、もしかしたら、まだ大きなお腹を撫で、初夏の陽射しのなか木陰でまどろんでいるに違いない。

カールに問いただしたい事は山のようにある。だが黙り込み一歩前を歩く男の背中は何故だか痛々しく、俺は喉元まで出かかった幾つかの言葉を飲み込みながら足を進める。子供までいる状況を思えば、戸惑って当然だろう。全てをさらわれるのではと、葛藤が渦巻いているのかも知れない。失う事への恐怖。皮肉なものだ。立場が違いながらも、味わっている思いは同じだなんて。

さつきまで静かに立ち去ろうと心に決めていたというのに、一歩一歩ジャンヌに近づく高揚感に高鳴る鼓動を抑える事ができない。どんな顔をすればいい？ そうだ、取りあえずこのブーケを彼女に差し出さなくては。ジャンヌの為に選んだ。持ち主を見失えば、道端に捨てられる運命の美しい花々。

「……ここにジャンヌはいる」

立ち止まったカールの背に遮られ、その先にあるものが見えない。込み上げる違和感。状況が理解できず、奴の背を追い越し、その先にあるものを目にする。信じられない光景があった。

「……どう……いう……ことだ」

混乱する思考に言葉が詰まる。悪い冗談に固く拳を握りしめた。俺はふらふらと歩み寄ると、そこに膝まづき、石に刻まれた文字に視線を走らせる。

“ジャンヌ・ブルーニ。天使を抱きここに眠る”

日付はほんのひと月前のものだった。何だこれは？ 悪い夢を見ているに違いない。

「……ティル、君の子供は……男の子だった」

背後から震える声で語り掛けてくるカールを振り返る。

「俺の……子供？」

「そうだ、NYに辿り着いてからジャンヌは妊娠していることに気付いたんだ」

大事そうにお腹を支えるジャンヌの写真が脳裏をよぎる。どうして？ あのジャンヌがどうして土の下にいるのだ。

「産気づいたのは、あの黒い手帳を目にしまったショックからだった。酷い難産で……ジャンヌは半分錯乱し、半分は失神した状態で子供を産み落とした……死産だった」

カールの瞳からぱたぱたと涙が溢れた。悲しみを隠そうともせず、子供のように泣きじやくり始める。あの強制収容所で様々な地獄を傍観してきたこの男が……。

「子供の事を何て伝えよう……君を失ったショックに打ちのめされている彼女に、この上、子供まで……そう迷いながら薬で眠っているジャンヌの病室の扉を開いたら……ベッドから姿を消していた。産後の出血がひどくて、輸血の点滴をしている最中だったというのに……いなくなっていた」

その時の情景を、途切れ途切れに語るカールの言葉が、凍りついた心を滑っていく。現実の話として受け止められない自分がいた。涙など一粒も溢れはしない。認める証のような気がして、必死に喉元に込み上げる嗚咽を飲み込んだ。

「セントラルパークで見つかったと、早朝警察から連絡が入った。散歩を日課としている老夫婦が、ミモザの木の下で横たわるジャンヌを……見つけたんだ」

語尾は嗚咽にほとんどかき消されていたが、墓場はカールの息遣いさえも際立たせるほどに静まり返っていた。そう、一面に広がる墓地……俺は馬鹿だ。ここはセントラルパークなんかじゃない。摩天楼の喧騒から逃れ、死者だけに休息が許される、緑豊かなただの墓地。

「俺が駆けつけた時には、もう……息絶えていた……眠っているのかと錯覚するような穏やかな顔で……握りしめた手の中に……指輪があった……ティル、君が昔ジャンヌに贈ったという……あの小さなダイヤの指輪だ」

“大事にするわ……死ぬまで……ずっとよ”

まだ少女だったジャンヌの指にはサイズが合わず、落胆する俺に彼女が囁いた言葉が甦る。クルクルと回る指輪を彼女はよく弄っていた。その存在を確かめるかのように。

「彼女を愛していた」

きつぱりとカールは迷いのない眼差しで俺に言い放ち更に言葉を繋げた。

「だけど、彼女の気持ちが揺らぐことは決してなかったよ。……ただの一度たりともね」

「どうしたの？ おじちゃん、どこか痛いの」

薄く目を開くと、青空を背景にした金髪の少女に、顔を覗き込まれていた。

「転んだの？」

「……いや」

「一緒に芝生に寝転びたいけど、新しいお洋服にドロをつけるとママに叱られちゃうの」

五、六歳とみられる少女の、あどけない笑顔に目を細める。

「おじちゃん……大人でも泣くのね。なでなですると、痛いのが消えちゃうよ。どこ？」

問いかけられるまま、素直に指を指す。少女は小さな手のひらを、俺の胸にそっと押し当てた。そして可愛らしい声で、おまじないらしい言葉を唱えはじめる。

「この木はね、綺麗な黄色いボンボンの花が沢山咲くのよ。こないだママと来たときは綺麗だったのに」

芝生の上に散り落ちて色褪せたミモザの花びらを、少女は指先で弾いてみせる。ジャンヌが最後に眠った場所。横たわった彼女が見つめた光景は、どんなものだったのだろうか。枝をならせる程の花が咲き誇り、芝生のベッドに黄色いカーテンを垂らしていたに違いない。初めて出会ったあの坂道のように。

「泣き虫さんね。ふいてあげる」

ゴシゴシと柔らかい手のひらが俺の頬を拭う。涙は止めようもなく溢れていた。こんな子供に慰められている自分が情けないなどと感じる思考回路も消え失せたまま。すっかり、いいおままごとの道具にされてしまったらしい。少女は俺の世話に瞳を輝かせている。屈託のない眼差し。

子供……ジャンヌと俺の子供。信じられない。ジャンヌの身体に二人の血を分け合った命が芽生えていたなんて。黒い手帳を彼女が目にするとは……命を切り裂くほどの絶望をジャンヌに与えたのは、結局は俺なのだ。その上、子供まで彼女の手から剥ぎ取ってしまったなんて。

どうしてこんな事になった。俺なんぞが身の程をわきまえず、ジャンヌを愛したが故に、神の怒りに触れたというのか？ ほんの数時間前、花屋の店先でジャンヌに相応しい花を選んでいた。これから彼女のアパートを訪ねるという状況に、目眩がする程の幸福感に包まれて。柄にもなく神に膝まづき、感謝の言葉を捧げたいと願った。ひと時の安息は、突き落とす奈落の底を、更なる深みにする為に神が仕掛けた悪戯だというのか？ 俺は愚か者だ。何て馬鹿な男だろう。

その時だった、鼻先をふわりと何かが横切っていった。そしてそれは吸い寄せられるように、少女の手の甲に止まった。見事なアゲハ蝶。彼女は目を丸くし、じっとその蝶を眺めている。少女の瞳から、ずっと幼さが消え失せた。そして視線を蝶から俺へと流してくる。透き通るようなグリーンアイズに囚われる。

知っている、この瞳を。俺の心を絡めとる、魅惑の眼差し。これは……これは。

横たわる俺の頬に、少女の髪が覆い被さってきた。ふわりと小さな唇についはまれる。ほんの一瞬の出来事。だが、唇に触れた温もりが夢ではない事を物語る。

ふふっと、彼女は髪をかきあげた。その手には、いまだ羽を休め

る蝶が留まっている。

「ローズ、ねえローズどこにいるの？」

少女ははっとしたよう、声のする方向を振り返った。小さな手から、ひらりと蝶が飛びたっていく。

「あつちでママが探してるから、またね、おじちゃん」

ローズと呼ばれた少女は、はにかみながら手を振ってみせる。その様子には年相応のあどけなさが戻っていた。たった今、目の前の男に口付けた事など、忘れてしまったかのように……。

「バイバイ」

走り出したローズの頭上で蝶は気紛れに漂っている。やがて葉だけを残すミモザの木へと方向を転回し、高みへと羽ばたいていった。……っ待つてくれっ」

ジャンヌ……と、小さく叫び蝶の羽へ手を伸ばしたが、届くはずもない。そつと目を閉じると、ジャンヌの姿が瞼に浮かんた。透明な海の色にも似たグリーンアイズが静かに見つめ返してくる。

“知ってる？ 私達はひとつのコインだったの”

知っているさ。だって君が教えてくれた。瞼を開くと、誘うように揺れる羽の紋様が、遠い青空にかき消えていく。

ジャンヌ……ジャンヌ。その姿を、いつまでも見送る。雲ひとつない空。夜になれば銀色の月が、絶望という名の暗闇を一筋の光で照らしだす。あの頃のように息を潜め、ドアノブが小さく音をたてる瞬間を、俺はうす暗い部屋で独り待ち続ける事だろう。

もしかしたら……もしかしたら。蝶に導かれ、気紛れに扉の隙間をすり抜ける君が、目の前に現れるかもしれない。そんな幻を追いかめ、年老い命尽きるまで、何千、何万という夜が通り過ぎていくのか。終わることのない希望と絶望の狭間に見るものは……。

もしかしたらそれは、幸福とよく似た夢なのかもしれない。

波音がベッドの下から響いてくる。どのくらい眠っていたのか……いや、本当に眠っていたのだろっか。ずっしりと身体が重い。瞼を開くのをためらう自分がいた。ここはあのボート小屋かもしれない。起き上がり鏡を覗いたら、絶望を深い皺に刻んだ老人が、そこに映るのではないか。

馬鹿な。夢だ……全ては夢だ。邪念を振り払い瞼をひらく。天井でゆっくりと回るファンが見えた。……違う。ボート小屋ではない。シーツを握り締める拳にも、皺などは見当たりはしない。俺はどうかしている。夢と現実の区別さえつかなくなってきたのか。のろのろと起き上がり、裸の身体に肌着を着用する。

中世のベネチア、第二次世界大戦のナチス……。目覚めた後にまで尾を引く、引き裂かれるような胸の痛みは一体何なのだ？いない。リコがいない。隣で眠っていたはずの女の姿が見えない。己の任務を思い出し、慌ててコテージの扉へと手を掛ける。

水上コテージから砂浜へと伸びる栈橋の真ん中で、うずくまる人影があつた。胸がドクリと跳ね上がる。溺水後遺症……昨日は回復したかに見えた。だが……

「リコっ……！」

彼女のもとに走り寄るまではほんの数秒間。わずかな距離だというのに、もどかしいほどに遠く感じた。リコは裸に俺のシャツを羽織り、小さくうずくまって震えている。痙攣か？ いや、痙攣とは違う。背中に手を添えると、すぐるように腕を絡めてくる。細かく身体を震わせながら、涙ぐんだ瞳で俺を見つめてきた。

「……昨日砂浜に帽子を忘れてきちゃったの」
「帽子？」

「レオン……くれたあの茶色い草の帽子……取りにいくと思ったんだけど……」

眩暈がするのか？ どうして立てない。何故こんなに震えている。「昨日まで平気だったのに……怖い……足の下の水……見ると怖

くて歩けなくなっちゃった」

水が怖いのだとリコは訴えてくる。昨日までこの棧橋の上を嬉しそうに、瞳を輝かせて走り回っていたというのに。

心的外傷後ストレス障害。溺れた恐怖がリコの心に刻んだ爪痕。俺のシャツの中で、泳ぐほどに華奢な身体。こんな小さな背中を、海へ突き落としたのは……この俺。

「大丈夫だ。手を引いてやるから、一緒に捜しに行こう」

リコの指に手を添えると、ぎゅっと握り返してきた。そしておどおどとした眼差しで、周囲に視線を泳がせる。

「レオン……もう……怒っていない？」

独り言のような小さな声が、問い掛けてくる。

「怒ってなどいない」

はつきりと、そう言い切ると、リコの瞳が少しだけ輝きを取り戻す。

「……本当に？」

「本当だ」

リコは思い切ったよう、立ち上がった。だが、重心がぶれるのかフラフラと足元がおぼつかない。リコの胸元に、あの痣が覗いていた。羽を広げた蝶にも似た……。

どうして……どうして。

「レオン？」

細い身体を両腕で抱きすくめる。キーパー（番人）として、どんな感情にも揺さぶられない精神を要求されてきた。己の死に対する恐怖心さえも、俺に特別な感情を呼び起こしはしない。……なのに、どうしてこの女に心が騒ぐ？ 腕の中の温もりを離したくないなどと、身体の奥底から込み上げてくる熱い感情は……。

おずおずと、リコが俺の背に指を這わせる。彼女の震えは、いつの間にか消え失せていた。安心したかのように、身体のを抜きもたれてくる。さわりさわりと吹き抜けていく海風が、悪戯にリコの髪を弄んでいく。

なんという光の渦。彼女の肩に顎を乗せながら、棧橋の真ん中より望む小さな島の情景に改めて息をのむ。波打ち際へと色合いを変化させていくブルーのグラデーション。南国の太陽を弾く白い砂浜。息づく熱帯の緑は艶やかな花々を散りばめている。初めてこの島に足を踏み入れた時と何も変わらないはずの情景が、輝きを増して心を揺さぶってくる。

二人きりだ。まるで地球上に産み落とされた神話のように、たった二人きり。

あとどのくらい一緒にいられる？ 明日の朝九時で、36時間与えられた自由は終わりを告げる。この時初めて俺は、樂園にいられる残り少ない時間を意識した。

もう二度と、会うことなど叶わない。だからどうした？ お互い生まれたときから定められた人生に戻るだけの事。そう自分に言い聞かせながら、どうしようもなく溢れてくる慣れない感情に、歯を食いしばり耐え忍ぶ。

生きている。生きている。この腕の中で息づいている。当たり前な事が悦びへとすり変わる。

堪えきれず……リコを抱く腕にそっと力を込めていた。

小さな海（リコ）

抱き締められた感触に、体から力が抜けていくのがわかる。棧橋の真ん中でレオンの影に包まれ、その居心地のよさに瞼を閉じた。今朝、目が覚めた時も、こんな風に彼の腕の中にいた。二人とも裸で……何でだかわからないけれど、触れ合う肌が急に熱く感じた。もう怒っていないってレオンは言ったけれど……どうしたの？レオンの瞳が哀しげに曇っている。昨日、太陽を隠してしまった雲のように、何かがレオンから光が奪っている。そんな瞳で見つめられると、冷たい雨をポツポツと落とされたような気持ちになる。ぐっしょりと濡れて、レオンに暖めてもらいたいような疼きがわいてくる。

胸がきゅって息苦しくなった。やっぱり、あたしはすごくいけない事をしたんだと思う。勝手にオンラインルームに入ってエリーと接触した。どうして、そんな事が出来のかはわからないけれど、とにかくレオンをすごく困らせたに違いない。もしかしたら、番人^{ギア}の偉い人に、レオンは怒られてしまうのかもしれない。

ごめんなさい、レオン。今度はあたしが暖めてあげるから……ね。だって知ってしまった。人の温もりがこんなにも心を柔らかく安心させるものだって。

不思議、ねえ不思議だね。さっきまで怖くて仕方がなかった海が、またキラキラと輝いている。独り棧橋にしゃがみこんだ時は、飲み込まれるような恐ろしさを感じ、綺麗なこのブルーが澱んで見えたのに。

不思議、ねえ不思議だね。あなたが一緒だと、身体の奥から何かが溢れてくる。嬉しいのと楽しいのと……だけどそれだけじゃなくて……胸を痛い程に締め付けてくるものも混ざっている。

黄色い花模様のワンピースは、床で濡れたまま丸まっていた。だから椅子に掛けてあったこのシャツを借りてみたのだけれど。服を

着てみて、レオンとの身体の違いをはつきりと感じた。目覚めた時、首の下に差し込まれていた長い腕の感触が蘇る……。

あ、ほら、まただ。そんな事を思い描くと、胸の奥がちりちりと熱くなる。棧橋の真ん中で、堪らずレオンの背中に腕を回す。そっと指で彼の感触を確かめて身を寄せてみる。ぴつたりと、少しの隙間もなく合わさっていたい。もっと、もっと……そんな不思議な感情に、いつの間にかあたしは心を覆われている。

結局、帽子は見つからなかった。風にさらわれ何処かへ飛んでいってしまったのだ。ウフには風なんてない。島に来て初めて風を知った。優しく髪をすいてくれる柔らかい風もあれば、木や花をみんな同じ方向へ引っ張ってしまうほどの力持ちの風もある。何処からやってくるのか……一度レオンに聞いてみたが、答えはまったく分からない単語ばかりだった。

瞼を閉じると風の声が聴こえてくる。葉っぱをカサカサと揺らし、レオンのシャツとあたしの身体の隙間を、パタパタと足音をたててすり抜けていく。姿は見えないのに……ここは不思議がいっぱい。ずっとレオンとこの島に居られたら、どんなに楽しいだろう。

時間は、今までただの数字の区切りに過ぎなかった。けれども太陽や月が、空を沢山の色彩で染め上げ、時間の経過を描いく様を知ってしまった。珊瑚に群れる魚の鱗模様を、色鮮やかに際立たせる強烈な陽射し。太陽が沈む瞬間に、蒼い海を塗り替える赤や紫のグラデーション。闇色に浮かぶ月光は、銀色の糸垂らし視線を誘う。

何処かの絵画で目にしたことのある風景……けれども画家が内なる想像力で描こうとした現実を知らずして、どうしてその芸術性をはかれるというのか。なんて素敵。肌を焦がす程の光の渦。癒すように冷たく触れる白い砂。

もうウフには帰りたくない。だけどそんな事を口にしてしまったら、またレオンを困らせてしまう。やはり危険分子だと、直ぐに送り帰されてしまうかもしれない。……嫌だ。イヤダ。いやだ。思わず繋がれたままの大きな手を、ぎゅっと握りしめる。レオンの視

線が、頭ひとつ上より注がれる。

「そんな難しい顔をするな。売店で代わりの帽子を探してやる」

違う、そんなんじゃないの。心の中のもやもやを、上手く説明することが出来ずに黙りこみ、レオンに導かれるまま売店の扉の中に入っていく。初めて足を踏み入れた時にはただ、周囲を見回し珍しい品物の数々に溜め息をついていた。でも今日は二度目という事もあり、少しだけ余裕をもって店内を探索することが出来る。賑やかな柄を連ねる布地、魚の写真が飾られた回転棚、足の指で挟んで装着する不思議なぺったんこの靴。レオンが帽子を探し出してくれた。無くした物と同じ……じゃない。両脇から紐のようなものが垂れている。

「この紐はなあに？」

頭に被りサイズを確認しながらレオンに聞いてみる。レオンはしばらく黙り込んでいたが、おもむろにその紐をあたしの顎の下で結んでみせた。そして、大きな手の平で帽子の頭を掴むと、ぐいっと引いて、ふいに吹き出した。

「……よく考えてあるな、こんなもので……」

口元を緩め、笑いを噛み殺す彼を不思議な気持で眺める。何が可笑しいの？

「風が強く吹いても、この紐があれば飛ばされないぞ」

「えっ、本当に？」

「今、俺が引つ張ってもビクともしなかっただろう」

顎の下で、ぷらぷらと揺れる紐を指の先でいじくってみる。風が吹いても飛ばされない……

「すごい！レオンすごいねっ。本当だ、これならもう大丈夫っ」

鏡の中の自分を確認する。顎の下で結ばれた紐が、不思議な形をしている事に気付く。

「ねえ、レオンこの紐の形、昨日見た蝶みたいじゃない？……ふふっ可愛い」

レオンの口元の笑みが、すっと消え失せた。その様子に、どきり

と胸が跳ね上がったが、誤魔化すよう話を続ける。

「レオン、アレは？キラキラ光っているよ」

壁に埋め込まれたスケルトンケースの奥で、不思議なものが光を放っている。

「昔、この島の隣国では、国土の九割から宝石が掘り出せたんだ」
「ほうせき？」

レオンは並んだ石をひとつずつ指差して教えてくれた。

「赤はルビー、紫はアメジスト、水色はアクアマリン、青がサファ
イア……」

滑らかなレオンの声。綺麗な響き。

「石に名前があるの？」

「まあ、そんなところだ」

「どうしてみんな輪っかの上に乗っているの？」

「あれは、指輪と言うんだ」

「ゆびわ？」

「肖像画で見た事があるだろう。指につける装飾品だ」

肖像画……頭のなかでパラパラと、記憶している絵画がめくられてく。あれもこれも、確かに指だけではなく首にもこんな石がかけられていた。そうなんだ、この輪っかに指を通すんだ。

触れてみたい。赤い石は太陽のように熱いのだろうか。青い石は海のように、意外な冷たさを秘めているのだろうか。

「さすがにここには鍵がかかっている。残念だったなり」

「カギが？」

「貴重な石だからだろう。宝石など、限られた数しかもう地球には残っていない」

「赤いのも青いのも、もう最後の一個って事？」

「最後の、ということもないかもしれないが、まあそんなところだ」
じつと眺める。どの絵の具を混ぜ合わせたら、こんな色が出来上がるだろう。小さな石なのに、不思議なまでの存在感。

「……欲しいか？」

肩越しにレオンに問われる。囁くような低い声と共に、吹き付けられた息がうなじをかすめ、肌がぞくりと音を立てた。

「うっん。綺麗だから、こうして見ているだけでいい」

心と反対の言葉を口に出している。

“欲しいか？”

欲しいわ、レオンがくれるならば……でも、カギがかかっているものに、手を触れてはいけないって知っているもの。ウフにも、私達、歯車^{ギア}が手を触れる事の出来ない扉が幾つもある。ルールは絶対だ。カギを持つ者にしか扉を開く事は出来ない。レオンはこの扉のカギを、持つてはいないでしょう？ 私の為に罪を犯してはいけない。

違反した者がどうなるのか、その先なんて知りもしない。ただ消えてしまうのだ。まるで存在しなかったかのように忽然と。

足の指先を、魚がかすめ通り過ぎていく。ごろんと寝転ぶと、耳元で水がチャプチャプと音を立てた。柔らかく揺れる波に、髪を弄ばれる感触が心地いい。レオンが売店で見繕ってくれた小さな服：水着は、水分を含みぴったりと身体に張り付いている。肩も脚もない不思議な服。黄色いワンピースは濡れると足にまとわりついて重くなるから、この服は余分な布が無い分快適だ。

レオンも同じように隣に寝そべっている。昨日よりも、濃く色付いたレオンの肌。彼の水着はもつと小さい。……あたしも、レオンと同じのでいいのね。海に足を踏み入れる最初だけは怖いと感じたが、もう平気。レオンと一緒にいてくれるから大丈夫だって心の中で繰り返したら、いつの間にか落ち着いていた。

ほんの三日前まで暮らしていたウフの生活が遙か遠く感じる。明日、あたしは一体何処で目が覚めるのだろう。ウフに戻り、今までと同じ生活ができるのだろうか。わからない……ただ今は、そんな事を考えたくない。

「リコ、昨夜も夢を見たのか？」

海の続きのような空に目を細めたレオンに問い掛けられる。昨日、朝食の時に話をした、あの夢の話の続きをしているのだろうか。

“どんな夢を見た？”

“目が覚めると忘れちゃうの……それでね、探すの……夢に出てきたはずの誰かを”

「今朝は……うん……見た気がする……」

思い出そうと瞼を閉じると、ゆらゆらと綺麗な羽模様が浮かんで消えた。

「蝶々が……見えた気がする」

「昨日飛んでいた、あの蝶か？」

ぱちゃんと、音を立てて、レオンは頭を上げた。その形の良い顎から、ポタポタと滴が落ちるのを、綺麗だなと眺める。

「カルロという男を知っているか」

カルロ……。

「ティルという名は、覚えがないか」

ティル……。

「だあれ、その人達、レオンのお友達？」

「夢で会った事がないか、リコ」

「……わからない」

カルロ……ティル。小さくその名を口づさんでみれば、不思議な響きを添えて耳の奥でこだまする。何度も……何度も。

「やつ……あたま、イタイ」

濡れた手で顔を覆う。軽い吐き気が込み上げてきた。この感じ。前、ずっと前、目が覚めたら凄く不安になって涙が止まらなくなった事がある。大切なものをどこかに置き去りにしてしまったような気分襲われ、カプセルベッドを抜け出したものの、途方に暮れてしまった。頭を抱えて床に座り込んでいたら、いつの間にかエリーが現れた。リアルプレビューのエリーの姿が暗闇の中にぼっかりと

浮かんでいて……そうだこう慰めてくれたのだ。

“無理に思い出さなくてもいいのよ”

だけど今、レオンは夢を掘り起こせと言う。

「……無理に誰なのか思い出さなくてもいいって、昔エリーが教えてくれた」

「エリー……昨日アクセスしてきたメールフレンドの？」

「うん」

またレオンは怒り出さないだろうか。探るよう彼を見詰め返す。怒ってはいないようだ。ただ、もっと話を続けるようにとチャコールグレーの瞳が催促をしてくる。

「エリーはずっと友達。あたしが小さい頃から、側にいてくれるの……みんな、リアルプレビューのメールだけ。今回の当選も、自由を使う場所を指定できるってエリーが教えてくれた」

レオンと同じように身体を起こすと、膝を抱えて海を眺める。エリーはあたしの心の内を何だってお見通しだ。いつも見守ってくれている、そう感じるだけで大きな安心感にくるまることが出来た。

「アートヒューマンの仲間か？エリーと実際会ったことは……」

その問い掛けに、首を振って否定する。幼かった頃、一度だけ会ってみたいのだと駄々をこねたメールを送った事がある。返信は何も語らないエリーのリアルプレビューだった。困った顔で哀しげに彼女は首を横に振ってみせたのだ。求めてはいけないのだと、あの時、幼心ながらに悟った。エリーを困らせてはいけない。彼女が消えてしまうような不安が、全ての疑問を閉ざした。

「レオンにも、いるでしょう？誰かメールフレンド。あたしには、エリーだけだ」

「任務以外でメールを使うことはない」

「じゃあ、ウフに帰ってからあたしがメールしてあげる」

曖昧にレオンは笑ってみせた。その様子に、レオンにメールを送ることなど許されないのだと感じた。レオン……ねえ、海の方には他の島がたくさん散らばっているんでしょう？どこかに隠れ

ようよ。ずっと一緒にいられるように。そう望むのはあたしだけ？
寂しそうに首を横に振るエリーの表情が、隣に座るレオンの横顔と
重なる。

カルロ……ティル。頭の隅でその名が再び小さく響く。ざわりざ
わりと、胸がざわめく。思い出したい。夢の中で髪を撫でる指の感
触、頬を寄せた肌の温もり……エリー……ねえ、エリー。教えて、
あれは誰？カルロ……ティルってどんな人なの。

レオンはどうしてその名を口にしたのだろう。ねえ、知っている
の？ ギアは夢までも管理されているのだろうか。

「ぼんやりしてると、やられるぞ」

海を眺められるテーブルでランチを頬張っていると、レオンにそ
う注意を受ける。その意味ありげな視線の先を辿ると、小さな鳥が
舞い降りてきた。砂浜に可愛らしい足跡をつけながら、こちらにト
コトコと近付いてくる。ほんの一瞬の隙について、お皿にのせた齧
りかけのパンをさらわれる。

「あ、あたしのっ」

小鳥はひょいとテーブルから地面へ飛び降りると、一目散に離れ
た木陰へと走り抜けていった。早い。それに、あんな小さな体だと
いうのに、なんて大胆な行動。感心しながら新しいパンを取り、再
び自分の皿に置く。あ、このパン。一番好きなやつ。クルミって木
の実が混ざっているの。ふわふわのパンとカリカリした舌触りがた
まらないご馳走だ。もちろん、この島に来るまで口にしたことすら
なかったのだけれど。

早速頂こうと指を伸ばしたら……あれ、ない。ほんの一、二回、
瞬きをしたら無くなったよ。嫌な予感がして辺りを見回すと、また
あの小鳥がパンをくわえて走っていく後ろ姿が見えた。

「やつ、それはダメっ」

小鳥はさっきと同じ木陰の穴に入っていく。走り寄り、そっとそ

の中を覗くと……頼りない小さな鳴き声が聞こえた。小鳥が自分より小さな鳥達の口へと、齧り取ったパンの欠片を放りこんでいる。もっと頂戴と言わんばかりに皆、口を大きく開けて自分の順番を待ちわびている。

「ヒナに餌を与えているんだ」

「偉いのね、小さな子の面倒をみるだなんて」

ウフにも小さな子供だけが暮らす一角がある。あたしも十才まではそこで暮らしていた。数少ないアートヒューマンの子は、他の子供達から隔離されていた。感性を磨く特別な環境。その中には同じくらいの年の子もいたけれど、すれ違うだけで交流はなかった。面倒をみてくれる大人は皆、淡々とその任務をこなすだけ。この鳥のように、子供の為に走ったりなんてしない。

「親鳥なんだろう」

「親……鳥？」

「自分で産み落としたって意味だ。命を与える元の存在が親だ。ほら、脇にまだかえっていない卵があるだろう」

「卵……この鳥が作ったの？」

「そうだ。雌は自分の体から、ヒナが入った卵を産み落とす」

雌は女って意味だ。雌鳥は子供の入ったカプセルみたいな卵を、自分の体内で作ることが出来る？ すごい……じゃあ人間は……

歯車番人^{ギアキパー}も全ての源はマザー・コンピュータ。ずっと、そう聞かされてきた。

絶対的な存在。一体、どんな姿をしているのだろう。

「人間の親は、マザーコンピュータ・エリザベスって事？」

「……そんなとこだな」

「人間の雌は卵、産めないの？」

「説明してもお前には理解できない。……いや、アートヒューマンは避妊処置されていないらしいから、お前は産めるかもしれないな。

……卵ではないが」

「えっ、本当に？」

「自然分娩が可能かは未知数だが」

しぜんぶんべん？レオンの話は知らない言葉ばかりで半分も理解できない。でもアートヒューマンは産めるかもしれないと言った。そうだ、いくつも見たことがある。裸の小さな子供を胸に抱く女の絵画を。あれはきつと親に違いない。幸せそうな薔薇色の頬を、子供の髪に寄せていた。

「どうやったら産めるの？」

知りたい。いつ、どこで、何をどう申請したら子供を産めるのか。足りない画材を補充するのは奇数日の19時から20時までの間にA3窓口にアクセスして申請する。絵画資料の申請はC3窓口。ねえ、レオン……子供を産みたい時は？ すぐるようレオンを見詰めると、ついと彼は絡んだ視線を振りほどいた。

「申し訳ないが、俺の管轄外だ。これ以上提供できる情報は持ち合わせていない」

話を打ち切られ、突き放されたような気分になる。主が不在のテーブルへ、親鳥は再び餌を選びに忍び寄っていく。ヒナ達はまだ催促をするような鳴き声を続けている。そつと指先で小さな小さな身体に触れてみる。暖かい。生まれたばかりの命の温もり。指先から伝わってきた衝撃に、ぱつと手を引っ込める。

あれ……やだ……どうして……。咄嗟に立ち上がり、この場を逃れるよう歩き始める。

「リコ」

呼び止めるレオンの声が聞こえたけれど、振り向く事が出来なかった。涙が溢れて止まらないのはどうしてなんだろう。ヒナの身体に触れた途端、自分の奥底にぽっかりと空いた大きな隙間に気付いてしまった。

どこ……どこ？ 何を探しているのかも分からないままに、当てもなく島の中を歩き回る。

どこ……どこに行つたの？ 一体あたしは何を無くしたというのだろう。

水上コテージに向かうものとは違う棧橋を通り抜ける。棧橋の先端には日影を作る屋根があり、汗ばんだ肌をそっと休ませてくれた。しゃがみこみ手で顔を覆う。まだ、涙は止まらなかった。きつとすごい顔をしているに違いない。ゆらり、ゆらり。透かした太陽の光を混ぜ合わせながら、揺れる海が指の隙間から見えた。顔に押し当てた手をゆつくりと離しながら、小さく息を吐く。サンゴに魚達が群れている様子が、棧橋の上から見えた。海の中に花が咲いていると言った時に、あれはサンゴというのだとレオンが教えてくれたのは昨日……それともおととい？ あらゆる記憶が絡まって、何が現実なのかふいにわからなくなる。

いたい、イタイ、痛い。頭が割れるように締め付けられる。探し物は何だろう？ その奥を真剣に探ろうと心を覗き込むと、遮るような壁が立ちはだかる。助けて……。知りたい……。うん、知ってしまったのが怖い。込み上げる嗚咽に身体を震わせながら、感情の高ぶりが通り過ぎるのをただひたすらに待ちわびる。

ふわりと、頭に何かが覆い被さってきた。うつ向いたまま薄く瞼を開く。顎の脇で揺れる赤い紐が見えた。風に飛ばされない魔法の紐。頭に手を添えると、編み込まれた帽子の感触があった。レオンだ。彼の気配が、丸めた背中に覆い被さってくる。どんな顔を見せたらいいのか分からなくて、ただじつと床についた自分の手を眺めていると、そこにレオンの腕が伸びてきた。

え……。何？ すっぽりと大きな手に指が包まれると、何かがずりりと滑りこんでいく感触が通り過ぎた。放たれたあたしの手に、キラキラ光るものがぶら下がっている。青い……。海の滴を閉じ込めたような……。

「旧式の鍵だから、針金一本で簡単に開いた。指輪なんて誰かの指に飾られてこそ存在価値があるものだ。今日一日くらい拝借しても、最後に戻しておけば問題ない」

「……綺麗」

スケルトンケースに飾られていた時よりもそれは、太陽の陽射し

を吸い込み艶やかに息づいている。小さな石がひとつ飾られるだけで、指の持つ役割さえ変わってしまったようだ。色々な角度に傾けると、ブルーの色調が移り変わって見えた。飽きることも無くその様子を眺めているうちに、ふと自分の顔が既に泣き顔ではない事に気付く。隣に座るレオンにおずおずと顔を向ける。

「なくすなよ」

海を眺めながら、レオンは素っ気なく言った。うん、と素直に頷く。ついさっきまで頭を締め付けていた頭痛は、いつの間にかすっかり消え失せていた。

「夢の話は、もう思い出さなくていい。ただの夢だ、リコ」

……ただの夢。隣に座る色付いた肩に、そっとおでこを寄せてみる。現実の温もりにもたれ掛かる心地良さ。キラキラと誘うような青い光の存在を、指先でそっと撫でてみる。毎夜訪れる夢と同じように、明日には終わってしまう幻なのかもしれない。でも、確かな感触……これはいつもの夢じゃない。あたしはこの瞬間を、いつでも繰り返し思い出すことが出来る。何度も、何度も……だ。

瞼を閉じて指輪を耳に寄せると、レオンがくれた小さな海が、ちやぶりと音を響かせている気がした。

輪廻を繋ぐ印（レオン）

ヒナに触れた時のリコの反応といったら……一瞬ビクリと跳ね上がったかと思うと、見る間に顔がくしゃりと歪んでいった。頬に涙がこぼれ落ちると同時にリコは立ち上がり、逃れるよう歩き始める。

「リコ」

呼び掛けてみたが、振り向きもしない後ろ姿をただ見送る。何がそんなに彼女を動揺させたのか。思い当たる節はある。でもまさか……俺もどうかしている。本気でリコと夢を共有していると思っっているのか。そしてあの夢が過去に経験した、お互いの人生なのだと子供を失ったジャンヌの絶望を、リコが受け継いでいるとでも？

ならば彼女の命も、この手をすり抜けていくというのか？

ドクリと胸が跳ね上がる。リコがそんな運命を引き継いでいたとしても、俺と何の関係がある。もう二十時間も経てば、二度と会わない相手だ。だが、気付いたら後を追うように歩き始めていた。監視など必要ないのだ。海に囲まれた孤島で、泳げもしない女など、何処にも逃れようがないのだから。

小さな売店に足を踏み入れてみる。……いない。踵を返しドアに手を伸ばした所で、先程リコと眺めたスケルトンケースが視界に入った。

“綺麗……”

彼女が溢した感嘆の溜め息を思い出す。モニカの指に飾られた純白のパール、ジャンヌが最後まで握りしめていた小粒のダイヤ。

“欲しいか？”

どうしてあの時そう訪ねたのだろう。麦わら帽子を拝借するのは訳が違う。触れる事など許されない身分不相応な代物だというのに……。

「なくすなよ」

俺の命令口調に、リコは頷きながら指を飾るサファイアを眺めて

いる。嬉しそうに微笑むと、甘えるよう俺の肩に頭をもたれてきた。俺はどうかしている。鍵をこじ開け、指輪に手をかけるなんて。俺の心中など知るよしもなくリコは、無邪気にはしゃいでみせた。

「ゴハン途中だった。戻って食べよ、ね」

ちゃっかりしている。だが一体、あのテーブルに何が残っているやら……。すっかりと泣き顔の消えたリコに手を引かれ、陸地へと導く棧橋を並んで歩き始めた。リコの指にぶら下がるサファイアが熱い太陽に溶かされたならば、きっとこの浅瀬のような水溜りができるに違いない。揺らめく波は海を柔らかくカットし、屈折させた光の渦でクリスタルブルーを混ぜ合わせる。目を開けていられないほどの眩しさ。

奇跡のように美しい島での穏やかな時間が、ゆっくりと通り過ぎていく。名残惜しむかのように。

手の平にのせた数え切れない砂粒が、零れ落ちすり抜けていく感覚を味わう。永遠など幻だ。だが、明日も明後日も、こんな時間が当たり前に訪れるであろう錯覚が胸を締め付ける。残り時間など気にするな。あがらわず、流れるがままに過ぎ行く時間に身を任せてみる。

椰子の木陰が彼女に落とす影模様。日焼けした肌にまぶされた白い砂粒。瞳を覆う海の色、空の色。風に弄ばれ流れるリコの髪。

積み重ねられていく。不思議な程に満たされた時間が。傍らにはいつもリコがいた。まるでそれが当たり前のように。

沈みゆく太陽が、二人の影を砂浜へと長く伸ばしていく。濃い影を産み落とす灼熱の陽射しが、力尽きる間際の淡い閃光。海を……空をも紫色に染ながら光の渦が、水平線へと崩れ落ちる。鮮やかな色彩に包まれた島が、ゆっくりと闇にのまれていく様をリコと歩きながら眺めていた。

知り尽くしているつもりでいた。歴史、言語、科学……地球上で人類が積み上げてきたあらゆる知識を詰め込む脳内チップ。隙などありはしない。これから夜空を埋め尽くすであろう星屑の名前さえ、

ひとつつつ弾き出す事が出来る。だが、そんな知識などこの大自然を前にしてみれば、なんてちっぽけな存在かを思い知らされる。

ふと、リコが足を止めてうしろを振り返った。凝視するその視線を辿ると砂に刻んだ二人の足跡があった。穏やかに押し寄せる波が、その痕跡を綺麗に拭い去っていく。

「……ずっとずっと、残ればいいのにね」

リコは小さく呟くと、頭ひとつ低い位置からこちらを見上げてくる。

「あ、でもここにちゃんと残っているから、大丈夫」

人差し指で、リコは自分の頭を指差して見せる。

「ね、レオンも？」

ちやぷん。足元を濡らす波が、音を立てる。すぎるような眼差しに触れ、身体の奥で何かが疼く。このまま二人で何処かへ逃げてしまおうか。ふと浮かんだ信じがたい思考を、苦笑いと共に振り払う。馬鹿な……何を考えている。

「俺はお前と違って記憶力を増幅する訓練を受けているからな。昨日の昼にお前がパスタを平らげながら、何回フォークを皿の上に落としたかなんて、どうでもいいことまで覚えてる」

「パスタ、つるつるして滑っちゃうんだもん」

そう、どうでもいい出来事ばかりが刻まれている。

“レオン……レオン”

何度その名を囁やかれ、どんな眼差しで俺を覗き込んできたのか。そんな記憶は、頭の片隅に追いやってしまった方がいい。

「今日は眠らない。もったいないからずっと起きているの」

いいでしょう？ そんな言葉を秘めた仕草で、リコが微笑みかけてくる。勝手にしると、呆れた溜息で応える。一体、何時までその決意が持つことやら。あつという間に闇色に滲んでいく夕暮れの空で、淡い光を放ち始める一番星へと視線を流す。リコはおもむろに砂浜へ寝転ぶと、浮かび上がる星々を指差してみせる。その指にはめられたサファイアも、海や空と共にその色彩を暗く潜ませてしま

った。隣に並ぶよう身体を横たえ、夜へと変貌していく空を眺める。もう二度と見る事のない風景。いや、世界中でこの情景を目にしたことのある人間が、一体何人存在するのだろうか。リコが伸ばしてきた指が砂を這い、俺の手の平に辿り着く。繋がった温もりを感じながら言葉も途切れ、どのくらいの時間が経っただろうか。手の平に触れるリコの指が、重みを増した事に気付く。隣に横たわる、リコを覗き込む。伏せられた睫毛が、柔らかな曲線を描いていた。穏やかな波音の合間に挟み込まれる寝息。いいのか？ さっきの決意は何処にいった。

夕食に混ぜようと思っていた眠剤を飲ませるまでもなかったか。いや、目覚めの時間を調整しなくてはいけない。食事の支度が整ったら揺り起こし、投薬しなくては。羽織っていたシャツをリコにかけると、調理場に向かって歩き始める。売店のわきを通り抜け、食糧が備蓄されている倉庫へと足を向ける。

その時だった……違和感を感じ振り返る。たった今、通り過ぎた扉から灯りが漏れていることに気付く。僅かに開いたオンラインルームの扉。ほんの数秒前は、なんの異変も見当たらなかったはず。リコの仕業では有り得ない。ならば一体何者が？ そつと忍び寄り、不意打ちにドアを開け放つ。

バンッ！ 同時に部屋に響いたのは、クスクスと噛み殺した笑い声だった。信じられない。白いワンピースを着た、少女が座っていた。金色の細かい巻き毛が、あどけない笑顔を包んでいる。

「見つかったやつだ」

悪びれる様子もなく、収まらない笑いをいまだ溢している。

「一体、どうやってこの島に……」

リアルレビューか？ いやオンラインはどれも立ち上がってはいない。ならば生身の人間のはず。

「はじめまして、レオン。あたしエリーよ」

暢気な様子で自己紹介をはじめた少女に、怪訝な眼差しを向ける。リコのメールフレンド……あのエリーか？ リコは幼い頃からの付き

合いだといっていた。だが、どう見ても五、六歳の少女にしか見えない。

「迷子にでもなったのかな？」

警戒しながら話し掛けてみる。少女は屈託ない返事をよこした。

「うっん、大丈夫、遊びに来ただけだもん」

エリーは机に頬杖をつくとき、おどけた眼差しをしてみせた。全く不可解だ。こんな子供が独りで、どうやってヘブンの内部へ潜り込んできたというのだ。汚染された地球の環境から隔離する為、目に見えない特殊シエルターで覆われた楽園、ヘブン。シエルターの下部は地球の地殻の底にまで続いている。反対に上部は対流圏、成層圏、中間圏、熱圏を通り越し、宇宙に接する外気圏にまで及んでいるという。外部からヘブンへと侵入する経路はトップシークレットだ。マザーコンピュータが許可し、シエルターの一部が開かれる。

「ね、ヘブンにどのくらいの島があるのかを知っている？」

「ヘブンの地図は脳内チップの対象外だ。地球中枢管理レベルの高官しか立ち入る事は許されない場所だからな」

そう、例外なのだ俺とリコは……。二十一世紀後半に、この辺一体は温暖化による海面上昇で全ての島が海の底へと消えた。そして、気の遠くなるような歳月経て、特別保護区域に指定されたヘブンは修復が施された。

「今はねそうね……三十八の島があるの。一見バカンスで賑わっていた頃の21世紀を真似てレトロな雰囲気をもせているけれど、シエルター全体を帆にしたソーラーシステム、海水淡化プラント、作物の培養を目的としたスケルトンハウスが連なる島もあるの。もし外部から完全に遮断されたとしても限られた人数ならば、このヘブンで自給自足しながら生きながらえるわ。何世代先までもね」

「貴様：シエルター全体を何者だ？」

ただ者ではない。ヘブンの実態をここまで知り尽くしているだなんて。

グオンツ。異常な電子音と共に突然、全てのオンラインテーブル

が立ち上がり、青く点滅し始める。

「……をがつ……我々の……」

浮かんでは消える男のリアルレビュー。この制服は……。コックス（舵手）と呼ばれる、中枢管理者のものだ。世界に八つ存在するウフを取り仕切る、最高責任者の一人なのだと伺える。

「エリ……ザベ……スつ、機能……てい……し、機能……停止」

途切れ途切れの呼びかけに相応しく、男の姿も雑像と化していく。オンラインテーブルに指を添え、応答しようとするが何の反応も示さない。

「こちら、コードNO・88765599・LEON、メインコンピュータへのアクセス許可を！」

全く無反応だ。機能停止？マザーコンピュータ・エリザベスが……そんな事があるのだろうか。

「ねえ、フランケンシュタイン・コンプレックスって知ってる？」

こんな緊急事態だというのに、全く無関心といった様子でエリーが話し掛けてくる。

「人間を模して造られた創造物は、やがて人間を疎ましく思い、創造主である人間に対し、いつか反乱を起こす可能性がある」と危惧する事だ」

脳内チップが弾き出した答えを、棒読みで口にしながら頭の中で現状と照らし合わせてみる。人間を模して造られた創造物……マザーコンピュータ・エリザベス。プツンツと、小さく弾ける音と共にオンラインは全てダウンした。

「人間の被害妄想よね。コンピュータだからって休み無しで働かせておいて、こんな言い掛かりって酷いわ」

ふわり。俺の頬をかすめ、何かが通り過ぎていく。エリーは指をひとつ差し出すと、それを迎え入れる仕草をした。蝶だ。何度も目にした……あの黒アゲハ。モニカの襟足、ジャンヌの甲、リコの胸に刻まれた輪廻を繋ぐ印。導かれるがままに、エリーの指先にそれは羽を休めた。

チラチラと羽の紋様が乱れ始める。昨日スコールの中で見た時と同じ……本物じゃない、リアルレビュー……。オンラインは立ち上がっていない、死んだように静まり返っている。どうしてこの状態でリアルレビューが？

遠くで地鳴が響き、やがて足の下を通り過ぎていった。大きなものではない。窓がカタカタと音を立てる程度の震度。

「独り占めしようなんて愚かな人達。ヘブンは選ばれしアダムとイヴの楽園。誰も入れないわ。もう門は二度と開かない」

エリーの声が、感情を含まない淡々とした響きに変わる。……何を言っている？ どういう意味だ。

「リコは思い出さないわ。それほどに子供を失った傷は深かったの。己を壊すほどにね」

「子供だと？」

「あなたとジャンヌの子供の事よ」

何もかも知り尽くしたような物言いに、啞然とエリーを凝視した。指に止まった蝶の残像を、目の前の少女は愛しそうに撫であげている。エリーの綿毛のような金髪が、白いワンピースが……チラチラと揺らぎ始める。まさか、まさか……この少女も？

「あなたが全て背負うの。課せられた運命の重みを認識し、鍵を開く強さを持ち合わせているのだから」

消えてしまう。エリーの体が透けて、座っている椅子の背が見える。行かせるものか。思わせぶりな事ばかり言い放って、そのままなど消えるなど……聞いただいたいの事は山のようにある。

「一体何なんだ。お前は誰だ？」

「エリーよ。エリザベスなんて名は長つたらしいでしょう？」

……エリザベス……エリザベス。その名に触発され、脳内チップから弾き出される断片が、頭の中を駆け巡る。フランケンシュタイン・コンプレックス。機能停止。全てをつかさどる万能の神、マザーコンピューター……エリザベス……。

「もうひとつだけ扉を開くわ。旅立つのよ、あなた達の愛を再びな

ぞる為に」

エリーが両手を上げると、羽を広げた蝶が飛び立っていった。視界が歪む。意識が暗い穴に吸い込まれる。もうひとつの扉だと？一体どこへ引きずりこもうというのか。この感覚……同じだ。カル口の、テイルの元へ飛び立った時の浮遊感。また迷い込むのか、絶望を味わう為に？

……見える、光の街だ。様々な電飾の灯りが、夜を艶やかに彩りながら街一面に広がっている。複雑に入り組んだ橋の上に連なる車の後部ライト。流れを無視した速いスピードで、赤い車が走り抜けていく。

運転しているのは、女だ。ショートカットの黒髪。ハンドルを握る爪は真珠色に染められ、ゴールドのリングが光っている。屋根のないオープンカー。風に身を任せ、流れるがままに髪をなびかせる女は、猫科の野生動物を思わせる雰囲気纏っている。

車は迂回し橋……いや、高速道路を降りた。しばらく直進し、人が溢れる交差点を左折する。華やかな街並みの中で、際立って存在を主張する建造物へと続く道を車は向かう。大きく広がる足を地面に伸ばし、白とオレンジ色の光で包まれた美しい塔がそびえ立つ。

脳内チップが解析を始めた。街並みを照合し場所と時代を模索する。21世紀初期……TOKIO（東京）。

ブルンっ。一呼吸おくようなエンジン音の後、車はスピードを緩め道路脇に止まった。女の隣には男が座っている。若い男だ。拗ねた目で女を睨むと、男はふて腐れたように視線を歩道に反らした。「どうしちゃったんだよ由美さん、急に今日で最後だなんてさあ、俺、結構本気だったんだけど」

女はハンドルに片肘を付きながら、男の様子を眺めている。この

状況を楽しんでいる女の心理を、弛んだ口角が物語っていた。

「恋愛はね引き際が肝心なの。お互いもう少し欲しいなって思うくらいが良いタイミングな訳」

「俺の事、愛してるって言ったじゃん」

「そうね、でも心地いいでしょう？そんな言葉って…特にベッドの上では…ね」

「俺知ってるんだ、本が書きあがったからだろう？主人公のイメージに使われただけなんだ」

女は男の頬に長い指先を伸ばした。

「そうね、あなたのお陰で、イケメンモデルの男の子って素材を、克明に描写できたわ。そういうのに憧れちゃう女の子達に、ウケる事間違いないって出来ね」

「……何だよ、本当に俺って利用されただけって事？」

二人の会話を眺めながら、違和感を感じた。レオンやテイルの時と異なり、この男に何の共感も感じられない。だというのに、不思議と女の心理は手にとるように流れ込んでくる。

「遊びで色んな女と付き合ってきたけどさ、由美さんは運命の人だって感じたんだよね」

「光栄だわ。でも大袈裟ね」

子供をあやすような眼差しで、女は男を軽くあしらう。

「この原作で、ドラマの企画が持ち上がったっているの。だからプロデューサーにイメージに合う人がいるって、あなたの名前を伝えておいたわよ。モデルを脱皮して俳優になりたいって言ってたでしょう」

男は一瞬言葉を見失い、目を丸くして女を見つめた。

「……別れるからって、悪い冗談……やめてよ由美さん」

「事務所に近いうち、局から連絡が入るわよ」

「え、マジ？ヤバイ俺、ずっと携帯切ってた。」

「早く確認しなくちゃね。。最終はまだだから、電車で帰って貰える？別れる男を送り届ける趣味はないの」

「うつ……うつん」

男は落ち着かない様子で相槌を打つ。

「由美さんさあ、もしかして俺の未来の為に身を引くってヤツ？」

「えっ？」

しばらく黙りこんだ女が、堪えきれないといった様子で唐突にクスクスと笑い始めた。

「そうね……そうよ。健気な女でしょう？」

男は大袈裟な仕草で両手を広げると女を抱き締める。

「絶対、頑張る俺。由美さんさ、カッコ良すぎ」

唇を軽く合わせると、車を降りた男は、走るよう去っていった。

女は銀色のライターで、啜えた煙草に火をともす。

「新人を使いたいけど、イメージに合う人材はいないかなって、本当に相談されちゃったただけなんだけどね」

女は独り言を呟くと、再び口端をゆつくりと上げた。噛み殺した笑いが溢れるたびに、紅い唇から紫煙が立ちのぼる。

「利用しただけって、ビンゴなんだけどなあ」

車内のトレイに煙草を押し付けると、女はおもむろに指のリングを抜き取った。躊躇なく運転席から放り投げられた金の輪は、小さな金属音を響かせ道端に転がっていく。

“運命の恋なんて、何処にもないのにな”

女は心の中でそう自嘲し、皮肉めいた眼差しで歩道を行き交う恋人達を眺める。ブルンツ。美しい曲線を描く車のエンジン音が響きわたった。赤いボディの鼻先に立つ俺を通り抜け、車は再び走り始める。押し寄せる風圧。ハンドルを握る女が近づき、俺と一瞬重なる。

この女が？ まさか……女だなんて。由美という女の身体に意識が吸い込まれていく。走り出してほんの数分で、車は光の塔に辿り着き、その足元を通り過ぎていく。

カタンツ。意識の奥で脳内チップが鈍い音を立てる。

“東京タワー”

前を走る車が、不自然に車体をふらつかせ、けたましいクラクシ

ヨンを鳴らした。

「馬鹿野郎っ！死にたいのかよっ」

前方より、怒鳴り声が響く。クラクションに追いたてられ、道路に立ち尽くす男がいた。肩をすくめて一歩退いたものの、奴はこちらに気付くと嬉しそうに親指を立てる仕草をして見せる。女が冷やかな視線を流す。既にその視線は俺と同一になっていた。

男を無視し一度反らした視線を、通り過ぎ様に再びちらりと横目で盗み見る。人なつこい笑顔で、奴は立てた親指を大袈裟に振ってみせた。派手なブレーキ音と共に車が急停車をする。バックミラーを覗くと、数メートル通り越した場所から、男は嬉しそうに走り寄って来た。

「ヒッチハイクしている人なんて、実際に見たの初めてよ」

呆れた口調で女は、男をまじまじと見据えた。癖のある肩まで伸びた髪。濃い睫毛で縁取られた瞳。二十歳くらいだろうか、顔はどこか少年のようなあどけなさを残している。なのに、美しいラインを描く筋肉で覆われた身体は、男への脱皮を匂わせていた。発展途上がゆえのアンバランスさ。

“悪くないじゃない”

さつき男をひとり捨てたばかりだというのに、この女はもう新しいゲームを楽しみ始めている。

「こんなに沢山の車を通るのにさ、止まってくれたの初めてだよ」

「異常な状況に興味があるの。ネタ探しよ」

「ネタ？」

「何でもないわ……ところでどこまで行きたいっていうの？」

「道に迷っちゃってさ。とにかく近くの駅に行って欲しいんだけど」

「もう終電間に合わないかもよ」

「終電って？」

「終電は終電よ。……もしかして酔ってるの？」

男はとんでもないと言いたげに、肩をすくめてみせた。ヒッチハイクなどしている状況を見れば、酔っぱらいより面倒な相手を招い

てしまったに違いない。

「いいわ、乗って」

その言葉に男の瞳が輝く。ぐるりと車を半周し、助手席のドアのふちに手を添えると、男はひらりとシートに飛び乗った。思わぬ行動に、女は言葉を失う。

「素敵な車だね、君に似合ってる」

二人の視線が絡み合う。身体の内から沸き上がる、この不思議な感覚は何だというのか。……もう耐えられそうにない。深い……深い穴へと落ちていく。

「あなたも似合ってるわよ。男の子なのにロマンティックなタトゥ（刺青）がね」

まさか……まさか……。

次々と通り過ぎていく車ヘッドライトに男の身体が照らし出されていた。タンクトップから覗く肩に刻まれたそれは……。

カタンッつ。

意識が……途切れる。限界が来た事を知り、俺はあがらう事を諦めた。

「ああ、これタトゥじゃないんだ。生まれつきの痣」
また巡り会ってしまった。輪廻を繋ぐ美しき印に。
それは、羽を広げた……スワロウテイルバタフライ。

運命の人（由美）

「タトウじゃないんだ。生まれつきの痣」

一瞬見とれてしまった。男の肩に蝶を形どった痣など、偶然の産物とはいえ普通ならば失笑を買うところだ。なのに……。綺麗なラインを描く皮膚に刻まれた蝶は、そこがお気に入り場所だと言いたげに羽を休めている。

触れてみたいなんて、どうかしている。オープンカーのアクセルを踏み込みながら、男の様子を横目で観察する。柔らかな髪が風にさらわれ、男の輪郭が露になっていた。以前……。どこかで……。口にしたら今時、三流映画でも使わない安っぽい口説き文句かと勘違いされる。会った事などあるはずがない。喉元まで出かかった言葉を飲み込むと、小さく息を吸い込んだ。

ふいに横顔に視線を感じた。見つめられている事など、気にもかけない振りをして前を見据える。

「……不思議だな」

唐突に男が放った言葉に首をかしげる。何が？ そう言いたげな目配せをし、素っ気なく前を走る車のテールランプに視線を戻す。

「ずっと昔に、会った事がある気がする」

ドクリと胸が跳ね上がった。こちらの心の内を、見透かされているのかと。

「ヒッチハイクを拾うのは初めてよ」

「俺も拾われたのなんて初めて。特にほら、日本人って他人に警戒心が強いから……」

「まるで自分が日本人じゃないみたいなお口振りね」

「もちろん、身も心も生粋のジャパニーズさ」

大袈裟な仕草で男はおどけてみせた。

「風が気持ちいいね、屋根のない車は初めてだ」

艶やかな黒い髪、濡れたような光沢を秘めた黒い瞳。男は心地良

さそうに瞼を閉じた。濃い睫毛が描く柔らかな曲線をちらりと盗み見る。

さっきまで隣にいたモデル君も、顔が商売というだけあって綺麗な顔をしていた。髪もファッションも彼を引き立てる為に計算し尽くされ、けれども嫌味にならないようさりげなくラフに仕立ててあった。隣を歩かせるにはうってつけの男の子。少し馴れ合いになったところでお開きが丁度いい関係。

だけど、どうだろう。入れ替わりに助手席をキープした男の様子は。ブルージーンズに白のタンクトップ。シンプルすぎる……けれども飾り立てる必要のない無頓着さが、素の魅力をいっそう引き立てていた。

白い漆喰の真壁に、障子を透かした朝日が、柔らかな陽射しを映している。昨夜は寝つきが悪くあまり睡眠時間が取れなかった。ベッドから黒塗りしたヒノキの床にのろのろと足を伸ばす。ひんやりとした感触が足の裏を伝わってきた。障子をひとつ開き、中庭を取り囲む廊下を進むと、台所へと抜ける飾り模様を刻んだ板戸に手をかける。カラカラと指先に軽い振動を伝えながら、扉は横に滑っていった。

香ばしいコーヒーの香りが鼻先をくすぐる。まだ半分閉じていた瞼を見開き、そこに立つ男を凝視する。

「おはよう」

思いがけない状況の中、さらりと挨拶をされ頭が混乱する。

「あ……なたっ、昨夜は車の中で眠りこけちゃったから、車ごとガレージに置いてきたはずなのにどうして家の中にいるのよっ」

「えっと、ガレージから家に抜けるドアの鍵が……あいてた」

「閉めた筈よ、ちゃんと」

「でも……あ、はいコーヒー飲みなよ。牛乳で割ってカフェオレに

する？」

邪気のない顔で尋ねられ、朝から大声を張り上げている自分が馬鹿馬鹿しくなる。道端に放り出さず、こんな男をお持ち帰りしてしまつた己の浅はかさのせいだ。どうかしていた。

「……ブラックでいいわ」

男はその言葉に安堵したよう、いそいそと食器棚からカップを取り出すと、コーヒーを落とす始めた。毎朝使うものだから、ミルも豆も一式すぐ手の届く場所に並べてある。だからって、あまりにも手慣れた様子でそれらを扱い、名前も知らない男がコーヒーを淹れている様子を不思議な気持ちで眺める。しかもこの状況はまるで一夜を共にした男女のようではないか。

「すごい日本家屋だね」

吹き抜けの天井に渡された黒塗りの梁を見上げながら、男は感嘆の声をあげた。

「築五十年といったところかしらね」

「東京って未来都市のようなイメージだったんだけど、こんな家もまだ残っているんだ」

「妙な台詞ね。東京に来た事が初めてみたい」

「観光で来てるんだ」

カンコウ？ どこか田舎の山奥から都会に出てきたとでもいうのだろうか。だか、方言を感じさせるアクセントは特に見当たらない。何処から来たのかと尋ねようとしたが、黙りこんだまま相手の様子を伺う。未成年ということとはなさそうだ。

この男、夕べは助手席で瞼を閉じたと思ったら、寝息も立てずにつきり眠りこけていた。揺さぶっても鼻をつまんでも起きる様子がなく、呆れた気分でまじまじと寝顔を見つめた。あどけなささえ匂わせる、無防備な顔。一瞬、未成年かもしれないと勘ぐってしまった。とはいえ、ママにお伺いをたてなければいけない程の幼さがあるわけでもなく、取り合えず車ごとガレージの中に押し込んだのだが。

コーヒーの香りがやたら鼻につく。テーブルをはさみ、向かい合
ってカップに手を添える。ただそれだけなのに……沸き上がるこの
胸のざわめきはなんなのだろう。

窓から覗く庭の緑が揺れている。唐突にぐらりと、視界が歪んだ。
脳裏に浮かんだ映像が、駒送りのようスローモーションで脳裏をよ
ぎっていく。屋外に置かれたアンティークなテーブル。湯気をあげ
る華奢なコーヒーカップ。背景には石造りの白い洋館……まるで中
世を舞台にした映画に出てくるような。どこかで……昔観た映画の
ワンシーンだろうか？

ガチャンっ。マグカップが手元から滑り落ちた音で我に返る。溢
れたコーヒーが手の甲を濡らしていた。

「あ……っ」

熱さに声を洩らすのと同時に、走り寄って来た男に手首を掴まれ
る。

「早く、こっち」

シンクへと連れて行かれ、水音と共に冷たい感触が熱を帯びた皮
膚を流れ落ちていく。

「寝起きの一杯だから、少しだけぬるめに淹れたんだ。すぐに冷や
せば痕にはならないと思う」

のんびりとした口調とは裏腹の素早い動作に、呆気に囚われる。
蛇口の前で、背中に感じる男の気配を妙に意識してしまう。心臓が
とくとくと早い音を立てるのが耳元に響いた。こんな子供みたいな
男の子に、どうかしている。その時だった、絶妙なタイミングで家
の電話が鳴り響いたのは。

携帯ではなく、家の電話を鳴らす者など限られている。蛇口を捻
り、彼の脇をすり抜け、濡れた手で受話器を上げた。予想通り相手
は担当編集者だった。午前中の打ち合わせは予定通りでいいかとい
う確認の電話。

「シャワーを浴びて支度をするわ。仕事が入ったの」

「じゃあ、俺は帰るよ。……手、大丈夫？」

名残惜しそうな男の声がなぜか心地良い。

「真っ直ぐ歩いて大通りに出たら右に曲がるの。そこから五分くらいで広尾の駅があるわ。地下鉄よ」

「うん、了解」

ガレージの出口から男を送り出す。大きなスニーカーに足を入れながら、彼は何か言いたげにこちらを見つめてくる。時間が止まったような空気の中、絡み合った視線を振り払う。

「忠告しておくけど、朝からヒッチハイクなんかしても誰も停まってくれないわよ」

おどけたように肩をすくめ、背を見せた彼が二、三步外へと向かう。だが足を止め、再びこちらを振り返ってきた。

「野宿しなくて済んだよ。ありがとう」

ふわりとした柔らかい笑顔を向けられ、どんな顔を返したらいいものか一瞬戸惑う。

あ、まただ。風に仰がれ翻る花模様のワンピース……潮の香り。脈絡のない残像が、匂いさえ添えて覆い被さってくる。カタリという物音にはっと顔を上げると、彼の姿はもうそこにはなかった。名前……名前も聞かなかったな。いや、聞いてどうしようというのだろう。自分らしくない感情に苦笑いを噛み締める。先程からちらつく記憶の断片といい、仕事の疲れが溜まっているのだと自覚する。しばらく休暇を取って旅行にでも行こうか。日常の煩わしさから逃避できる、バカンスなんていうのも悪くない。

「由美センセ、今回の本は話題になりますよ。ドラマ開始と共に同時発売だなんて、毎週一時間かけてゴールデンタイムにテレビが本のコマースャルしてくれるようなものですもんねえ」

表参道に連なる並木道沿いのオープンカフェは、午前中のせいかなかまだ人影もまばらだ。編集担当の湯原は、手帳へペンを走らせなが

ら満足気に口元を緩めている。

「今回の話はツボをつけてますもんね。年下のモデルと冴えないOLの恋物語なんて。ま、それだけに留まらない展開がさすが由美センセって圧巻ですけど。特に、最初の二人が出会うシーン、ドラマチックで……」

湯原の話を聞き流しながら、頬杖を付き通りを行き交う人達を眺める。アイツ、地下鉄に辿り着き、ちゃんと帰れたのだろうか。複雑な鍵編み模様のように張り巡らされた東京の鉄道網を、お登りさんが乗りこなすのは至難の技に違いない。

「……で……信じますか？ 由美センセって……」

不意打ちの問い掛けに我に返る。何を聞かれたのか…右から左に流れていった言葉を今更に拾い集める。

「やだあ、もう今日の由美さん、ちょっと変ですよ。心ここにあらずって感じ」

一足先に三十路に足を突っ込んだくせに、舌足らずで甘えた口調がうざったい。ベビーピンクのフレアスカートなんて、私には一生縁が無さそうな服をひらひらとなびかせている。似合っているから見苦しくはないのだが。それに行き詰まった時は意外にも、この編集担当はなかなか役に立つ女なのだ。こんな脇役を置いてみたらどうか、こんなこだわりを流れに持たせたらいいかもしれない。はたまた、つじつまの合わない箇所指摘に至るまで……ベストセラー作家と称されるまでの道案内を、彼女が導いてくれたと言っても過言ではない。

「だから、由美センセは感じた事ありますかって聞いているんです」「何を？」

メンソールが効いた煙草に火をつける。意味ありげな眼差しを向けられ、怪訝な気分で煙を吐く。

「だから、運命の人ですよ。ぴぴっと来たってやつ」

運命？

「……やっぱり、倉田さんには感じたんですか？」

「あら、湯原ちゃん知ってたの、倉田との事」

「センセの担当になって四年。今になって、やっと聞ける衝撃の真実ってやつです」

おどけた口調とは裏腹の、真剣な眼差しに囚われて、話を打ち切るきっかけを見失う。隠していたつもりはない。そう、こうして尋ねられなかったから口にしなかっただけ。

「由美センセに初めてお会いした頃は、離婚されたばかりだったの
で…さすがに話題にしづらくって」

「あら、氣を使わせたわね」

湯原とは長い付き合いだが、お互いのプライベートについては、ほとんど話したことなど無かった。

「この際だから遠慮しないで聞いちゃいますけど、どんな出会いだったんですか？ ノンフィクション作家、倉田遼との恋の始まりは

……」

「別に……昔話よ。大学時代、同じ講義をとっていた。ただそれだけの事。そうね、ご期待にそえるようなネタとしては学生結婚だった。それくらいのことかしら」

「えっ、出来ちゃった結婚だったんですか？」

「湯原ちゃん、アンタ、私を勝手に子持ちにしないで頂戴」

「だってそうでもなきゃ、なんでそんな若くして結婚」

湯原がテーブルに身を乗り出す様子に、苦笑いが込み上げる。

「成り行きよ。若氣の至り」

彼女は黙り込み、しばらく眉間に皺を寄せて考えこんでいた。そして小さな溜め息と共にポツリと溢した。

「それくらい引かれ合っていたって事だったんですね」

曖昧に微笑んでその場をしのご。彼女が望むドラマを、壊すのは忍びないというものだ。

「あ、そうだ忘れていました。これ、当社の創立五十年記念パーティの招待券です」

「創立記念パーティ？ さすが双実社さんって歴史があるのね」

「由美センセはウチの看板作家様ですから、是非出席してくださいね」

「行けるかわからないわ。そうそう、バカンスにでもしばらく行こうかなって思ってるの」

「えっ、いつからですか？」

「全然未定。来週か一カ月後か、とにかく行きたい場所が決まったら出発よ」

中庭が見渡せる縁側でクッションにもたれ、開け放ったガラス戸から空を見上げる。桜、紅葉、ミモザ…その木々の隙間から儚げな光を放つ三日月が覗いている。

“運命の人って感じた事ありますか？”

そんなものは幻想だ。夢物語だからこそ、小説や映画で描かれる運命の出会いに、人々は憧れの眼差しを向ける。主人公達が奏でるロマンスを自分にひと時重ね、疑似恋愛を楽しむのだ。

馬鹿みたい。冷めた目で傍観しながらも、そんな読者が喜ぶようなドラマを組み立てていく。売れなければ意味が無い。だけど月が銀色に輝くこんな夜は、何か大事な事を忘れたような気分に襲われる。生れ落ちた瞬間からその喪失感、私の奥底で息を潜め、時折切ないという感情を呼び覚ます。

昨夜、彼の脇を通り過ぎた……あの一瞬、見つけた気がしたのだ。何を？ 何を……探していたものを。

“運命の人って感じた事ありますか？”

ヒッチハイクなどしている物珍しい男に興味が湧いた、ただそれだけの事。そう自分自身に言い聞かせ、何度も繰り返す……まるで呪文のように。瞼を落とすとやがて、きらきらと輝く不思議な模様が覆い被さってきた。上等な黒いビロードに妖しく光を放つブルーの紋様。目にした者を一瞬で虜にする蝶の羽模様のような。

ああ、またこの夢だ。起きなくては……初夏とはいえ、こんな縁側で眠りこけたら風邪を引いてしまう。けれども、もう少しこの夢を見続けていたいという自分がいた。美しい羽模様に抱かれていると、甘美な陶酔の海へと漂うことが出来る。

どのくらいそうしていただろう。ふとおでこをくすぐる風の感触に薄目を開く。白んだ視界に朝の雰囲気を感じとり、すっかりと眠り込んでしまった事を悟る。板間の上で長時間横たわっていたせいか、身体の節々が痛い。ノロノロと上半身を起こした時、何気なく流したミモザの木の下に人影を見つけた。泥棒……そう叫ぼうとして目を凝らす。

どうして……どうして？

“運命の人って感じた事ありますか？”

息を呑んで目の前の現実を凝視する。ヒッチハイクの男がそこにいた。素性が知れない他人という恐怖は、不思議と感じなかった。木の下からこちらを見つめる、真っ直ぐな眼差しに囚われる。遠くから、心の隙間にひたひたと忍び込んでくる、男の足音が聞えた気がした

おみくじ（ヒデ）

いくら日本が犯罪率の低い国とはいえ、都会の真ん中で女性が一人、窓を開け放ったまま眠っている状況には驚かされた。なんて無用心な。不法侵入などしている自分が、そんな説教じみた事を言える立場であるはずもないのだが。

ガレージの片隅であっても、昨日は彼女の了承のもとに連れて来られた。だが今朝は……。泥棒と、声にならない叫びを彼女の唇は描いた。視線が絡むと、冷水をあびたよう身体を強ばらせ、啞然とこちらを凝視している。

どうして来てしまったのだろう。だが問われてもいいように、最初から言い訳は用意してある。用意周到……当てはまる四文字熟語をパズルの感覚で思い描き、日本語の奥深さを噛み締める。先手必勝……更に浮かんだ漢字の羅列をすばやく行動にうつす。刺激を与えないよう、ゆっくりと歩み寄り、声も出ないといった様子で座る彼女の前に紙切れ差し出した。

「これ……良かったら一緒にどうかなって」

寝起きのせいか、目が悪いのか、眉間に皺を寄せ、彼女は押し黙ったままそれを眺めている。注意を俺の手元に集中し、こちらの視線に無防備な様子を斜め上から見下ろす。

頼りなく細い襟足を、思わせ振りに覆い隠すショートカット。その髪は緩やかなカーブ描き、色白の首筋に相応しく茶色い色素を持ち合わせている。ルージユで染められていない唇は、放心したような隙間を覗かせていた。

“お前、女に興味無さすぎ”

誘うような女達の眼差しをいつも素通りする俺に、相棒が放った忠告が頭をよぎる。

“ゲイって訳でもないのにな。必要ないならその女ウケのいい顔を交換してくれよ”

人間らしい感情を不必要とする仕事だ。知らぬうちに異性への関心とやらも欠落してしまったのだと自覚していた。いや、ご丁寧な忠告をしてくれる相棒ケンのように、どんな仕事をしていようと、大抵の者は女達と奏でる情事を息抜きとする。それがありふれた男の性ださがとわかつてはいるのだから……今まで全く興味というものを感じた事はなかった。そんな俺がどうして？

昨日、ガレージを抜け、外に足を踏み出した瞬間から慣れない感情に囚われてしまった。初めて経験する通勤ラッシュと呼ばれる朝の地下鉄で、薄い空気に喘ぎながら繰り返すその願いが頭をよぎる。会いたい。もう一度会いたい。

「女をデートに誘うには、随分突拍子ないコースね」

笑いさえ含んだ、燐とした口調がふいに耳元に流れ込む。ついさっきまで彼女を蝕んでいた、不安や動揺といった感情は跡形もなく消え失せていた。

「Yes or No？」

恐る恐る彼女に答えを求める。こちらを見上げてくる瞳は、息を吹き込んだよう挑戦的な光さえ帯びている。ぞくりと肌が栗立つ。

そうだ、この瞳に囚われたかった。口の端を上げるだけの笑みを浮かべ、彼女は答えを出した。

「……いいわ、Yesよ」

「バスに乗るなんて、随分と久し振り。しかもこの派手な黄色いバス、何度も見掛けたことはあるけど、まさか自分が乗る日が来るとは……思ってもみなかったわね」

窓際に座った彼女の装いは、ほのかに肌が透ける薄手のブラウスにジーパン。胸元には凝った透かし模様が施され、ひとつ余分に外されたボタンが、綺麗な鎖骨を露にしている。移り変わる東京の景色を、窓ガラス越しに眺める振りをして、その横顔を見つめる。車

内はほとんどが日本人、他にヨーロッパ人のファミリーが一组。

「本日は、はとバスツアー浅草三昧にご参加下さりありがとうございます」

制服姿のガイドが、マイクを握り愛想の良い笑顔をふりまいている。昨日、地下鉄から乗り換えの為に駅の構内を歩いていたら、このツアーのポスターが目にとまった。真ん中に大きく写し出されているのは、大きな赤い提灯をぶら下げた古い寺院。大都会の東京が隠し持つ、全く異質の空間がそこにあった。

仕事はほとんど片がついている。残りは帰ってから急いで取り組めば、朝までに仕上げられるはずだ。ケンがこちらに到着するまでの半日を、こんな場所で過ごすのも悪くない。誘ったら……彼女は来てくれるだろうか。だが電話をしようにも、携帯の番号など知らない。家の固定電話は、調べようと思えば探り出せるかもしれないが……名前も知らずして受話器越しに、何て呼び掛けるつもりだというのだ。とにかくそのままポスター脇の旅行代理店へ足を踏み入れツアーの申し込みをすると、ホテルに戻り仕事に取り掛かった。そして眠らないままに、早朝再び彼女の家を訪ねたのだ。

塀と呼ぶには低すぎる垣根を乗り越える。中庭は様々な草花が生い茂り、太い幹を持つ木もそびえ立っていた。さわりと夜風が悪戯に音を立て通り過ぎていく。見上げると、交差する枝の隙間から銀色の光を放つ三日月が見えた。

こんな夜が嫌いだった。ずっとずっと。銀色のベールが、薄汚れた闇の世界さえ、まるで輝いているような錯覚を呼び起こす。朝日にさらされ本当の姿を思い知る。ならば夢など見せなければよいものを。あの喪失感。失ったものはなんだろう？ そんな疑問が心をかき乱す。

だけど……ほら、見つけた。中庭を取り囲む廊下で無防備に眠る女の姿を見つけた瞬間、泣き出してしまいそうな気分になられた。柔らかな月の光が、導くよう照らし出す彼女の寝顔。近づいたら、かき消えてしまいかもしれない。一步も踏み出すことが出来ずに何

時間もそこに立ちすくんだまま。漂う光が朝日に変わり素の姿をさらしても、変わる事の無い美しさに息を呑む。あんなにも満たされた時間を味わった事があつただろうか。そして数時間後、こうして彼女が俺の隣に座っているだなんて……嘔みたいだ。

「浅草の寺めぐりをしたあと、昼食は老舗天朱亭での天婦羅ご膳をご用意いたしております。伝統の味をご堪能下さい。その後は自由時間もたっぷりと設けておりますので、浅草仲見世など存分にお楽しみください。最後は水上バスにて日の出桟橋へと向かいます」

歯切れのいい発音でバスガイドがスケジュールを説明する。自分がこんな観光バスに乗っている現実に、笑いが込み上げてしまいそうだ。

「ね？ かつこ良くない、あの人……」

視線を感じた。二つほど前の座席から身を乗り出しこちらを振り向く女の子が二人。金髪に近いほど染め上げた髪、アイメイクを強調した濃い化粧。けれども、いまいちその装いが馴染んで見えないのは、素材以上派手に装い過ぎているアンバランスのせいだ。だが若さという武器が、その違和感を上回っていた。東京はファッションナブルな街だ。踵の高いヒールで背筋を伸ばした少女達が、一重瞼で控えめなどというひと昔前の先入観を笑い飛ばしている。

「年上だよねえ……彼女……でもイケてない？ 大人つて感じ」

あとに続く会話は、日本語とは思えない解読不能な用語で占められていた。恋人同士に見られている、その現実を彼女はどう受け止めているのだろうか。けれども、全く意に介さない様子で、彼女は窓の外を眺めている。車内では街並みを説明するアナウンスが流れていたが、彼女の存在で全ての音がかき消されてしまう。

一時間ほど走っていただろうか、同じような大型バスが並ぶ駐車場にバスは停車した。ほんのさっきまでコンクリートジャングルと称される都会にいたというのに、まるでタイムスリップしたような情景。朱塗りの寺院、大きな瓦屋根、白く漂う煙がエキゾチックな香りを漂わせている。立ち昇るお香に、人々が群がり、手で自分に

降り掛ける仕草を繰り返す。

「この煙は身体の悪いところを治してくれるって言われているのよ」
彼女が俺の隣を歩きながら、そんな説明を添えてくれた。立ち入る隙がない程に、香を焚く大きな壺の前には人々が群がっている。

「あそこの一番前でずつと頭に煙をかけている、ほら眼鏡の男の人、元氣そうに見えるけど……」

「あら、髪にも効くのかもね」

強烈なブラックジョークに一瞬、言葉を見失い込み上げてくる笑いを噛み殺す。バスガイドに説明を受ける一行より一足遅れて、俺だけに囁かれる彼女の説明に耳を傾ける。

「ほら山門を守る為に立っている二対のこの金剛力士像、これは宇宙の始まりから終りまで表しているのよ」

「宇宙？」

過去にさかのぼったような仏像を目の前に、未来を予測させる宇宙という言葉は随分的外れな気がした。

「右の大きく口を開けている像が“阿形”^{あきよう}、左の口を閉じている像が吽形^{うんきよう}。阿は口を開いて最初に出す音、吽は口を閉じて出す最後の音。生まれてから死ぬまで、万物の始まりと終わりを象徴的に表現しているって言われているわ」

「すごい、ここは宇宙への入り口って訳だ」

彼女の言葉の後では、同じ像が全く違った威厳を持って立ちそびえる。

「詳しいんだね、驚いた。バスガイドがいないね」

「昔、小説の題材で調べた事があるの」

「小説？」

「……仕事よ」

「小説家なの？どんな話を書くのか知りたいな」

「今日はプライベートだから、仕事の話はノーコメント」

素っ気無く視線を反らされる。近づいていた距離が、すっと引き離された気がした。バスガイドが皆を集合させている。旗を一生懸

命高く掲げ、大きな声を張り上げてた。

「これから、記念写真を撮ります。撮影はあちらになりますので皆さんはぐれないよう、私の後に続いて来て下さいね」

写真？ そんな話は初耳だ。

「俺はやめておくよ。あんまり……写真が好きじゃないんだ。でも記念になるし、遠慮しないで入ったら？」

「私も、ちよつとアレは趣味じゃないわね」

同じバスに乗りあわせている若い女の子達は、バックから取り出した鏡で念入りに髪型をチェックしている。集合写真を撮影する一画には、他のバスから降り立った人々も混ざり、ごったがえしていた。

「そつだ、ねえ、皆が写真を撮っている間におみくじを引かない？」
そつ口にながら、彼女の目が悪戯に輝く。

「ほら、あつちよ」

彼女の細い指に腕を引かれる。ひんやりとした指先が絡み付いてくる感触。バスガイドに撮影は参加しないことを伝え、片隅にある小さな小屋へと向かう。お守り、お札、和風の小物が所狭しと並んでいた。言われるがままに小銭を払い、長細い箱に入った棒を一本引き抜く。棒の先端には番号が刻まれていた。マス状の棚から同じ番号がふられた紙切れを選びとる。彼女のしている動作を真似ながらも、一体何のことやら理解に苦しんでいた。

「ふうん」

かさかさと小さな和紙を広げると、彼女はそれをじつと覗きこんでいる。同じように紙を広げてみる。解読不能だ。どういう意味があるのか、何かの暗号だろうか？ チラリとこちらを覗き見る視線を感じた。

「やだ、気にすることないわ」

その慌てぶりに、違和感を感じ、手にした紙切れを再び眺める。細かい文字がびっしりと羅列されている。印刷物だが文字は所々、毛筆を真似た筆跡を描いていた。上部に一際大きな文字が並んでい

る。

“凶”

文字が持つ意味を思い描けば、あまりいい事が書かれて無さそう
だとは想像がつく。

「凶なんて、そんなの初めて見たわ。でも視点を変えれば大当たり
とも言えるかもね」

堪え切れないといった様子で、彼女は笑いを噛み殺している。

「大当たりって……これって何のためにするもの？」

「何っておみくじよ」

「……おみくじ」

棒読みで繰り返す俺に、彼女は怪訝な眼差しを向けてくる。

「最近の若者はおみくじも知らないのかしらね。ねえあなたって何
歳なの？」

「二十一歳」

誤魔化そうかと思ったが、嘘を言うのは気が引けてありがまさを
答える。貴方みたいな子供は趣味じゃない。そう言われそうな気が
して。

「ほら、記念すべき人生初めてのおみくじが凶だなんて、なかなか
あるもんじゃないわ。一緒にじっくり読んであげる」

「本当に？ 優しいんだね」

小さな紙と一緒に見るため、触れるほどの距離に彼女が踏み込ん
できた事にすっかり舞い上がってしまった。

「いやだ、貴方って女を見る目がないのね」

「え？」

思いがけない言葉に、どう返答したらいいのか混乱する。

「優しいなんてとんだ勘違いよ。私ってすごいイジメツ子なんだか
ら」

戸惑う俺を、横目で眺めながら彼女は再びくすりと笑ってみせた。
そして何事もなかったかのよう、取り澄ました顔で綴られた文字を
読み上げ始める。

「手に持つ珠を大海に落としてしまつように何事も思いのままにならず久しく苦勞する。」

龍が再び珠を得て昇天する時機を待つのがよい」

「龍が……再び昇天する？」

「今は成就しない事柄も、時期を待てば上手くいくつて事なんじゃない？」

なるほど。彼女の解釈に頷きながら、更に続く言葉に耳を傾ける。

「願望、かなわず。病氣、危う。待人、来ず。失物、出ず。縁談、整わず。売買、折りがあわない。その他、万事もつれること多し」

「酷いな。でも待人^{まちひと}つて誰の事？」

「人生を左右するような運命の人つて事よ」

「じゃあ、それつて当たつてないな。だって俺、こつちに来て巡り会えたもの、運命の人に」

隣に立つ横顔を見つめると、彼女は視線を合わせる事なく行きかう人波を眺めている。

「そんな事を思い込んだつて、相手は全然同じ気持ちじゃないかもよ」

私は違つのと、釘を刺された気がした。

「いいんだ」

「え？」

「そう感じる人に出会えた事実は、素敵な事だなつて思えるから」

「前向きなのね」

素っ気なく彼女は言い放つた。

“相手は全然同じ気持ちじゃないかもよ”

知っている。どんなに相手が真つ直ぐな気持ちを注いでくれたとしても、同じ想いを分かち合えるわけではない。愛しているのだと訴えてくる眼差しを、困惑でしか返せないもどかしさ。自分はそんな感情とは、一生無縁なのだと諦めていた。この年になつて初めて異性を意識するだなんて、他人から見たら笑い話にさえなる出来事だけど……自分の身に降りかかつてみたら、運命なんて大袈裟な言

葉さえ嘘には感じない。彼女の立つ側の温度だけ、熱を帯びて感じるだなんて。身体の奥底に芽生えた甘い疼きに酔ってしまいそうだ。これは一体なんだろう？　ずっと昔から知っていたような不思議な錯覚。彼女が隣で息づいている事実に、何故か喜びさえ沸き上がる。切ない程の痛みさえ添えて。

抱き締めてしまいたいなんて…まさか、欲情しているとでもいうのか俺は……。いや、そんなんじゃない。ただ、その温もりを確かめたいだけ。まだ彼女の名前さえ知らないというのに、こんな気持ちになるだなんてどうかしている。庭へ忍び込み、寝起きの彼女に唐突なデートを申し込む図々しさがあるというのに、どうして名前さえ問えない？　きっかけを見失ってしまって、上手く言葉が出ない。

そうだ、一度連れて行かれたナイトクラブで、ケンがスマートに女達に声をかけていた様子を思い出す。気のきいたジョーク。女を引き寄せる思わせ振りの流し目。あんな風に振る舞えたら、彼女を退屈なんてさせないのに。けれど、突然そんな色男になれるはずもなく、意識すればそうするほどに肝心な事すら上手く話せない。

「ほら、細く畳んで。そう、それでここに結ぶの。優しくやらないと千切れちゃうわよ」

皆の運命を暗示したおみくじが、ところ狭しと結ばれている。風変わりなクリスマスツリーの飾りみたいだ。彼女が結んだおみくじは、綺麗な形を整え、白い蝶が止まっているように見えた。真似をしてみるものの、同じ紙を結んだとは思えないお粗末な形になってしまった。……その時だ。こちらに注がれる視線を感じたのは。不自然な姿勢で携帯電話のカメラをこちらに向けている女の子がいた。

「あ、ヤバッこっち見た」

「ね、上手く撮れた？あとで私にもメールで回して」

バスで一緒の……集合写真はもう撮り終えたのだろうか。視線が絡むと、二人は恥ずかしそうにバスの方へ消えていった。

「モテるのね」

冷やかすような眼差しで彼女が女の子達の背中を見送っている。

「きつと男を見る目がないのさ」

つまらないジョークに彼女は唇の端を上げ、肩をすくめてみせた。
「そろそろランチの時間よ。私達も行きましょか」

先に歩きはじめた彼女の背を見つめる。薄手の生地から透ける背中が、素肌をさらすよりもかえって視線を引き付ける。ジーパンから覗く華奢な赤いヒール。女に称賛を惜しまないイタリア人観光客の男達が、誘うような眼差しを彼女に投げ掛ける。駄目だよ、そんな目で見詰めたって。今日の彼女は俺のものなんだから。

クリーム色の制服を着たバスガイドの旗に誘導され、天婦羅屋へと案内される。予約をしてない客なのだろうか、店の外にまで行列ができている。お座敷を用意してあるからと、靴を脱ぐように言われた。軽やかに赤いミュールを脱ぎ捨て、彼女は先に廊下を歩いていく。広い玄関が、人の出入りでごった返していた。ぐるりと確かめるよう周囲を見回すと…居た。俺の写真を撮った女の子だ。足首に巻き付いた厚底サンダルのリボンをはどくの到手間取っている。その子の隣に腰を降ろし俺もスニーカーの紐に手をかける。こちらを意識してその子の指先が止まるのがわかった。素知らぬ振りをし、床に投げ出された派手なバックに視線を走らせる。無造作に詰め込まれた荷物の隙間に、携帯電話が見えた。

警戒するに当たらないだなんてわかつている。だが……見逃す訳にはいかない。素人のブログに載っても、アクセスは世界中から可能なのだから。今日この瞬間、東京に自分が存在した証拠にさえなれる。

「お先に」

愛想のよく会釈をして、皆が歩く廊下に向かう。座敷の場所だけ確認すると、部屋には足を踏み入れずにトイレへと入った。個室の鍵を閉め、先程、玄関で立ち上がり様に引き抜いたピンクの携帯電話を取り出す。

「何だってこんな……」

その携帯電話は、想像を越えたデコレーションが施されていた。ハート型のピンクや白のパーツで覆われ、キラキラと輝いている。これはある意味、芸術作品とさえ言えるかもしれない。まじまじと眺めながら、自分がこんな携帯電話を手に行っている目的を、今更のように思い出す。苦笑いをしながら携帯を開いてみた。

両側に並ぶビル群を眺めながら、水上バスは進む。ひと昔前の町並み浅草から船を漕ぎ出せば、喧騒から切り離された静寂の中で佇む都会があつた。潮風を受けながら、手すりに頬杖について彼女がぼんやりと過ぎ行く情景を眺めている。

「俺、聞き忘れてた」

「何を？」

「おみくじ、君のは何て書いてあつたの？」

「内緒」

からかうように彼女は口の端を上げてみせた。

「本当だつたんだね」

「何が？」

「……いじめっ子だつて」

あははと、白い歯を見せて彼女が笑つた。完璧な大人の女といった雰囲気から、垣間見えた無邪気さに目を細める。あまり馴染みのない潮の香りが、二人の隙間に漂う。彼女に出会ってまだほんの三日目だというのに、一体自分はどつしてしまつたのだというのだろう。さわさわと頬を撫でる風が無ければ、熱に浮かされてのぼせてしまいそうだ。

「いやだ！携帯を落としちゃった」

背後から、泣き声混じりの声が響いた。振り向かなくても誰だかわかる。そう、あの子だ。ああ、忘れていた。いや、忘れていた訳ではない。タイミングを逃していた。天婦羅屋で席は離れていたし、その後の自由行動ではすれ違いもしなかった。船着き場に辿り着く

道程でも、気付かれずに返す機会を見失っていた。

「えーっ、よく探してみなよ。最後に使ったのいつだっけ？」

「お昼食べるちよつと前に、メルチエクしたのまでは覚えてるんだけど……え、なんで？ バスの中かなあ」

あたふたとバックの中身をデツキの上に広げている。

「私、バスガイドさんに落し物が届いてないか聞いてきてあげるよ」
一緒にいた友人の方が、足早に俺たちの脇を通り過ぎようとした。
「どうしたの、何か無くしたの？」

俺よりも先に彼女が声をかけた。その子は、困り果てた顔ですが、
のような眼差しを投げかけてくる。

「あのお、友達が携帯電話を落としちゃったみたいで」

「あら、困ったわね」

「バスガイドさんって、どこにいるか知ってますか？ ちよつと聞いてみようと思って」

そつと、その子の脇をすり抜け、周囲を見回し、俺はバスガイドを探すような素振りをしてみせる。

「そうね、もしかしたらもう届いてるかもよ。あ、でもちよつと貴女の携帯で電話をかけてみたら？ 拾った人が電話に出てくれるかもしれないでしょう」

「あつ、そうですよね！ ちよつとかけてみます」

「ごそごそと大きめのバックの中からその子は自分の携帯電話を取り出した。……すごい。あの携帯と負けずとも劣らないゴージャスな装飾。長い爪にもキラキラとしたビーズのようなものが貼り付けられ、立体的な花模様を描いている。その指先で器用に携帯を開くと、その子は目にも止まらぬ速さでボタンを叩いた。電子音の賑やかな音楽が響き渡る。」

「え？」

その音を聞きつけて、携帯をなくしたと騒いでいたあの子が近づいてきた。

「やだっ、どうして？ どうしてここで私の携帯が鳴っているの？」

みんなの視線が集中する。俺：を通り越して、花柄の爪を持った子に。

「え……私っ？ 何？ えっ」

「ユツコ！ アンタのバックのポケットから聞えるよ。やだあ、間違えて私の携帯しまつちやつたんでしょ」

「えっえっ、やだっ全然記憶無いよ」

泣き顔だった女の子は、唇を尖らせながらも安心した顔を見せている。お騒がせしましたと頭を下げて、二人は恥かしそうに去っていった。

「見つかつて良かったわね」

彼女が確かめるように自分のバックから携帯電話を取り出した。目が覚めるようなアクアブルーのシンプルな携帯電話。爪はパールがかった珊瑚色で彩られている。皆、携帯電話ひとつ取ってみても自分らしさをアピールしているんだな。自分には無い感覚。いや、特徴を持たない黒い携帯電話が、ある意味自分の存在をよく表しているのかもしれない。背後では、まだ賑やかに女の子達が騒いでいる。

ゴ・メ・ン・ネ。と、心の中で呟く。特定の画像を消去したことを誤魔化す為に、数枚の写真も合わせて削除した。今日の送信履歴に添付ファイルをつけたものは無く、他に転送されていないことも確認済だ。いいタイミングが巡って来て、携帯電話を無事持ち主の元へ返すことが出来た。

“願望、かなわず。待ち人、来ず……万事もつれること多し”

おみくじ、やっぱり当たってないよねと小さく呟くと、何か言った？ という眼差しで彼女がこちらを振り返る。

「生きてると、こんな特別な一日と巡り合えることもあるんだなっ
て……」

「大袈裟ね」

皮肉めいた口調で彼女は軽くこちらを睨んだ。だけど視線が絡む

と、その瞳に困惑の色が滲むのが見てとれた。逃れるよう、彼女は海へと顔を向けた。傾きかけた太陽が、彼女の頬を金色に透かしている。視線を辿り、同じ方向を眺める。行き交う船、海へと続く水路…… ああ、知っている。揺れる水面に映るこの光模様を。

なぜ知っている？ 奥底に眠る記憶の欠片が、こつこつと小さな音を立てる。彼女も、同じ感覚を味わっているかもしれないだなんて、そう思う俺は自惚れているのだろうか。

船着き場に着き、バスガイドよりここで解散との説明を受ける。気まずい空気が流れているわけではない。たけど、沈黙はずっと二人の周囲を漂っていた。目の前を横切るモノレールの駅を素通りし、自分が今どこにいるのかも分からないままに、彼女の横をただ歩き続ける。狭まった距離に何度となく手のひらが触れる。いつしか、どちらからともなく指先を絡め合っていた。ちらりと彼女の様子を伺う。何事もないかのように、とりすました横顔があった。

時が止まればいいのに。生まれて初めて、欲しいと願った温もりが手の中に存在する高揚感。彼女の何を知っている訳でもないのに、ずっと辿り着きたかったこの地で、たまたま巡り会ってしまった女性だから、錯覚しているだけなのかもしれない。待ち人來ず。人並みの幸せなど似合わない人生。おみくじに暗示された暗闇が相応しい男なのだ。そう現実を噛み締めれば、本当に夢のような一日。

人通りが多くなり、駅が見えてきた。週末のせいか、スーツ姿のビジネスマンはあまり見当たらない。ブルンっブルンっ。ズボンのポケットの中で、携帯電話が震えた。急に歩調を緩めた俺に、彼女は黙りこんだまま探るような眼差しを流してくる。こんな電話など…… 無視してしまえばいい。止む気配を見せない振動音。

「ねえ、携帯が鳴ってるんじゃない？」

するりと手のひらを指先がすり抜けていく。落胆した気分で、やり場の無い手を渋々ポケットの中へと入れる。触れた瞬間、からかうように電話はピタリと息を潜めた。

「後でかけ直すから、いいんだ」

タイムリミットか。駅に掲げられた大きな時計に視線を走らせる。PM5:30。もつと一緒にいたいのに……すぎるよう彼女の指先を追い掛ける。再び絡んだ温もりに、安堵の溜め息をつく。けれども彼女は振り払うでもなく、握り返してくるわけでもなく。

「私、地下鉄で帰るわ。あなたは？」

駅構内の上部にJRの文字を見つけ、乗るべき路線を確認するものの、彼女の手を離す事が出来ない。プリペイドカードで地下鉄の改札を抜け、一緒に階段を降りていく。丁度電車が滑り込んできた。周囲の人達が、慌てた様子で階段を掛け降りていく。歩調を速めないう俺に付き合ってくれたのか、ホームに降り立ったものの、彼女は閉まる電車のドアを見送った。次も、その次も、立ち止まる俺の手に繋がれたまま、数本の電車を彼女は黙って見送る。

「……私ね」

前を見据えたまま、独り言のよう彼女は話し始めた。

「幼い頃、すつごい内気な子供だったの。お菓子を買いに行っても、これが欲しいとお店の人に話しかけることすら出来ないくらいにね」
ホームに人が途切れる事は無い。滑り込んできた鉄の箱から溢れ出る人、吸い込まれていく人波。喧騒の中、彼女の声だけが俺の鼓膜を震わせる。

「土地柄、学校には外人の子も多くて、みんな自己主張は得意分野じゃない？ 黙っていると、欲しいものはあつという間に横取りされる訳。それで学んだの。心で繰り返すだけでは手に入らない事を。本当に欲しいものは行動に移さないといけないとね」

繋がっていない手を、彼女が伸ばしてくる。その仕草はスローモーションのようにゆっくりと見えた。頬に添えられる指の感触。
「何故、私なの？」

耳朶に触れそうな距離まで近づいた唇が、甘い吐息を吹きかけながら囁いてくる。

「年上が好み？ 悪いけど私面倒見のいい女じゃないわよ」
からかうような光を宿した瞳が、じつとこちらを覗き込んで来る。

電車が滑る込んでくる様子が、目の端に映った。

「また……会いたかった。どうしても……今日は迷惑だった？」

彼女の髪に少しだけ鼻先を押し当てながら、祈るような気持で問い掛ける。ドアが開く音がする。少し離れたところにいる女の子のグループが、興味ありげな顔でこちらを覗き込んでいた。

「いいなあ、彼氏……」

嬌声をあげ、ちらちらと振り向きながら電車に乗り込んでいく。時間調整の為、発車を数分遅らせると告げるアナウンスが響いた。

「そろそろ行くわ。あなた、この地下鉄に乗る気ないんでしょう？」
行ってしまう。行ってしまう。すり抜けていく温もりを、引き止める為に気付けばすぎるよう抱きしめていた。

「ずっと聞きたかった事があるんだ」

「なあに？」

臆することの無い落ち着いた声色に、舞い上がっているのは自分だけなのだと思い知る。

「名前……聞きたかった、ずっと」

「あら、私の名前なんて興味がないんだって思ってたわ」

「何度となく尋ねようって思ったんだけど、タイミングが……うまく見つからなくて」

クスクスと腕の中で、彼女の含み笑いがこぼれる。野暮な台詞に呆れたに違いない。

「ふうん、悪くないじゃない」

満足そうに呟く彼女の言葉の意味が、全く理解できず、え？と聞き返そうとした時、緩めた腕の中で、つま先を立てた彼女が背伸びをしてきた。

「きゃっ……ねえ、ちょっと映画みたいっ」

溜息混じりの女の子達の声が、遠くで聞こえた。現実なのか夢なのか、信じられない状況に足元がふわりと浮く。合わさった唇の感触。柔らかな睫毛に皮膚を撫でられる心地良さ。

「ゆ・み……よ」

唇を離すと、そのまま熱の含んだ吐息を首筋に吹きかけ、彼女はぼつりと呟いた。合わさった手をひっくり返し、俺の手の平をさらすと、そこに細い人差し指で文字を刻んでいく。

「由・美」

由美……由美……甘い飴玉のように何度も舌の上でその名前を味わう。あなたは？ 無言のまま、彼女が催促するような眼差しを投げかけてくる。

「ヒ……」

そう言い掛けたときだった、構内にけたましい発進音が響き渡った。不意打ちの電子音に、びくりと身体が跳ね上がる。俺の手をすり抜けた彼女、由美がドアに向かって歩き始めたのが見えた。車内に足を踏み入れた彼女に走り寄る。

「危ないので駆け込み乗車はおやめください」

まさに俺をたしなめるようなメッセージがアナウンスされるが、そんなものは右から左へと聞き流す。

「俺っ……」

そう言いかけると、ボタンとドアが閉まった。伝えなきゃ。名無しのままでは自分の存在が、あっという間に記憶の隅に埋もれてしまふようで怖かった。はあっと、ドアに息を吹きかけると、窓ガラスが僅かに白く曇る。

「黄色い線の内側にお下がください」

ぴぴーっと、たしなめる警笛が響く。彼女側から読めるように逆転させて書くなんて、そんな余裕は無かった。

“ヒデ”

綴った文字はあっという間に滲んで、書き損じた記号の欠片のようになっちゃった。ガタンッ。電車が走り始める。由美が小さく頷くのが見えた。

「危ないので電車から離れて下さいっ」

素直に一步退く。視線だけは彼女を追いかけたまま。電車の速度はどんどんと速まっていき、トンネルへと消えていく地下鉄の後姿

をぼんやりと見送っていた。

ブルンブルンっ。携帯電話が震えた。小さな溜息をひとつ吐き、いつもと変わらない様子で応答する。

『トラブルか？』

淡々とした声色が受話器から響く。

「いや、何も無い」

『さっきも鳴らしたが出なかった』

『デートの途中だったから』

しばらく沈黙が漂ったが、それを打ち破ったのは相手の笑い声だった。

『面白いジョークだな。ヒデ、お前にしちゃ、珍しい』

「……ケン、着いたのか？」

『ああ、さっき成田から電車で到着した。東京まで結構距離があるんだな。まあ、街並みを眺めながら、興味深い道のりだった』

『俺も四十分ほどで部屋に戻る』

『了解。どうだ？ 俺より五日先に味わった、初めて訪ねる祖国の空気は』

「……どこも変わらないさ」

素っ気無く言い放つと、『後で』と電話は切れた。電話を閉じることなく、すぐに着信履歴を消去する。身体に染み付いた習慣、痕跡は全て拭い去る。

“どうだ？ ……初めて味わう祖国の空気は”

一度も足を踏み入れたことが無かった日本の生活習慣を、叩き込まれ生きてきた。様々な学習を重ね、日常会話を日本語とし、細々とした習慣も取得した。初めて会った夜、“終電”という単語を聞き返した俺に、由美が怪訝な眼差しを向けてきたのを思い出す。“最終電車”と言ってくれたならば判ったのに：略語はさすがに及ばない事もある…でも発音は完璧だと自負している。しばらく滞在すれば、崩した言葉もおのずとマスターできるだろう。

“何故、私なの？”

彼女が語りかけた台詞が頭をよぎる。何故って、何故って……自分でもよくわからない。でも他の誰かでは駄目なんだと、漠然と己の奥底が囁きかけてくる。

“何故、私なの？”

愛だとか恋だとか、当てはまる枠組みなど必要ない。ただ心が震えた。そんな理由は陳腐だろうか。気紛れでもいい。唇を寄せたあの瞬間、少しでも君は俺を欲してくれたのだろうか？

踵を返し歩き始め、そつと指先で唇に触れてみる。熱い……瞼を閉じて、刻み込まれた彼女の感触を蘇らせてみた。

ブルーマンデー（由美）

地下鉄の雑踏の中、繋がれた指先に囚われる。振り払えないのはどうしてなのだろう。まるで子供じゃない。世界にはママしかいないのだとも言いたげな眼差し。

行かないで。どこにも行かないで……

いくつもの電車を、一緒に見送っている自分を不思議に思う。どうかしている。遊覧船に揺られている時、漂う浮遊感を懐かしいと感じていた。また、あの感覚……彼といると、何度もそんな想いに囚われる。真っ直ぐに私を見つめる漆黒の瞳。

いつだって、駆け引きのような恋愛を楽しんできた。その時の自分に合わせた男達を、アクセサリー感覚で選び、傍らに呼び寄せる。そしてこちらも、彼等が望む女を演じてみせるのだ。

妻を演じた事すらある。その立場を一度を味わってみたかったから。そして悟ったのだ。ひとつ屋根の下に暮らしていても、自分は全てを委ねる事が出来ないタイプの女なのだと。

私の母は愛人だった。父親は戸籍上、空白になっている。認知すら許されなかった環境。留守がちな父ではあったが、幼い頃はごく普通の家庭だと信じて疑う事などなかった。母は幸せだったのだろうか。資産家だった父が与えてくれるお金が目当てだと、誰からも後ろ指を差されるような関係。

父が訪れる日、母が鏡台に向かい浮きたつ様子で薄化粧をしている背中が今だに忘れられない。鏡に映る母は、恋する女だった。自分が入り込む隙を見つけられず、寂しいとも、羨ましいとも思いつながら部屋の片隅で息を潜め母を眺めていた。

綺麗な人だった。望めば普通の結婚など容易く手に入ったであろうに。愛人など、結局は気紛れの玩具でしかない。父の足が遠のいていくのと共に、母の心はバランスを失っていった。

縁側でぼんやりと外を眺める母は、少女のようにあどけなく、ま

るで子供に返っていくように見えた。中学、高校と、成長していく私と全く相反する存在だった。大学に入学した春、母は小さな風邪が原因で肺炎を患い、呆気なく他界した。まだ四十三歳、けれどもそんな儚さが似あう人だった。

最後の瞬間まで、父が再びこの家を訪れる日を待ちわびていた母。けれども葬儀に姿を現したのは、父ではなく代理人と名乗る弁護士だった。この家の所有権、大学卒業までの学費、生前贈与という言葉を弁護士は口にした。認知してない子供への義務など背負ってはいいのに、父は私を娘だと認識していたのだろうか。だが、親子の絆すら清算しようとしているのだと漠然と感じた。お金で義理を果たせるのであれば、それが世間的には桁が違う金額であつたとしても、父にとってはそれが一番容易い解決法なのだろう。

私には二種類の血が混じっている。正気を逸するほど、愛という呪縛に身を委ねる愚かな女と、そんな女に子供を孕ませ、拳句の果てに簡単に見捨てられる冷淡な男の血。愛なんて……その響きの心地良さに人を惑わせ、ふとした拍子に姿を変える。狂気にも、酷薄にも。

母が決して手に入らなかった妻という無二の場所。己で味わってみれば、それは小さな檻だった。夫だった倉田は嫌いではない、好きだった。けれども愛していたのかと問われれば、首を横に振るだろう。

冷めた女。自分ながらにそう思う。自分が綴る小説の中では、甘い色恋沙汰を奏でながら、冷静に筆を走らせる。どんな風に主人公に試練を与えるか。どのタイミングでシンデレラにガラスの靴をはかせるのか。結末はお決まりのハッピーエンド。

私の小説は商品だ。読者のニーズに合わせた品物であるほどに本は部数をあげる。女が自立して生きていく為に必要なものは手に職を持つこと。文芸性など私は求めない。切なく甘い恋物語を女達は求めているのだから。

時代に取り残されたような日本家屋で独り、とりとめもなく降り

注ぐ物語の断片を拾い集める。縁側でぼんやりと構想を練っていると、自分が昔の母と同じ顔をしている錯覚がした。

待っている。いつまでも待っている……私はそんな時、そっと庭に出てミモザの木に触れる。花をつけていても、いなくても、この木に寄り掛かると心が落ち着いた。

地下鉄が滑り込む轟音に我に返る。繰り返し通り過ぎる電車を眺めていたら、ぼんやりとしていたようだ。母の事など……最近は滅多に思い出さなかったというのに。隣の男と繋がれた指先が熱い。……いつまでこうしている気なのだろう。年下の面倒をみる趣味はないのだと素っ気なく言い放つと、男はすぐるような眼差しを落としてくる。

「会いたかった……どうしても。今日は迷惑だった？」

溜め息混じりに震える声が、わたしの髪を揺らす距離。寄り掛かってしまいたいだなんて、今日の私はどうかしている。

「そろそろ行くわ。あなた、この地下鉄に乗る気ないんでしょう？」
振り払うように言い放つ。茶番は終わりだ。こんなので、らしくもない。電車の扉に向かって歩き出すと、背後から伸びた長い腕が覆い被さってきた。ふわりとミモザの花の香りが鼻孔をくすぐる。とつくに散ったはずなのに……こんなプラットホームのどこにも、花などあるはずがないのに。

「ずっと聞きたかった事があるんだ」

目を閉じて、深く息を吸い込む。瞼の奥で、揺れるミモザの黄色い花が浮かんで消えた。

「なあに？」

感情を含ませない声色で淡々と問いただす。薄く瞼を開くと。出

発を待つ電車の中から、興味ありげにこちらを覗き込む女の子達の視線を感じた。

「名前……聞きたかった、ずっと」

「あら、あたしの名前なんて興味がないんだって思ってたわ」

「何度も尋ねようって思ってたんだけど、タイミングが……うまく見つからなくて」

駆け引きなんて微塵も匂わせない、無防備に途惑う眼差しが、私の身体の上を迷子のようにさ迷っている。気構えていた自分が馬鹿みたいに思えた。笑いさえ込み上げてくる。大胆に庭先へ忍び込み、サプライズなデートを申し込んできた男の台詞とは思えない。

「ふうん、悪くないじゃない」

肩から力を抜けば、思わぬ本音が喉元から滑り落ちた。……そう、悪くない。背伸びをすれば届く……欲しいものに。無意識に吸い寄せられていた。触れたい、指先よりもっと、お互いを感じあえる場所に。そつと唇を重ねると、よりリアルな彼の体温を感じ取れた。唐突な行動に、彼は啞然と立ち尽くしている。

「きゃっ……ねえ、ちよつと映画みたいっ」

電車の中からはしゃぐ女の子達の声が響く。ルージュの痕跡が、クレヨンで悪戯をされたように、彼の唇からはみ出して見えた。

「由美……よ」

小さな子供に教えるよう、彼の手のひらに文字を綴る。鳴り響くベルに急かされ電車に乗り込むと、扉は目の前で閉ざされた。ホームに取り残された彼が、電車に触れる程の位置に立ち尽くしている。電車が動き出したら危ないじゃない。そんな心配をよそに彼はかみこむと、扉の硝子を息で曇らせ、何やら指先でなぞりはじめた。車内の人達の目が……こちらに注がれるのを感じたが、今更取り繕う術もない。

“ヒデ”

文字はあっという間にかき消えた。

“ヒデ”

けれどもその名は私の胸に深く刻まれた。

ガタンッと電車が走りはじめたかと思うと、ゆっくりと彼の姿が遠のいていく。本当に予測不可能な行動をする男だ。窓硝子に白く残ったヒデの痕跡に、そつと指先を押し当てながら込み上げる笑いを噛み殺していた。

ひっそりと静まりかえった閉館間近のプール。水中からライトアップされた波紋が、ゆらゆらと白い壁に映し出されていた。水底には美しい幾何学模様を描く、見事なモザイクタイルが敷き詰められている。天井まで続く大きな窓ガラスから一望する都会の夜景。PM21:40。こんな時間が好きだ。高い天井を見上げながら水に浮かんでいると、都会の喧騒から切り離されたような錯覚がする。揺らめく小さな青い宇宙に、抱かれているような安堵感……瞼を閉じて水の感触を肌で味わう。

ちゃぷり、ちゃぷり。

鼓膜を撫で上げる柔らかな音。その心地良さに耳を傾けると、数時間前に唇を重ねたヒデの顔が浮かんで見えた。どのくらいそうしていただろう、壁に指が触れた感触に視線を上げると、真上から人影がこちらを覗きこんでいる。ジムのスタッフかと目を凝らしたが、見覚えのある男の顔だった。

「前と同じような時間に来たら、また君に会えるかなと思って」手を差し出す不意打ちの来訪者。プールサイドに上がった私の肩に、男はホテルのロゴが刺繍されたバスタオルをかけてくれた。記憶の片隅から目の前に立つ男を探り出す。前にもこのくらいの時間に一緒になって……気まぐれで一夜を共に過ごした相手。

「私がいなかったら、スーツでプールに入る気だったの？」

男はその台詞に肩をすくめ、ばつの悪そうな苦笑い浮かべた。

「まさか、今日は泳ぎに来たんじゃないんだ。仕事で上のレストランを使ったからさ、ふと君を思い出して……」

このプールは、ホテル内にあるフィットネススクラブの会員も利用できる。職業柄、家に籠りがちな環境。運動不足解消の為、去年から時々利用していた。

「本当に私がいて、来た甲斐があつたかしら？」

「もちろん。今夜はツイている」

「あら、喜ぶのは早いかもよ」

偶然の再会に盛り上がる男に釘を刺す。

「下心が無い訳じゃないけれど、ただそれだけでここに来るほど浅ましい男じゃないさ」

仕立てのいいスーツ、スマートな物腰。三十代半ば、遊び方を心得た大人の男。

「そうね、喉が渴いたわ。上のバーで一杯いただこうかしら」

大きな窓硝子で囲まれた四十二階のラウンジバー。磨き抜かれたカウンターに並んで腰をおろす。この場に相応しいジャズの旋律が、騒がしくないボリウムで流れていた。

「ブルーマンデーを」

憂鬱な月曜日と言う名のカクテルは、どこまでも澄んだブルーでグラスの向こう側を透かしている。

「これって、今の君の気分？」

「OLなら週末最後の夜には、憂鬱な気分になったりするのかもしれないけど、私には曜日なんてあまり関係無いわね」

「羨ましいな。僕なんて日曜まで働き蟻でさ、毎日がブルーマンデーだ」

「あら、可哀想にね」

クスリと笑ってみせると、男は拗ねた眼差しを流してくる。

「綺麗なブルーだね、昔ダイビングで潜りに行った南国の海に似ている」

「……ダイビング？」

「最近はずつかりとご無沙汰だけどね」

「本当にこんな色？」

「海と空のブルーが金色の陽射しに混ざり合って……本当にこんな色に見えるんだよ」

男は懐かしそうに、カクテルグラスに注がれた小さな海を覗き込む。

「考えてみるとビーチリゾートって今まで縁が無かったわ」

グラスを手に取り、海の滴を味わう。海水とは程遠い、強いウオツカがオレンジの香りと共に喉を滑り落ちていく。

「来月になれば仕事も落ち着くんた。良かったら、一緒に逃避しようか？こんな色の海に」

夜を甘く色付ける、他愛のない口説き文句だなんてわかっている。けれども意外なまでに真剣みを帯びた眼差しに囚われて、冗談だと軽く受け流すきっかけを見失う。

「あの夜から、君のことがちらついてさ……もっと知りたいだなんて言っても本気にはしてもらえないかもしれないけれど」

一度寝た男だ。居心地の良さを感じたからこそ、あの夜、同じシートに包まった。人肌の温もりを恋しいと思う夜だつてある。彼なら外国の男達に混じつても、見劣りしないエスコートを提供してくれるに違いない。隣の男と過ごす甘ったるい南国のバカンスを思い描いてみる。

「溜め息が出そうなくらい素敵なお誘いだけど、遠慮するわ」

「どうして？」

拒絶の言葉に臆する様子も見せず、男は理由を訊ねてくる。

「本当は断る理由なんて見つからないのよね」

「は？」

「この誘惑に流されてしまえばきつと心地良いつてわかっているのに……何故だか浸れないの」

「この前の夜と違って、他の男が君の心に棲みついている？」

「……まさか」

視線が絡むと、男は肩をすくめてみせた。

「しつこく食い下がりたいけど止めておくよ。せつかく再会出来た夜が台無しになる」

男は手にしたグラスを傾けると、ウィスキーに浮かんだ氷を回し、カラリと涼しげな音を立てた。

「プールで見かける綺麗な女の子に、片想いなんていうシユチエーシヨンもたまには悪くないさ」

“他の男が君の心に棲みついてる？”

どうしてこの人じゃ駄目なのだろう。どうして、あの男の顔なんかが浮かんでくるのだろう。ヒデ……八つも下の、まだ子供みたいな年ではないか。どうかしている。グラスに再び唇を寄せると、ヒデに口付けた感触が蘇る。身体の奥底からわき上がる火照りを感じ、見掛けより強いカクテルのせいなのだと、自分自身に言い聞かせた。

キーボードを打つ指先が、無様な程に入力ミスを繰り返す。全く進まない原稿に嫌気がさし、煙草をくわえライターで火を灯した。細い紫煙がゆらゆらと漂う様子を目で追いながら、一体今は何時だろうと障子を透かす光の加減を押し図ってみる。観光で来ているとヒデは言っていた。あれから五日。もしかしたら、もう東京にはいないのかもしれない。……だったら、どうだと言っただ。たまたますれ違い、ノリでキスをした。ただそれだけの関係。そんな行為に意味を持たせるほど、愚かな女ではないつもりだ。浅草なんかへ行ったのは、夢だったのかもしれないなどと感じはじめ。ヒツチハイクで拾った男など、夜中に見た映画の断片だったのかもしれない……。

縁側に座りぼんやりと庭のミモザを眺めていると、過ぎてゆく時間の感覚が曖昧に感じた。電話のベルが鳴り響く。身体がびくりと

跳ね上がる。まさか……いや、そんなはずはない。携帯のアドレスすら交換していない。ましてや家の電話番号など……。受話器を上げると、聞き覚えのある声が響いた。

「双実社の湯原ですが……」

落胆している事に気付き、誤魔化すよう短くなった煙草を灰皿に押しつける。苦笑いが込み上げた。滑稽な自分自身に。

「今、双実社さんの原稿は受けてないはずよ」

ぶつきらばうに言い放つ。けれどもそんな私の態度に慣れている湯原は、全く気にする事無く話を続ける。

「由美センセ、やっぱり忘れてる。電話してよかったですわ」

「忘れてるって……何を？」

「招待状を送ったはずですけど」

「招待状って？……あ……」

全く忘れていた。双実社の創立記念パーティだ。

「いやね、ちゃんと覚えているわよ。明日だっけ？」

「センセ、今日の六時からですよ」

「えっ！今何時？」

「三時です。もし由美センセが来なかったら、私、上司にお咎めを食らいますよ。迎えに行きましようか？」

「いいってば、子供じゃないわ」

ここからお台場までは四十分ほどだ。これからシャワーを浴びて、服を選んで……何とかなるだろう。小説は自由業とはいえ自分ひとりの力で成り立っている訳ではない。社交辞令で義理を果たす事も大切な仕事の一部だ。念を押す湯原に、必ず行くからと約束をし受話器を置く。

慌ててシャワーを浴び、バスローブ姿のままクローゼットの扉を開いた。ワンピース、スーツ、手に取っては再びハンガーを元の場所に戻す。どれもありきたりでつまらなく思えた。ふと、目に止まったのは艶やかなブルーの柔らかな布地。アオザイ……。以前、友人が経営するカンボジア料理店を足を運んだ事がある。店の女性は

皆、白一色のアオザイを着ていた。カンボジアが誇る美しい民族衣装のシルエットに釘付けになった。腕のいい仕立て屋を紹介してもらい、一着あしらえたものの、着る機会を見失いしまいこんだままになっていたのだ。

袖を通し、姿身の鏡の前に立つてみる。ぴったりとした上半身とは対照的なゆったりとした履き心地のクアン（パンツ）。チャイナドレスのように深いスリットの隙間から意味ありげな脚をのぞかせることなく、薄絹が柔らかく身体のラインを浮かび上がらせる。けれども、ひらりと上着がなびくと、クワンとの隙間から僅かに覗くウエストの素肌が艶かしい。胸元より流れるような曲線を描く、白い花刺繍がブルーの生地に浮き出るよう施されていた。この服に合わせて買った、ビーズ刺繍のミニールとバックも出番を待っているはずだ。沈んでいた気分が少し浮き立つのを感じる。支度を終え、透かし模様のシャンデリアピアスを耳朶に差している時、玄関のチャイムが鳴った。

……湯原だ。迎えに来なくていいって言ったのに、全く信用されていないらしい。縁側を通り抜け、玄関へと向かう。擦りガラスがはめ込まれた格子造りの玄関扉の向こうに人影が見えた。湯原じゃない。見覚えのある輪郭。忘れたと思っていても、記憶とは侮れない。ミニールを履き土間を二、三步またぎ玄関の鍵を解く。玄関戸がカラカラと音を立てて横に滑っていった。

「久しぶり」

懐かしい声が響く。そこに立っていたのは昔、この家で一緒に生活を共にした男だった。倉田遼^{くらた}。四年前ならば、玄関を開いた私に彼は「ただいま」と笑いかけていたはずだ。

「俺も出席するから、ついでに拾っていこうかなって思いついてさ。お前、酒飲むから車出せないだろう？」

変わらないぶっきらぼうな口調。しかも四年ぶりの再会が、こんな不意打ちとは彼らしい。日焼けした顔、ルーズに伸ばした髪、あの頃よりも大人になったのだからだろうか、キャメル色のスーツが

板についている。

「別れた夫婦が並んで出席なんて、悪趣味だと思わない？」

「そうかな？俺は別に気にしないけれど。由美が来るって聞いて、知らん振りっていうのも変だと思ってさ。

でも迷惑だったら……先に行くよ」

「いいわよ、もう。この状況で、別々にパーティへ行く方が後味悪いわ」

「突然来たりして、怒ってる？」

「怒ってなんていないわよ。驚いただけ」

相変わらず、マイペースな人。でも私の前で笑顔を見せてくれる彼に、心の奥で安堵している自分がいた。四年前、この人を深く傷つけてしまった。笑顔を奪うほどに……。

「たまには皆の噂の種になるのも悪くないわね」

バックを手に取り、倉田の腕に軽く手を添える。湯原が目を丸くする様子が目に浮かび、込み上げる笑いを噛み殺した。

帰宅したのは日付が変わる少し前だった。

「今夜は少し、飲みすぎちゃったわ」

迎えに来た時と同じ玄関先に車を着けると、倉田はエンジンを切らずに煙草に火をともした。

「やっぱり、今日の俺達って注目されてたかな」

思い描いていたのと同じリアクションをした湯原を思い出し、吹き出しそうになる。

「元夫婦だって、皆意外と知っているのね。芸能人でもないのに。私なんてどこにも顔写真なんて載せないようにしてるのに」

「そういえば由美って、作者紹介のところに絶対に写真使わないの

な」

「恋愛小説家に相応しい顔って訳でもないしね。読者にイメージダウンを植え付けることもないでしょう」

「出せばいいのに。大人の女って感じで、悪くないぜ。由美って名前は本名使っているくせにな」

「おばあちゃんになっても書くんだから、年齢不詳とかがいいの」
「……相変わらず、頼もしいのな」

注がれる眼差しに素知らぬ振りを通す。見つめ返してはいけない、そんな予感がした。

「今日はゆっくり話せて、楽しかったわ」
さりげなく、別れの言葉をなげかける。

「……俺もだ」

長く煙を吐くと、倉田はぼんやりと家へと視線を流した。

「さつき何年か振りに玄関の前に立った時、自分のバカさ加減に呆れた。口をきいてもらえても、仕方がないくらいの仕打ちを俺はしたから……」

「そんな事、もう忘れたわ」

離婚の原因は倉田の浮気だった。いや、それは単に彼のささやかな抵抗に過ぎない。追い詰めたのは私、ただそれだけの事。

「おやすみなさい」

助手席のドアに手をかける。振り返ると車に残した倉田と視線が絡み、ほんの少しだけ再会の夜を後悔した。この人をまた傷つけてしまうかもしれないなんて予感は、馬鹿げた自惚れだろうか。

「おやすみ」

倉田は小さく呟くと、アクセルを踏んだ。一日の終わりを締め括るこの言葉を、同じベッドの上で繰り返していた歳月が頭をよぎる。愛されていた。溢れるほどに、哀しいほどに。どうして、彼の腕に全てをゆだねる事が出来なかったのか。違う……違う……。溺れるほどの倉田の愛情に包まれながら、あの頃いつも何かが違っていると囁く自分を感じていた。

走り去る車を見送った後、鍵を開け、玄関の照明もつけずに靴を脱ぎ捨てて。真つ暗な闇の中、馴れた足取りで廊下を横切り居間の扉に手をかけた。酔いが回った頬に、ひんやりとした室内の空気が心地良い。手探りでソファの背に手をかけ、ドサリとなだれ込むと、電気をつけるのも、お化粧を落とすのも億劫だと思った。でも顔くらい洗わなくては。ひとつの手抜きが大きな後悔を招くに違いない。胸の内であれこれ葛藤していると、小さな水音が遠くで聞こえた。……バスルームから？ やだ、出掛ける前にバスを使ったときに蛇口を締め忘れていたのかもしれない。慌てて立ち上がると、酔いが少し醒めた気がした。

バスルームへ近づくにつれ、水音はよりはつきりと響いて聞こえた。脱衣所の扉をそつと開く。中は薄暗く、ブラインドを上げた小窓から差し込む仄かな月明かりが、暗闇から室内の様子を浮き上がらせている。バスルームへ入る硝子戸の向こうは真つ暗で、水音は間違い無くそこから伺えた。今までこんな失敗は一度だったことは無いのに。年寄りにでもなった重い気分のまま硝子戸を開いた。

パチャパチャと跳ね上がる水飛沫の音がクリアに響く。湿ったタイルの床が足を濡らす感触。

バスタブの上部に設置されたシャワーヘッドの下に、うずくまる人影があった。裸……ではない、服を着たまま。普通なら家を飛び出し助けを求めるだろうに、酔いが思考回路を混乱させているのか、立ち尽くしたままバスルームの照明スイッチに手を伸ばす。明るくなった視界に目を細めながら現実を凝視する。お湯のないバスタブの中で片膝を立てうずくまる男の顔は、濡れた髪が張り付いて水滴がしたたる顎しか見えない。けれどもそれだけで何故か彼だと確信する。

「あなた……ヒデ？」

最初は朝のキッチン、次は夜明けの裏庭。人を驚かすのが趣味なのだろうか。さすがに呆れた溜め息が漏れる。

「ねえ一体なんのつもり？冗談にも程つてものが……」

白いバスタブに近づくと見慣れない色が目についた。それは長袖の黒いシャツから覗く彼の甲を伝い、排水口へと吸い込まれていく。赤い……赤い……これは。慌てて蛇口を捻る。そのとき初めてヒデに降り注ぐシャワーが、冷たい水だと気付いた。ヒデがゆっくりと顔を上げる。濡れた前髪の間から悲しげな瞳が見えた。

もしかして、泣いている？ いや、頬を伝わるものは、髪から流れ落ちたシャワーの滴だ。だけど……癒してあげたいだなんて、どうしてそんな感情が沸き上がるのだろう。捨て猫を拾う趣味など幼い頃からなかったというのに。

「怪我、しているの？」

「ああ……かすただけだから大した事はない」

「かすったって、何が？」

ヒデは一瞬口をつぐむと、指先で濡れた髪をかきあげた。

「……裏庭の垣根をよじ登って……それで枝が……」

「馬鹿みたい。そんな事で怪我なんかして。庭の木を折ったりしたら許さないわよ。それで、一体どうやって家の中に忍び込んだ訳？」

「脱衣所の窓が鍵をかけ忘れてた」

「信じられない。あなたのしてる事は犯罪だってわかってる？それになんだって服のままシャワーなんて浴びているのよ」

「俺、汚れているから」

「え？」

仕立てのよい麻の黒いシャツ、同じ色の細身のパンツ。怪我をしている腕の袖が少し破け、血で滲んではいるけれども……。

“俺、汚れているから”

絞り出すような彼の低い声色に違和感を感じた。

「とにかく、立って頂戴。手当てをしなくちゃ」

ヒデの手を引いて脱衣所へと連れて行く。

「濡れた服を……」

そう促しても、ヒデは頭ひとつ高い位置からただ私の顔を眺めて

いる。服に吸い込まれた水滴は、彼の足元に広がる小さな水溜まりへと姿を変えていく。傷口を確認したくて、待ちきれずシャツのボタンへと手を伸ばした。二、三個外したものの、水を含んで固くなったボタンホールに手間取ってしまう。

「あつ……」

そんなに力を込めたつもりはなかったのに、無理矢理押し込もうとしたボタンがブチンと音を立てて取れてしまった。濡れた服、床に転がるボタンの音……一瞬、激しい雨音に包まれた……気がした。はつと窓辺に視線を流すと、さつきと変わらない月明かりが穏やかに差し込んでいる。まただ……この感覚。知っている、知っている……何を？ この情景を、だ。ヒデが止まってしまった私の手に、そつと触れてきた。そして、自分で残りのボタンを片手で外し始める。

「由美……」

溜め息にも似た声色が降りかかり、自分の体温が上がるのを感じた。

「そのアオザイよく似合っている」

この服をアオザイとわかる男なんて珍しいと思う。はだけたシャツから彼の素肌が覗いていた。露になった胸に、手のひらを押し当ててみると、ひんやりとした体温が伝わってくる。不安な気持ちで確かめるように、今度はそつと耳を押し当てる。トクトクと脈打つ命の鼓動が聞こえた。

何を安堵しているのか……馬鹿みたいだ。肌に張り付いたシャツを脱がせ、傷口を確認する。ざつくりと皮膚がえぐれていたが、すでに出血はほとんど収まっていた。傷口は腕に浮かぶ蝶の痣を、切り裂くように刻まれていた。まるでその身を捨てて、彼を庇ったように見える。その痛ましさに胸の奥がずきりと疼く。バスタブを赤く染めていたのは、シャツに染み込んだ血が水を含み伝い落ちていたもののような。他にも怪我はないかと点検をする。よく見ると、あちこちに小さな古傷を見つけた。何か、スポーツでもやっている

のだろうか。

「あなたって傷だらけの野良猫みたいね」

私の台詞に彼は笑ってみせた。傷がある以外は文句などつけようのない程にバランスのとれた綺麗な筋肉。張りがあって、つやつやしていてイルカみたい。改めて彼の若さを実感する。最近寝不足をすると、てきめんに肌の疲れを痛感するようになった。少し前までは、徹夜のアとなどパツクでもすれば、すぐに回復していたというのに。お手入など、縁もゆかりもなさそうな男のありがままの姿に軽い嫉妬を覚える。

大したことは出来ないが、傷口を消毒し化膿止めを塗り込む。薬箱にある包帯を取り出し、以前に同じような手当てを夫だった倉田にしてあげた事をふと思い出す。台所の棚を作ってくれたことがあった。その時にノコギリで彼は指をえぐってしまったのだ。溢れる血に、倉田の顔が見る見る青くなった。冷静にその腕を掴み手当てをする私に、倉田は子供のように目をつぶってじっと耐えていた。血を見ているだけで気分が悪くなるのだと、彼は苦笑いをしていた。『よく平気だね?』

そう問い掛ける彼に私は……そうだ、こう答えたのだ。

『女は毎月血を見るのよ。初めて男と寝る時にも女は血を流すでしょう? 子供を生むときもそうよ。血を怖がっていたら女は生きていけないわ』

今、目の前に立つヒデは表情ひとつ変えずに、私の作業を見守っている。これだけの怪我をしても、あまり気にとめていない様子だ。『お酒の匂いがする……どこかで飲んできたの?』

「そうよ。でも、あなたのお陰で酔いが冷めちゃったわ」

包帯を巻き終わると、安堵したのか不覚にも大きな欠伸がこぼれた。

「包帯を巻くのが上手だね。ありがとう、もう眠りなよ」

「そうね、夜更かしはお肌の大敵だからもう寝るわ。で?あなたどうするの」

まだ急いで家を出れば電車はあるはずだ。びしょ濡れの服のままでは、他の乗客を驚かせてしまうだろうか。

「今夜は、ここに泊まってもいいかな？」

あまりにもストレートな物言いに呆気にとられてしまった。

「……いいわよ。だけど男物のパジャマなんてないから、あなた裸で寝るしかないけどね」

投げやりに放った言葉。いや、鼓動の乱れを悟られたくなくて、わざと素っ気無く口にした。

「……本当にいいの？」

子供じゃない。家に泊めると了承したからには、男が何を期待しているのかだなんて分かりきっている事だ。ヒデを男として意識している自分をもつ、誤魔化す気などなかった。興味がある相手と寝る事に、それ以上の意味など必要ない。

「服は洗ってあげるから全部そこに置いていつて頂戴。明日、着るものがないと困るでしょう。寝室は廊下の一歩奥よ。あたしはシャワーを浴びてから行くわ」

何か言いたげなヒデを残しバスルームへと歩き始める。この家に泊めた事がある男は倉田だけだ。ボーイフレンドと過ごす夜はホテルか、相手の部屋で過ごしていた。ヒデを車で拾った時はガレージに置いて来たのだから、泊めてあげるといふ感覚はなかった。でも今夜は……。勝手に上がり込んでいたのだから、招いたと言うには語弊があるが、拒絶すれば濡れた服のままでもヒデは帰ったに違いない。誘ったのは私。

シャワーの蛇口を捻ると、ヒデが浴びていた時と同じ冷水が降り注いできた。不意打ちの冷たさに身体が跳ね上がったが、あえて温度を上げないでそのまま瞼を閉じた。さっきヒデの胸に耳を押し当てたときに聞こえた、繰り返される鼓動の音が蘇る。ふいに込み上げるものを感じ、溢れる何かを遮るよう口元を押さえる。コントロールの利かない感情に狼狽している自分がいた。

「……ふっ……う……っ……」

喉の奥から洩れる嗚咽に、自分が泣いているのだと思い知らされる。信じられない……一体どうしたというのだろう。

トクン、トクン。

ヒデの鼓動が頭から離れない。息づいている……そんな当たり前の事実が胸が張り裂けそう。

会いたかった。会いたかった。

ほんの数日だったというのに、気の遠くなる程の歳月が、二人を隔てていたような錯覚に胸が締め付けられる。止まらぬ涙に、酔っているのだと自分自身に言いきかせる。血だらけの男に驚き、影を潜めていたアルコールが急に回ってきたに違いない。瞼を開くと照明の光を含んだ水滴が、視界に覆い被さってくる。感情の昂ぶりで火照った肌に、冷たい水の感触がいつの間にか心地良いものへと変わっていた。

男の沽券（ヒデ）

車が行き交う大通から脇道に入り込むと、自動販売機が並んでいた。煙草、ジュース、酒……カラフルなデザインの缶やペットボトル。

皺が刻まれた札さえ飲み込み、コインひとつ違えることなくお釣りを吐き出すテクノロジー。便利だとは思う。だがそんな需要があるのかと疑いたくなる程に、あちこちに同じものが連なっている。日本人の機械好きが、街角の風景に溢れていた。

他人に干渉しない寡黙な国民性。だが、暗黙の統制力には感服させられるものがある。殺人的な通勤ラッシュの混雑時、駅員の誘導も警察の強制がある訳ではないのに、駅構内は川の流れのような波が移動していく。エスカレーターで急ぐ人は右側を登り、譲る人は左側に立ち並ぶ。どこにそうしろと書いてあるわけではない。車内で新聞を読む者は、ペーパーを小さく折り畳み周囲に配慮を心掛ける。だが他人に優しいのかと思えば、ベンチで気分を悪くしうなだれている女性がいても、立ち止まり声をかける者はほとんどいない。

髪を染めている若者も多いが、生まれ持ったベースは皆が黒い髪、黒い瞳。江戸時代、鎖国で守り抜いた島国独特の単一民族の名残か、やはり外人はごく少数派で人目を引くのは避けられない。こんな都会ですら。だが、この角を曲がった一画は、少々事情が違うらしい。

「hey！お兄サン、遊ば」

「こんなのブスイやね？アタシのがキレイよ。ホラ見て……」

充分短いミニスカートを女は思わせ振りにたくしあげる。白い脚を妖しい網模様で包むストッキングが、紅いガーターベルトで吊られている。興味を示さず、すり抜けようとする俺に、機嫌を損ねた女の悪態が投げられる。

「男がいいんなら、あっち行キナ。バアカッ」

ロシア系の顔立ちにはそぐわない、たどたどしいながらも達者な

日本語。女が指差す方向には、横目でチラチラとこちらの様子を伺う男の姿があった。日本人……ではない、マツチヨな筋肉にぴったりとしたジーンズ。誘うような眼差しを投げかけられ、苦笑いを添えて振り払う。

新宿歌舞伎町の裏通り。表通りとは全く異質な世界が夜の闇とともに姿を現す。日本に足を踏み入れてからいろいろな街を探索したが、ここまであからさまに客を引く場所は他には見当たらなかった。古ぼけた雑居ビルの薄暗いホールへ足を踏み込むと、タイミングよくエレベーターのドアが開いた。中から出てきた男は、目の前に立つ俺から視線をそらすと、バツが悪そうに足早にすり抜けていった。エレベーターの中に漂う安っぽい石鹸の残り香から、ビルの中に潜む風俗店のどの店の客かを憶測する。どれも看板など掲げない、潜りの売春宿まがいの店ばかりだ。

数日前も五階から降りてきた女が、同じ匂いを漂わせながらエレベーターに乗り込んできた時のことを思い出す。派手な化粧。青白く荒れた肌。マスカラで厚塗りされた睫毛に縁取られた眼球は血走っていた。ドラックジャンキー……か、直感的にそう察知する。三階から乗り込んできた新参者の俺を、物珍しそうに一瞥したが、空気のようには無視するこちらの態度に力モでは無いと結論付けたようだ。途端に興味が失せた様子で、一階のドアが開くなりハイヒールを鳴らして出て行った。

この裏通りをうろつく者は皆、真っ直ぐに瞳を絡めたりしない。金を運んでくる客か、ひと時の欲情を満たしてくれる相手か、そんな憶測が夜の闇の中を行き交う。

エレベーターが三階で停車し、くぐもった音をたて扉が開いた。目の前には殺風景な扉がひとつあるだけだ。風俗店の客が迷い込まないよう、目立つ色のプレートが壁に掲げられている。

『有限会社 MMS健康食品』

見てくれとは異なる重い扉や部屋を仕切る古ぼけた壁が、防弾仕様と気付く者などいないだろう。会社名の刻まれたプレートを力チ

リと外すと、小さなテンキーボタンが姿を現す。八桁の暗証番号を入力し扉に手をかけると、ロックの外れる手応えがした。天井の配管が剥き出しにされたままの殺風景なフロアには、U字型のデスクが二つ並んでいる。その卓上にはコンピュータがところ狭しと置かれていた。

静まりかえった室内には時折、配管がたてる小さな振動音が響くだけだ。壁際のせり出した柱の影に視線を走らせる。

「かくれんぼなんていい大人がするもんじゃないぜ。いい加減、出てこいよ」

押し殺した笑いが流れてくるのを感じた。普通に椅子にでも座つていればいいものを……いや、奴にとっては死角に身を潜める事が当然の慣習か。

「久し振りだな、ヒデ」

クリーム地に派手な花模様のアロハシャツ。柱の影から姿を見せた男は、芝居がかったよう両手を広げ片目をつぶってみせた。

「ケン、随分派手なシャツだな」

ケンと呼んだ相手は撫で付けた髪を手で整えると、口元を弛めながら歩み寄ってきた。

「新宿はヤクザの街だろ。前に見た映画じゃ若い奴らは皆こんな格好してたぜ」

ウォール街のビジネスマン、スラムの売人……コイツはすんなりと居るべき場所に馴染み、溶けこむ術を心得ている。

「今日は何処に出掛けてた？電話に出ないなんてお前らしくもないじゃん。奥手のヒデの目に止まるような女が東京にはいるのか？」

からかうような薄笑いを浮かべながら、ケンが歩み寄ってきた。何も答えない俺の鼻先にまで顔を近付けると、探るような視線で覗き込んでくる。くんとケンびやくたんは鼻を鳴らした。

「白檀びやくたんか、随分変わった香水をつける女だな」

「寺で焚いている香だ。浅草に行ってきた」

「また随分と古風な場所に出かけたもんだ。……で？デートの相手

ってどんな女だ」

「ケン……デートだなんてジョークだって知ってるだろう、一人で出かけてたんだよ。ところで、おみくじって知ってるか？」

「おみくじ……」

「未来を予測する紙だ。divination……占いつてところかな。寺の境内で売っている」

「日本の慣習は奥深いよな。で？お前の未来は何て出たんだ」

「からかうような口調でケンが答えを催促する。俺は内緒だと言いたげに肩をすくめてみせた。

「案内する。こっちだ」

話題の矛先を変えるためにケンを連れ、細長いフロアを横切り、突き当たりのドアを引く。一見、倉庫のように見える小さな部屋の隅にある空調機のボタンを操作すると、グオンという機械音と共に壁が一部動き始めた。黒光りするスナイパーライフル、小型リボルバー（回転式拳銃）M18、タクティカルナイフ、様々な国籍のスポーツ、紙幣……。

「短時間でこれだけ揃えられればたいしたものだ。流石だな、ヒデ」

「お前が段取りをしてくれたから、時間が短縮できただけだ」

「ならば話は早い。早速だが依頼がきた。日本での初仕事だ、完璧に済ませてくれ」

身体中に飛び散った血の匂いがする。数百メートルの距離を保ち引き金を引いた状況で、返り血など浴びるはずもないのに。

ドウシテ俺ハ、コンナ事ヲシテイル？ マタ命ヲヒツツ、握リ潰シタノカ。

こんな夜はいつもこうだ。沸き上がる熱に身体を包まれ異様な感情を独り押し殺す。叩き込まれた残酷な感覚が指先にまで溢れてい

る。

誰も俺に近づくな。今誰かに触れられたら、俺は条件反射で手をかけてしまいかもしれない。なのはどうして？ こんな汚れた夜にどうして……会いたいだなんて感情が押さえきれない？ 唇を噛み締め己の欲望と戦う。

会いたい、会いたい……。任務中だというのに、歯止めのきかない感情に翻弄されるだなんて。我に返りライフルを解体すると、細工が施したギターケースにしまいこむ。こんな所で何をぼんやりとしている。すぐに立ち去らなければ。

人気のないビルの非常階段を降り、外に抜ける扉を開いた時だった。街灯から伸びた黒い人影を目の端でとらえる。反射的に身を屈め、斜め前のアスファルトへとダイブした。
バスンッ。

サイレンサーを装着した拳銃の発砲音が鈍く空気を震わせる。左肩に一瞬、焼けつくような衝撃が走った。だがそんな感覚など振り払い、銃を向ける相手に突進する。再び引き金を引かせる前に、蹴りあげた足が描く弧の軌跡で、銃身の先をとらえ弾き飛ばす。宙を舞う銃が落ちるより早く、男の顎とこめかみを掴むと、力任せに両手を交差させる。

ゴキリと男の首が鈍い音をたてた。途端に力尽き地面に崩れ落ちる肉体を真上から一瞥する。つい先程、ライフルのスコープで覗き見た記憶を辿る。この男、標的の傍らにいたボディガードだ。狙撃した場所を憶測し僅か数分でここに辿り着いたのだから、優秀な部類に入るのだろう。

このビルは割り出され易い位置にあったのだ。それはわかっていて。けれども確実に任務を成功させる為にあえて選んだ。狙撃の後、現場で物思いになどふけていた自分に呆れる。命取りな行為をしている自覚すらなかっただなんて。足元に横たわる亡骸は自分だったかもしれない。追跡者が独りだったから切り抜けられただけの事。ギターケースを拾い上げると表通りに向かって歩き始める。傷を負

った腕が今さらのように痛みを伝えてきた。

遠くから近づいてくるサイレンの音を聞きながら夜空を見上げると、銀色の月が俺を照らしていた。人混みに紛れても、身体中に染み付いた汚れを誤魔化すことなど叶わないのだとでも言いたげに……。

ブルーのアオザイが揺れている。由美はベトナムの民族衣装をアジアンチックなアクセサリで飾り立て、パーティドレスのように装っていた。俺の鼓動を確かめるように由美の耳朵がそつとこの胸に押し当てられた。触れ合う体温。冷水のシャワーで冷えきった身体が一瞬にして熱を帯びるのを感じた。白く滑らかな肌を斜め上から見詰める。歪んだ俺とは何もかもが違う存在。その指に触れられると、清められていく錯覚にさえ包まれる。

仕事の後に服のまま、冷たいシャワーを浴びるのは俺の習慣だ。どうしてそんな事を……と問われれば、答えなど見当たりはしないわからない、身体の中でいつまでのくすぶる残忍な火照りを一刻も早く洗い流したい、そんな思いからだろうか。

異常な状況に呆れながらも、由美は俺を受け入れてくれた。血を見て怯える様子など見せずに、意外にも手慣れた仕草で由美は傷口に薬を塗りこんでいく。身体の古傷を幾つか指先でなぞると、捨て猫のようだからかわれた。こんな訪問は犯罪だとたしなめながらも、追い出さないのはどうして？ けれどもそんな事を尋ねられるはずもなく、拒絶しない彼女を試すような言葉を口にしてみる。

「今夜は、ここに泊まっていてもいいかな？」

どうかしている。こんな夜に、誰かと過ごしたいだなんて。

ふわりとアルコールの香りが漂う。少し酔っているのか、由美は

一瞬ぼんやりと黙り込み、クスリと小さく笑って答えた。

「いいわよ。でも男物のパジャマなんてないから、あなた裸で眠るしかないけどね」

服は洗つといてあげるから、全てを脱いで寝室で待っているように言い放つと、由美はシャワーを浴びるために俺を脱衣所から追い出した。

飼い主に忠実な飼い犬のよう、のろのろと扉の前でびしょ濡れの服を脱ぎ、指定された場所に置いておく。裸の腰にバスタオルを巻くと、彼女が教えてくれた寝室へと歩き始めた。この前のようにガレージに……ではなく、寝室に？ 自分から申し出た事なのに、思いがけない展開に頭が回らない。

寝室は縁側の廊下を通り過ぎた突き当たりにあった。暗い室内に忍び込み、ライトのスイッチを押す。ステンドグラスで装飾されたアンティークなランプが優しい光で室内の様子を浮かび上がらせた。ゆったりとしたベッドが光沢を持つシートで覆われている。サイドテーブルに積み重なった本や、部屋の隅に置かれた椅子に視線を流す。ベッドに近づきそつとシーツをなぞってみた。

柔らかな手触り。張り詰めた布地に指先が悪戯に描く皺が刻まれていく。禁じられた遊びをしているような罪悪感と、高揚感を噛み締める。耳をそばだてるが近づく足音はまだ聞こえない。時間に猶予があると確信し、サイドテーブルに置かれた本に手を伸ばす。一冊摘まみ上げ表紙を眺めてみた。海に浮かぶ小さな島の写真に視線を奪われる。

蒼い、青い……海に浮かんだ南国の小さな島。ぱらぱらとページをめくる。様々な形をした小さな島は似ているようで違いがあるらしく、どれも宿泊設備を兼ね備えているらしい。水上レストランやスパ、鬱蒼とした木々に包まれた小さなコテージの詳細などが載っている。本を閉じ再び表紙を確認すると、モルディブと英字で書かれていた。頭のなかでその国の場所を思い描く。インドの下、スリランカの更に南……。

以前、地中海のビーチリゾートと言われる場所に足を踏み入れた事がある。皆が太陽の下でバカンスを味わっていたが、俺だけは全く違う目的を持って砂浜に寝転んでいた。白い砂浜を透かす美しい波打ち際が、赤い血で染められいくプロセスを愛を囁き合う恋人達の影で何度も思い描く。あの時広がる青い海は、都合のいい逃走ルートにしか見えなかった。海に浮かべた無人のボート、素肌に羽織るシャツの裏に忍ばせた小振りのナイフ。

廊下小さく軋む音に反応し、我に返る。由美の素足が立てる僅かな足音に耳をそばだてる。そつと元の位置に本を置くと、どんな状況で彼女を出迎えたらいいか途方に暮れてしまった。

ベッドが置かれた部屋、椅子がひとつ、近づく足音。どこかで……こんな部屋で……同じ高揚感を噛み締めた記憶が湧き上がる。先程目にした写真のせいだろうか、部屋の窓から無意識に海を探している。どこかで波の音が……気のせいだ、まさか、海など何処にもあるはずがないのに。任務の時とは違う、相手が近づいてくる気配に身体の奥が切なくざわめく。懐かしいなどという感情に惑いを感じた。

海の側で誰かと落ち合った記憶などありはしない。訓練や標的を仕留める目的以外に、海なんて縁が無い場所なのだから。

照明と同じ色合いのステンドグラスがアクセントに装飾された扉が音を立てて開いた。咄嗟に椅子に座り、動揺を押し殺しうたた寝をしている振りをしてみせる。ぱたんと扉が閉まる音、由美の素足が床を踏む気配、近づく息遣い。死んだ振りは得意だ。死人のごとく呼吸を潜め臉を伏せる。

小さな溜め息が響くと、寸前まで近づいた由美がすつと離れていくのがわかった。ギシリとスプリングが軋む音、彼女の身体がシーツに滑り込む衣擦れの囁き。部屋の照明が落とされる。暗闇に慣れた目でそつとこちらに背を向けて横たわる由美の様子を伺う。触れてみたい。けれどもこの現実、指を触れたら掻き消えてしまう幻のようだ。こんな感情を呼び起こす存在に、出会ってしまった奇跡

が信じられない。殺すべき相手が、否か。関わる人間はその二種類しか存在しなかったというのに。

そばに居るだけで……ひたひたと忍び寄る胸の痛みに酔ってしまいそうだ。

「全く……失礼な男ね」

すっかりと静寂に包まれ、由美は眠ってしまったと思いこんだ矢先、苛立ちを含んだ彼女の呟きにびくりとした。部屋の隅でおとなしく眠っているはずの俺に、彼女は怒りを感じているようだ。寝た振りがバレているとは思えない。こんな状況でも身動き一つせず、意識を保ったまま朝まで椅子に座っている事など慣れたものだから、ギシリとベッドが再び軋む音が響く。薄目を開いていた瞼をそっと閉じ、再びこちらに近づいてくる足音に耳を傾ける。ごくりと喉を鳴らしてしまいそうな衝動を押し殺す。こちらをじっと覗きこむ彼女の視線を肌を感じる。この先の状況が予測できずに心の中で冷や汗をかいていた。

包帯を巻かれた腕に、ひんやりとした彼女の指が触れる。指先は辿る道筋にちりちりとした疼きを引きながら、ゆっくりと俺の腕を下っていく。

皮膚を切り裂かれた方がましではないか。この状況で平静を装う事など、拷問に耐える訓練よりも堪え難いと感じた。観念したものの、ぼんやりとした仕草を装い瞼を開く。息がかかるような距離からこちらを覗き込む、由美の瞳があつた。視線が絡むと、彼女は咎めるような瞳で睨み付けてくる。

「どういう神経？こんな屈辱は初めてだわ」

返す言葉に詰まる。何一つ思い当たる節はない。ただ、部屋の隅で大人しく寝息さえ控えめに座っていただけなのに。

「あなたまさか、本当にウチを簡易ホテルか何かだと思っている訳？」

泊まっていって許可をもらったのは、俺の勘違いだったのだろうか。彼女の怒りの原因が理解できずにただ、啞然とその瞳を見つめ

返す。

「ごめん、ホテルだなんて思っていないけど……迷惑みたいだから……帰るよ。突然押し掛けて、頭にくるの当然だよな」

由美の頬が窓から差し込む月明かりに照らされている。

「手当てしてくれて、ありがとう。濡れてもいいから服どこにあるかな？さすがに裸じゃ外に出られない」

「……今更、帰れって言ってる訳じゃないわ」

ぶいっと顔を背けると、由美はベッドへと戻っていった。再び静まり返った室内に、重い沈黙が漂う。僅かに震える息遣いが聞こえた。嫌われてしまった。まともな生活などした事がないから、知らぬ間に不快な思いをさせてしまったに違いない。どうしたらいいのかわからないまま、焦燥感に押され由美の側に歩み寄る。ベッドに膝をかけると、背を向けた由美の肩が反動で僅かに揺れる。キャミソールの華奢な肩紐……目の前に横たわる肉体が自分と異なる性であることを知らしめてくる。

「……ごめん」

ただ謝る事しか出来ない。訳が分からなくても悪いのは俺だから。

「何を謝ってるのよ。馬鹿みたい」

「……うん。俺、馬鹿だよな」

「もっつ、あなたと話をしていると調子が狂っちゃうわ。年上の女をからかって面白い？」

くるりと由美はこちらに身体を回すと、横たわったまま頬杖をついた。片方の手でうつつとうしそくに髪をかきあげる。

「からかってなんていない」

「裸同然で寝室にいて、眠りこけているなんて普通ありえるかしら……えっ？」

自分でも間抜けなだと思っ声が出た。今更にこの状況を考える。だってまさか、一緒にいられる一夜に舞い上がってしまい……それ以上の事なんて。改めて目の前に横たわる由美を見つめる。光沢のある薄布のキャミソールが柔らかく体のラインを浮き上がらせてい

た。呆れ果てた溜め息をひとつ吐くと「もういいわ」と由美は枕に顔を埋めた。

無防備な背中が露になる。そつと剥き出しの肩に指を伸ばす。薄い皮膚に覆われた滑らかな肌の感触。俺の行動に由美の身体がぴくりと跳ねた。

「……馬鹿は……あたしだわ」

枕に遮られて、由美の言葉がくぐもって聞こえる。答える代わりに髪を撫でると、湿った手触りがした。いつもの強気な彼女とは違い、道端で雨に濡れる迷い猫を連想させる。指を差し込み、優しくその髪をすくい上げる。バスタオルを巻いただけの俺の腰に、由美の手が触れた。自分の身に起きている事だというのに、現実味が無い。

彼女に導かれるままに、身体をそつとすり寄せる。髪に触れていた手の平を、由美の背中に回す。枕から顔を上げた由美の頬に自分の頬を重ねてみる。触れ合う体温に眩暈が押し寄せた。

この先に進もうとする欲望に、大きな絶望が立ちはだかる。流れに乗りきれない自分自身がもどかしい。けれどもこれ以上彼女を落胆させられないと、咄嗟に口にした。

「きつと、君をガツカリさせる」

欲望でうつすらと濡れた瞳が、ぼんやりとこちらを覗き込んでくる。意味がわからない。眼差しがそう訴えかけてきた。

「俺、……したことはないんだ」

「何が？ 年上の女とつてこと？」

「違う。そんな意味じゃなくって……あのさ……」

「……何よ、はっきり言いなさいよ」

触れていた肌を引き剥がし、苛立ちを滲ませた口調で凄む彼女に、もう誤魔化しはきかないと観念する。

「女の人と、そういう経験無いんだ。呆れたらどう？」

由美の目が丸くなるのが見て取れた。男としてこんなにも情けない台詞があるだろうか。

「もしかして、ゲイなの？」

予測もしない憶測に大袈裟なほどに首を振って否定する。そうくるとは思わなかった。

「だって……信じられない、あなたが？だってモテるでしょう？」

ほら、ハトバスに乗ってた女の子達にだって、注目されていたじゃない。今までそんなチャンスいくらでもあったでしょう」

「だって、そんなの何の意味も無いさ。自分が惹かれなきゃ」

「正直なのね。でも男って気持より先に欲望に負けてしまうつて事があるでしょう？特に若いうちは尚更……」

「普通はそうなんだろうけど、でも後悔してる」

「後悔？」

「だってこんな夜に上手く立ち回れなくって、情けない告白をする羽目になる」

真っ直ぐに注がれる眼差しにいたたまれず、目をそらす。こんな事ならば、ケンと繰り出したクラブで女に誘われた時、成り行きに身を任せてしまえばよかったのだ。あの時もこの時も、由美の言う通りチャンスは思い返せばいくらでもあった。でも、欲望など湧きはしなかった。誘うような眼差しが鬱陶しいとさえ感じていた。

「なんだか自分が節操の無い大人に思えるわ。ね、本当に好きな相手とじゃなくちゃ嫌だって気持、情けないどころか素敵だと思う」

違う違う、そうじゃない。すっかり欲望の灯火が消えた由美の瞳にすがりつきたい衝動が沸いてくる。

「だから、君に会って初めてそう思ったんだ」

「……いいのよ、気を使わないで。ね、もう寝ましょう。怪我もしてるんだし……」

「だからっ」

気付いたら、両腕で由美の肩を押さえていた。彼女の身体がシーツに縫い付けられたようベッドに埋め込まれる。

「本当だって」

「痛いわ、離してよ」

その台詞に我に返り、慌てて手を引つ込めた。

「もう、その気無いの。ごめんね」

こんな無知な男は趣味じゃない。そう宣告された気がした。

「はい、横になって。この枕大きいから半分わけてあげる」

聞き分けの無い子供をあやすような口調。これ以上反論する言葉を失い、言われるがまま天井を見上げ横になる。心臓は凍りつき、脈打つ事さえ拒んだよう静まり返っていた。放り出した手の平に、由美の指がそつと重ねられる。

「馬鹿になんてしない、本当よ。羨ましいとさえ思うわ」

彼女の声に含まれる澄んだ響きに、その言葉が嘘ではない事を感じ取る。

「大事にしなくちゃね。こんな行きずりの夜に惑わされちゃ駄目。きつと巡り合うわ、あなたが待ち望む相手に」

お休みなさい。小さな呟きの後しばらくすると、由美の指が、俺の手の平の上でそつと力を落とした。深く息を吐き、首を横に傾けると静かな寝息を立てる由美の横顔があった。そつと顔を近づけその髪に鼻先を埋めてみる。すつかり乾いた髪は、さらさらと皮膚をくすぐり、甘い匂いを漂わせてくる。満ち足りた気持が溢れてきて、瞼を閉じ慣れない感情を深く味わってみた。

幸せってこういうもの？

けれども、ふとライフルのスコープ越しに跳ね上がる男の姿が脳裏をよぎった。首の骨をへし折った時の指の感触……。

“ 才前二ナド、ソンナ資格ハ無イ ”

暗闇の向こうから、あの世に送り込んだ輩のざわめきが聞える。知っている、知っているさ。けれども、この忌まわしい人生にこんな夜が、一度くらいあってもいいではないか。覆い被さる過去の罪を、振り払うようにかぶりを振る。

「……ん」

寝返りを打った由美の顔がこちらを向く。僅かに漏れる息づかいが俺のおでこをくすぐる。

ちゃぷり、ちゃぷり……。ほら、聞える。揺れる海面がたてる水音が。

ちゃぷり、ちゃぷり……。空耳……。でも何故？由美と眠る柔らかなベッドが小船のように感じる。船……。船……。二人を乗せた……。小さな……。

“きつと巡り合うわ、あなたが待ち望む相手に”

それは君なのだと、今夜はどう訴えてみたところで上手く伝わらないのだろう。けれども、隣で眠っている間は、この腕から擦り抜けてどこにも行く事は無い。こんな夜は二度と叶わない夢。ましてやベッドで眠るなどいづりだろうか。いつも椅子にもたれ、とっさの行動に備え銃を傍らに置きながら眠る日常。由美の温もりに包まれ瞼を閉じる。

このまま死んでもいい。……。そう、行き先は地獄だとわかってはいても……。

いつかどこかで（由美）

いつかどこかで（由美）

目が覚めたらじっとこちらを見つめる瞳に囚われた。屈託のない笑顔を向けられ、寝ぼけた思考が一気にクリアになる。一体、ヒデはいつからこちらを見てたのだろうか。

“女の人と……そういう経験ないんだ……呆れたらろう？”

昨夜、罪を告白するように彼は瞳を曇らせた。今時の若い男の子とは少し違うのかもしれない。いや、草食系男子なんて言葉があるくらいだ。これが今時なのだろうか。

上半身素肌をさらし横たわる男をまじまじと眺める。こんな男の子……がねえ。彼がいつか選ぶ女はどんなタイプだろうか。それは決して私では無いのだろうけれど……。

“君に会って本当にそう思ったんだ”

乱暴にシートに押し付けられた時、その背中に腕を回してしまいたい衝動にかられた。彼が待ち望んでいたという、特別な女にでもなったような錯覚がした。けれども状況を思えば、キャミソール一枚で誘惑してくる年上の女に惑わされただけに違いはない。都会に遊びに来て、いつもより開放的な気分になっているだけなのだ。そう思ったら、唐突に襲ってきた罪悪感。

“もうその気ないの”

感情を押し殺し、拒絶するのが精一杯だった。

“きつと君をガツカリさせる”

流されて後悔するのはヒデではないか。その元凶になるだなんて、私の趣味ではない。心の底から欲した男などいままでいただろうか？ 成り行きのままに重ねてきた情事。ヒデと同じよう、運命の相手に出逢うまで待ちわびる事など私には無理だ。だって、こんな醒

めた女にそんな恋など訪れるはずもない。実際、三十路になろうとする今まで、運命など巡ってはこなかったのだから。結婚すら興味本意に流されただけ。そう、今までは……。

昨夜の私はどうかしていた。シャワーを浴びながら訳もわからずに涙は溢れるし、それに……こんな男の子を寝室に誘うだなんて。洗濯の為とはいえ服まではぎとってしまった。駅のホームでも唇を奪ったのは、私からではなかったか。

「どうしたの？まだ眠いなら無理して起きることないよ」

至近距離にお互い横たわったままの状況で、ヒデが優しく囁いてくる。わずかな距離……手を伸ばし脛にかかる前髪をつまんであげたら、彼はどんな反応をするのだろうか。この期に及んで湧き上がる悪戯心をそつと振り払う。

「目が覚めちゃったわ。それよりあなたの服を取ってくる」

「あ……うん」

起き上がると、背中に名残惜しむようなヒデの視線を感じた。いつまでもこの状況のままベッドにいるのは良くない。朝の気だるさに任せ、隣の温もりにもたれかかってしまいたくなる。昨日と変わらずヒデを求めてしまう欲望の欠片を感じる。一夜の気紛れのはずなのに……まさか欲求不満だともいうのだろうか。欲求不満……滑稽な憶測に苦笑いが込み上げる。

「……由美」

唐突に名前呼び掛けられ、胸の奥がどくりと音を立てた。何よ、女も知らない子供の癖に……生意気な声の主を咎める気分で振り返る。少しだけ照れくさそうに微笑むヒデがそこにいた。

「おはよう、いい朝だね」

今更に改まった朝の挨拶を投げ掛けられ、返す言葉に詰まる。チリチリとした感覚が胸を締め付ける。馴れない感情、これは……一体何だというのか。

ねえ、まだ私の事を欲しいと思っている？

本当に口にしたのはそんな陳腐な台詞だなんて。女も知らない

この坊やに、まるで恋でもしているみたいではないか。恋？ そんな感情はただの思い込みではないのか。そんな想いに胸を焦がす女と自分は違う筈なのに。

絡んだ視線を振り払い、寢室のドアを開く。中庭を取り囲む廊下を横切ると、ミザモの木が視界に入り込んだ。足を止め、連なる硝子戸をカラカラと横に滑らせる。

待つていたくせに……ざわりと吹き抜ける風がそう囁いた気がした。

運命の出逢いを、ずっと待つていたくせに。

空耳だ。心の奥底を見透かされたような焦燥感に、せわしく周囲を見回す。違う、違うそれは私ではなく母ではないか。家に寄り付かなくなった父を、死ぬまで待ち続けた母の、底無しな執着心が風に乗る中庭をさ迷っているに違いない。私は違う。そう小さく呟くと、逃げるよう音をたてて窓を閉めた。

ヒデが淹れるコーヒーを口にするのはこれで二回目だ。しかも今回はふんわりと焼き上げたオムレツまで湯気をあげている。フォークを刺すと、絶妙な焼き加減の断片が覗く。口に含めば、トロリと甘い卵が舌の上でとろけた。

「器用なのね」

「好きなんだ、料理するの。自己流だけど」

「あら、もったいない。本格的に学ばいいのに」

「……そんな、おだてないでよ」

「あたし結構、味にはうるさいのよ。オムレツは腕が試される料理だし、これならお店だって出せるレベルだと思うけど」

「店？」

ヒデはその言葉に目を丸くし、大袈裟な程に反応してみせた。

「そんなのって、夢みたいな話だ」

「あら、謙虚なのね。夢くらい持たなくっちゃ、コックがいい男だから、女性客が沢山来るわよ。客層のニーズに合わせて、スイーツも勉強しないとね」

向かい側に座るヒデの視線が、ついと窓の外に流れていく。会話の途中で急に黙りこんだ彼を不審に思う。ぼんやりとした目差し、パサリと優雅に瞬いた睫毛。一瞬不覚にも視線を奪われてしまった。カチリとフォークが皿に触れる音が響く。小さな音なのに、ヒデははっとしたように視線をこちらに戻した。ずっと見つめられていた事に気付き、照れ臭そうに微笑みを向けてくる。

「……夢とか将来の事なんて……考えたこともなかったから
遠い目差してヒデは呟いた。

「偉そうな事言っただけ、よく考えたら私も夢なんて無かったかも」
「小説家になるのは、夢じゃなかったの？」

「そう思っただけ目指す人もいるんだろうけど、私の場合は……そうね、
特技よ」

「特技？」

ヒデはぶつと吹き出した。

「何よ」

「いや、すごいなって思っただけ」

ちらちらと白い歯を覗かせて、ヒデは屈託のない笑顔をこぼしている。見慣れない朝の風景に、違和感を覚えながらも、心地のよい空気を不思議に思う。失礼ねと睨む視線に、甘い感情が混ざるのを誤魔化せない自分がいた。

「俺、出来たよ夢」

今までそんなものを抱いたことなどないと、寂しそうな目差して告白していたのはほんの数分前のはずだ。唐突な宣言に呆れながらも、その先の言葉に耳を傾ける。

「海が見える場所に小さなレストランを開くんだ……」

宇宙飛行士になりたい、お姫様になりたい、子供が未来を思い描く口調でヒデは瞳を輝かせている。そんな彼を目の前にしていると母親にでもなった気分させられる。

「でね、俺が作った料理を由美が運んでくれるんだ」

「は？」

「そこまで含めて俺の夢。きっと流行るよ、店の名前は……二人で決めよう」

二人って、二人って……。

「勝手に人をウェイトレスにしないで頂戴」

軽くあしらひ、さらりと受け流すが、頬が熱くなっていくのがわかる。からかっているのだろうか？ こんな女もまだ知らない男の言葉に反応している自分もどうかしている。

海……海。その小さな店に波音は届くのだろうか。どの窓からも溢れる色はきつと……脳裏をよぎったのはカクテルグラスに注がれた透明なブルー。作り物かと見間違うほどに、美しい光をはらんだブルーだ。

一瞬、夢を見ているのかと思った。水の上を漂っているような浮遊感に意識がさらわれていた。そんな私を現実に戻したのは、玄関から鳴り響くチャイムの音だった。来客の予定などない。きつと勧誘か宗教か、招かざる客に違いない。何度かチャイムが繰り返された後、諦めたかのような静けさが漂った。が、次の瞬間、指先でトントンと玄関の硝子戸を叩く音が聞こえてきた。

誰？ 怪訝な顔をする私を見て、ヒデが腰を上げた。

「俺が見てくるよ」

こういう時に男の人がいると便利だ。一軒家だと、屋根の修理だ下水の点検だと訳の分からない勧誘も後を絶たない。ピシヤリと断っているつもりなのだが、女の独り暮らしだと知れると、本当に夕チが悪いのだ。ヒデは巧くあしらう事が出来るのだろうか。

玄関の硝子戸がカラカラと開く音は聞こえた気がしたが、その後

の会話らしいものがさっぱり途絶えている。なにかを売りつけようとする者は、大袈裟な程に自分が訪問してきた理由を大声でアピールしてみせるのだが……もしかしたら、本当の来客だった？

手にしたフォークを皿に置き、慌てて席を立つ。玄関へ抜ける戸を開けて数歩進むと、玄関口で黙り込んだまま立つ男が二人……倉田とヒデだ。私の姿に視線を移すと、倉田は困惑した顔をしてみせた。

「なんだ、いるんじゃないか。この坊やが由美は留守だって言うからさ……」

ヒデは不機嫌そうな顔で、私を隠すように倉田の前に立ちほだかった。

「ね、いいのよ。この人は……」

諭すよう、その背中に手を添える。ゆっくりとヒデは振り返った。眼差しが、この男は誰なのかと問いかけてくる。

「あなたはリビングに戻っていて頂戴」

自分でもそっけない声色だと思った。だって生意気じゃない？目の前の背中がまるで俺の女だとも言いたげに視界を覆っている。

「彼はお客様なの、あたしのね」

ヒデはちらりと倉田を見ると、何も言わずに部屋に引き上げていった。その姿が消えるまで、倉田は意味深な視線で、ヒデの後姿を追っている。

「驚いたな。あの坊やと一緒に暮らしているのか？」

若すぎるんじゃないの？倉田の言葉の裏に、そんな懸念が挟まれているを感じる。私より二つ年上の倉田から見れば、干支が一回りも違う男など、やはり子供にしか見えないのだろう。

「たまたま、よ。で？あなたは何の御用で来たのかしら」

他人行儀な口調でヒデの話題を打ち切る私に、倉田は慌てたように「ごめん」と呟いた。

「こんな朝っぱらから押しかけて……」

大袈裟に頭を下げる彼を一段高い玄関口から見下ろしていると、

意地悪な女になった気分がわいてくる。本当に……おかしな朝だ。

「……これ、忘れていったらう、車の中に」

倉田はぶら下げていたものを差し出した。白い紙袋には出版社のロゴが印字されている。昨夜のパーティーで皆に配られた記念品だ。

「いいのに、どうせお菓子かなにかでしょう？ わざわざ届けてくれなくても」

「出掛ける用事があって、こっちの道を通るからついにとっさ」

「そう……ありがとう」

昨日といい、今日といい、別れて何年も顔を会わせる事などなかったのに、急に見えない境界線を越えて倉田が私の日常に近づいている気がした。ヒデと出くわしてしまった偶然は、倉田にとって丁度よい出来事だったのだ。再会した元妻を、感傷と共に懐かしむなんて茶番から、目を覚ませてくれる切っ掛けになったに違いない。十歳近く年下の男を家に連れ込む女になど、さぞ幻滅した事だろう。これ以上玄関先で、顔を眺め合っているのも不自然だという空気が漂う。

倉田は「じゃあ」と、踵を返す仕草をしてみせる。

「由美……」

小さく倉田は呟くと、もう一度こちらを振り返った。言い残した事があるのだと、言いたげな眼差し。

「なに？」

「俺さ……」

後悔しているんだと、倉田の瞳が訴えかけてくる。一緒に暮らしていた頃、愛されるという意味を彼は教えてくれた。家庭という名の揺り籠は安息を与えてくれた。なのにどうして、倉田に全てを委ねられなかったのだらう。

結婚して数年が過ぎた頃、子供が出来たらいいなと彼がポツリと口にしたあの瞬間、気付いてしまった。夫婦なのだから当たり前に望みだというのに。

子供は苦手だ。小さくて、頼りなく、その命すら儚げで……強く抱き締めたら壊してしまいそうな恐怖感に襲われる。そんな存在は欲しく無いと口にするのは、裏切るような後ろめたさがあった。だからピルを飲んだのだ。話し合わなかった私は卑怯者に違いない。隠れて薬を服用している事がバレた時ですら、彼は私を責める事をしなかった。自分の希望ばかり押し付けて悪かったと、そんな謝罪の言葉さえ添えてくれた。

由美が居ればいい。真っ直ぐな眼差しに射抜かれ、己の罪深さを思い知った。望まれて、愛されて、流されて結婚した。なんて残酷で浅はかな女だったのだろう。一緒に暮らしていれば、夫婦になれば……いつしか同じ目線で倉田を愛せるような錯覚がしていた。幼い頃から漠然と抱えていた心の隙間を埋めてくれるのは、きっと彼なのだろうと依存していた。

男として、作家として倉田は充分魅力的だった。彼の人生を狂わせてしまう。幸せになる権利があるというのに、妻である私が、愛される喜びも、父親となる家庭をも奪ってしまうに違いない。

倉田は平静を装ってたが、明らかな溝が二人の間に見えない境界線を引いた。いや、埋めようと努力する彼に対し、私はあまりにも冷淡だった。彼は悟った筈だ。求められてなどいない自分に、振り払われはしなくても、抱き締め返してくる腕など無いことを。

淡々とした日々が過ぎたある日、倉田の恋人だと名乗る女が訪ねてきた。彼と別れて欲しいと、愛されているのは自分なのだと彼女は口にした。妊娠しているのだと告白する瞳が、不安そうに揺れていたのが今でも忘れられない。こんな時、普通の妻ならば傷付くのだろうか。けれども私に沸き上がる想いは、倉田が救われるという安堵感だった。子供のいない妻と、妊娠した愛人。彼の隣を明け渡す理由としては十分すぎる状況だ。

離婚届を差し出すと、倉田は黙り込みサインをした。紙切れ一枚。よくそんな皮肉で例えられる現実を、実感として噛み締める。最後の一字を書き終えると、倉田は顔を上げた。

「……俺は大馬鹿者だ」

絞り出すような声色が、深い苦悩を伝えてくる。楽にしてあげたい、私に対して罪悪感の欠片すら感じる必要など無いのだと、伝えたいと思った。

「潮時だったのよ、私達」

机に置かれた離婚届を摘まみ上げながら、努めて世間話のよう倉田に語りかける。

「やらかした事を思えば、ふざけた戯言を言っているなんてわかっているけど、俺はそうは思っていないかったんだ。ただ……」

言葉を濁らせて倉田は大きく息を吐いた。

「……見苦しいよな、この後に及んで……止めよう」

彼は思い切ったよう立ち上がった。握りしめた倉田の拳が小さく震えていたが、私は気付かないふりをして視線を反らした。

「ね、嫌味じゃないのよ。赤ちゃん……楽しみね」

部屋を出ていこうとする倉田の背に、そう言葉をかける。ゆつくりと振り向いた彼は、自嘲するよう口の端を上げ薄く笑ってみせた。「子供なんて……いないんだ。最初から」

「えっ？」

「あんなの……彼女の嘘なんだ。どうしてそんな事を君に言ったのか、訳が分からない」

嘘……私に妊娠しているのだと告げた彼女の不安そうな瞳が脳裏をよぎった。

「あなたの事、すごく愛しているのよ。ただそれだけなんだわ」

肩をすくめて倉田は苦笑いをした。

「愛なんて、一步通行ばかりでうまくいかないもんだな」

倉田が真っ直ぐに私を見つめる。後悔と困惑が入り混じった哀しげな瞳。その後、倉田はバックパックひとつで海外に旅立ち、それから何年も日本に戻らなかった。発展途上のアジア諸国を巡り、旅の合間に綴ったノンフィクションルポタージュは、彼の代表作となった。ゴミの山から一日の糧を探る靴さえ持たない人々の生活。爆

撃の止まぬ街で、玩具ではない銃を抱え生きる子供達の日常。離婚せずにはいたならば、彼は狭い視野から見える世界のなかで筆を走らせていた事だろう。

私なんかとは違う、倉田は本物の作家だ。何にも囚われずにありがままを直視し、己の感性で現実を綴っていく鋭い切り口。後悔など何の必要があるだろう。私は彼にとって足枷だった。飛び立つ羽根を持つ倉田に絡みつく、忌わしい鎖。彼を縛り付けていたもの、それは私への執着だったに違いない。手に入らないものに人はこだわるものだ。それが妻となっても自分のものにならない女なら尚更に……ただそれだけの事。

ダイニングに戻ると、食器が綺麗に片付けられていた。部屋の中に、ヒデの姿がない。まさか来た時と同じように、垣根を越えて出ていったのだろうか。ヒデと過ごす時間は突拍子がなく非日常的で、その存在事態が掴みどころがない。いつの間にか現れ、幻のように消える……そんな感覚が似合う気がした。

消える、消える。

ふと不安がよぎりヒデを探して歩き出していた。ただトイレにでも行っているだけかもしれない。慌てたりして馬鹿みたいだ……自分自身を自嘲する。本当に馬鹿みたい。

コの字型に庭を取り囲む縁側に出て視線を泳がすと、ミザモの木の下に見慣れないものが見えた。

人の……足。カラカラとガラス戸を横に滑らせ庭に足を踏み出す。裸足のままだが構わないと思った。近づくと、横たわるヒデの全身が見えた。両手を頭の後ろで組み、夏の色を含み始めた青空を見上げている。

「帰ったのかと思ったわ」

ヒデは一瞬私のほうに視線を走らせたが、困惑した様子で顔を背

けた。

「俺……帰ったほうがよかったかな？」

独り言のように放たれた言葉に拗ねた響きを感じ、思わず笑いが込み上げる。

「昨日のパーティで忘れ物をしたのを届けてくれただけよ。彼、もう帰ったわ」

言い訳のような事をしている自分を可笑しく思う。一体何の義理があるというのか。ヒデの隣に腰を降ろし、寝そべる彼の顔を真上から覗き込む。私の影が作る日陰で、彼は安堵したよう真っ直ぐに視線を絡めてくる。駆け引きなど微塵も見せない無防備な眼差し。彼は気付いているのだろうか、こんな空気が女心をくすぐり、少しいい気にさせてしまうという事に。自分にうつつを抜かしている……そういう相手に女は、他愛もない意地悪をしたくなるものだ。

「昔、あの人とこの家に暮らしていたことがあったの」

距離を縮め、ヒデの耳元で罪を告白するように囁く。彼が動揺し瞳を曇らせたのがわかった。その反応に満足し、更に話を進める。

「元夫が忘れ物を届けにくるなんて、変な朝よね」

ヒデは黙り込み誤魔化すよう視線を反らした。結婚して離婚も経験して……色恋沙汰に甘い夢を抱くお嬢ちゃんとは違うのだと、これはささやかな警告だ。

「愛してたの？」

「え？」

ヒデの唇から不意打ちに零れ落ちた疑問の意味が、すぐには飲み込めなかった。

「結婚しようと思うくらい……アイツの事、愛してたって事？」

さわさわとミモザの葉が風にそよぐ音を立てる。視線を反らし空を仰ぐ彼の横顔が、少し哀しげに見えた。何よ、そんな顔して……裏切ったような後ろめたさが湧き上がる。結婚していたのは昔話だというのに。

「愛せたらいいなって……そう思っていたわ、上手く出来なかった

けれど」

再び罪を告白する。今度はさつきよりも少し神妙な気持ちで。ヒデが大きく息をつく。強張った彼の肩から力が抜け落ちるのが見て取れた。

「不思議だな」

「何が？」

「さつき結婚してたって聞いた時、胸が苦しくなってきた、本当にズキズキと痛むんだ。……だけど……」

言い辛そうにヒデは言葉を濁した。そんな彼に続きを話すよう視線で促し耳を傾ける。

「由美の答えを聞いたら、ピタリって今痛みが消えたんだ」

「答えて……」

「愛してなかったんでしょ？」

「……そんな言い方して無いわ」

「でも同じ意味に聞えた」

浮き立つような声色。結婚生活に影を落としたその真実が、ヒデにとって喜ばしい事だとは皮肉なものだ。

「あなたに私の結婚なんて、なんの関係もないじゃないの」

「あるさ」

「どうしてよ」

「だって過去でさえ俺をこんなにも揺さぶるんだ。どうしてって……こっちが聞きたいくらいだよ」

ヒデは胸に手を置くと、癒すようにそっと撫でてみせた。女を抱いたこともないと昨夜、彼は告白したが、もしかしたらそれは女を落とす為の巧妙な嘘かもしれない。

“過去でさえ俺をこんなにも揺さぶるんだ”

溜め息混じりの台詞に、爪の背で肌をなぞられるような切なさが増し上がる。こんな口説き文句をチェリーボーイが容易く口にできるものだろうか。

苦笑いが込み上げる。流される心地良さに、たまには浸ってみる

のも悪くない。胸の上に置かれたヒデの手に頬を寄せ、もたれかかってみる。指先で髪を優しく撫であげられる。かつて感じたことの無い、満たされた想いに目眩がした。

「春にはミモザの花が沢山の花をつけるんだろっな」

「あら、よくわかるわね。この木がミモザだなんて」

「一番好きな花なんだ」

同じだ……ヒデの身体にもたれながら、戸惑いを隠すよう瞼を閉じる。ささやかな偶然。けれどもそれが運命付けられた必然にも感じる。ミモザの花は私にとって特別な意味を持つ。春先には艶やかな黄色い花が、重たげに枝をしならせて垂れ下がる。

まだ父に愛されていた頃の母が、よくこの花で小さな冠を作ってくれた。ミモザの冠を頭にのせると、幼かった私はお姫様になったような高揚感に包まれた。哀しみも喜びも、母を失った喪失感も、この木は全てを受け入れてくれた。

「このまま眠ってもいい？ほんの少しだけ」

答えの代わりに、ヒデは私の髪をくしゃりと撫でた。

第三京浜から横浜首都高へと抜けると、高層ビル群が見えてきた。東京と違う雰囲気を感じ出す源は、ウォーターフロントに立ち並ぶ立地条件のせいかな、もしくは観覧車が傍から見えるという遊び心のせいかな。

ほんの少しのうたた寝のつもりが、目を覚ますと昼を回っていた。ヒデは……ずっと起きていたのだろっ。髪を撫でられる感触は夢の中にも伝わっていた。浅瀬を漂うような心地良さに包まれて、すっかりと寝過ごしてしまった。そして次に湧き上がってきた欲望は、美味しい物が食べたいという滑稽なほどに原始的なものだった。

頭の中で幾つかのレストランが浮かんだが、ちらりと脳裏をよぎったメニューにすっかりと気分は傾いてしまった。北京ダックは好

き？ そう問い掛けるとヒデはきよとした顔をした。二十歳そこそここの男の子には、あまり馴染みの無い料理かもしれない。

中華街の中にある立体駐車場に車を停め、駐車券をバックの中に入れてしまう。ふと見慣れない茶封筒が目に入り、小さく溜息をついた。出かける間際、倉田が置いていった紙袋の中にこの封筒が入っているのを見つけた。『由美へ』と書かれた三文字で、倉田が書いたものだと理解した。一体何だろう。そう思ったが、すぐ側にいるヒデがいる状況で、中身を確認するのは躊躇した。そっとハンドバックの中に封筒を滑り込ませ、そのまま食事に出掛けてしまったのだが…… どうして持ってきてしまったのだろう、置いてくればよかったのに。バックを閉じると、少し憂鬱な気分になった。

歩調がゆっくりになった私をヒデが振り返る。伸びてきた指に優しく手を包まれる。家に帰ったら読めばいい。そう心の隅で決めたみれば少し気分が軽くなった。

目当ての店はメイン通りを外れた裏路地にある。小さな店だが、窯でじっくりと飴色になるまで焼き上げた北京ダックの歯応えは絶品だ。最後の角を曲がろうとして違和感に気付く。いつもここまで香ばしい香りが漂っていたはずなのに…… 角を曲がると袋小路の路地に、小さな店が連なっているはずだったが、飛び込んできた光景は予想しないものだった。黒焦げの壁に焼き落ちた屋根。

「やだ、信じられない」

ただ啞然と立ち尽くしていた。とにかくいつもの北京ダックにはありつけないという事実は理解できた。

「……その店が火元だよ。全くモウロクしやがって」

突然廃墟の一角から、アクセントに違和感を感じる日本語が響いた。老婆だった。今にも崩れ落ちそうな焼け焦げた店の中から、ガラクタのような荷物を引っ張り出している。

「床下に入れておいた荷物は無事だったよ。」

こんな日がくるんじゃないかって予感がしていたんだから、やっぱりあたしゃ名易者だね」

易者？ 何故か中華街には占いの看板を掲げる店が数多く点在する。確かにこの老婆の店の前には、よく若い女の子達が列をなしていた。興味がなかったのであり注目したこともなかったのだが。今時あまり目にする機会の少ないリヤカーに、老婆は荷物を放り込んでいく。ガラガラという音と共に、無造作に積み上げた荷物が一部崩れ、細い竹の束が地面に散らばった。

「年はとりたくないねえ、嫌になっちゃうよ」

丸まった背中を更に小さく丸めて、老婆はのろろとそれらに手を伸ばした。

「俺が拾うよ」

ヒデが屈み込み、素早い動作で竹の棒を集め始める。

「優しい坊やだねえ、ありがとよ。これは筮竹ぜいちくっていうんだよ。長く使ってきたけどもう易者も潮時かね」

「ぜいちく？」

不思議そうに質問を投げかけるヒデに対し、老婆は得意げに「占いの道具だよ」と答えた。

「占い……俺この前浅草でおみくじを引いたら凶が出たんだ」

「ほう、そりや物騒な」

「でも当たってなかった。待ち人来ずって書いてあつたけど、運命の彼女に出会えた」

ちよつと、この子何言ってるの。恥かしげも無く他人にそんな事を口走るヒデが理解できない。老婆の値踏みをするような視線がこちらに流れてきくを感じ、顔が熱くなるのがわかった。

「アンタ達、ちよつとあたしの前に並んでごらん」

やはり生粋の日本人とは違うイントネーション。中国人なのだろう、でも流暢に操る日本語からは、老婆が長い年月をこの地で重ねていることが伺えた。年寄を邪険に扱う訳にもいかず、訳がわからないままにヒデの隣に歩み寄る。老婆は目を閉じると、私達の目の前に手をかざしてみせた。

「小道具を使うこともあるけど、アンタ達と相性さえよけりゃ、こ

うするだけで見えるってもんさ」

皺だらけの顔を見つめていると、唐突に大きくその目が見開かれ、どきりと胸が跳ね上がる。

「こりゃあ、驚いたねえ……初めてだよこんなのは」

老婆は興味深そうな声をあげると、再び皺に縁取られた瞳を閉じた。小さな眩きが色褪せた薄い唇から洩れてくる。

「見えるよ……水……いや海だ。大量の水は山をも崩し世界さえ無にする力を持っている。そして万物の源は次なる世を作ることだろう。背負った運命は何て重いんだろうね。あんた達は、完璧な魂を産み落とす為に選ばれたんだ。眩しいほどの光を放つ美しい魂さ。絡み合った運命は何度も輪廻を繰り返し、相応しい場所を求めてさまよっている。でもいつか辿り着くよ。現世か来世か……今のあたしにや、ちよつと計り知れないけどねえ」

老婆は名残惜しむかのようにゆっくりと瞼を開いた。非現実過ぎて、自分達を占った言葉であるとは信じがたいと感じた。

「易者人生60年の最後にふさわしい客だった。いいもんを見せて貰ったよ」

老婆はヒデの鼻先で二本指を立ててみせた。

「お客からはちゃんと料金を貰わなくっちゃねえ。椅子も用意できなかったから、うんと安くしといたよ」

ヒデは頷くとポケットの中からマネークリップに挟まれた札を取り出した。そこから抜き取った札を二枚、老婆に差し出した。……

一万円が二枚……本当にこの男は底なしの馬鹿かもしれない。だから田舎者は騙されやすいのだ。私は素早く自分の財布から千円札を二枚取り出すと、ヒデを押しつけ老婆に突きつけた。年寄りだと思つて甘く見ていたけれど、押し売りと変わらないではないか。老婆は肩をすくめてみせたものの、素直に私の手から札を受け取った。

「お腹すいちゃったわ。他の店を探しましょう」

退散をほのめかし、踵を返そうとした時だった。

「蝶が導いてくれるからね」

唐突に老婆が言葉を付け足した。知っているだろうとも言いたげに。今何て……？ 爪先から髪まで、痺るような衝撃を受けた。まるで毒を吹き付けられたかのごとく。

「おばあちゃん、占い面白かった。じゃあね」

ヒデの挨拶に片手を上げると、老婆は薄笑いを浮かべポケットから取り出した煙草を唇に押し込んだ。蝶……蝶……どうしてその言葉が出たのか。問いただきたい衝動に駆られたが、ヒデに腕を引かれ歩き出す。角を曲がり、メインストリートへと続く人影のない細道を通り抜ける。先程の老婆の言葉が、繰り返し頭の中で響いていた。

「さっきの話だけどさ……」

ヒデが気恥ずかしそうに話しかけてくる。

「つまり俺達、運命で結ばれているって事だよね？」

ストリートな問い掛けに返す言葉を見失う。馬鹿みたい、そんな嬉しそうな顔をして。小さく息を吸い込み呼吸を整える。

「運命なんて言葉は客が喜ぶのよ。誰にでも使う台詞だわ」

突き放した口調で一瞥する。未だに心臓が凍り付いたよう萎縮していた。

“蝶が導いてくれるからね”

あの言葉に扉が開け放たれた気がした。けれど、その隙間に歩み寄る事を躊躇する自分がいた。いつも眠りの縁で垣間見る蝶の紋様は、何を意味するのか。その美しいシルエットを腕に刻む、ヒデとの出会いは必然だというのか。

「別にいいんだ、使い古された言葉でも。俺にとっては特別だから」
澄んだ瞳に囚われて、心を揺さぶられる自分が、怖いと思った。
怖い……怖い。甘美な誘惑の向こう側は、底無しの奈落が影を潜めていてのではという恐怖に襲われる。

だからといって知らない振りは今更だと思えた。取り繕ってみたところで、自分自身は偽れない。こんなにも惹かれているだなんて立ち止まったヒデに、強く身体を引き寄せられる。頭ひとつ高い

位置から垂れてくる彼の髪に、首筋を悪戯にくすぐられる。瞼を閉じると、キラキラと光を放つ蝶の鱗粉が瞼の裏側を漂って見えた。波のように押し寄せる高揚感に、全身が栗立つ。おでこが触れ合う距離から、ヒデがこちらを覗き込んできた。

「由美、困った顔してる。……こんな子供みたいな男、相手する価値があるのかって……そう思っているの？」

溜息にも似た苦しげな問い掛けに胸が締め付けられ、思わず目を反らす。

「お願いだから、俺を拒まないでよ。やっと……やっと見つけたんだ」

彼は意識していないのだろう。掠れるようなこの声色だけで、こんなにも私を揺さぶる事ができるのだなんて。何度も絡んだ視線をはぐらかしては、さ迷わずにいられない。抱き締め返してしまったら、もう後戻りが出来ない気がした。

「迷うくらいなら、溺れてくれればいい」

奪うよう唇を塞がれる。頭が混乱して、足先がみっともないくらいに震えた。触れ合う感触が、訴えかけてくる。この唇を記憶していると。

あなたと私。……いつかどこかで……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5131e/>

イヴの接吻

2011年8月15日03時28分発行